鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（210）

滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡塁跡群・岩川官軍墓地

二〇二一年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（210）

「西南戦争を掘り，学ぶ」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

滝ノ上火薬製造所跡
（鹿児島市稲荷町）

高熊山激戦地跡
（伊佐市大口）

チシャケ迫堡塁跡群
（霧島市牧園町）

岩川官軍墓地
（曽於市大隅町）

2021 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

巻頭図版1　滝ノ上火薬製造所跡

遠景（遺跡北側上空から　対岸：桜島）

巻頭図版2　滝ノ上火薬製造所跡

石垣及び石積み遺構の検出状況

高熊山山頂（北西上空から　背後：伊佐市市街地）

巻頭図版４　チシャケ迫堡塁跡群

遠景（南西側上空から　画面中央左の尾根付近　奥：霧島連山）

巻頭図版５　岩川官軍墓地

遠景（北側上空から　画面中央付近）

序　文

この報告書は，文化庁の国庫補助事業「西南戦争を掘り，学ぶ」に伴って，平成30年度・令和元年度・令和２年度に実施した滝ノ上火薬製造所跡，高熊山激戦地跡，チシャケ迫堡塁跡群，岩川官軍墓地の確認調査の記録です。

世界文化遺産に登録された旧集成館をはじめ，本県にはわが国の近代化を支えた産業遺産や軍事遺産が数多く存在します。

しかしながら，その多くは未調査で，詳細が不明のままとなっています。そこで，本事業は，幕末から明治初期の西南戦争関係遺跡の考古学的な調査を行うことで，遺跡の実態解明や再評価を行い，史跡指定等の適切な保護措置を講ずるための基礎資料を作成することを目的としています。また，発掘調査成果を用いた学校における授業支援や，地域等で講演会を行うことで，文化財の保存・活用，地域振興，郷土教育，郷土愛の醸成などに資することもねらいです。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たり御協力いただいた文化庁及び鹿児島市教育委員会，伊佐市教育委員会，霧島市教育委員会，曽於市教育委員会，調査地点・周辺の土地所有者の皆様，関係各機関，発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

令和３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　前　迫　亮　一

報　告　書　抄　録

ふりがな	たきのかみかやくせいぞうしょあと・たかくまやまげきせんちあと・ちしゃがさこほうるいあとぐん・いわがわかんぐんぼち
書名	滝ノ上火薬製造所跡　・高熊山激戦地跡　・チシャケ迫堡塁跡群　・岩川官軍墓地
副書名	「西南戦争を掘り，学ぶ」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第210集
編集者名	湯場﨑辰巳
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995-48-5811
発行年月	西暦2021年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市長村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
たきのかみかやくせいぞうしょあと 滝ノ上火薬製造所跡	かごしまし 鹿児島市 いなりちょう 稲荷町	46201	201-127	31° 36′ 55″	130° 34′ 8″	確認調査 2018.11.5～2018.12.26	2,900	保存目的調査
たかくまやまげきせんちあと 高熊山激戦地跡	いさし 伊佐市 おおくちきのうじ 大口木ノ氏	46224	－	32° 5′ 28″	130° 36′ 55″	確認調査 2019.5.13～2019.6.7	200	保存目的調査
ちしゃがさこほうるいあとぐん チシャケ迫堡塁跡群	きりしましまきぞのちょう 霧島市牧園町 さんたいどう 三体堂 ちしゃがさこ チシャケ迫	46218	218- 533	32° 52′ 42″	130° 45′ 47″	確認調査 2019.11.1～2019.11.28	200	保存目的調査
いわがわかんぐんぼち 岩川官軍墓地	そおし 曽於市 おおすみちょう 大隅町 いわがわ 岩川	46217	－	31° 35′ 39″	130° 59′ 27″	確認調査 2020.5.18～2020.6.12	200	保存目的調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主要な遺構	主要な遺物	特記事項
たきのかみかやくせいぞうしょあと 滝ノ上火薬製造所跡	生産遺構	近世・近代	石垣，石積み遺構，導水路，排水路	陶器，瓦，塼	
たかくまやまげきせんちあと 高熊山激戦地跡	戦跡遺構	明治10（1877）年	堡塁跡９基	銃弾(エンフィールド銃７点･スナイドル銃７点･ツンナール銃１点･不明１点)･薬莢４点･鉄製品･釦・古銭	伊佐市指定文化財（昭和53.10.1）
ちしゃがさこほうるいあとぐん チシャケ迫堡塁跡群	戦跡遺構	明治10（1877）年	堡塁跡７基	―	
いわがわかんぐんぼち 岩川官軍墓地	墓地	明治10（1877）年	墓石79基・残欠７基	古銭	曽於市指定文化財（昭和49.3.8）

要約

【滝ノ上火薬製造所跡】
薩摩藩は，火薬製造の本局として文政年間（1818～1831年）に滝ノ上火薬製造所を設立した。稲荷川の水流を利用した直径4ｍほどの水車を設置し，硝石や硫黄，木炭を粉末にして火薬を製造していた。平成５（1993）年の「8・6水害」で，残存していた水路等が流失したと考えられていたが，今回の確認調査で，当時の石垣や石積み遺構，導水路が広く残存していることが判明した。

【高熊山激戦地跡】
明治10（1877）年の西南戦争の大口の他戦いの際には，辺見十郎太が指揮する雷撃隊が坊主石山に，池辺吉十郎指揮する熊本隊が高熊山に陣を構えていた。確認調査では，現存している堡塁跡（塹壕）の構造を把握することができたほか，銃弾や薬莢も出土した。また，文献史料に残る戦闘状況と調査成果がおおよそ一致した。

【チシャケ迫堡塁跡群】
明治10（1877）年の西南戦争では，政府軍と西郷軍は，牧園（旧踊郷）で２度の戦闘を行っている。１度目は，７月１日～７日に西郷軍が牧園一帯に陣を築き，政府軍と対峙している。２度目は宮崎県延岡の可愛岳を突破した西郷軍が鹿児島に突入する直前の８月30日に，笠取峠で激しい銃撃戦を展開している。確認調査では，７月・８月の戦闘の時に構築された300基以上あるとされる堡塁跡のうち，チシャケ迫に位置する堡塁跡７基の調査を行った。

【岩川政府軍墓地】
岩川の政府軍墓地は、西南戦争で亡くなった政府軍の戦死者を埋葬した墓地であり，陸軍大尉山形照方，少尉奥田政実，少尉試補林為隆など79基の墓石と残欠７基が存在している。墓石はすべて天草下浦石（砂岩）製である。調査では，現在の姿は当時のものでなく，改変（整備）をうけていることが判明した。さらに，当時の造営面を明らかにし，２基の墓坑の可能性があるプランを確認した。また，東に1.5㎞ほど離れた薩軍の墓の測量などを行い，今後の検討資料を蓄積することができた。

滝ノ上火薬製造所跡　位置図（1:25,000）（国土地理院 1：25,000 地形図『鹿児島北部』改変）

高熊山激戦地跡　位置図（1:50,000）（国土地理院 1：50,000 地形図『大口』改変）

チシャケ迫堡塁跡群　位置図（1:50,000）（国土地理院 1：50,000 地形図『霧島山』改変）

岩川官軍墓地　位置図（1:50,000）（国土地理院 1：50,000 地形図『岩川』『末吉』改変）

例　言

1　本書は，鹿児島県が文化庁の補助を受け，平成30年度・令和元年度・令和２年度に実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち，「西南戦争に掘り，学ぶ」事業に伴う滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡塁跡群･岩川官軍墓地の発掘調査報告書である。

2　滝ノ上火薬製造所跡は鹿児島県鹿児島市稲荷町，高熊山激戦地跡は鹿児島県伊佐市大口木ノ氏高熊，チシャケ迫堡塁跡群は鹿児島県霧島市牧園町三体堂チシャケ迫，鹿児島県岩川官軍墓地は鹿児島県曽於市大隅町岩川に所在する。

3　発掘調査及び整理・報告書作成作業は，鹿児島県教育委員会が調査主体となり，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は平成30年度に滝ノ上火薬製造所跡，令和元年度に高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡塁跡群，令和２年度に岩川官軍墓地を実施し，整理・報告書作成作業は令和２年度に実施した。

5　掲載遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，表，図版の番号は一致する。

6　遺物注記等で用いた記号は，滝ノ上火薬製造所跡が「ＴＫＮ」，高熊山激戦地跡「ＴＫＹ」，チシャケ迫堡塁跡群は遺物がなく，岩川官軍墓地は古銭のため，用いていない。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。

9　本書で使用した方位はすべて磁北である。

10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。なお，基準杭打設は，(有）ジパング・サーベイ（H30・R1)，(株）埋蔵文化財サポートシステム（R1）に，高熊山激戦地跡の地形測量・遺構配置図作成を（有）ジパング・サーベイに委託して実施した。また，空中写真の撮影を，(株）ふじた（H30・R1)，(有）スカイサーベイ九州（R1･R2）に委託した。

11　遺構の埋土や土器の色調，土層断面の土色は『新版標準土色帖』(1970年度版，農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。

12　遺構図等の作成・トレースは，湯場﨑と橋口が整理作業員の協力を得て行った。なお，赤色立体地図は，アジア航測（株）に委託した。

13　出土遺物の実測・拓本・トレースは，湯場﨑が整理作業員の協力を得て行った。なお，遺物実測の一部は（株）島田組に委託した。

14　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて，横手が行った。

15　文献史料の調査・判読は，浅田・宮﨑が行った。また，尚古集成館松尾千歳館長に指導・助言をいただいた。

16　本書の編集は，湯場﨑が担当し，執筆の分担は次のとおりである。

第１・２章　湯場﨑　　第３章　湯場﨑
第４章　湯場﨑・宮﨑　第５章　湯場﨑・宮﨑
第６章　湯場﨑　　第７章　湯場﨑

17　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　例

本書に用いた名称の考え方は以下のとおりである。

1　西郷軍

各研究や文献史料では，薩軍と西郷軍・賊軍・反乱軍等がある。本書では，薩摩藩士を中心とする私学校徒以外にも，旧日向国の高鍋隊等や熊本県の熊本隊等，大分県の中津隊等，九州外からも参加していることから，西郷軍を用いることとした。

2　政府軍

官軍の呼称もあるが，戊辰戦争のような諸藩中心の軍でなく，明治５（1872）年の徴兵令によって組織された軍隊として機能していることから，政府軍を用いることとした。

3　高熊山激戦地跡及び笠取戦跡の遺構名

・堡塁

文献資料	主体	名称			
「征西戦記稿」	官軍	堡壘	胸壁	壕壘	賊壘
「英国銃隊練法」	英国	胸壁			
「工兵操典　封壕之部」	官軍	堡藍			
「熊本鎮台戦闘日記」	官軍	凸角堡			
「塹溝堡築設教法略則」	官軍	塹溝堡			
「戦袍日記」	古閑俊雄	堡塁	守塁	塁壁	
「軍事小典」	オランダ	堡塁			

上記が西南戦争前後における歩兵用小規模施設の名称である。当時も様々な名称が使われている。塹壕や台場は，歩兵用小規模施設とは一線を画すことから，本書では歩兵用小規模施設を堡塁とした。

4　各遺構や遺物の部位名称，計測部位については，必要に応じて，各章の第３節にて記載している。

本文目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言・凡例
第１章　事業の経緯と経過
第１節　事業の経緯と事業内容 …… 1
第２節　調査体制 …… 1
第３節　事業経過 …… 2
第４節　整理作業・報告書作成経過 …… 2
第２章　西南戦争の概要と各県の関連遺跡
第１節　西南戦争の概要 …… 3
第２節　西南戦争関連遺跡の調査状況 …… 4
第３節　鹿児島県の西南戦争関連遺跡の調査及び選定基準 …… 6
第４節　鹿児島県の西南戦争関連遺跡の現況状況 …… 6
第３章　滝ノ上火薬製造所跡
第１節　遺跡の位置と環境 …… 15
第２節　調査の方法 …… 26
第３節　層序 …… 26
第４節　滝ノ上火薬製造所跡の調査成果 …… 26
第４章　高熊山激戦地跡
第１節　遺跡の位置と環境 …… 39
第２節　調査の方法 …… 45
第３節　堡塁の分類 …… 45
第４節　高熊山激戦地跡の調査成果 …… 46
第５章　チシャケ迫堡塁跡群
第１節　遺跡の位置と環境 …… 59
第２節　調査の方法 …… 65
第３節　層序及び堡塁 …… 65
第４節　チシャケ迫堡塁跡群の調査成果 …… 66
第６章　岩川官軍墓地と関連遺跡（薩軍の墓）
第１節　遺跡の位置と環境 …… 73
第２節　調査の方法 …… 78
第３節　層序 …… 78
第４節　岩川官軍墓地の調査成果 …… 81
第７章　総括
第１節　滝ノ上火薬製造所跡 …… 93
第２節　高熊山激戦地跡 …… 95
第３節　チシャケ迫堡塁跡群 …… 97
第４節　岩川官軍墓地と薩軍の墓 …… 98
第５節　西南戦争関連遺跡の現状と課題 …… 103
写真図版 …… 105

挿図目次

滝ノ上火薬製造所跡　位置図（1:25,000）
高熊山激戦地跡　位置図（1:50,000）
チシャケ迫堡塁群跡　位置図（1:50,000）
岩川官軍墓地　位置図（1:50,000）
第１図　西南戦争関連戦地図 …… 8
第２図　西南戦争関連史跡・遺跡位置図（１）……13
第３図　西南戦争関連史跡・遺跡位置図（２）（鹿児島市）……14
第４図　滝ノ上火薬製造所跡　周辺地質分類図（鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変）…15
第５図　滝ノ上火薬製造所跡　周辺遺跡位置図 ……18
第６図　大正４年　滝ノ上火薬製造所　周辺地形図（１:50,000・『鹿児島』改変）……22
第７図　銃薬方（武雄市歴史資料館蔵）……23
第８図　銃薬製造所図（東京大学史料編纂所蔵）……24
第９図　瀧ノ上御所所有地字絵図（東京大学史料編纂所蔵）……25
第10図　滝ノ上火薬製造所跡　調査範囲図 ……27
第11図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１・２全体図…29
第12図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１実測図 ……30
第13図　滝ノ上火薬製造所跡　排水路断面図 ……31
第14図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ２石垣実測図 ……32
第15図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ３導水路実測図 ……33
第16図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ４導水路実測図 ……33
第17図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ５石垣実測図（左①・右②）……34
第18図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ５石垣写真 ……34
第19図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ６・７位置写真 ……34
第20図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ６写真 ……34
第21図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ７写真 ……35
第22図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ８写真 ……35
第23図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区２導水路実測図 ……35
第24図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区３全体図 ……36
第25図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区３導水路実測図 ……37
第26図　滝ノ上火薬製造所跡　出土遺物 ……38
第27図　高熊山激戦地跡　周辺地質分類図 ……39
第28図　高熊山激戦地跡　周辺遺跡位置図 ……42
第29図　明治35年高熊山激戦地跡　周辺地形図（1：50,000・『大口』改変）……44
第30図　堡塁部位名称及び計測箇所 ……45
第31図　高熊山激戦地跡　遺構配置図及び遺物出土状況図 ……47
第32図　高熊山激戦地跡　堡塁２号～７号遺構配置図 ……48
第33図　高熊山激戦地跡　堡塁１号実測図 ……49
第34図　高熊山激戦地跡　堡塁２・３号実測図 ……49
第35図　高熊山激戦地跡　堡塁４号実測図 ……49
第36図　高熊山激戦地跡　堡塁５・６号実測図 ……49
第37図　高熊山激戦地跡　堡塁４・５号トレンチ図 ……50
第38図　高熊山激戦地跡　堡塁７号実測図 ……51
第39図　高熊山激戦地跡　堡塁８号実測図 ……52
第40図　高熊山激戦地跡　堡塁９号実測図 ……52
第41図　高熊山激戦地跡　堡塁９号トレンチ図 ……53
第42図　銃弾及び薬莢部位名・計測箇所 ……54
第43図　高熊山激戦地跡　出土遺物（１）……55
第44図　高熊山激戦地跡　出土遺物（２）……56
第45図　高熊山激戦地跡　堡塁７号復元状況 ……57
第46図　チシャケ迫堡塁跡群　周辺地質分類図（鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変）…59
第47図　西郷隆盛宿営地之趾 ……61
第48図　チシャケ迫堡塁跡群　周辺遺跡位置図 ……62
第49図　明治35年チシャケ迫堡塁跡群　周辺地形図（1:50,000・『栗野』『霧島山』改変）……64
第50図　チシャケ迫堡塁跡群　遺跡範囲図（詳細）…65
第51図　チシャケ迫堡塁跡群　遺構配置図 ……67
第52図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁１号実測図 ……68
第53図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁２号実測図 ……69
第54図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁３号実測図 ……70
第55図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁４号実測図 ……71
第56図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁５号実測図 ……72
第57図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁６号実測図 ……72
第58図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁７号実測図 ……72
第59図　皆越台場跡（曽於市大隅町坂元）……74
第60図　岩川官軍墓地　周辺遺跡位置図 ……75
第61図　墓石部位名称及び計測箇所 ……78
第62図　岩川官軍墓地の土層 ……78
第63図　岩川官軍墓地　周辺図 ……79
第64図　薩軍の墓　周辺図 ……80
第65図　岩川官軍墓地　配置図（略図）……82
第66図　岩川官軍墓地　墓石配置図 ……83
第67図　昭和８（1933）年岩川官軍墓地　墓石配置図 ……83
第68図　岩川官軍墓地　ST1・３・７・38・69実測図及び拓本 ……84
第69図　岩川官軍墓地　トレンチ位置図 ……85
第70図　岩川官軍墓地　トレンチ１実測図 ……85
第71図　岩川官軍墓地　トレンチ２実測図 ……86

第 72 図　岩川官軍墓地　トレンチ３実測図 ……86
第 73 図　岩川官軍墓地　トレンチ位置写真 ……87
第 74 図　岩川官軍墓地　出土遺物 ……88
第 75 図　薩軍の墓　遺構配置図 ……89
第 76 図　薩軍の墓　墓石実測図 ……89
第 77 図　「銃薬方」（武雄市歴史民族館蔵　一部改変）
……94
第 78 図　高熊山の戦い戦況図 ……95
第 79 図　坊主石山状況写真 ……96
第 80 図　坊主石山堡塁位置略図 ……96
第 81 図　堡塁模式図及び類例 ……98
第 82 図　牧園町堡塁位置図
（手嶋 2018 引用・一部改変）……99
第 83 図　チシャケ迫堡塁跡群周辺赤色立体地図
……100・101
第 84 図　古写真①（JCII フォトサロン蔵）……102
第 85 図　古写真②（JCII フォトサロン蔵）……102

図版目次

巻頭図版１　滝ノ上火薬製造所跡
巻頭図版２　滝ノ上火薬製造所跡
巻頭図版３　高熊山激戦地跡
巻頭図版４　チシャケ迫堡塁跡群
巻頭図版５　岩川官軍墓地
図版１　滝ノ上火薬製造所跡　古写真 ……105
図版２　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１ ……106
図版３　滝ノ上火薬製造所跡
トレンチ３・４・５・８ ……107
図版４　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１・２石垣・
導水路 ……108
図版５　滝ノ上火薬製造所跡　調査区３導水路 ……109
図版６　高熊山激戦地跡　遠景 ……110
図版７　高熊山激戦地跡　堡塁１号～７号 ……111
図版８　高熊山激戦地跡　堡塁８・９号・
堡塁４号トレンチ・堡塁７号トレンチ ……112
図版９　高熊山激戦地跡　堡塁７号トレンチ・
堡塁９号トレンチ・弾痕跡・銃弾出土状況
……113
図版 10　チシャケ迫堡塁跡群　遠景・堡塁１号・
堡塁４号 ……114
図版 11　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁１号～７号 ……115
図版 12　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁１号・
３号トレンチ ……116
図版 13　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁２号トレンチ
・堡塁５号トレンチ・ 堡塁６号トレンチ ……117
図版 14　岩川官軍墓地 ……118
図版 15　岩川官軍墓地 ……119
図版 16　岩川官軍墓地　墓石（大尉・少尉補・軍曹・
兵卒・軍夫）・トレンチ１ ……120
図版 17　岩川官軍墓地　トレンチ２・トレンチ３ ……121
図版 18　岩川官軍墓地　トレンチ３・薩軍の墓 ……122
図版 19　滝ノ上火薬製造所跡　出土遺物（上）・
高熊山激戦地跡銃弾（エンフィールド４～ 10
・スナイドル 11 ～ 17・ツンナール 19）……123
図版 20　高熊山激戦地跡　出土遺物（20 ～ 29）
・岩川官軍墓地　出土遺物（30 ～ 32）……124

表目次

第 １ 表　西南戦争関連年表 …… 9
第 ２ 表　西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表（１）
……10
第 ３ 表　西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表（２）
……11
第 ４ 表　西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表（３）
……12
第 ５ 表　滝ノ上火薬製造所跡　周辺遺跡地名表 ……19
第 ６ 表　陶器　観察表 ……38
第 ７ 表　瓦　観察表 ……38
第 ８ 表　塼　観察表 ……38
第 ９ 表　高熊山激戦地跡　周辺遺跡地名表 ……43
第 10 表　高熊山激戦地跡　堡塁　観察表 ……57
第 11 表　高熊山激戦地跡　銃弾　観察表 ……58
第 12 表　高熊山激戦地跡　薬莢　観察表 ……58
第 13 表　高熊山激戦地跡　鉄製品　観察表 ……58
第 14 表　高熊山激戦地跡　釦　観察表 ……58
第 15 表　高熊山激戦地跡　古銭　観察表 ……58
第 16 表　チシャケ迫堡塁跡群　周辺遺跡地名表 ……63
第 17 表　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁　観察表 ……72
第 18 表　岩川官軍墓地　周辺遺跡地名表（１）……76
第 19 表　岩川官軍墓地　周辺遺跡地名表（２）……77
第 20 表　岩川官軍墓地　基本層序 ……78
第 21 表　岩川官軍墓地　古銭　観察表……88
第 22 表　岩川官軍墓地　石碑刻字一覧（１）……90
第 23 表　岩川官軍墓地　石碑刻字一覧（２）……91
第 24 表　岩川官軍墓地　階級別墓石計測値 ……92
第 25 表　岩川官軍墓地　戦死場所・戦死日一覧 ……92
第 26 表　岩川官軍墓地　埋葬者階級別数 ……92
第 27 表　岩川官軍墓地　埋葬者所属別数 ……92
第 28 表　岩川官軍墓地　埋葬者出身県別数 ……92
第 29 表　大分県・鹿児島県堡塁形状内訳 ……97
第 30 表　岩川官軍墓地の整備状況 …… 103

第１章　事業の経緯と経過

第１節　事業の経緯と事業内容

鹿児島県には，平成 27 年７月に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産製鉄・製鋼，造船，石炭産業」の構成資産を始め，日本の近代化の礎を築いた幕末から明治初期にかけての産業遺産・軍事遺産が数多く残っている。しかし，多くが未調査であり，詳細が不明瞭である。

これまで鹿児島県教育委員会は，平成 27 年度～平成 29 年度に「かごしま近代化遺産調査事業」（国庫補助事業県内遺跡発掘調査等事業として実施）で，旧薩摩藩の近代化遺産に光をあて，考古学的調査による実態解明を進めてきた（敷根火薬製造所跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡）。平成 29 年度には，『敷根火薬製造所跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（194）を刊行した。

平成 30 年度からは，近代化の波の中で勃発した西南戦争関連遺跡まで発展させ調査を行うこととし，国庫補助を活用して「西南戦争を掘り，学ぶ」事業を企画した。具体的には，本県に残る西南戦争関係遺跡の考古学的な調査を実施することで，遺跡の実態解明や再評価を行い，史跡指定等を視野に，適切な保護措置を講ずるための基礎資料を作成することとした。活用面では，発掘調査成果を用いた学校での授業支援や地域での講演会を行い，文化財の保存･活用，郷土教育などに資する目的とした。

発掘調査の実施にあたり，鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）と鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）は，歴史的価値や残存状況等を考慮し，関係機関とも協議を行い，調査対象地を選定した。

発掘調査を実施した遺跡は，平成 30 年度は，滝ノ上火薬製造所跡（鹿児島市），令和元年度は，高熊山激戦地跡（伊佐市），チシャケ迫堡塁跡群（霧島市），令和２年度は，岩川官軍墓地の４か所である。なお，整理・報告書作成作業は，令和２年度に実施した。

第２節　調査体制

平成 30 年度調査体制（確認調査）

事業主体　鹿児島県
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所長　堂込　秀人
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼調査課長　大久保　浩二
　総務課長　髙田　浩
　調査課第二調査係長　宗岡　克英
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　調査課第二調査係
　文化財主事　湯場﨑　辰巳
　文化財研究員　橋口　梨絵
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　主査　新穂　秀貴
調査指導　文化庁文化財第二課
　主任文化財調査官　山下　信一郎
　尚古集成館
　館長　松尾　千歳
　広島大学
　准教授　水田　丞

令和元年度調査体制（確認調査）

事業主体　鹿児島県
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所長　前迫　亮一
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼総務課長　野間口　誠
　調査課長　中村　和美
　調査課第二調査係長　宗岡　克英
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　調査課第一調査係
　文化財主事　湯場﨑　辰巳
　文化財研究員　松山　初音
　（高熊山激戦地跡）
　文化財研究員　宮﨑　大和
　（チシャケ迫堡塁跡群）
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　主査　新穂　秀貴
調査指導　日本考古学協会・日本鉄砲史・
　軍事史学会会員　高橋　信武
　南九州縄文研究会会長　新東　晃一
　文化庁文化財第二課
　文化財調査官　藤井　幸司
　防衛省防衛研究所戦史研究センター
　二等陸佐　齋藤　達志

令和２年度調査体制（確認調査，整理･報告書作成作業）

事業主体　鹿児島県
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所長　前迫　亮一
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　次長兼総務課長　野間口　誠
　調査課長　中村　和美

調査課第二調査係長　横手　浩二郎
調　査　担　当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
調査課第二調査係
文　化　財　主　事　湯場﨑　辰巳
文化財研究員　宮﨑　大和
調査課第一調査係
文　化　財　主　事　橋口　梨絵
事　務　担　当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
主　査　新穂　秀貴
整　理　指　導　尚　古　集　成　館
館　長　松尾　千歳
報告書作成指導委員会　令和２年10月７日ほか２回
中村調査課長ほか５名
報告書作成検討委員会　令和２年10月９日ほか２回
前迫所長ほか５名

第３節　事業経過

１　滝ノ上火薬製造所跡（鹿児島市稲荷町）

確認調査は，表面積2,900㎡（調査対象）で，平成30年11月５日（月）から12月26日（水）（実働34日）にかけて実施した。なお，発掘調査中に，のべ75名の見学者があった。

平成30年11月１日（木）～２日（金）機材搬入・鹿児島市水道局との協議（２日）
11月５日（月）～９日（金）調査区①石垣精査，調査区③調査範囲設定，基準杭設置
11月12日（月）～16日（金）調査区③導水路検出
11月19日（月）～22日（木）石垣精査，調査区③調査
11月26日（月）～28日（水）調査区③試掘調査
12月３日（月）～７日（金）調査区①石垣実測，調査区②石垣精査，調査区③導水路　実測・落水口検出，文化庁山下信一郎主任文化財調査官調査指導（６日）
12月10日（月）～14日（金）調査区①・②石垣精査・トレンチ調査・遺構配置図測量，尚古集成館松尾千歳館長調査指導（10日）
12月17日（月）～21日（金）礎石検出，調査区②精査，調査区③精査，空撮（19日）　広島大学水田丞准教授調査指導（21日），県教育委員会東條広光教育長・文化財課寺原徹係長視察（20日）
12月25日（火）～27日（木）　調査区埋め戻し

２　高熊山激戦地跡（伊佐市大口）

確認調査は，表面積約10,000㎡（調査対象）で，令和元年５月13日（月）から６月７日（金）（実働15日）にかけて実施した。

５月８日（水）・９日（木）高橋信武氏調査指導
５月13日（月）～17日（金）堡塁跡精査，基準杭設置
５月20日（月）～24日（金）堡塁跡精査，金属探知機による遺物（銃弾等）検出
５月27日（月）～29日（水）各堡塁トレンチ調査，周辺関連遺跡写真撮影，新東晃一氏調査指導（27日）
６月３日（月）～７日（金）各堡塁トレンチ調査，空撮（５日），文化庁藤井幸司文化財調査官調査指導（６日）

３　チシャケ迫堡塁跡群（霧島市牧園町）

確認調査は，表面積約5,000㎡（対象面積）で，令和元年11月１日（金）から11月28日（木）（実働17日）にかけて実施した。

11月１日（金）　環境整備
11月５日（火）～８日（金）各堡塁精査，基準点設置
11月11日（月）～15日（金）各堡塁トレンチ調査，追加雇用者（11日），堡塁７号新発見（15日），手嶋正次氏来跡（11日・15日）
11月18日（月）～21（木）各堡塁調査，追加雇用者オリエンテーション（19日），空撮（21日）防衛省防衛研究所戦史研究センター齋藤達志二等陸佐調査指導（21日）
11月25日（月）～28日（木）各堡塁トレンチ埋戻し

４　岩川官軍墓地（曽於市大隅町）

確認調査は，表面積約200㎡（調査対象）で，令和２年５月18日（月）から６月12日（水）（実働16日）にかけて実施した。なお，薩軍の墓も併せて測量調査を行った。

５月18（月）～22（金）トレンチ１調査，遺構配置図作成，墓石実測・拓本，曽於市教育委員会橋口拓也主事来跡（21日）
５月25日（月）～28（金）トレンチ１・２調査，墓石刻字確認，薩軍の墓遺構配置図作成，曽於市教育委員会文化財係加塩秀樹係長・徳留隆二主事来跡（26日）
６月１日（月）～５（金）トレンチ３調査，薩軍の墓精査，空撮準備
６月８日（月）～10（水）トレンチ３調査，撤収作業，空撮（８日），トレンチ埋め戻し

第４節　整理作業・報告書作成経過

整理作業・報告作書作成は，令和２年４月～12月にかけて埋文センターで行った。作業の経過については，月別に集約して記載する。

４月　図面整理，遺物分類
５月・６月・７月・８月　遺構図，遺物トレース等
８月25日　尚古集成館館長松尾千歳氏整理指導
９月　レイアウト・原稿執筆，写真選別
10月・11月　原稿執筆・遺物写真撮影
12月　原稿執筆・修正，遺物・写真収納

第２章　西南戦争の概要と各県の関連遺跡

第１節　西南戦争の概要

１　幕末から明治維新前後の鹿児島

文政年間（1818 ～ 1831 年）に設立された銃薬方（滝ノ上火薬製造所）は，その後，集成館事業に組み入れられ，敷根火薬製造所や谷山作硝局などが設立される。薩摩藩は製鉄・ガラス・紡績だけでなく，火薬・弾薬製造においても日本有数の生産力を誇っていた。また，当時の主な陸戦武装であるスナイドル銃の銃弾を製造できたのは，明治８（1875）年まで国内では鹿児島だけであった。

２　西南戦争直前の状況

明治６（1873）年の征韓論争に，破れた西郷隆盛等は下野した。明治７（1874）年に，私学校が設立されると，県の主な役職を私学校生徒が占めるようになり，県内に反政府的な雰囲気が強まっていく。

鹿児島にある武器製造機や備蓄されている弾薬の存在を危惧した政府は，搬出命令を出し，明治 10（1877）年１月下旬，武器弾薬等を密かに大阪へ移すために，赤龍丸を鹿児島港に入港させた。このような政府の動きを察知し，激怒した私学校生徒等は，１月 29 日夜から草牟田火薬庫を皮切りに，２月１日まで連日弾薬等の掠奪を行い，事態は緊迫の度を高めた。さらに，鹿児島出身警察官の潜入や西郷隆盛暗殺計画などが発覚したため，西郷隆盛や私学校幹部らは，率兵上京を決断することとなった。

３　西南戦争勃発

２月 15 日，西郷隆盛率いる私学校生徒を中心とした鹿児島士族約１万３千人は，政府に問い糾すことを掲げて陸路鹿児島を出発した。しかし，２月 19 日には「鹿児島賊徒征討」の詔勅が下り，西郷軍は賊軍となる。２月 22 日，熊本城を包囲した西郷軍は，一斉攻撃を開始する。しかし，政府軍の激しい抵抗や高い城壁に遮られ，城内に入り込むことはできなかった。遅れて到着した砲隊が砲撃したが，期待したほどの成果は得られなかった。その間に，政府軍の増援部隊が九州北部に上陸・南下した。両軍は，熊本城から 15 ㎞以上離れた現在の玉名市，山鹿市，玉東町吉次峠，植木町田原坂，熊本市木留等で衝突し，約２か月間戦闘を繰り広げた。

４　火薬製造所の処分

鹿児島では３月７日～ 12 日，政府軍の艦隊が鹿児島湾に入り，集成館・滝ノ上火薬製造所の火薬・製造機等を搬出・処分している（３月 10 日には敷根火薬製造所が焼き払われている）。以後，西郷軍は銃弾不足に陥ることとなった。

５　熊本城開放から城東会戦，西郷軍人吉へ

３月 18･19 日に政府軍が八代に上陸，市街地を占拠し，熊本城に向かい北上を開始した。３月 20 日には田原坂での戦いにおいて，西郷軍が敗退，４月 14 日に政府軍は熊本城を開放した。以後，西郷軍は熊本平野東部の大津から御船付近まで 20 ㎞に渡り戦線を展開するが，城東会戦で敗北し，矢部を経て，４月 26 日人吉に入り，人吉を拠点に薩摩・大隅・日向へ進軍することになる。その人吉も兵数と物量に勝る政府軍により，球磨川方面と山江方面から進攻をゆるし，６月１日に西郷軍は宮崎方面に撤退した。

６　鹿児島市での戦闘

政府軍は，４月 27・28 日にかけて別動第１旅団を中心に鹿児島に上陸し，５月４日には増援部隊も加わり，城山から新上橋，西田橋，武之橋などに陣地を築いた。また，城山の東部から現在の鹿児島駅一帯・多賀山や集成館にも陣を展開した。

西郷軍（振武・行進・奇兵の３隊）は，鹿児島奪還を目指し，鹿児島北部方面から兵を進め，５月５日，両軍は激突した。鹿児島を包囲する西郷軍は政府軍に激しい攻撃を加えたが，政府軍も軍艦の支援を受けるなどして応戦，一進一退の戦闘を約２か月間繰り広げることとなった。６月 21 日，鹿児島の政府軍は重富に上陸し，白銀坂から吉野攻撃を仕掛けた。６月 25 日には川内・宮之城に進出した別動第３旅団が鹿児島に到着し，６月 26 日までに，西郷軍は鹿児島城下一帯から撤退した。これらの戦闘で鹿児島城一帯は焼失した。政府軍は，西郷軍の支配地域で弾薬製造が行われていたため，５月 14 日に谷山作硝所を焼き払い，５月 16 日には多賀山から滝ノ上火薬製造所に対して砲撃を加え破壊した。

７　大口方面での戦闘

西郷軍において大口方面に派遣されたのは，辺見十郎太が指揮する雷撃隊と池辺吉十郎指揮する熊本隊であった。一時は，大口の山野まで進行した政府軍を水俣方面に敗走させ，久木野（水俣市）に兵を配置し，一進一退の攻防を繰り広げていた。その後，人吉側で長期戦をもくろんでいた西郷軍本隊が６月１日に敗れたため，大口との境と，人吉からの２方向から攻撃を受けることになった。この合流地点が高熊山や坊主石山であった。高熊山には熊本隊，坊主石山には雷撃隊が陣を構え，鳥神岡にも味方を配置し，堡塁（塹壕）を築いて，政府軍の攻撃に備えていた。山中では抜刀による戦いで対抗し，激しい戦いが繰り広げられた。しかし，６月 18 日に坊主石山が陥落し，同 20 日，高熊山の熊本隊と雷撃隊本営の大口も総攻撃を受け陥落した。

８　牧園方面の戦闘

政府軍と西郷軍は，牧園（旧踊郷）で２度の戦闘を行っている。１度目は，６月に大口の戦闘で敗れ，７月１日に横川を制圧された西郷軍が牧園麓に陣を築き，７月１

日～７月７日までの約１週間に渡り，政府軍と対峙した。しかし，政府軍が国分に進行して，挟み撃ちに遭うことを恐れた西郷軍は，本格的な戦闘は行わず，大窪方面（霧島市霧島町）・財部（曽於市）に退却した。

２度目は宮崎県延岡の可愛岳を突破した西郷軍が鹿児島に突入する直前の８月 30 日で，笠取峠で激しい銃撃戦を展開した。この際に西郷隆盛等一隊は，踊郷宿窪田（現在の霧島温泉駅近く）の前田萬兵衛の家に陣取った。そこには，現在「南州翁宿営之趾」として，碑文が建てられている。当時地元では，西郷軍の７月の敗退を「踊の一度敗れ」，８月を「踊の二度敗れ」と呼んで残念がったと言われている。

９　大隅半島から宮崎へ

大隅半島では，６月末から７月 24 日に都城が陥落するまでの間に，激しい戦いが繰り広げられた。この時の政府軍の百引・大崎・岩川で戦死した者や，都城の病院で病死した者が岩川官軍墓地に葬られている。

西郷軍は，常態化した兵員不足と弾薬不足をどうすることもできず，都城も７月 24 日に放棄した。その後，宮崎の大淀川を盾に抗戦するが，長大で複雑な流域は守備できず，政府軍に次々に突破された。７月 31 日には西郷軍は，宮崎市からも撤退した。さらに，８月 14 日には，政府軍は延岡を占拠した。

10　和田越の決戦から可愛岳突破・鹿児島へ

８月 15 日延岡市北方で包囲された西郷軍は，延岡市街地への突破を目指し，和田越一帯で戦ったが，その日の午前には敗戦が決定的となった。西郷らは政府軍に取り囲まれてしまうが，８月 18 日に可愛岳の政府軍を突破し，三田井（高千穂）から吉松・横川へ向い，前述とおり笠取峠を突破しようとして失敗し，溝辺から蒲生を経て，鹿児島へ向い，９月１日鹿児島市に突入して城山一帯を占拠した。

11　城山陥落・西南戦争の終結

すぐに陸路と海路から政府軍部隊が次々と鹿児島に集結し，城山は幾重にも包囲され，市内との交通も完全に遮断された。９月 10 日前後には，全旅団が鹿児島に集結し，城山に籠もる西郷軍を攻撃することとなった。西郷軍は，兵力約 300 名，軍夫等合わせても 400 名程度で，小銃は 150 丁，砲は若干であった。政府軍の砲弾を避けるため，西郷隆盛らは横穴を掘り，過ごしたと言われている。

９月 19 日，政府軍の山縣有朋参軍は，９月 24 日に総攻撃を行うことを決定し，各旅団に達示を行った。９月 21 日には，西郷軍の河野圭一郎が西郷の助命と義挙の大義を弁明するため，山野田一輔を伴い，山を下り，政府軍に投降した。９月 23 日，政府軍の川村参軍と会見したが，川村参軍は，西郷に本日午後５時までに来る旨を伝えるよう山野田を城山に返すが，西郷隆盛は「回答の要なし」と告げ，最後の戦いとなることが確定する。

政府軍の総攻撃は，９月 24 日午前４時の号砲を合図に一斉に火蓋を切った。すぐに西郷軍の各所の陣地は沈黙し，洞窟前に整列した 40 数名の西郷軍は，西郷隆盛を囲んで岩崎谷口へ向かった。そこで，ついに西郷隆盛も力尽き，別府晋介により介錯され，その生涯を閉じることとなった。その後も，村田新八・辺見十郎太らは岩崎口の堡塁で奮闘したが，午前７時には陥落し，７か月におよぶ国内最大・最後の内戦は，かけがえのない幾多の人材と財産を失い，終結することとなった。

12　西南戦争後の動き

火薬製造所

政府軍により破壊された滝ノ上火薬製造所・敷根火薬製造所・谷山作硝局は，再建されることはなく，陸軍の武器・弾薬製造はその後，東京と滝ノ上火薬製造所の弾薬製造器械が移設された大阪に集約されていった。また，海軍は，東京都の目黒に火薬製造所を建設し，明治 17（1884）年には，敷根火薬製造所の熟練工６名が招聘され，その技術が伝承された。

その他の集成館事業で建設された工場群は，西南戦争で，壊滅状態に陥り，再建されることはなかった。

戦没者の扱い

鹿児島には，各地に建立された西南戦争関連の招魂碑等の記念碑は，これまでに 69 か所確認されている。その中で，鹿児島市の祇園之洲（現在の祇園之洲公園）には官軍墓地が建設されている。しかし，鹿児島の地の官軍墓地だったためか，あまり管理されず，早々に荒廃が進んでいたようである。その後，太平洋戦争や昭和 26（1951）年のルース台風でさらに荒廃・破壊が進むが，公園として整備される。昭和 30（1955）年に地下納骨堂に合葬された後，昭和 52（1977）年に「西南の役官軍戦没者慰霊塔」が建立され，現在に至っている。

一方，官軍墓地として現存する曽於市大隅町の岩川官軍墓地は，地元の人々によって整備され，荒廃も進むこともなく，祀られている。

第２節　西南戦争関連遺跡の調査状況

ここからは，熊本県・宮崎県・大分県の発掘調査状況と国あるいは県の史跡に指定されている西南戦争関連遺跡の現状を述べる。

１　熊本県

（１）発掘調査

玉東町では，「国指定史跡」を目指して，発掘調査を行い『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』（玉東町教育委員会 2012）を刊行している。戦場跡だけでなく，前線基地となった政府軍病院跡，墓地等を対象にして町内に残る９か所の調査を実施し，その調査成果を基礎に保存・活用のための資料を詳細に報告している。

玉名市では，高瀬官軍墓地の発掘調査を行い『高瀬官軍墓地』（玉名市教育委員会 2018）を刊行している。官

軍墓地の数少ない発掘調査で，記録上の埋葬者に対して墓坑が少なく，全体的に配置したのでなく，一部の範囲で埋葬されている状況であることを報告している。調査成果をもとに，平成 27（2015）年に市の史跡に指定された。

熊本市では，熊本城と２つの西南戦争関連遺跡の発掘調査が行われている。熊本城では，各種整備に伴う発掘調査は行われているものの，西南戦争関連の遺構・遺物に関する報告書は少なかったが，『熊本城跡発掘調査報告書１－飯田丸の調査－』（熊本城調査研究センター 2014）では，初めてまとまった形で西南戦争関係の遺物を報告している。

西南戦争関連遺跡では，西南戦争最大の激戦地である田原坂を中心とする第１～６次調査を行い，『田原坂Ⅰ～Ⅴ』（熊本市教育委員会 2011 ～ 2015）として刊行している。田原坂周辺の踏査や史料調査から陣地や戦闘状況，使用された火器が推定され，発掘調査成果も古図や文献史料と一致することや，銃弾の出土状況から，西郷軍は前装銃だけでなく，かなりの割合で後装銃であるスナイドル銃を使用していたこと等を報告している。

『東中原遺跡・山頭遺跡』（熊本市教育委員会 2016）では，多くの薬莢や雷管の出土状況をもとに，銃を発砲した場所が特定されている。そこから当時の戦闘の実態を明らかにし，政府軍と西郷軍陣地が近い位置にあったことを報告している。なお，この調査は，西南戦争関連戦跡を考古学的手法で発掘調査を行い，明確な遺構・遺物が伴って確認された初めての例である。

八代市では，『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』（八代市教育委員会 2002）で，被葬者名や所属・戦没日，出土遺物，墓地構造等を詳細に報告している。

（２）西南戦争関連遺跡の状況

熊本城（熊本市）

慶長 12（1607）年，茶臼山と呼ばれた台地に加藤清正が当時の最先端技術と労力を投じ，その後，400 年の歴史の間に数々の歴史の舞台となる名城熊本城を完成させた。明治 10（1877）年の西南戦争勃発直前の火災により，その大半を焼失する。昭和８（1933）年には城域が史跡，宇土櫓等 13 棟の建造物が国宝に指定されたが，戦後の昭和 25（1950）年にそれぞれ史跡・重要文化財にあらためて指定され，昭和 30（1955）年には特別史跡に指定された。熊本城二の丸広場や髙橋公園などでは西南戦争関係の石碑や銅像を見ることができる。

西南戦争関連遺跡（熊本市・玉東町）

西郷軍と政府軍の激戦の場となった田原坂をはじめ、横平山，半高山・吉次峠，砲台及び官軍墓地等が良好に残っている。平成 25（2013）年に，国の史跡に指定された。熊本市では，田原坂歴史資料館が整備され，玉東町では，各遺跡をフィールドミュージアムとして回遊しながら，理解が深まる史跡整備を行っている。

七本官軍墓地（熊本市北区植木町）

墓地は周囲を石垣で囲み，玉垣がめぐらしてある。軍人 276 名，軍夫 10 名，警察官 14 名の計 300 名が埋葬されている。大半は田原坂の戦の後，植木周辺や吉次，木留，辺田野，平野，滴水などで戦死した東京，大阪，名古屋，広島，熊本鎮台及び近衛歩兵の所属である。昭和 58（1983）年に，県指定の史跡となっている。その他，官軍墓地として，城ノ原官軍墓地・肥猪町官軍墓地（南関町）・陣内官軍墓地（水俣市）・下岩官軍墓地（和水町）・明徳官軍墓地（熊本市）が，昭和 52（1977）年に県指定の史跡となっている。

２　宮崎県

（１）発掘調査

近年，西南戦争関連遺跡の分布調査を行っており，今後の調査成果が期待される。

（２）西南戦争関連遺跡の状況

県指定の史跡として，３か所指定されている。

谷村計介旧宅（宮崎市）

谷村計介は明治政府の軍人として，明治７（1874）年の佐賀の乱，明治９（1876）年の神風連の乱，明治 10（1877）年の西南戦争と奮戦した。特に西南戦争において，陸軍伍長であった谷村計介は，熊本城に構えていた政府軍が西郷軍の包囲を受け落城寸前の時に，城外にいた政府軍との連絡を果たし，城の危機を救った。しかし，田原坂の戦いにおいて戦死している。昭和８（1933）年に県の史跡に指定されている。旧宅跡は現在，「贈従五位陸軍伍長谷村計介誕生の地」と書かれた石碑と墓が建立されている。

南州翁寓居跡（延岡市）

明治 10（1877）年８月 15 日に延岡の和田越で政府軍に敗れた西郷隆盛は，戦いの後，北川村（現北川町）俵野の児玉家旧宅に身を寄せている。ここで，会議を開き西郷軍解散の命を発して，九州山地突破を敢行して鹿児島へ辿りついた。昭和８（1933）年に県の史跡に指定されている。現在，児玉家旧宅は，現在西郷隆盛宿陣跡資料館として西郷の遺品などを展示している。

有栖川征討総督宮殿下御本営遺跡（日向市）

政府軍総司令官有栖川熾仁親王殿下が西郷隆盛ら率いていた西郷軍追討のため８月 25 日から９月 26 日までの１か月間滞在した本営跡である。有栖川熾仁親王殿下が滞在された貴重な生活空間で，政府軍・西郷軍の攻防を知る上での重要な拠点であり，当時の遺品が数多く残されている。昭和 11(1936)年に県の史跡に指定されている。

３　大分県

（１）発掘調査

大分県では平成 16 ～ 20 年度に西南戦争遺跡の分布調査を実施しており，県南部を中心に 866 か所の陣地跡を

確認し，その調査成果として，『西南戦争戦跡分布調査報告書』（大分県埋蔵文化財センター 2009）を刊行している。調査対象には，多稜形の堡塁群を含んでおり，戦闘記録と分布調査の成果から，具体的な戦闘経過を報告している。

（２）西南戦争関連遺跡の状況

分布調査で確認した台場は周知の埋蔵文化財包蔵地として文化財保護法上の対象地となっている。

４　その他（研究等）

西南戦争戦跡に残る遺構や遺物を対象に考古学的な研究と併せて，史料の検討を行い，戦跡と出土遺物からみた西南戦争の特徴を考察したものに，高橋信武氏の『西南戦争の考古学的研究』がある（高橋 2017）。

西南戦争の陣地跡の踏査状況や史料調査・遺物検討など多方面から考察したものに，高橋氏や有志等による『西南戦争之記録』がある（西南戦争を記録する会 2002・2003・2005・2008・2012）。

第３節　鹿児島県の西南戦争関連遺跡の調査及び選定基準

１　調査方法

文化財課では，各県の調査状況を踏まれ，平成 21 年に県内各市町村に対し，西南戦争関連遺跡等の現況調査を依頼した。提供された情報をもとに西南戦争関連遺跡の調査対象を抽出し，現地踏査を行った結果，16 市町の 100 件の報告がリストアップされた（第２～４表）。内訳は記念碑 69 件，陣地 13 件，戦場跡５件，墓地５件，建造物４件，休憩地２件，街道１件，その他１件である。

２　調査対象遺跡の選定基準

100 件の報告の中から，埋蔵文化財調査の対象地としての選定を行った。No は第２～４表の No と同一である。

（１）記念碑 69 件のうち，西南戦争時と直接関係ない 68 件を除外した。ただし，No. ４は西郷隆盛自決の地とされていることから残すこととした。

（２）建造物のうち，戦闘と直接関係ないもの（No. 67, 74）を除外した。

（３）休憩地２件（No. 55, 56）は，個人住宅で，残存状況も不良または消滅のため除外した。

（４）墓地５件のうち，４件（No. 11, 60, 69）は民有地のため除外した。なお，No. 76 も民有地であるが，No. 75 の岩川官軍墓地を調査するのに併せて，土地所有者の同意を得て調査することにした。

（５）街道１件（No. 49）とその他（No. 61）は，戦闘と直接関係ないため除外した。

（６）陣地 13 件のうち，政府軍本営と使用した建物が建て直されている１件（No. 93）を除外した。

以上の結果，残る 21 件（第２～４表　　・第２図・第３図）を調査対象候補として検討することとなった。

埋文センターでは，調査対象地を選定するにあたり，文化庁や文化財課・候補所在地市町村と協議を行い，西南戦争勃発の契機となり，敷根火薬製造所跡の本局である滝ノ上火薬製造所跡，県内での激戦地であり市の史跡や地元の研究が行われている高熊山激戦地跡とチシャケ迫堡塁跡群，当時の姿に近いと考えられている岩川官軍墓地を調査することとなった。

第４節　鹿児島県の西南戦争関連遺跡の現況状況

本県における西南戦争関連の史跡は，西郷隆盛終焉の地となった城山，西郷をはじめ，西郷軍の志士たちが眠る南洲墓地など西南戦争終焉時期の史跡が有名だが，それ以外はあまり知られていない。ここでは，史跡に指定されている西南戦争関連遺跡の概要について記述する。なお，滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡塁跡群・岩川官軍墓地及び西南の役薩軍の墓については，各章を参照されたい。

鹿児島県内の西南戦争関連遺跡　史跡指定等の状況

国指定２件（城山，大口筋 白銀坂 龍門司坂）
県指定３件（鶴丸城跡，私学校跡石塀，南洲墓地）
市指定５件（西郷隆盛洞窟，西郷終焉の地，
西南の役高熊山激戦地跡，岩川官軍墓地，
西南の役薩軍の墓）

（１）城山

城山は，鹿児島市の中心に横たわる標高約 107 ｍのシラスからなる丘陵である。南北朝時代(1336 ～ 1392)に，上山氏が築城・居城した山城（上山城）であったが，江戸時代初めに，鹿児島城の後背地として，城の一部となっている。明治 10（1877）年西南戦争では，５月・６月の鹿児島市での戦闘の際に，政府軍が城山にも堡塁を作り，陣地を築いている。激しい攻防戦が繰り広げられたのを物語るように，現在でも堡塁跡が残っている。また，９月１日には，西郷軍の本営となり，政府軍の総攻撃を受けて，同月 24 日に激戦の末に力尽き，西南戦争の終結地となった場所でもある。

昭和６（1931）年，国の記念物（史跡）・天然記念物（植物）に指定された。一般人の立入禁止区域ともなっていたため，植物学上からも，日本南岸の固有の自然林を形成し，植物の宝庫と呼ばれ，南九州植物分布の縮図といわれている。城山公園として整備され，観光客はじめ，鹿児島県民・鹿児島市民の憩いの場として，利用されている。

（２）鶴丸城跡

慶長７（1602）年，島津家 18 代当主家久によって造られ，正式名称は鹿児島城である。城山の地形が，翼を広げた鶴の形になっていることから鶴丸城と呼ばれている。天守閣を持たない居館群からなり，城は背後の城山まで取り込んでおり，中世の山城的な構成となっている。

明治６（1873）年に本丸が焼け，明治 10（1877）年の西南戦争で，二ノ丸も焼けている。その後，旧制七高，鹿児島大学の敷地となり，現在は二ノ丸跡に県立図書館が建設され，本丸には黎明館が建設されている。昭和 28（1953）年，石垣や堀などが，鹿児島県の記念物（史跡）に指定された。

（３）私学校跡石塀

明治６（1873）年，征韓論に破れ，鹿児島に帰郷した西郷隆盛は，一緒に帰郷した薩摩藩士のために，桐野利秋，篠原国幹，大山綱良などとともに，鹿児島城の厩跡に私学校を設立した。これを機に，明治９（1876）年頃には，県内すべての郷内に私学校が設立され，多くの青少年が学んだといわれている。西南戦争の際，私学校周辺は激戦地となり，当時の弾痕が石塀に残っており，戦闘の激しさを伝えている。昭和 43（1968）年，鹿児島県の記念物（史跡）に指定された。現在，石塀の内側には，鹿児島医療センターが建設されている。

（４）南洲墓地

墓地のある場所は，藤沢山浄光寺（神奈川県）の末寺である時宗の浄光明寺があった跡地である。かたわらの南洲神社は，明治 13（1880）年に建立されたが，昭和 20（1945）年の戦災で焼失し，昭和 32（1957）年に新たな社殿が造営されている。西南戦争後，政府軍は県令岩永通俊の願いを聞き，西郷隆盛以下 40 人を浄光明寺の境内に仮埋葬することを許可した。この他に，不断光院・草牟田・新照院の上・城ヶ谷の４か所に埋葬された。明治 12（1879）年，有志により，鹿児島市内に仮埋葬された 220 余人の遺骨を知事の許可を得て，西郷以下の仮埋葬遺体とともに現在の位置に整然と改葬した。明治 16（1883）年，薩摩・大隅・日向・豊後などの各地で戦死した遺骨も集められた。墓地には 749 基の墓石があり，西南戦争で敗れた西郷軍将士 2,023 名が眠っている。西郷隆盛を中心に，桐野利秋，篠原国幹，村田新八，辺見十郎太，別府晋介，桂久武，鹿児島初代県令大山綱良をはじめ，山形県などの各県の出身者の名も見られる。昭和 30（1955）年に，鹿児島県の記念物（史跡）に指定された。

（５）西郷隆盛洞窟

西南戦争の最終決戦である城山攻防戦において，西郷隆盛は，明治 10（1877）年９月 19 日から同月 24 日までの６日間，この洞窟で過ごしたとされ，最後まで西郷軍の指揮を執っていた重要な場所である。現在の洞窟の規模は，奥行き４ｍ，間口３ｍ，入口の高さは 2.5 ｍである。昭和 49（1974）年，鹿児島市の記念物（史跡）に指定された。

（６）西郷隆盛終焉の地

城山に追い詰められ，西郷軍本陣は岩崎谷の洞窟へ移し，西郷隆盛は最後の６日間を過ごすことになる。９月 24 日未明，政府軍の総攻撃が始まり，西郷隆盛は，桐野利秋，村田新八らとともに岩崎谷を下り，谷の入口付近で銃弾を受け，別府晋介に介錯を頼み自決した。明治 32（1899）年には，西郷終焉之碑が建てられている。昭和 49（1974）年，鹿児島市の記念物（史跡）に指定された。

（７）大口筋 白銀坂 龍門司坂

龍門司坂は，大口筋の一部で，寛永 12（1635）年に整備され，100 年後に石が敷かれている。石は近くの樋ノ迫山から切り出され、全長は 1,500 ｍ余りだったと考えられ，現在は約 500 ｍが当時の姿で残っている。明治 10（1877）年には，西郷隆盛の率いる西郷軍がこの坂道を通って熊本へ向かっている。薩摩街道大口筋　白銀坂 龍門司坂として，平成 18（2006）年に国の記念物（史跡）に指定された。

（８）その他

鶴丸城（鹿児島城）に関連して，令和２（2020）年に，官民一体となった鶴丸城「御楼門」復元実行委員会により，御楼門が復元された。また，鶴丸城（鹿児島城）を含む１県９市の構成文化財『薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～』として，令和元年（2019）には，日本遺産にも認定されている。

【引用・参考文献】

熊本城調査研究センター　2014『熊本城跡発掘調査報告書１－飯田丸の調査－』熊本城調査研究センター報告書 第１集

玉東町教育委員会　2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町文化財調査報告 第８集

玉東町教育委員会　2016『史跡西南戦争遺跡保存活用計画書』玉東町編

玉名市教育委員会　2018『高瀬官軍墓地』玉名市文化財調査報告第 39 集

熊本市教育委員会　2011 ～ 2015『田原坂Ⅰ～Ⅴ』熊本市の文化財　第５・15・30・39・48 集

熊本市教育委員会　2016『東中原遺跡・山頭遺跡』熊本市の文化財　第 56 集

熊本市　2018『特別史跡熊本城保存活用計画』

八代市教育委員会　2002『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』八代市文化財調査報告書 第 16 集

大分県埋蔵文化財センター　2009『西南戦争戦跡分布調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 44

みやざき文化財情報ＨＰ

鹿児島県　1941 『鹿児島県史』第３巻

鹿児島県教育委員会　2004『鹿児島県の近代化遺産』

鹿児島市教育委員会　2016 『史跡　めぐりガイドブック』

姶良市　指定文化財・登録文化財一覧表及びＨＰ

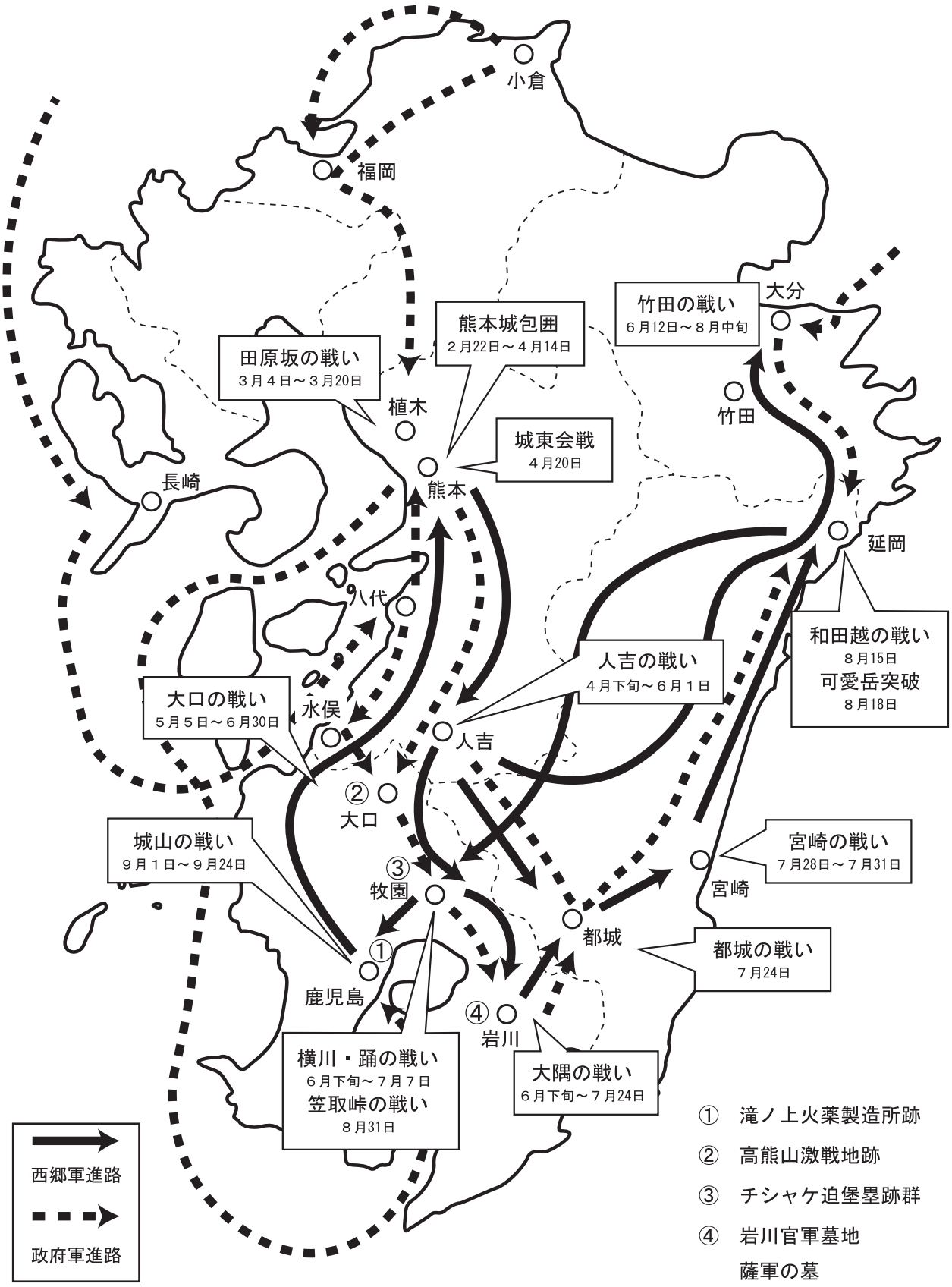
高橋信武　2017『西南戦争の考古学』吉川弘文堂

原口泉　2018 『戦況図解西南戦争』サンエイ新書

松尾千歳　2017『西南戦争と集成館』尚古集成館紀要 第 16 号

西南戦争を記録する会 2002・2003・2005・2008・2012『西南戦争之記録』

学習研究社　1990『西南戦争【最強薩摩軍団崩壊の軌跡】』歴史群像シリーズ 21



第１図　西南戦争関連戦地図（玉東町教育委員会 2012，学習研究社 1990，原口泉 2018 を参考に作成）

第１表　西南戦争関連年表

年月日					出　　来　　事	本報告関連遺跡
西暦	元号		月	日		
1818 ～ 1831	文政	元 ～ 13			火薬製造の本局（銃薬方）として滝ノ上火薬製造所が設立	滝ノ上火薬製造所跡
1848	嘉永	元			島津斉彬，綿火薬の製造研究	滝ノ上火薬製造所跡
1849	嘉永	2			火薬製造法を洋式に改める	滝ノ上火薬製造所跡
1853	嘉永	6			綿火薬の製造成功	滝ノ上火薬製造所跡
1858	安政	5			谷山作硝局の設置（硝石不足を解決）	滝ノ上火薬製造所跡
1863	文久	3			薩英戦争勃発。敷根火薬製造所が設立（蘭式→英式）	滝ノ上火薬製造所跡
1868	慶応	4			戊辰戦争勃発（薩摩産の火薬を供給）	滝ノ上火薬製造所跡
1868	明治	元			草牟田火薬庫を設立	滝ノ上火薬製造所跡
1869	明治	2			版籍奉還に伴い，集成館・銃薬方・兵器方を廃止	滝ノ上火薬製造所跡
1871	明治	4			廃藩置県に伴い，滝ノ上・敷根火薬製造所，谷山作硝局が 政府所管となり軍の管理下へ	滝ノ上火薬製造所跡
1872	明治	5			滝ノ上・敷根火薬製造所，谷山作硝局が陸軍所管へ	滝ノ上火薬製造所跡
1876	明治	9			各地で不平士族の反乱が起こる（神風連の乱・秋月の乱・萩の乱など）	
1877	明治	10	1	下旬	武器弾薬を大阪へ移すため，赤龍丸が鹿児島入港	滝ノ上火薬製造所跡
				29	私学校生徒，草牟田火薬庫を襲撃。連日各地の火薬庫が襲撃される	滝ノ上火薬製造所跡
			2	15	西郷隆盛らの本隊（１・２番隊）が鹿児島を出発	
				19	政府が「鹿児島賊徒征討の詔」を発する 有栖川宮仁親王を征討総督として九州へ派兵 山縣有朋・川村純義を参軍に，野津鎮雄を第１旅団，三好重臣を第２旅団の司令長官に任命	
				21	熊本県士族池辺吉十郎ら西郷軍に呼応して挙兵	
				22	熊本城を包囲	
			3	4	田原坂の戦い開始	
				7	勅使柳原前光を伴った艦隊が鹿児島の弾薬製造工場ほかを破壊・ 弾薬製造器機の搬出（～ 12 日）	滝ノ上火薬製造所跡
				8	政府軍，集成館・滝ノ上火薬製造所の火薬を搬出及び処分（～９日）	滝ノ上火薬製造所跡
				10	春日艦，敷根湾へ，敷根火薬製造所を焼き払う	滝ノ上火薬製造所跡
				20	17 日間の激戦のすえ，田原坂から敗退	
			4	14	黒田清隆率いる第１・２旅団が熊本城に入る 熊本城解放	
				21	西郷軍，本営の人吉移転を決定 十個大隊を，九隊へと再編成	
				27	政府軍、別動第１旅団を中心に鹿児島に上陸	
				28	西郷隆盛ら西郷軍幹部が人吉に到着（26 日） 桐野利秋，熊本隊・雷撃隊を大口へ向かわせる	高熊山激戦地跡
			5	3	新鹿児島県令岩村通俊が赴任。４日には，第４旅団・警視１大隊，鹿児島に到着。政府軍，城山や甲突川沿い，城山東部（岩崎）から多賀山に布陣	
				4	山野（大口）で戦闘開始	高熊山激戦地跡
				5	政府軍・西郷軍が鹿児島市で激突	
				6	政府軍，牛尾川（大口）まで侵攻	高熊山激戦地跡
				10	西郷軍攻勢へ。政府軍，水俣方面へ敗走	高熊山激戦地跡
				14	政府軍，谷山（鹿児島市）へ進撃し，谷山作硝局を焼き払う	滝ノ上火薬製造所跡
				16	政府軍，多賀山より滝ノ上火薬製造所へ砲撃し破壊	滝ノ上火薬製造所跡
				26	政府軍，西郷軍を鹿児島城下一帯から駆逐	
			6	1	西郷軍，人吉を撤退。	高熊山激戦地跡
				7	第３旅団，久木野（水俣市）占領	高熊山激戦地跡
				8	第３旅団，小川内（大口）占領	高熊山激戦地跡
				13	高熊山山頂に熊本隊が集結。宿舎建設，堡塁構築 第３・別働第２旅団，山野（大口）占領	高熊山激戦地跡
				14	高熊山に熊本隊，坊主石山に雷撃隊・正義隊が陣取る	高熊山激戦地跡
				16	別働第２旅団，黒萩山に出軍 河泉山の西郷軍撤退	高熊山激戦地跡
				18	政府軍が攻撃開始。高熊山では熊本隊と第三旅団が交戦 坊主石山では雷撃隊と正義隊と別働第２旅団が交戦，坊主石山陥落	高熊山激戦地跡
				19	別働第２旅団，坊主石山から高熊山の熊本隊へ向け砲撃	高熊山激戦地跡
				20	第３旅団，高熊山へ進撃，高熊山占領 鳥神岡，大口陥落	高熊山激戦地跡
			7	1	西郷軍，横川から踊へ退却 政府軍，栗野の幸田や恒次などから横川へ進撃	笠取戦跡
				2	加治木の西郷軍，第４旅団と交戦	笠取戦跡
				3	下植村の西郷軍守備隊が芦谷原へ後退 熊本隊が浅谷で政府軍と交戦 加治木の西郷軍は一部を小田越の守備に当て，主力は国分へ	笠取戦跡
				4	第３旅団の一部が下植村・有村・落水田まで進出，芦谷原の西郷軍と交戦	笠取戦跡
				6	政府軍，大窪・田口方面へ退却	笠取戦跡
				7	政府軍，横川・植村・万膳の三方向から踊へ進撃	笠取戦跡
				8	百引（鹿屋市輝北町）で戦闘，西郷軍勝利	岩川官軍墓地
				11	荒佐野（大崎町）で戦闘，政府軍勝利	岩川官軍墓地
				12	假宿（大崎町）で戦闘，西郷軍勝利	岩川官軍墓地
				24	都城で敗退	
			8	15	和田越の戦い（西郷軍最後の組織的戦闘）	
				16	解散令が出され，半数が降伏	
				18	可愛岳越えをして政府軍包囲網から脱出	
				30	笠取峠で西郷軍と政府軍が交戦 西郷隆盛，芦谷原の前田万兵衛宅に陣取る	笠取戦跡戦跡
				31	西郷軍，笠取峠の突破を諦め，赤水を抜けて蒲生へ	笠取戦跡戦跡
			9	1	米倉の戦い，西郷軍が急襲して鹿児島城山を占拠	
				24	城山陥落。西郷隆盛自刃。	

第２表　西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表（１）

No	市町村	名称	所在地	種類	残存状況	指定	現況	所有	備考
1	鹿児島市	城山	城山町	陣地	良	なし	山林	民有地	夏陰城跡東南の上（１基），城ヶ谷尾根頂上（２基），城山尾根頂上(城山公園内)（３基),岩崎谷尾根頂上（15 基）に堡塁（塹壕）が残存する。
2	鹿児島市	西郷隆盛洞窟	城山町	陣地	良	市指定	公園	公有地	
3	鹿児島市	私学校跡石塀	城山町	建造物	良	県指定	宅地	民有地	
4	鹿児島市	西郷隆盛終焉の地	城山町	記念碑	良	市指定	その他	公有地	
5	指宿市	西南の役従軍戦没者招魂塚	山川山下町	記念碑	良	なし	墓地隣接地	団体所有	
6	南さつま市	招魂冢	加世田武田社付	記念碑	良	なし	護国神社境内		
7	南さつま市	招嵬冢	坊津町坊 9024	記念碑	良	なし	地籍墓地	公有地	
8	南さつま市	招魂社	金峰町花瀬下之馬場	記念碑	良	なし	墓地横	集落共有地	
9	南さつま市	招魂冢	金峰町尾下麓公民館南隣	記念碑	良	なし	その他	集落共有地	
10	薩摩川内市	一条坂の戦い	陽成町一条殿 8568 番地付近	戦場跡	やや良	なし	山林	民有地	『川内市史』下巻
11	薩摩川内市	巡査殿墓	入来町浦之名	墓地	良	なし	墓地	民有地	
12	薩摩川内市	西南之役百年記念碑	西方町（西方寺付近）	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
13	薩摩川内市	招魂碑	陽成町宮小平 4650 番地	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
14	薩摩川内市	招魂碑	城上町今寺 866-4 付近	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
15	薩摩川内市	招魂碑	高城町西迫 1324 番地 (市立高来小学校横手）付近	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
16	薩摩川内市	招魂碑	水引町 5339 番地 (若宮神社境内内)	記念碑	良	なし	山林	公有地	
17	薩摩川内市	招魂碑	宮内町 1935 番地-2 (みくに幼稚園駐車場内)	記念碑	良	なし	山林	民有地	
18	薩摩川内市	招魂碑	中郷町 6519 番地 (諏訪神社境内内)	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
19	薩摩川内市	招魂碑	田海町中今村 (中今村公民館内)	記念碑	良	なし	山林	集落共有地	
20	薩摩川内市	警修墓地	大小路町 48 番 37 号 (泰平寺墓地内)	記念碑	やや良	なし	墓地内	公有地	
21	薩摩川内市	招魂塚	向田町 1139 番地	記念碑	良	なし	山林	公有地	
22	薩摩川内市	招魂碑	向田町 1139 番地	記念碑	良	なし	山林	公有地	
23	薩摩川内市	丁丑戦役五十年祭記念碑	向田町 1139 番地	記念碑	良	なし	山林	公有地	
24	薩摩川内市	忠魂碑	平佐町 3057-16	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
25	薩摩川内市	招魂碑	平佐町 3057-16	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
26	薩摩川内市	忠魂碑	中村町 7396 番地	記念碑	良	なし	雑種地	公有地	
27	薩摩川内市	招魂塚	百次町 898-6	記念碑	良	なし	山林	公有地	
28	薩摩川内市	招魂碑	高江町 534-2	記念碑	良	なし	境内地	民有地	
29	薩摩川内市	太平橋架橋碑	東開聞町 179	記念碑	良	市指定	宅地	公有地	
30	薩摩川内市	明治十年の役戦没者招魂碑	樋脇町塔之原 5338 番地	記念碑	良	なし	境内地	民有地	
31	薩摩川内市	魂乎歸来	入来町浦之名　寿昌寺跡	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
32	薩摩川内市	鬼哭碑	入来町浦之名　寿昌寺跡	記念碑	良	なし	墓地	民有地	
33	薩摩川内市	招魂碑	東郷町斧渕 4675-4	記念碑	良	なし	宅地	公有地	10 月東郷町戦没者追悼式
34	薩摩川内市	西南戦争供養塔	祁答院町上手 4309 番地 (平国忠義氏宅左横山裾)	記念碑	良	なし	山林	民有地	
35	薩摩川内市	黒木招魂墓	祁答院町黒木（常永寺の裏山）	記念碑	良	なし	山林	公有地	
36	薩摩川内市	大村招魂墓	祁答院町下手（永福寺隣）	記念碑	良	なし	雑種地	集落共有地	
37	薩摩川内市	藺牟田招魂社	祁答院町藺牟田 138 番地 (藺牟田小学校校庭隣り)	記念碑	やや良	なし	雑種地	集落共有地	
38	薩摩川内市	慰霊塔	祁答院町下手（永福寺隣り）	記念碑	良	なし	雑種地	集落共有地	
39	薩摩川内市	招魂碑	里町里 1684-1･1684-2	記念碑	やや良	なし	公園	公有地	招魂碑は高さ２m50 cmの自然石の記念碑
40	薩摩川内市	招魂碑	下甑町手打 1312-1	記念碑	やや良	なし	雑種地	公有地	慰霊祭：毎年 10 月中旬 場所：大照寺 主催：下甑町手打区

第３表　西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表（２）

No	市町村	名称	所在地	種類	残存状況	指定	現況	所有	備考
41	阿久根市	陣之尾塁跡	多田山ノ口	陣地	不明	なし	丘陵	国有地他	阿久根市史，埋セ調査
42	阿久根市	甲子・戊辰・丁丑戦役記念碑	波留戸柱	記念碑	やや良	なし	神社敷地	神社敷地	
43	阿久根市	戦亡招魂塚	波留戸柱	記念碑	やや良	なし	神社敷地	神社敷地	
44	長島町	十五社神社（唐隈）下西南之役従軍記念碑	唐隈集落公民館	記念碑	やや良	なし	公園	集落共有地	『長島郷土誌』
45	長島町		小浜十五社神社境内	記念碑	やや良	なし	宅地	集落共有地	『長島郷土誌』
46	長島町		成川内伊勢神社境内	記念碑	やや良	なし	宅地	集落共有地	『長島郷土誌』
47	出水市	薩士十二人被斬首の地	上大川内六ヶ所 2750-57	記念碑	良	なし	牧場	民有地	『出水の文化財』
48	伊佐市	高熊山激戦地跡	大口木ノ氏字高熊	陣地	やや良	市	山林	公有地・民有地	『大口市郷土誌』下巻
49	姶良市	龍門司坂	字高倉 4970 番地先から，木田字内祝儀 5077-3 番地先まで	街道	良	国指定	町道	公有地	平成 18 年 7 月 28 日付け，国指定文化財
50	姶良市	戦亡招魂之表	加治木町仮屋町 212-1	記念碑	良	無	神社境内	遺族会	
51	姶良市	戦亡招魂表，西南役記念碑	下名 1195-1	記念碑	良	なし	招魂社	公有地	『姶良町郷土誌』
52	姶良市	招魂塔	鍋倉 694-2	記念碑	良	なし	墓地	民有地	『姶良町郷土誌』
53	姶良市	従軍碑	鍋倉 694-2	記念碑	良	なし	墓地	民有地	『姶良町郷土誌』
54	姶良市	招魂石	平松 6198	記念碑	良	なし	墓地	民有地	『姶良町郷土誌』
55	姶良市	富田次兵衛宅	蒲生町上久徳字正孝庵原	休憩地	消滅	なし	水田	民有地	『蒲生郷土誌』
56	姶良市	渕上休右衛門宅（質屋）	蒲生町上久徳字蛭子原	休憩地	やや良	なし	宅地	民有地	『蒲生郷土誌』
57	姶良市	蒲生城跡	蒲生町久来字竜ヶ山	陣地	やや良	なし	山林	公有地・民有地	『蒲生郷土誌』
58	姶良市	佐山峠	蒲生町久来字佐山	陣地	やや良	なし	峠	公有地	『蒲生郷土誌』
59	姶良市	野川沢	蒲生町久来字野川沢	陣地	不良	なし	工業団地	民有地	『蒲生郷土誌』
60	姶良市	反私学校派 4 名の墓	平松 6190	墓地	良	なし	墓地	民有地	『姶良町郷土誌』
61	姶良市	西郷隆盛の腰掛け石	下名 1118　瀬戸山十郎宅	その他	良	なし	宅地	民有地	『姶良町郷土誌』
62	霧島市	古戦場跡（激戦地・堡塁）	横川町上ノ字鷹巣	陣地	やや良	なし	山林	民有地	『横川町郷土誌』
63	霧島市	笠取戦跡	牧園町宿窪田字笠取	陣地	不良	なし	山林	民有地	『牧園町郷土誌』
64	霧島市	西南戦争馬堀	霧島永水　馬堀	陣地	やや良	なし	山林	民有地	国分郷土誌編纂時は木が小さく，藪であったが，今では馬堀もはっきりしている。『国分郷土誌』
65	霧島市	古戦場（大窪）	霧島大窪字芹迫	戦場跡	やや良	なし	山林・水田	民有地	『霧島町郷土誌』
66	霧島市	敷根火薬製造所跡	国分敷根字彦田	建造物	消滅	なし	水田 畑 荒地	民有地	『国分郷土誌』『敷根火薬製造所跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡』（県埋セ 194）
67	霧島市	戦闘による刀傷の跡	福山町佳例川池田 1712	建造物	良	なし	宅地	民有地	『薩摩藩の天道 東目筋』
68	霧島市	丁丑戦亡之塚・殉忠碑	国分中央二丁目 金剛寺跡	記念碑	良	なし	畑・原野 墓地	公有地・集落共有地	
69	霧島市	西南戦争薩軍墓	霧島永水　馬堀	墓地	やや良	なし	山林	民有地	『国分郷土誌』
70	霧島市	明治十年之役招魂碑	牧園町宿窪田	記念碑	やや良	なし	なし	公有地	『牧園町郷土誌』
71	霧島市	南洲翁宿営之跡	牧園町宿窪田	記念碑	良	なし	宅地	民有地	『牧園町郷土誌』
72	曽於市	皆越台場跡	大隅町坂元	陣地	不良	なし	山林	民有地	『大隅町誌』
73	曽於市	十文字原西南の役激戦地跡	財部町	戦場跡	不良	なし	宅地	民有地	『財部町郷土史』
74	曽於市	落合家の辺見十郎太がもたれていた柱	末吉町岩﨑内堀	建造物	不良	なし	宅地	民有地	『末吉郷土史』
75	曽於市	岩川官軍墓地	大隅町岩川東馬場	墓地	良	市・史跡	墓地	公有地	『大隅町誌』

第４表　西南戦争関連史跡・遺跡調査状況一覧表（３）

No	市町村	名称	所在地	種類	残存状況	指定	現況	所有	備考
76	曽於市	西南の役薩軍の墓	末吉町岩崎岩南	墓地	良	市・史跡	山林	民有地	『末吉郷土史』
77	曽於市	戦死招魂標石	大隅町岩川上馬場	記念碑	良	なし	神社	民有地	『大隅町誌』
78	曽於市	招魂碑	大隅町恒吉貝ヶ塚	記念碑	良	なし	慰霊区	公有地	『大隅町誌』
79	曽於市	招魂碑	末吉町二之方 6299-2（掛上り）	記念碑	良	なし	慰霊地	公有地	『末吉郷土史』
80	曽於市	西南役記念碑	末吉町二之方 6299-2（掛上り）	記念碑	良	なし	慰霊地	公有地	『末吉郷土史』
81	曽於市	西南役招魂碑	財部町北俣城山	記念碑	良	なし	城跡	公有地	『財部町郷土史』
82	曽於市	西南の役従軍記念碑	財部町北俣城山	記念碑	良	なし	その他	公有地	『財部町郷土史』
83	垂水市	招魂墓	二川西宝寺横	記念碑	やや良	なし	宅地	民有地	『垂水市史料集』
84	垂水市	招魂碑	下宮町（下宮神社内）	記念碑	やや良	なし	神社内	神社敷地	『垂水市史料集』
85	垂水市	招魂墓	新城（神貫神社内）	記念碑	良	なし	神社内	神社敷地	『垂水市史料集』
86	錦江町	麓公民館招魂碑（丁丑の役招魂碑）	馬場	記念碑	不明	なし	宅地	集落共有地	
87	鹿屋市	高隈城	上高隈	陣地	やや良	なし	山林	民有地	『鹿屋市史』
88	肝付町	戦亡招魂塚	前田 3632 番地 竹田神社境内南隅	記念碑	良	なし	神社地	社地	旧高山町の戦没者が列記してある。 基壇には，戦没地及び戦没年月日並びに氏名が列記してある。 花台は丸に桜が掘ってある。
89	肝付町	招魂墓	南方 2636 番地	記念碑	良	なし	雑種地	公有地	側面に戦没者の氏名及び戦没年月日並びに戦没地が列記してある。
90	大崎町	明治 10 年西南の役招魂碑	仮宿字西迫 1589 番地	記念碑	良	なし	都萬神社境内	宗教法人都萬神社	『大崎町史』
91	大崎町	明治 10 年西南の役激戦の跡	野方字蔵元	戦場跡	不明	なし	畑	民有地	『大崎町史（明治百年）』及び『郷土の歴史』を参考とする。日付は旧暦で記述されている可能性がある。 かつて畑地耕作中に弾丸が多く出土，包含層が撹乱されている可能性もある。
92	大崎町	明治 10 年西南の役激戦の跡	仮宿字城内・新土手・大橋	戦場跡	やや良	なし	宅地	民有地	櫨山贇一氏の『明治十年西南の役従軍略記』を参考とする。
93	大崎町	明治 10 年西南の役官軍本営の跡	仮宿字町上 1750 番地	陣地	不明	なし	宅地	民有地	櫨山贇一氏の『明治十年西南の役従軍略記』・『鹿児島県史』を参考とする。
94	西之表市	玉川招魂碑	東町	記念碑	良	なし	公園	集落共有地	他に「従軍者碑」「紀恩招魂碑」「玉川招魂整理碑」がある。
95	西之表市	招魂	住吉浜之町	記念碑	良	なし	寺	集落共有地	
96	西之表市	招魂碑	国上中目	記念碑	良	なし	神社	集落共有地	
97	西之表市	陣亡招魂之碑	現和浅川	記念碑	良	なし	神社	集落共有地	
98	中種子町	野間神社の招魂碑	中種子町野間神社	記念碑	良	なし	神社	社地	
99	南種子町	茎永の招魂碑	南種子町茎永松原	記念碑	良	なし	？	？	
100	龍郷町	龍佐央整之碑	龍郷 172（田畑家墓地内）	記念碑	良	なし	墓地	民有地	銘文「明治九年十二月人民総代ニテ佐藤自由販売請願ノ為メ上鹿　偶明治十年西南役ニ際シ薩軍ニ参□明治十年八月請願ノ目的ヲ遂ゲ帰島際便乗帆船青□丸七島灘ニテ破船溺死　行年四十六歳」□は解読不可

（　）調査対象候補とした 21 遺跡（第２図・第３図）

第２図　西南戦争関連史跡・遺跡位置図（１）

第３図　西南戦争関連史跡・遺跡位置図（２）（鹿児島市）

滝ノ上火薬製造所跡

第３章　滝ノ上火薬製造所跡

第１節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

滝ノ上火薬製造所跡は鹿児島市稲荷町に所在し，鹿児島市水道局の滝之神浄水場の付近一帯に位置する。

遺跡の所在する鹿児島市は，九州の南端，鹿児島県本土のほぼ中央部にあって，東経 130 度 23 分から 130 度 43 分、北緯 31 度 17 分から 31 度 45 分で，鹿児島県中西部，薩摩半島の北東部に位置する。同市は，北は薩摩川内市・姶良市に，南は指宿市・南九州市に，西は日置市・南さつま市とそれぞれに接し，東は鹿児島湾（錦江湾）に面している。

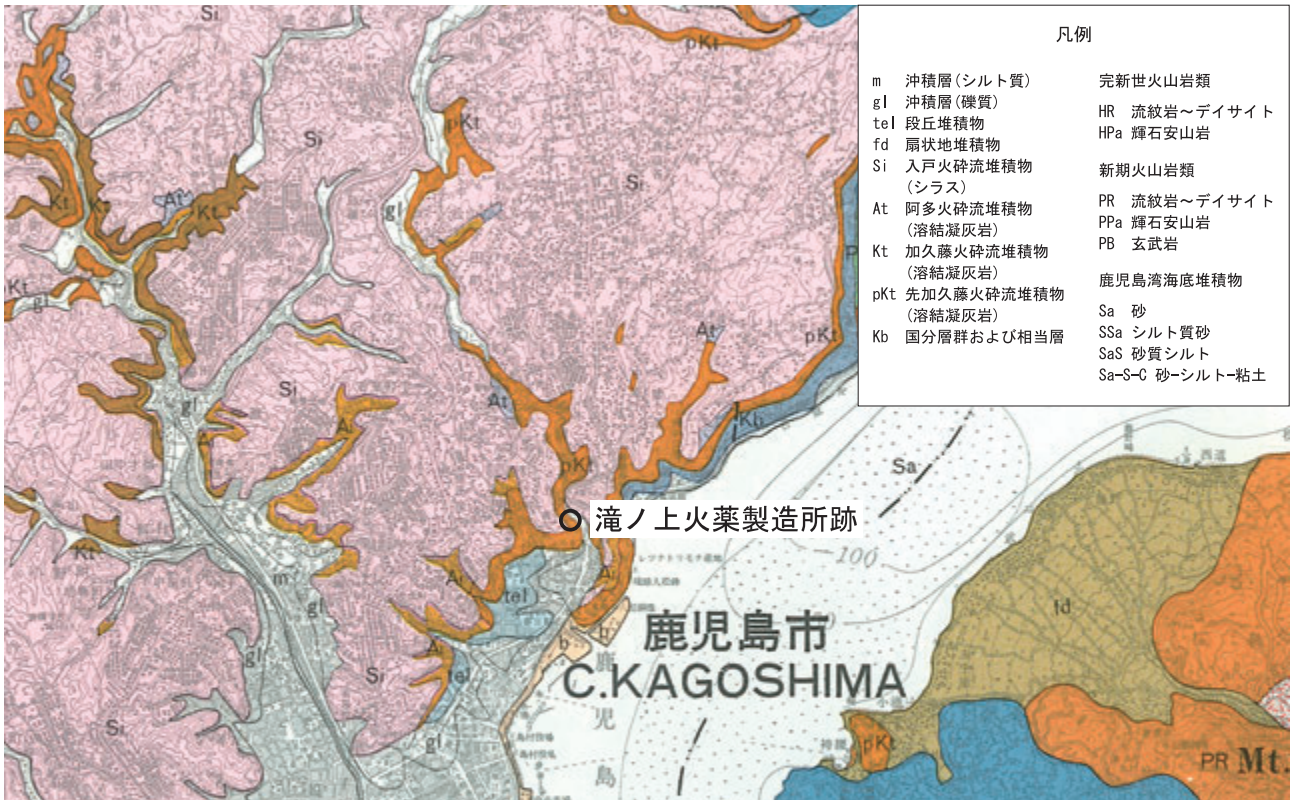
明治４（1871）年に廃藩置県とともに県庁の所在地となり，明治 22（1889）年４月には市制が施行されている。太平洋戦争後は観光・商工業の発展とともに市域も拡大し，昭和 42（1967）年４月 29 日には隣接する谷山市と合併して人口 38 万人の新鹿児島市が誕生，昭和 55（1980）年７月には人口 50 万人を突破している。その後，平成元（1989）年には市制施行 100 周年を迎え，平成８（1996）年４月１日には中核市に指定されている。また，平成 16（2004）年 11 月１日には吉田町・桜島町・喜入町・松元町及び郡山町と合併し，人口約 60 万・面積約 547 ㎢となっている。

鹿児島市の北東部は，姶良カルデラの西側壁にあたり，海岸地形は高さ 200～400 ｍの急崖がおおよそ 15 ㎞にわたり続いている。市の西部や南部は，薩摩半島を南北に走る南薩山地が展開する。この南薩山地から，丘陵・台地が東側に向かって緩やかに傾斜しており，低地部そして鹿児島湾へいたる。

市内の低地部は，鹿児島湾へと注ぐ河川（稲荷川・甲突川・田上川・脇田川・永田川など）によって形成された小規模な沖積地が連続し，河口にはデルタも形成されている。滝ノ上火薬製造所跡を流れる稲荷川は，鹿児島市の宮之浦町を源流としており，東側の吉野台地と西側の岡之原，下田，坂元の丘陵地からの水を集めて鹿児島湾に注いでいる。

平成５（1993）年８月６日に，100 年に１度と言われた記録的な集中豪雨「８・６水害」により，多くの市民の尊い生命が失われたほか，都市機能や市民の財産に深刻な被害をもたらした。稲荷川下流域の稲荷町，清水町一帯も，甚大な水害に見舞われている。

滝ノ上火薬製造所跡は，現在の稲荷川河口から約１㎞上流にあり，東側を吉野台地南端部，西側を清水城跡の急崖に囲まれた深い谷地にあり，川の両岸に形成されたわずかな小段丘を利用して形成されている。「８・６水害」



第４図　滝ノ上火薬製造所跡　周辺地質分類図（鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変）

や長年の風水により，両岸が削り取られ，崖が崩落して大部分は失われたと思われていた。

２　歴史的環境

鹿児島地区は，多くの旧石器時代や縄文時代の遺跡が存在しており，早くから考古学の調査・研究が行われた地域である。大正４（1915）年，イギリス人考古学者ＮＧマンローによって，鹿児島における最初の考古学的調査が行われた石郷遺跡を始め，学史に残る遺跡が数多く存在している。

ここでは，市町村合併前の市町村名で，鹿児島市全域の時代ごとの概要について述べる。

旧石器時代

鹿児島市から松元町にかけての台地では旧石器時代の遺跡が多く存在している。

県内では発見例が少ないＡＴ（シラス）よりも下位の後期旧石器時代前半期の遺跡として，喜入町帖地遺跡や松元町前山遺跡などでナイフ形石器など各種の石器が出土している。

ＡＴ（シラス）よりも上位のナイフ形石器文化期の遺跡としては喜入町帖地遺跡，松元町仁田尾遺跡・宮ヶ迫遺跡があり，剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器など多様な石器で組成されている。細石刃文化期の遺跡には鹿児島市加栗山遺跡，喜入町帖地遺跡，松元町仁田尾遺跡・仁田尾中Ａ・Ｂ遺跡・枦堀遺跡など複数の遺跡が連続しており，特に松元町の仁田尾遺跡はナイフ形石器文化期と細石刃文化期の各種の石器群が多量に出土しており，九州最大級の遺跡として知られている。また，仁田尾遺跡，鹿児島大学桜ヶ丘団地遺跡群で落とし穴が発見されている。帖地遺跡では両面加工の神子柴型石槍に類似した石器が出土しており，文化の広がりを研究する上で，貴重な手がかりとなっている。

縄文時代

草創期では，鹿児島市から松元町にかけての台地一帯には多くの遺跡が存在している。鹿児島市加栗山遺跡・横井竹ノ山遺跡，松元町仁田尾遺跡・前原遺跡では，薩摩火山灰層の下層から細石刃とともに，無文・細い突帯文が施された土器や，石皿・磨石・小型三角形鏃などが出土している。鹿児島市掃除山遺跡では，幅広の突帯文が施された土器とともに，竪穴住居跡２軒，連穴土坑１基，配石炉６基，集石３基などが発見されている。

早期では，加栗山遺跡で竪穴住居跡 17 軒，連穴土坑 33 基，土坑 45 基，集石 17 基などが，松元町前原遺跡では竪穴住居跡 27 軒，連穴土坑含む土坑約 240 基，集石 18 基などが発見されている。

前期では，仁田尾遺跡や枦堀遺跡で，轟式土器や曽畑式土器が出土している。特に仁田尾遺跡では，曽畑式土器が多く出土している。

中期では，春日式土器の標式遺跡である鹿児島市春日町遺跡がある。また，鹿児島市鹿児島大学郡元団地遺跡，松元町仁田尾遺跡などで玦状耳飾が出土している。

後期の前半では，鹿児島市木ヶ暮遺跡・山ノ中遺跡などの山間部に多くの遺跡が所在する。中頃になると鹿児島市草野貝塚・大龍遺跡，桜島町武貝塚のように海岸部に遺跡が所在するようになる。草野貝塚では，瀬戸内系・北部九州系土器や，南海産の貝も出土していることから，広域にわたる交易があったことがうかがえる。

晩期は，大龍遺跡で竪穴遺構から軽石製の岩偶が出土しており，軽石製品を伴う遺構の類例は，本県では少なく注目される。

弥生時代

シラス台地の麓に広がる低い沖積台地に遺跡が多く立地している。鹿児島市魚見ヶ原遺跡では，前期末から中期の竪穴住居跡や石包丁，多くの打製石斧が発見されており，稲作の定着をうかがわせる。中期になると，鹿児島市北麓遺跡で，溝を巡らした集落が発見されており，環濠集落の可能性も指摘されている。また，鹿児島大学郡元団地遺跡では水田や，川の水を堰き止めた木杭列なども発見されている。本格的な水田耕作が行われたことがうかがえる。

古墳時代

シラス台地に囲まれた沖積平野の縁辺部に遺跡が立地し，南九州独特の成川式土器が土器の中心である。鹿児島市笹貫遺跡は，成川式土器後半の笹貫式土器の標式遺跡である。須恵器の生産は広まらなかったが，５世紀後半以降には畿内産と考えられる須恵器が，鹿児島大学郡元団地遺跡で出土している。また，郡元団地遺跡では，多くの住居跡が発見されており，長期にわたって同じ土地で大規模な集落が営まれ，拠点的な集落の様相を示している。なお，高塚墳や南九州独特の地下式横穴墓などは発見されておらず，墳墓の様相は不明である。

中世・近世・近代

滝ノ上火薬製造所跡位置する磯地区周辺は，中世から近世・近代にかけての遺跡が多く残されており，ここでは磯地区にある中世から近代の様相を概観する。

中世の磯地区周辺

初代から３代まで鎌倉在住の守護職であった島津氏は，５代貞久の時に薩摩に入り，薩摩・大隅・日向を支配することとなる。守護大名時の鹿児島は郡司の矢上氏や長谷場氏によって支配されており，1341 年東福寺城の長谷川氏，1343 年矢上城の矢上氏を攻略し，鹿児島が島津氏の拠点となる。

東福寺城跡（第５図 19）

稲荷川河口の鹿児島湾沿いに位置し，シラス丘陵（標高 50～100 m）の南北 850 m，東西 200 mの城域がある。本丸や曲輪が６つあると考えられているが，詳細は不明である。

天喜元（1053）年に長谷場氏によって築城され，暦応４（1341）年，肝付兼重らと島津家５代当主貞久との激しい戦いがあり，島津の手に落ちた。なお，西南戦争時は，城域である多賀山から滝ノ上火薬製造所へ砲撃を行っており，堡塁跡も存在している。

清水城跡（第５図 16）

島津氏の居城で，屋形（平城）と山城から成り，吉野台地から伸びる丘陵（標高 50～100 m）に位置し，城域は北側の実方橋付近から葛山（橋ノ口城）を含む広範囲で，南北 1600 m・東西 700 m，台地下の麓南北 140 m・東西 210 mにも及ぶ。

至徳年間（1384～1387 年）に，7 代島津元久が築城した。現在の清水中学校付近に居館を構え，主殿 12 間（約 21 m）や厩・雑掌所などが揃った屋形作りの建物があったことが記録されている。天文 19（1550）年，15 代島津貴久が御内（内城）に移るまでの約 160 年間居城として機能し，その後は，大乗院となった。

山城部は鹿児島市による発掘調査で，中世の遺物や 12～13 世紀の礎石建物の跡を確認している。

内城跡（第５図 24）

清水城の南 600 m，稲荷川右岸の微高地に位置している。15 代島津貴久により天文 19（1550）年に築城され，鹿児島城に移るまでの約 50 年間，戦国時代の島津氏の拠点となる。「築地一重の屋敷」と言われ，石垣に囲まれた１辺 100 mの正方形の屋形であった。1602 年に鹿児島城が築かれると大龍寺が設置され，現在は大龍小学校の敷地となっている。

鹿児島市による発掘調査では，中世の遺物を多く確認しているが，内城の遺構は確認できていない。

福昌寺跡（第５図 26）

島津宗家の菩提寺（曹洞宗）として，応永元（1394）年に，７代島津元久により創建され，廃仏毀釈の行われる明治２（1869）年まで存続した。

大乗院跡（第５図 25）

天文 19（1550）年に 15 代島津貴久が鹿児島に入り，伊集院の荘厳寺を松峯山に移し祈願所としたのが創始で，開山は俊盛である。その後，弘治２（1556）年に現在の清水中学校へ移っている。

近世の磯地区周辺

江戸時代は「大磯」と呼ばれ，風光明媚な土地として知られていた。『三国名勝図会』で「大磯夕照」は鹿児島八景にも数えられ，景勝地としても知られていたようである。また，鹿児島（鶴丸）城も築城され，建設と同時に，近世城下町としての整備も進められた。また，城下から大磯へ向かう道は，山越えの鳥越道のみであったが，享保 10（1725）年，21 代島津吉貴の代に海岸沿いの新道が開かれたようである。この新道は，明治５（1872）年の明治天皇行幸の際，「磯街道」として整備された。

仙巌園附花倉御仮屋庭園

万治元（1658）年に島津家 19 代当主光久が別邸として造営したものである。この地は，対岸に桜島を望み，後背地は姶良カルデラの絶壁で奇岩・奇石が多く，中国龍虎山の仙巌に似ていることから「仙巌園」と名付けられ，その後，21 代当主吉貴の時代に曲水の庭が設けられたと伝えられている。昭和 33（1958）年，国の名勝に 指定され，平成 27（2015）年には，世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産となっている。

明治維新前後の磯地区周辺

日本の南端に位置する薩摩藩は，欧米列強の強大な軍事力にいち早く脅威を抱き，列強に対抗する軍備の近代化・強化を図ることが求められていた。そのため，薩摩藩では 1840 年代に第 10 代藩主島津斉興のもと，早くから欧米列強の科学技術を導入して海防体制の強化が図られてきた。嘉永４（1851）年に第 11 代藩主に就任した島津斉彬は，施策を加速させ，磯地区に集成館と名付けた工場群を築き，ここを中核に製鉄・造砲・ガラス・紡績などの近代化事業を展開した。これが集成館事業である。この工場群は，文久３（1863）年の薩英戦争によりいったん焼失するが，島津茂久（忠義）・久光が再建してからは，西南戦争で破壊されるまで日本最大級の工場群であった。

旧集成館（第５図 10）

薩摩藩の島津斉彬が建設した近代的な工場群のことである。仙巌園の隣接地に，反射炉・ガラス工場・鍛冶場・蒸気金物細工場など多くの工場が建ち並んでいた。現在は，反射炉跡を遺構として見ることができる。昭和 34（1959）年に国の史跡に指定され，平成 27（2015）年には，世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとなっている。

旧集成館機械工場

第 12 代藩主島津忠義が，薩英戦争で焼失した工場群の復興に際して，造らせた洋式機械工場である。日本の近代的工場建築として最も初期のものである。洋風石造建物であったため，当時「ストーンホーム」と呼ばれていた。現在は，尚古集成館の本館として利用されている。昭和 37（1962）年に国の重要文化財に指定され，平成 27（2015）年には，世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとなっている。

鹿児島紡績所跡（第５図 11）

同じく主島津忠義によって，慶応３（1867）年に建設された日本で最初の洋式機械紡績工場である。明治 30（1897）年 10 月に閉鎖され，取り壊された。そのため，位置が不明であったが，平成 22（2010）年の埋文センターの発掘調査により，推定位置が報告されている。昭和 34（1959）年に国の史跡に指定されている。

第５図　滝ノ上火薬製造所跡 周辺遺跡位置図（国土地理院１：25,000 地形図『鹿児島北部』改変）

第５表　滝ノ上火薬製造所跡　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	中尾瀬	201	94	鹿児島市吉野町帯迫	台地		●		●				
2	百人堀	201	137	鹿児島市吉野町百人堀	台地				●				鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)
3	老ノ迫	201	101	鹿児島市吉野町中ノ町	台地		●		●				
4	白井崎	201	103	鹿児島市吉野町中ノ町	台地				●				
5	七社Ｂ	201	25	鹿児島市吉野町七社上郷田	台地			●		●	●	●	
6	川の元	201	99	鹿児島市吉野町七社川の元	台地				●				
7	鳥堀	201	102	鹿児島市吉野町七社鳥堀	台地		●		●	●	●		
8	朱来門	201	104	鹿児島市吉野町雀ヶ宮朱来門	丘陵		●						
9	雀ヶ宮	201	27	鹿児島市雀ヶ宮深堀	台地			●	●				
10	集成館跡	201	145	鹿児島市吉野町磯	平地							●	国指定史跡・世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(29)(66)
11	鹿児島紡績所跡	201	156	鹿児島市吉野町竜ヶ水	平地							●	国指定史跡・世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(172)鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(29)
12	雀ヶ宮Ｂ	201	142	鹿児島市吉野町雀ヶ宮	丘陵		●						島津元久　築城
13	前平	201	5	鹿児島市吉野町雀ヶ宮	台地		●						『鹿児島考古』23，前平式土器標識遺跡
14	橋ノ口城跡	201	69	鹿児島市坂元町城ノ後	台地						●		
15	催馬楽城跡	201	57	鹿児島市坂元町矢上	丘陵						●		矢上氏築城　別名　矢上城
16	清水城跡	201	55	鹿児島市清水町大輿寺岡	丘陵						●	●	島津元久　築城・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)(55)
17	**滝ノ上火薬製造所跡**	**201**	**127**	**鹿児島市吉野町滝ノ上**	**平地**							●	**本報告書・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)**
18	尾頸小城跡	201	83	鹿児島市稲荷町後迫	平地						●		中村秀純・肝付兼重　築城（1341年）
19	東福寺城跡	201	54	鹿児島市清水町田之浦	丘陵					●		●	矢上氏（坂元の催馬楽城）の一族長谷場氏居城（1053年築城）・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
20	浜崎城跡	201	58	鹿児島市清水町田之浦	丘陵						●		東東福寺城の支城
21	祇園之洲砲台跡	201	146	鹿児島市清水町祇園之洲	平地							●	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(172)鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
22	浜町	201	132	鹿児島市浜町	平地							●	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(25)
23	大龍遺跡群	201	9	鹿児島市大竜町・池之上町・春日町	台地		●	●	●		●	●	『大龍遺跡』　鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)(2)(7)(15)(32)(33)(34)(48)(54)(55)(59)(71)(77)『若宮遺跡』　鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)(24)(73)『春日町遺跡』　鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(36)
24	内城跡	201	56	鹿児島市大竜町	平地						●		島津貴久　築城（1550年）
25	大乗院跡	201	82	鹿児島市稲荷町清水中学校校庭	丘陵						●	●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)(6)(55)
26	福昌寺跡	201	144	鹿児島市池之上町玉龍高校一帯	平地						●	●	島津家菩提寺・鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)(47)(50)(56)(58)(70)(71)(72)(80)
27	丸岡	201	3	鹿児島市坂元町たんたとう丸岡	丘陵		●						
28	南州神社	201	7	鹿児島市坂元町上竜尾町南州神社境内	台地		●						
29	竪野冷水窯跡	201	143	鹿児島市冷水町竪野	丘陵							●	
30	琉球館跡	201	159	鹿児島市小川町								●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(39)
31	垂水・宮之城島津家屋敷跡	201	134	鹿児島市山下町	平地							●	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(48)
32	火除地跡	201	411	鹿児島市山下町								●	平成29年度　発掘調査
33	名山	201	105	鹿児島市山下町名山小学校校庭	平地							●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)(38)
34	造士館・演武館跡	201	106	鹿児島市山下町	平地							●	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
35	鹿児島城跡（鶴丸城）	201	62	鹿児島市城山町	平地		●			●		●	島津家久　築城開始（1601年）平成27～令和２年度　発掘調査鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(55)(60)鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)(19)(28)(58)
36	上城跡	201	61	鹿児島市新照院町	丘陵						●		上山氏　築城（1352年），鹿児島城築城後は一部に取り込まれる
37	夏蔭城跡	201	133	鹿児島市草牟田町夏蔭	丘陵						●	●	上山城支城，西南戦争激戦地

旧鹿児島紡績所技師館

機械工場と同様に，薩英戦争後に建設された「鹿児島紡績所」に招聘されたイギリス人技師たちの宿舎である。外観は洋風だが，小屋組や柱の寸法などは寸尺法という和洋折衷の建物である。明治 15（1882）年に，鹿児島城本丸跡に移築され，昭和 11（1936）年に，現在の場所に移築されている。昭和 37（1962）年に国の重要文化財に指定されている。

祇園之洲砲台跡（第５図 21）

島津斉彬が築造した砲台である。薩英戦争時には，祇園之洲砲台の沖合に，イギリス艦船レースホースが座礁した。このため，それを救おうとしたイギリス艦隊の集中砲火を浴びたとされている。平成９（1997）年に鹿児島市，平成 22（2010）年に埋文センターが発掘調査を行っている。

３　滝ノ上火薬製造所跡概略

調査地の地名は「瀧の上」「滝の上」「瀧の神」「滝之神」などがある。鹿児島市水道局では，滝之神浄水場としている理由として，鹿児島水道局史に昭和８（1933）年２月 10 日付『鹿児島新聞』を引用して，次のとおり記載されている。「当地に浄水場を建設する際に，吉野村と鹿児島肥料会社が用地の境を巡り紛争となった。裁判や東京から評定官が来鹿したが，未解決のままであった。そこで，鹿児島市は工事を実施するため，「上」を「神」にすれば文句無かろうとして，水源地を「滝之上」を「滝之神」に改めたという。

また，調査対象の火薬製造所につては，文献等では，時期や所管の変更より，「銃薬製造所」・「火薬局」・「滝の上火薬製造所」と様々に記載がある。本報告書では，字である「滝ノ上」とし，薩摩藩海軍史並びに，鹿児島市発掘調査報告書で使用されている「滝ノ上火薬製造所」とした。

施設略史

滝ノ上火薬製造所は，文政年間（1818～1831 年）に唐湊村（現在の鹿児島市唐湊）から移設されて，銃薬方として建設された。水車を利用して硝石・硫黄を砕いたほか，混和機・圧搾機・光澤機の動力としても，稲荷川の水力を必要としたと考えられる。

移設の理由は，元々は唐湊で火薬を製造しており，火災が度々発生して死傷者が多数出たとされている。また，滝ノ上が選定された理由は，上町の商人神宮司武兵衛の勧めによるもので，元々銃射場（射撃場）であった場所を廃止して，水車を利用したとされている（公爵島津家編纂所 1968）。

嘉永２（1849）年には，製法を洋式に改めて，直径４ｍの水車を設置している（この際に６基の水車を設置した可能性あり）。

万延元（1860）年には，所管が集成館に一元化されるなどしいている。文久３（1863）年の薩英戦争での滝ノ上火薬製造所の被害詳細は不明である。

文久３（1863）年には，滝ノ上火薬製造所を本局とし，分局として敷根火薬製造所（霧島市）を創設している。なお，敷根火薬製造所は最新鋭の火薬製造機を備えたもので，タービン水車やエッジランナーがあったと言われている。

明治２（1869）年に，滝ノ上火薬製造所に隣接する稲荷馬場火巧所（現清水中学校付近・創設期不明）や，硝石を製造する谷山作硝局（安政５（1858）年創設）とともに，銃薬方から火薬製造局と改称された。

明治４（1871）年の廃藩置県後は，集成館とともに陸軍所管となり，明治５（1872）年３月に火巧所と改称，大阪砲兵支廠の属廠とされた。敷根火薬製造所は，明治６（1873）年には，藩政時代に見聞役であった薩摩藩士伊勢仲左衛門が火薬を製造し，海軍省に納めている。この頃には，火巧所（滝ノ上火薬製造所･稲荷馬場火巧所）は日本最大の火薬工場となり，敷根火薬製造所も最新鋭の設備を持ち，海軍省後は，海軍が使用する火薬を供給している。特質すべきは，政府軍の主力銃であるスナイドル銃（後装銃）の銃弾を製造していたと考えられていることである。弾丸と火薬を紙で包んで作るエンフィールド銃（前装銃）は手作業で製造できるが，金属の薬莢を使用するスナイドル銃は銅板を引き延ばすプレス機がないと製造できなかった。この機械を導入した記録が，明治２（1869）年４月 28 日付で島津家が外国官役所に宛てた史料に残っている。その状況は，明治８（1875）年まで続き，明治 10（1877）年になっても，鹿児島は銃弾製造の一大製造及び備蓄拠点であった。

そのような中で，明治９（1876）年頃から，九州各地で不平士族の反乱が起きている。明治政府は弾薬製造機や備蓄されている弾薬を危惧し，明治 10（1877）年 1 月下旬，汽船赤龍丸（三菱会社所属）で，夜間に滝ノ上火薬製造所などの兵器･弾薬を密かに運びだそうとした。機械や弾薬類が自分たちのものという考えが強かった鹿児島の士族たちは激怒し，草牟田の火薬庫を襲撃した。その間の火巧所は，襲撃を受けているが，積極的に防ごうとはしなかったようである。このような経緯から，滝ノ上火薬製造所は，国内最後で最大の内戦である西南戦争の勃発の契機となった場所ともいえる。

３月７日～12 日の間に，政府軍の軍艦春日丸などが鹿児島湾に入港し，その間に，集成館・滝ノ上火薬製造所等の武器製造機械・弾薬・砲台の大砲を搬出・処分している。滝ノ上火薬製造所横の稲荷川は，大量の火薬が廃棄され，「魚死シ河水黒色ニ変ス」と記録が残っている。搬出されたスナイドル銃薬製造機器は，大阪の砲兵支廠に設置された。しかし，不慣れな政府軍兵士たちが搬出したため，不具合を起こしていたようである。３月 10

日には，敷根火薬製造所に春日丸が来航し，火薬樽をすべて倉庫から出して水中に投げ捨て，機械などのすぐに処分できないものは焼き払っている。しばらくの間は，残った機材で西郷軍が弾丸を製造している。５月・６月に入り，鹿児島を巡って政府軍と西郷軍は，一進一退の攻防を繰り広げることになる。政府軍は，５月 14 日に谷山作硝所を焼き払い，５月 16 日には滝ノ上火薬製造所に対して，向かいの山の多賀山から砲撃を浴びせて破壊した。この瞬間に，火薬製造所としての役割に，幕を閉じることとなる。

その後，明治 22（1889）年に政府から鹿児島県へ引き渡されている。さらに個人へ払い下げられ銀の製錬を行い，骨粉肥料会社が引き継ぎ肥料製造を行った。戦後は，別の会社が買収し，金の製錬や木材加工などを行っている。それらの操業は，西南戦争による破壊を免れた水路等を利用していたようである。現在は，石材会社が主に所有している。また，遺跡範囲内は，別に鹿児島市水道局，鹿児島県，九州電力も所有者となっている。

火薬及び銃弾の製造能力

幕末の頃の間の製造量については，硝石や硫黄の生産量等から，薩摩藩は加賀藩に次ぐ規模であったと推定されている（県埋セ 2018）。

明治２（1869）年の頃は，滝ノ上火薬製造所・敷根火薬製造所合計で七万斤（約 42 ｔ）とされている。

明治４（1871）年４月，官有化される前の火薬局（滝ノ上火薬製造所・敷根火薬製造所・稲荷馬場火巧所・谷山作硝所・火薬庫５か所）の統計が『鹿児島県史　第三巻』に掲載されている。

火薬局

本局（稲荷馬場も含む人数か）	305 人	
敷根火薬製造所	29 人	
谷山作硝所	33 人	

製造能力１日分

火薬	290 斤	（約 174 kg）
針打パトロン（薬包）	3,000 発	
旋条銃玉打付パトロン	3,500 発	
空発パトロン	8,000 発	

針打パトロンは後装銃（主にスナイドル銃か）の銃弾，旋条銃玉打付パトロンは前装銃（主にエンフィールド銃）の銃弾を指している。空発パトロンは詳細不明だが，弾丸を詰めていない薬莢と考えられる。なお，敷根火薬製造所では，銃弾製造機器は見られないので，銃弾の製造能力は滝ノ上火薬製造所と稲荷馬場火巧所の２か所の可能性が高い。

明治４（1871）年以降の製造能力は判明していない。敷根火薬製造所から製造能力は，明治５（1872）年で火薬製造能力四万斤（約 24 ｔ），明治９（1876）年頃では，六万八千六百斤（約 41 ｔ）とされているので，同規模か，滝ノ上火薬製造所が銃弾の製造を一手に引き受けていたとすると，火薬については敷根火薬製造所以下と推定される。

施設内容

各絵図（第７図～第９図）から様々な施設が残っていることから確認できる。敷根火薬製造所同様に，銃薬水車・硫黄車・硝石水車をはじめ，各蔵（保管庫）や役局（事務所）など多数の施設があったことが考えられる。

絵図の時期については，「銃薬方」（第７図）は，安政４（1857）年６月，佐賀藩士千住大之助（脇役），佐野常民（精煉方主任），中村奇輔（精煉方）が，鍋島直正から島津斉彬に送られた電信機を携えて鹿児島を訪れた際，集成館などの施設を見学し，その様子を絵図にした『薩州見取絵図』の一部であることから，幕末期の滝ノ上火薬製造所を描いたものである。

「銃薬製造所図」（第８図）も，建物や水車の近似性からほぼ同時期の滝ノ上火薬製造所跡を描いたものであろう。

「瀧ノ上御所有地字絵図」（第９図）には，明治 22（1889）年 12 月鹿児島県へ引き渡しの記載が見られることから，西南戦争前後の滝ノ上火薬製造所跡の測量図と考えられる。

研究史

滝ノ上火薬製造所跡の既存の調査・研究として，次のものが挙げられる。

川越重昌氏は，現地の地形を入念に踏査し，その成果と『薩摩海軍史』や，東京大学史料編纂所蔵の「銃薬製造所図」，『銃薬製式録』などから，建物規模の検討や火薬水車復元断面図・復元平面図の作成を行っている（川越 1986ab・1987abcdef・1988・1990）。

鹿児島市教育委員会は，稲荷川の緊急整備に伴い，水車群があったと考えられる箇所を第１地点，建物があったと考えられる箇所を第２地点として，トレンチ調査による発掘調査を行った。その結果，第１地点では，約３m掘削を行ったが，当時の遺構面は失われた可能性が高いこと。第２地点では，Ｃトレンチから，約３m掘削した面から，切石を並べた敷石遺構が発見されており，当時の建物跡の可能性が高いことを指摘している。

池田芳宏氏は，滝ノ上火薬製造所の概略史を簡潔に述べている（池田 2016）。

松尾千歳氏は，西南戦争を誘発した集成館の状況，特に弾薬に関する事柄について，文献資料を元に考察している。その中で，滝ノ上火薬製造所の西南戦争における前後の状況や，火薬の製造量・備蓄量，戦闘における影響を考察している（松尾 2017）。なお，滝ノ上火薬製造所の概略史及び製造能力は，この松尾氏の研究を主に参考にして，記載している。

埋文センターでは，滝ノ上火薬製造所の分局である敷

根火薬製造所の発掘調査を行なっている。その中で，薩摩藩における火薬の製造や火薬の製造量の検討を行っている（県埋セ 2018）。

【引用・参考文献】

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2012『鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（172）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2018『敷根火薬製造跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター（194）

鹿児島県教育委員会　2004『鹿児島県の近代化遺産』

鹿児島市教育委員会　1988『滝ノ上火薬製造所跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（22）

鹿児島市教育委員会　2017『春日町遺跡H地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（78）

鹿児島市教育委員会　2019『史跡　鹿児島紡績所跡Ⅰ』鹿児島市重要産業遺跡関係調査報告書（1）

鹿児島市水道局　1991『鹿児島市水道局史』

鹿児島市史編さん委員会（編）　1969『鹿児島市史』Ⅰ

鹿児島市教育委員会　2016『史跡めぐりガイドブック』－五訂版－』

公爵島津家編纂所　1968『薩藩海軍史』上巻

川越重昌　1986a「鹿児島市滝の上火薬製造所址（1）」『銃砲史研究』第 183 号

川越重昌　1986b「鹿児島市滝の上火薬製造所址（2）」『銃砲史研究』第 185 号

川越重昌　1987a「鹿児島市滝の上火薬製造所址（3）」『銃砲史研究』第 186 号

川越重昌　1987b「鹿児島市滝の上火薬製造所址（4）」『銃砲史研究』第 188 号

川越重昌　1987c「鹿児島市滝の上火薬製造所址（5）」『銃砲史研究』第 189 号

川越重昌　1987d「鹿児島市滝の上火薬製造所址（6）」『銃砲史研究』第 191 号

川越重昌　1987e「鹿児島市滝の上火薬製造所址（7）」『銃砲史研究』第 193 号

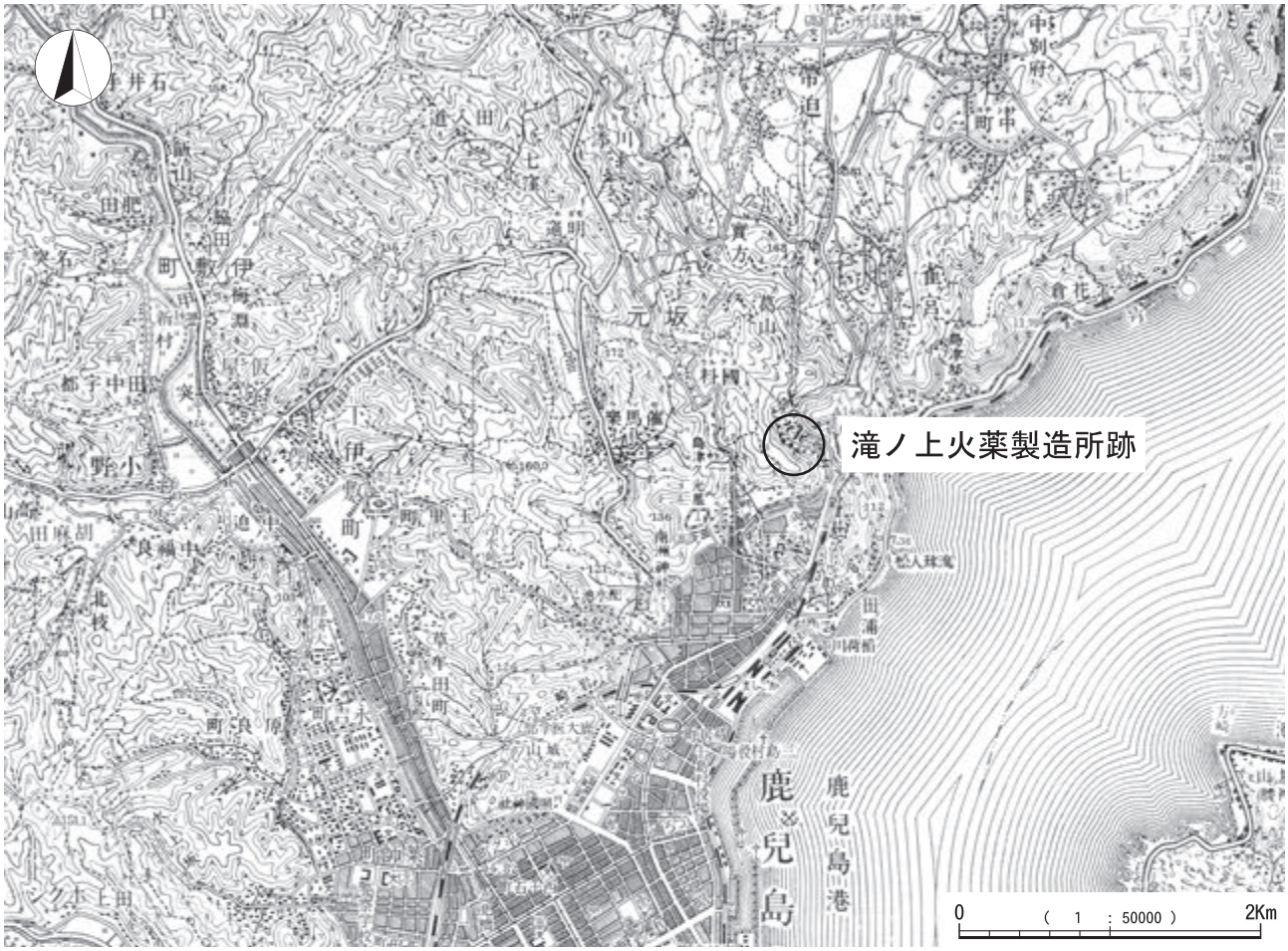
川越重昌　1987f「鹿児島市滝の上火薬製造所址（8）」『銃砲史研究』第 195 号

川越重昌　1988「鹿児島市滝の上火薬製造所址（9）」『銃砲史研究』第 196 号

川越重昌　1990「鹿児島市滝の上火薬製造所址（終稿）」『銃砲史研究』第 223 号

池田芳宏　2016「滝の上火薬製造所概略」『吉野史談』 第 40 号

松尾千歳　2017「西南戦争と集成館」『尚古集成館紀要』第 16 号



第６図　大正４年　滝ノ上火薬製造所 周辺地形図（1:50,000・『鹿児島』改変）

第７図　銃薬方（武雄市歴史資料館蔵）

第８図　銃薬製造所図（東京大学史料編纂所蔵）

第９図　瀧ノ上御所有地字絵図（東京大学史料編纂所蔵）

第２節　調査の方法

１　発掘調査の方法

滝ノ上火薬製造所跡の調査は，第 10 図に示す範囲（約 2,900 ㎡）を調査対象とした。なお，調査対象地は，鹿児島市水道局，鹿児島県が管理，また福村石材工業（株）が所有しており，それぞれ許可を得て調査を行っている。

『滝ノ上火薬製造所跡』（鹿児島市教育委員会 1988）及び，『薩摩火薬史跡実踏記・鹿児島市滝の上火薬製造所址』（川越 1986～1990）の調査結果から，各調査時には，石垣や導水路がかなり残存していたようである。しかし，現地踏査や，稲荷町公民館，鹿児島市水道局，福村石材工業（株）への聞き取り調査の結果から，27 年前の「８・６水害」等でかなりの部分が失われている可能性があると推測された。そのため，調査目的を石垣の残存状況の把握と水車・導水路跡の確認とした。

『銃薬方』（第７図），『銃薬製造所図』（第８図），『瀧ノ上御所有地字絵図』（第９図）の絵図や，史料及び各報告内容を参考に，調査区１～３の３つに分けて，調査を行うこととし，絵図や鹿児島市の調査結果を基に，導水路や水車が設置されていた可能性が高いと推測した箇所や，現状で石垣が良好に残存している箇所にトレンチを設定した。

遺構配置図の作成にあたっては，世界測地系による３級基準点を設置した。遺構配置図及び石垣・トレンチ位置等は，トータルステーションと平板による実測を行った。なお，基準点設置業務は委託して行い，基準点等のデータ一式は埋文センターに保管してある。

発掘調査の方法は，まず竹や樹木の伐採，倒木や土砂の除去等を行い，石垣の残存状況を確認した。その後，設定したトレンチを重機により慎重に掘削を行いながら，必要に応じて人力による精査を行い，遺構等の検出を行った。

遺物は，近代以降の造成土及び整地層だったため，トレンチ及び層ごとに一括で取り上げた。調査終了時には，伐採等で検出された石垣等は，現状のままとし，トレンチから検出された導水路等は土嚢で保護し，慎重に重機による埋め戻しを行った。

２　整理作業の方法

陶器や瓦の水洗い作業は，ブラシを用いて行った。

注記は，「ＴＫＮ」を頭につけて，続けて「トレンチ名」「層」「遺物番号」の順に記入した。

第３節　層序

本遺跡の層序は，調査区やトレンチで異なっている。火薬製造所廃絶後の当該域の利用状況による違いや，埋没時期の違いによるものと考えられる。そのため，トレンチごとの実測図で記述する。

第４節　滝ノ上火薬製造所跡の調査成果

滝ノ上火薬製造所跡の調査は，伐採及び土砂の除去を行い，石垣の検出及びトレンチによる掘削作業を行った。また，現状の石垣の配置や絵図・標高から，導水路等の遺構が残存している可能性がある箇所で，トレンチ調査を行った。各調査区ごとに詳細を記述する。

１　調査区１（第 11 図）

石垣の下部構造や操業当時の整地面，水車・導水路跡の検出を目的として，８本のトレンチを設定した。重機で表土を掘削した後，ねじり鎌や移植ごてによる人力で遺構・遺物の検出を行った。トレンチ１・２・３・４・５では，石垣や導水路等の実測図を作成した。調査区１のトレンチ６・７・８では，調査工程や安全上の理由から，写真による記録だけにとどめた。標高は現道が約 18 ｍである。各トレンチごとに詳述していきたい。

（１）排水路及びトレンチ１（第 12・13 図）

調査区の南には，排水路（階段状の石積み）が露出していた。排水路は現道部分の地下にも続いていると予想されたため，150×160 ㎝のトレンチ１を設定して，約 150 ㎝ほど堀り下げを行った。その結果，さらに段状の石積み５段を検出した。

排水路は，全長 730 ㎝，幅 550 ㎝で中央に水路，両側は切石を階段状に積み上げ，斜度約 40° 斜面を形成している。両サイドとも平積みで，30～50 ㎝程度の長方形，正方形，台形の切石をＤ-Ｄ’16 段，Ｆ-Ｆ’10 段の階段状に積み，段差は約 20～30 ㎝で，目地には土を用いている。

水路部分は，階段状部分から 120～220 ㎝下がり，18 段の階段状石積みで構築されている。段差は 10～15 ㎝と両側より低く，斜度約 30° 斜面を形成している。水路右側は，水流によるものか全体的に段差が削られている。下段には側面に２つの穴が穿孔され，何らかの構造物を置いた可能性が高い。目地には，モルタルを用いている。

水車を置くための枘穴等は検出できなかった。第９図には，稲荷川へ続く水路が描かれており，排水路の可能性が高い。なお，東西方向は崩壊及び埋没しており，さらに大きな構造物だったと推定される。

（２）トレンチ２（第 12・14 図）

トレンチ１の排水路と検出された石垣に囲まれた部分に，現道より一段高いテラス状の空間が検出された。テラス北側に露出している石垣に，凹状にトレンチを設定して調査を行った。

トレンチ２の東（Ａ－Ａ’）付近は，現道に面した石垣上部の裏にあたる部分になる。３層で大正３（1914）年噴火の火山灰が堆積していたため，４層が明治期の堆積土となる。さらにその下層の５層から多量の礫と硬化面を検出した。礫は石垣の裏込めと考える。以上のことから，５層上面が火薬製造所操業時の面と考えられる。

トレンチ２の西端石垣付近（Ｂ－Ｂ’）では，表土か

第 10 図　滝ノ上火薬製造所跡　調査範囲図（1：2,500『鹿児島市都市計画マップ』改変）

ら約 70 ㎝下の５層から，径が 70 ㎝で楕円形を呈した凝灰岩製の石を検出した。周辺の土は硬化しており，礫も多数検出されている。トレンチ３導水路（第 15 図）延長線上に位置しており，西（B-B’）から東（A-A’）へ低く（比高差約 30 ㎝）なるため，上部には木樋などの水を流すための支脚を建てた可能性がある。検出された凝灰岩製の石は，その礎石の可能性がある。なお，遺物編で詳述する遺物（第 26 図１・２・３）が出土している。

トレンチ２北側の石垣（第 14 図）は布積みで，切石は瘤出し加工を行っている。中央に切石が組み合わない面が縦に１本走る。その左側は，正方形に近い切石を多く使用している。石垣下は 20 ㎝大の礫が敷き詰められており，非常に固い硬化した層を検出した。この中央の面の右側は，長方形のやや大きい切石を使用しており，横だけでなく縦長に切石を積んでいる箇所もある。その下層はまだ石垣が続く。この中央の面を境に，積み替えまたは，構築築時期が違うと考えられ，右側が新しく積まれた可能性が高い。

（３）トレンチ３・導水路（第 15 図）

トレンチ２のあるテラスより 400 ㎝上部，石垣の最上部に，薄い切石があったため，その切石を中心に 110×85 ㎝の範囲で掘削を行った。表土直下より，長さ 126 ㎝，幅 75 ㎝の平石を桶状に組んだ遺構（導水路）を検出した。凝灰岩を深さ約 30 ㎝のＵ字状に削り出し，連結して構築している。壁面中央には長さ７㎝，幅６㎝，高さ５㎝の枘穴が作られている。

目地部分には，黒漆喰が施され，補強するような形で，モルタルが使用されている。黒漆喰は，江戸時代後期から用いられ，鹿児島城でも調査の結果，近世後期の水路に多用されている。そのため，導水路は，火薬製造所操業の可能性が高い。モルタルを施した時期は不明である。

導水路は前述したトレンチ２の礎石上部にあり，東方向には木樋などの構築物があった可能性が高い。西側へ続いており，トレンチ４導水路（第 16 図）と繋がる可能性が高い。

（４）トレンチ４・導水路（第 16 図）

『瀧ノ上御所有地字絵図』（第９図）に導水路のような構築物が描かれていたことから，220×160 ㎝の範囲で掘削を行った。表土から約 200 ㎝下で南北方向に伸びる板石を桶状に組んだ遺構（導水路）を検出した。側面は凝灰岩の切石が３段積まれ，一番下はＬ字状に 20 ㎝程度飛び出し，枘穴が作られているものがある。枘穴の西側は，台形状で長さ 15 ㎝・幅５㎝・高さ 20 ㎝，東側は歪んだ四角形で長さ 20 ㎝・幅 10 ㎝・高さ 14 ㎝である。床面及び壁面の目地はモルタルで，壁面上部は粗雑な補強となっている。底石は，縦 30～40 ㎝・横 60～70 ㎝の切石を敷き詰めている。目地は黒漆喰とモルタルの箇所がある。また，両壁には仕切りをはめ込む切石があるが，成形がきれいで石材が違うため，後世の再利用時の改変と考えられる。

導水路は，多量のシラスにより埋没している。４層から，流れ込んだ壊れたモーターが出土した。そのため，埋没時期も昭和 30～40 年代と推定される。モーターは，壁面に形成された仕切り板を開閉するために設置された可能性がある。２・３層は，１回埋没した導水路を掘り起こそうした際に，さらにシラスが流れ込んだ堆積と考えられる。

一部黒漆喰が施されており，構築時期は滝ノ上火薬製造所の操業時の可能性が高い。導水路は，その後，民間会社時代にも再利用され，崖崩れにより埋没したものと考えられる。

（５）トレンチ５・石垣（第 17 図・第 18 図）

門柱のような緻密に組まれた石垣（高さ約 600 ㎝）があり，その北側を 360×120 ㎝の範囲で，表土から約 130 ㎝の深さまで掘削を行い，調査を行った。

石垣①は布積みで，きれいに加工された切石を使用している。目地はモルタルを施されており，面を揃えた仕上げとなっている。表面には淡い橙色の漆喰が施されている。表土から 130 ㎝までの深さとなっている。石垣は地上部分と地下部分を併せて，約 730 ㎝の高さがある。また，石垣②に埋め込まれている。

石垣②は布積みで，瘤出しの切石を使用している。切石の加工の仕方が石垣①とは明らかに違い，目地にモルタルなどは見られない。トレンチ２北面の石垣（第 14 図）と同じ積み方である。石垣は下層に続いている。

各石垣の構築時期については，今回の調査では不明である。

（６）トレンチ６・７（第 19～21 図）

調査区１北に位置する石垣周辺の伐採を行ったところ，スロープ状の道を検出した。石垣は谷積みであるが，積み直しの部分もある。道の使用面を検出するために，スロープ部分に２か所トレンチを設定して調査を行った。なお，調査期間の関係で，写真のみの記録とした。

トレンチ６（第 20 図）

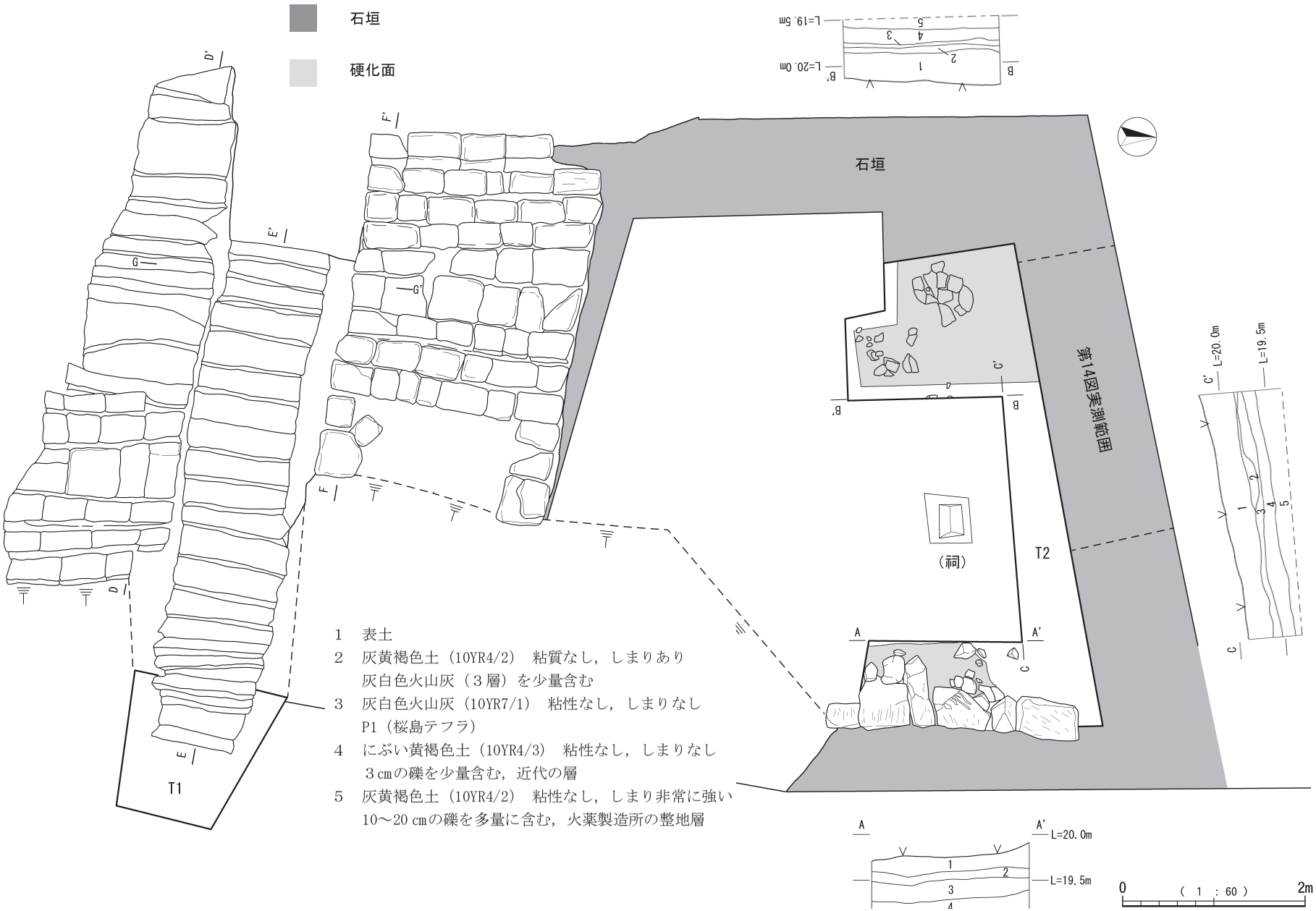
スロープ状の道の登り口に，200×140 ㎝の範囲の掘削を行った。表土から約 30 ㎝下から，礫敷による非常に固い硬化面を検出した。礫は５㎝程度のものを敷き詰めている。道の使用面と考えられる。

周辺石垣の積み替えが行われており，火薬製造所操業時なのか，後世の改変により構築された道かについての詳細は，不明である。

トレンチ７（第 21 図）

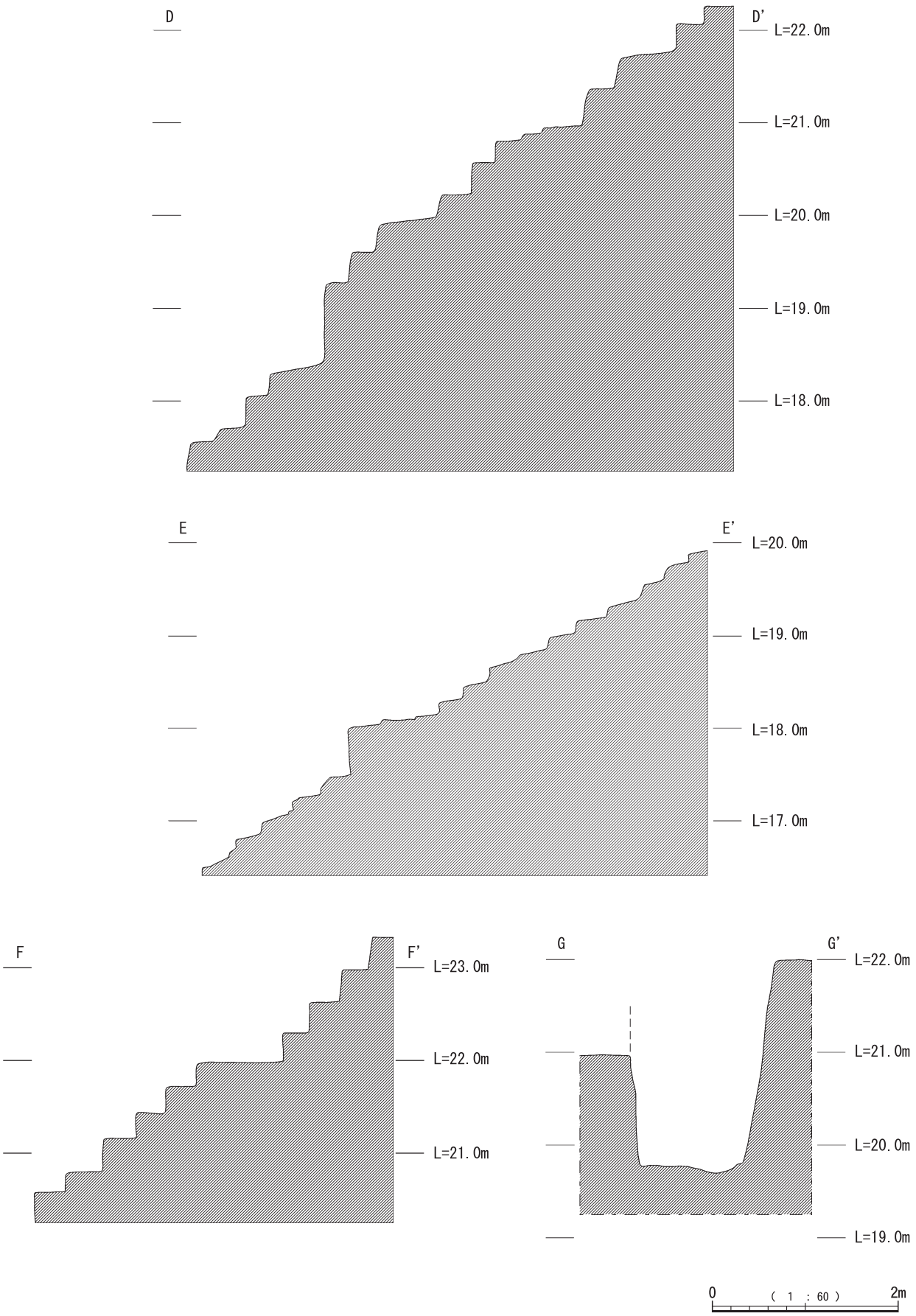
スロープ状の道の踊り場に，200×100 ㎝の範囲の掘削を行った。東側は表土直下から，西側は 30 ㎝下から，礫敷による非常に固い硬化面を検出した。礫は５～20 ㎝程度のものを敷き詰めており，トレンチ６の礫と大きさや石材が同一であり，道の使用面と考えられる。西側

第 11 図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１・２全体図



1　表土
2　灰黄褐色土（10YR4/2）　粘質なし，しまりあり
　　灰白色火山灰（３層）を少量含む
3　灰白色火山灰（10YR7/1）　粘性なし，しまりなし
　　P1（桜島テフラ）
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粘性なし，しまりなし
　　３㎝の礫を少量含む，近代の層
5　灰黄褐色土（10YR4/2）　粘性なし，しまり非常に強い
　　10～20㎝の礫を多量に含む，火薬製造所の整地層

第12図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１実測図



第 13 図　滝ノ上火薬製造所跡　排水路断面図

では，礫敷は約 20 ㎝と厚く敷き詰められている。東側とのレベルの差があるため，平坦にするために西側に厚く敷き詰められていると考えられる。

石垣の積み替え等が行われており，火薬製造所操業時なのか,後世の改変により構築された道かは不明である。

（７）トレンチ８（第 22 図）

調査区１から調査区２へと続く石垣部分に，谷積み面と布積み面の違いがあり，下層の確認のため，340×200 ㎝の範囲を掘削した。掘削深度が深いことから，写真のみ記録に留め，埋め戻している。

石垣は，南側がスロープ状の道から約 700 ㎝続く谷積みの石垣である。北側では調査区２へ向けて，約 70 ｍに渡り布積みとなっている。両面の石垣の切石は，正方形から長方形まで様々な凝灰岩の石を用いており，加工は瘤出しの切石と，そうでないものと混じっている。

表土から約 220 ㎝下層で，礫が多量に検出する層となり，石垣は検出できなかった。掘削深度が深いため，これ以上の調査はできなかったため，石垣の基盤にあたるかは不明である。

北側の布積み面は，調査区１トレンチ２（第 14 図）の石垣等とほぼ同一の構造をしていることから，同一時期に構築された可能性が高い。南側の谷積みの石垣面は，２種類の積み方が見えることから，積み替えと考えられる。積み替えの時期は不明である。

２　調査区２（第 11 図）

調査区２は，調査区１から続く石垣の北端にあたる部分で，標高約 23 ｍである。石垣上部に構造物が露出していたため，伐採等を行った。構造物のほとんどは，ブロックや鉄筋コンクリートで造られた貯水池や水路跡で，民間会社操業時の施設である。

調査区１で検出されたものと同じような導水路が露出していたため，調査を行った。

導水路（第 23 図）

調査区２の北側部分に，導水路の一部が検出できた。

導水路は，検出部分で全長 310 ㎝・幅 100 ㎝あるが，その大部分は崩れている。凝灰岩を深さ 36 ㎝のＵ字状に削り出し，連結して構築している。目地には黒漆喰が一部残っているが，多くはモルタルが接着に用いられている。

切石の厚みが約 12 ㎝前後，質が同一の凝灰岩の切石を用いていることから，調査区１トレンチ３導水路（第 15 図）と同一時期に構築されたと考えられ，火薬製造所の操業時の可能性が高い。

『瀧ノ上御所有地字絵図』（第９図）に南北に連なる導水路のような構築物が描かれていることから，調査区１トレンチ４の導水路（第 16 図）へ伸びると推定される。

３　調査区３（第 24 図）

調査区３は，調査範囲の北に位置し，標高約 33 ｍである。龍神や水神が祀ってあり，続く歩道部分に石垣上部が露出していたため，長さ約 13 ｍ，幅３～４ｍのトレンチを設定し，掘削を行ったところ約 150 ㎝の深さで，導水路を検出した。なお，トレンチ東側は，鹿児島市水道局の水道管（径 60 ㎝）６本と電気系統の管が通っている。

導水路１（第 25 図）

導水路１は，全長約 520 ㎝･幅約 200 ㎝･高さ 84 ㎝で，地盤の凝灰岩そのものを削って，床面と西側壁面を作り出している。床面は比較的丁寧な仕上がりをしており，一部ヒビ割れ部分にモルタルを使用して補強している。西側壁面は，荒い加工となっている。東側壁面は，凝灰岩の規格性の乏しい切石を積み上げている。床面に溝を切り，そこに切石をはめ水路の壁としている。目地にはモルタルが使用されている。

底石部分に，長さ 64 ㎝・幅 14 ㎝の枘穴と考えられる凹みが加工してある。この凹みは,途中で使用しなくなったのか，凝灰岩とモルタルで塞がれている。同じように東側壁面の近くの地盤にも，長さ 36 ㎝・幅 14 ㎝と長さ 12 ㎝・幅８㎝の２つの凹みが加工されている。

導水路２（第 25 図）

導水路２は，全長 240 ㎝・幅 170 ㎝残存している。凝灰岩の切石を積み上げて壁面を構築し，床面も綺麗に引き詰めて構築している。切石は全体的に丁寧な加工が施

第 14 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ２石垣実測図

されている。目地には丁寧な仕上がりでモルタルが詰められている。Ｌ字状に屈曲しており，東側（稲荷川方向）へ水を誘導していた可能性がある。

導水路３（第 25 図）

導水路３は全長 170 ㎝・幅 50 ㎝で残存していた。深さ 35 ㎝のＵ字状に削り出した凝灰岩を，連結して構築している。凝灰岩は，他に比べて非常に質が悪い。

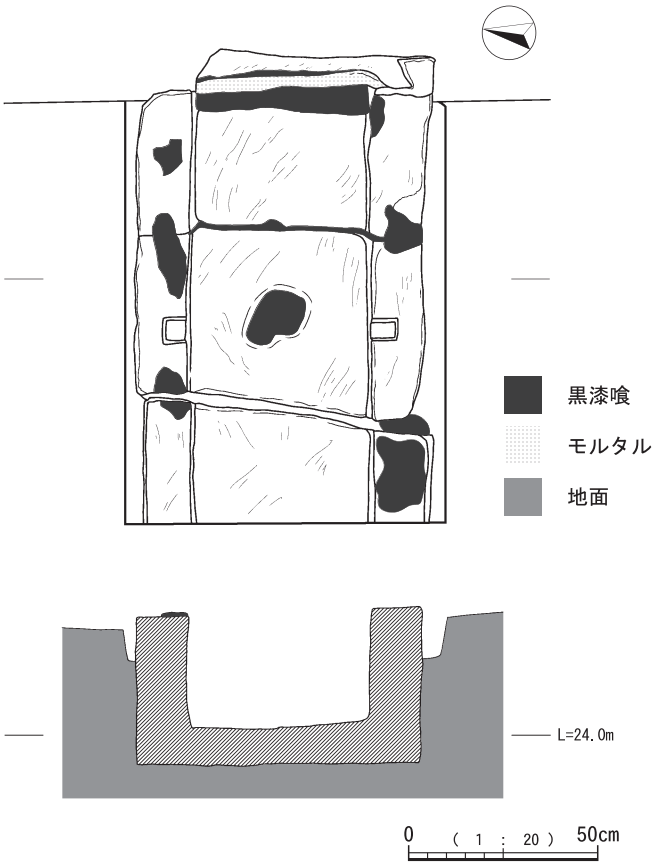
目地は，黒漆喰とモルタルが施してある部分がある。

導水路３西側は，地盤の凝灰岩を削りだし，溜枡状に加工されている。大きく削平を受けているため，本来の形状は不明だが，平面形が一辺約 200 ㎝の四角形を呈していた可能性がある。

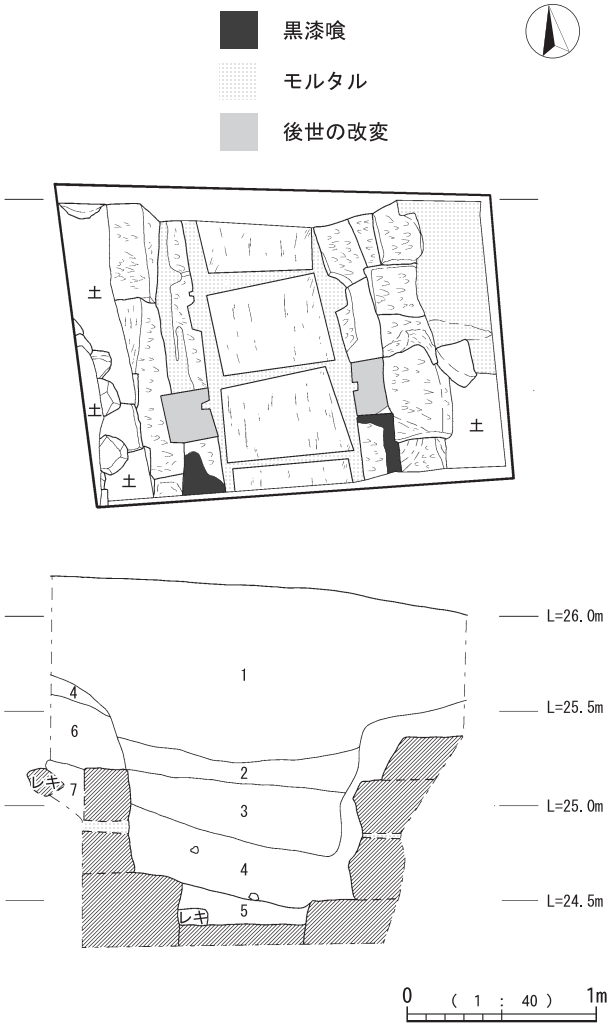
絵図では一番北の銃薬水車に周辺にあたり，水車に水を送る水路が描かれている。検出された導水路は，その水の引き込み口の可能性がある。

調査区３全体について

導水路１・２は，切石の凝灰岩の質や加工方法が同じで，目地にモルタルが使用されていることから同時期の可能性が高い。導水路３は，凝灰岩の質の違いや黒漆喰が一部残っていることから，火薬製造所操業時初期に構築された可能性が高いと考えられる。導水路１・２は，導水路３より新しいが，火薬製造所操業時に構築され，その後の改修等を経て，民間会社等が再利用したと考えられる。

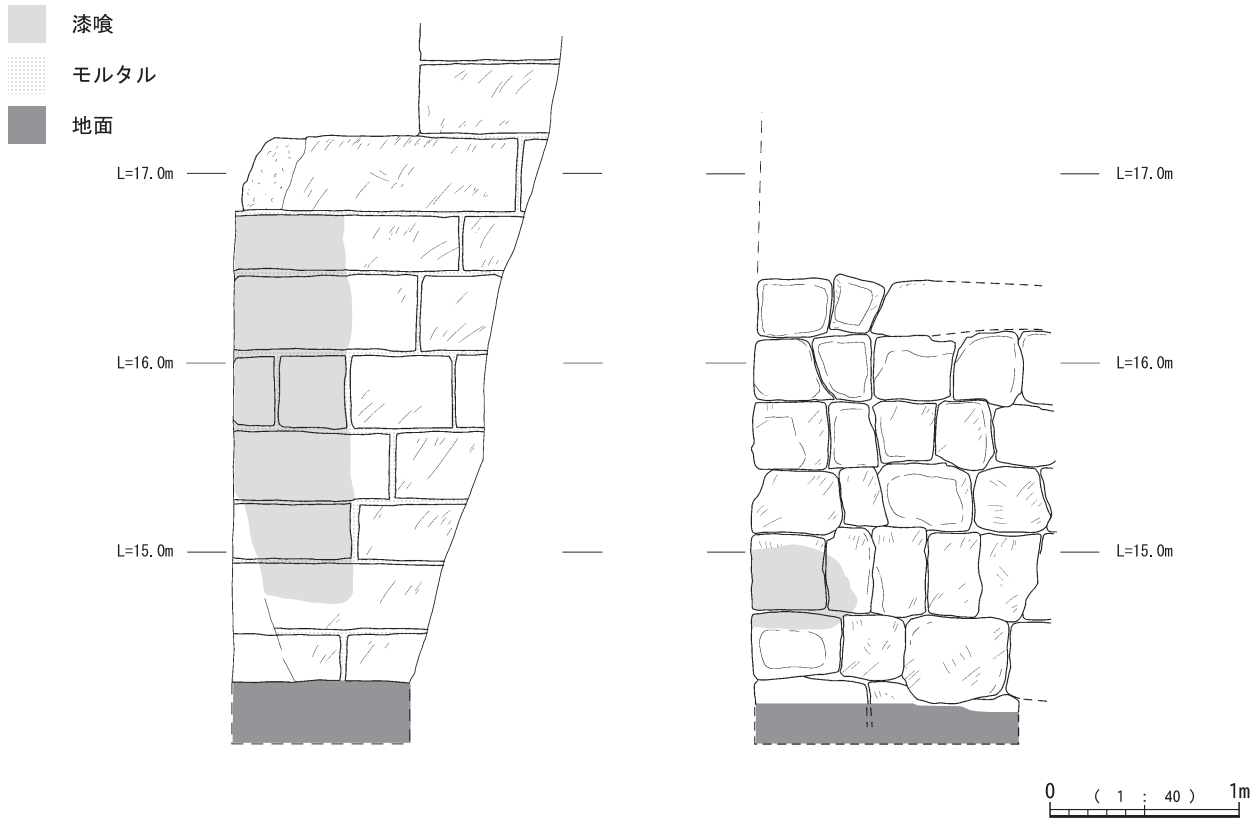


第 15 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ３導水路実測図



1　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　砂質土，しまりなし
　崖崩れ土（シラス・礫主体）
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　砂質土，しまりあり
　１㎜～１㎝の軽石の層
3　褐色土（10YR4/4）　砂質土，しまりあり
　粒子の細かい軽石の層
4　黒褐色土（10YR2/2）　粘性あり，しまりなし
5　にぶい赤褐色砂礫層（５YR4/3）　しまりなし
　明赤褐色の１～５㎝の礫を多量に含む
6　にぶい褐色土（7.5YR5/4）　しまりあり
　１～５㎝の礫を多量に含む
7　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）　粘質土，しまりあり
　10～20 ㎝の礫を含む，石垣裏込め

第 16 図　滝ノ上火薬製造所跡
トレンチ４導水路実測図



第 17 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ５石垣実測図（左①・右②）

第 18 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ５石垣写真

第 19 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ６・７位置写真

第 20 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ６写真

４　出土遺物について（第 26 図１～３）

今回の調査では，瓦や陶器が出土した。

遺物の出土は，調査対象範囲の南側の調査区１のトレンチ２からだけである。内訳は瓦片６点・陶器２点・塼１点である。そのうち，瓦片１点・陶器１点・塼１点を図化した。いずれもトレンチの硬化した５層（整地層）から出土しており，火薬製造所の遺物の可能性が高い。

１は苗代川の薩摩焼の壺底部である。復元径 22 ㎝で，外面は自然釉により赤褐色を呈している。内面は荒いナデで凹凸がある。

２は桟瓦片である。胎土が灰白色で，焼きが若干あまい。『銃薬方』（第７図），『銃薬製造所図』（第８図）の建物には，瓦葺きの屋根も見られることから，火薬製造所の建物の瓦の可能性がある。

３は焼成が良好な瓦質な塼である。表面や側面は丁寧に整形されている。裏面は粗雑な整形で，工具痕が残り凹凸がある。見える外側と接地面を意識した作りとなっている。『銃薬製式禄』（第７章総括参照）に煉瓦作りの建物の記載があり，その煉瓦の可能性がある。

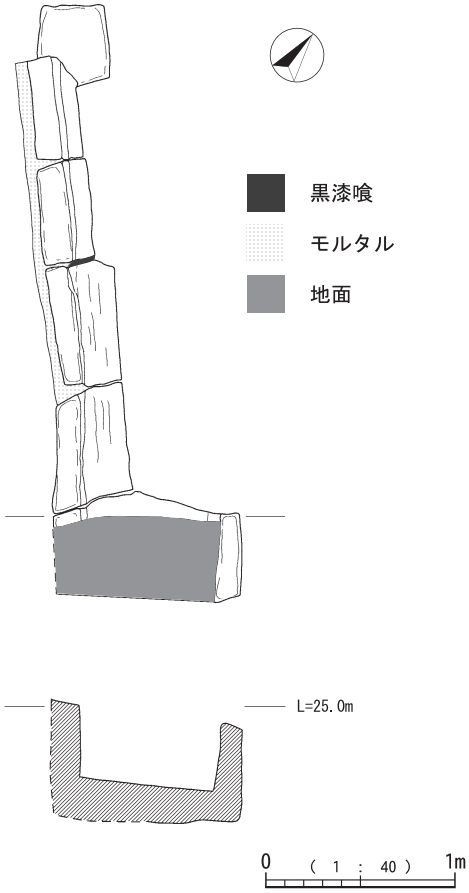
５　石垣等の残存について

石垣や石積み遺構の残存範囲は，調査区１・２全範囲（第 10 図）と調査区３のトレンチで確認している。

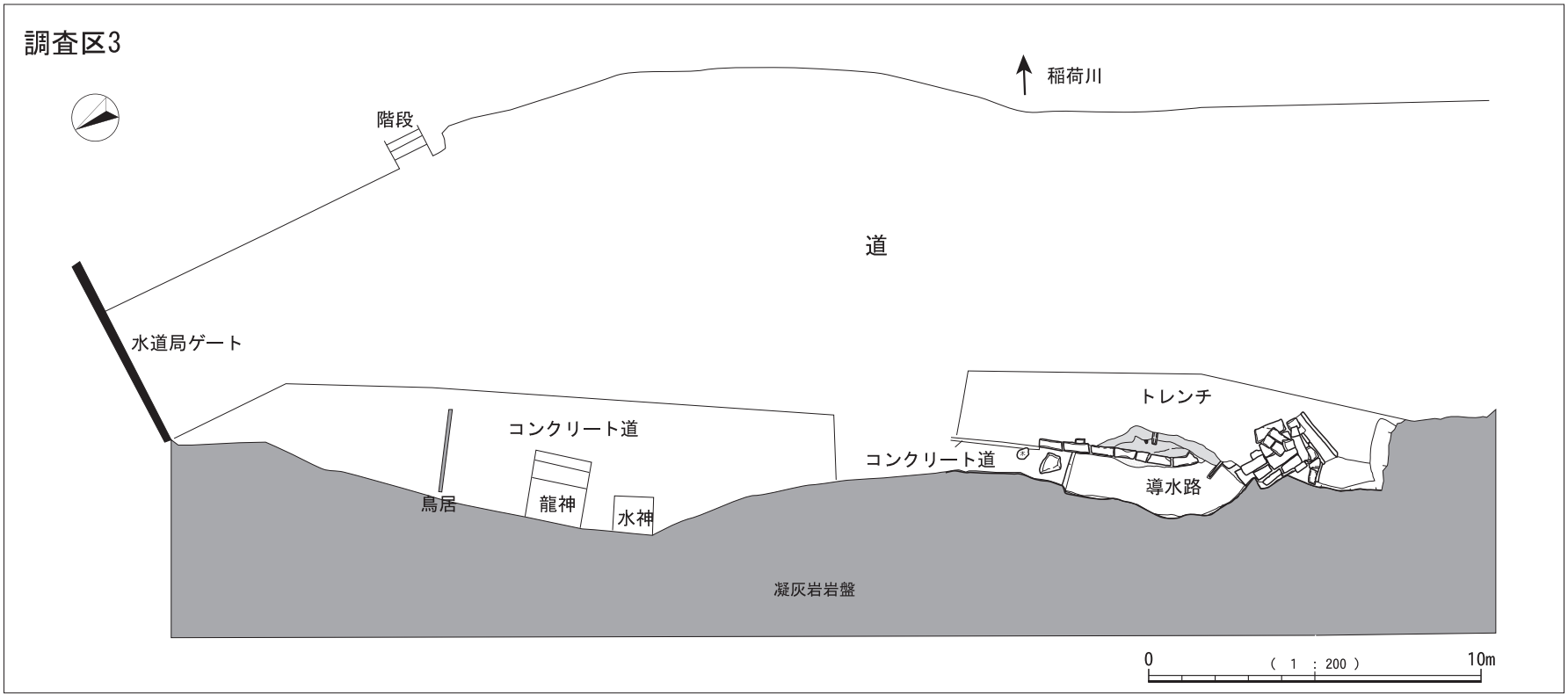
また，鹿児島市の調査により，第２地点（第 10 図南側調査区）から，敷石遺構が発見されており，その周辺も残存している可能性がある。

第 22 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ８写真

第 21 図　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ７写真



第 23 図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区２導水路実測図

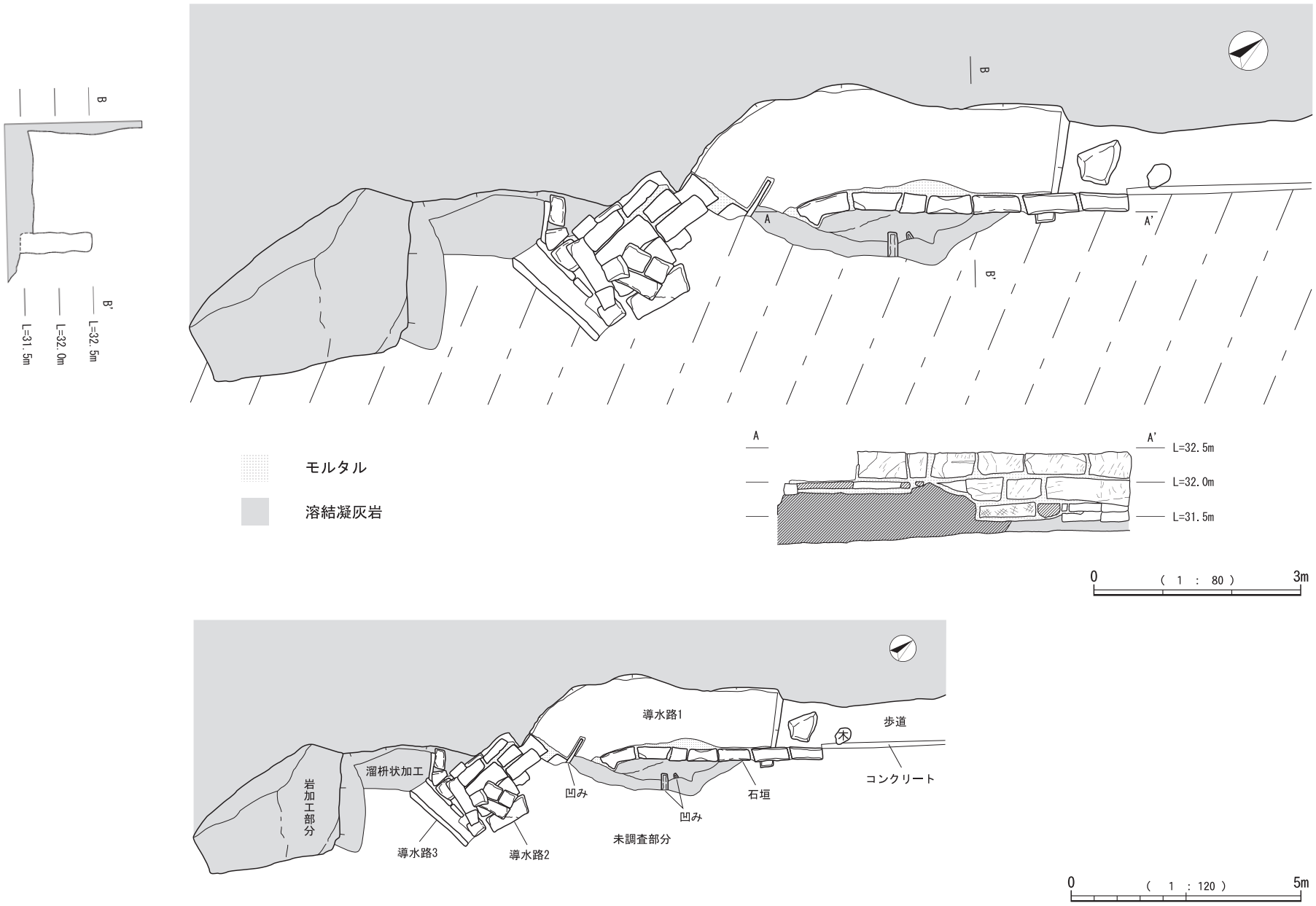


全体写真

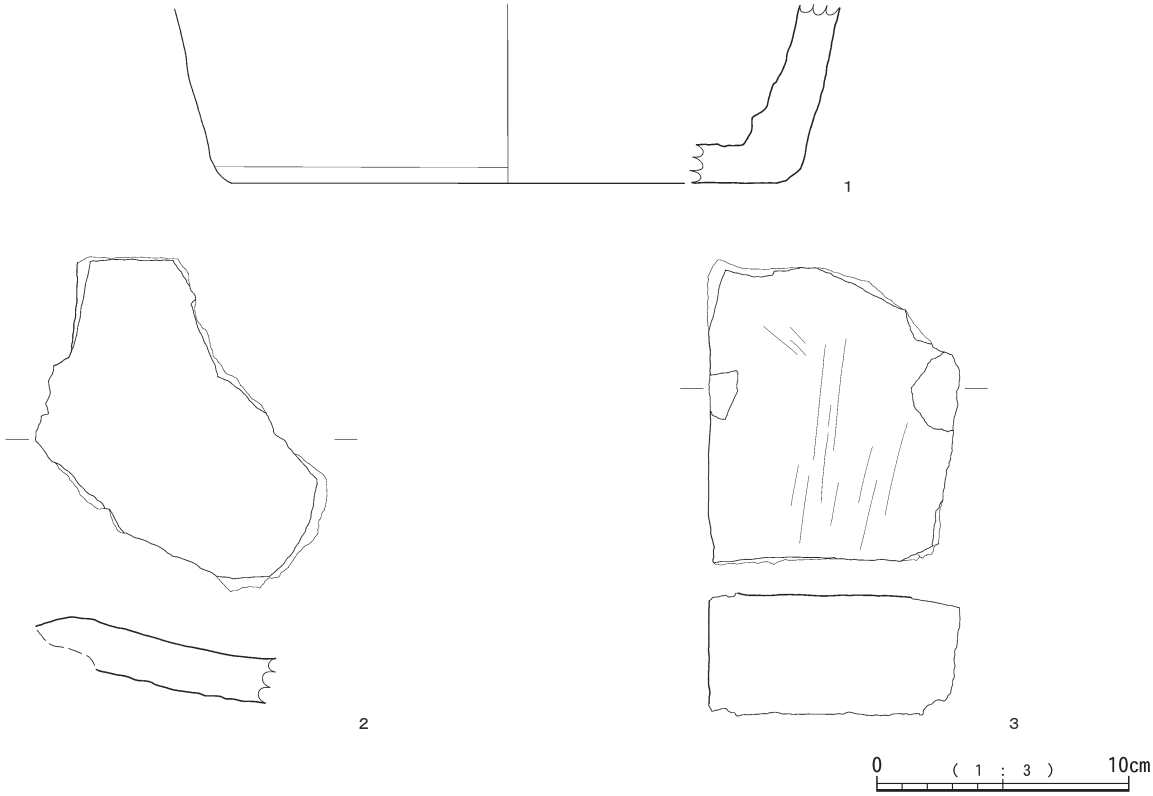
鳥居と龍神・水神

導水路

第 24 図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区３全体図



第 25 図　滝ノ上火薬製造所跡　調査区３導水路実測図



第 26 図　滝ノ上火薬製造所跡　出土遺物

第６表　陶器　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	トレンチ	層位	種別	機種	法量（cm）				色調	産地	年代	備考
								口径	底径	器高	重量（g）				
26	1	TKN 1	一括	トレンチ２	５層（整地層）	陶器	壺	―	22	(6.8)	(635)	にぶい赤褐色（5YR5/3）	薩摩	18 ～ 19 世紀	

第７表　瓦　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	トレンチ	層位	種別	法量（cm）			胎土色調	瓦色調	備考
							縦	横	厚さ			
26	2	TKN 3	一括	トレンチ２	５層（整地層）	桟瓦	(11.8)	(10.4)	1.8	灰白色（2.5YR8/2）白色小石少量混じる	灰色（N5/0）	

第８表　塼　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	トレンチ	層位	法量（cm）				色調	備考
						長さ	幅	厚さ	重量（g）		
26	3	TKN 2	一括	トレンチ２	５層（整地層）	(11.5)	(9.5)	4.7	(635)	褐灰色（10YR6/1）	灰色小石混じる

高熊山激戦地跡

第４章　高熊山激戦地跡

第１節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

高熊山激戦地跡は鹿児島県伊佐市大口に所在する。

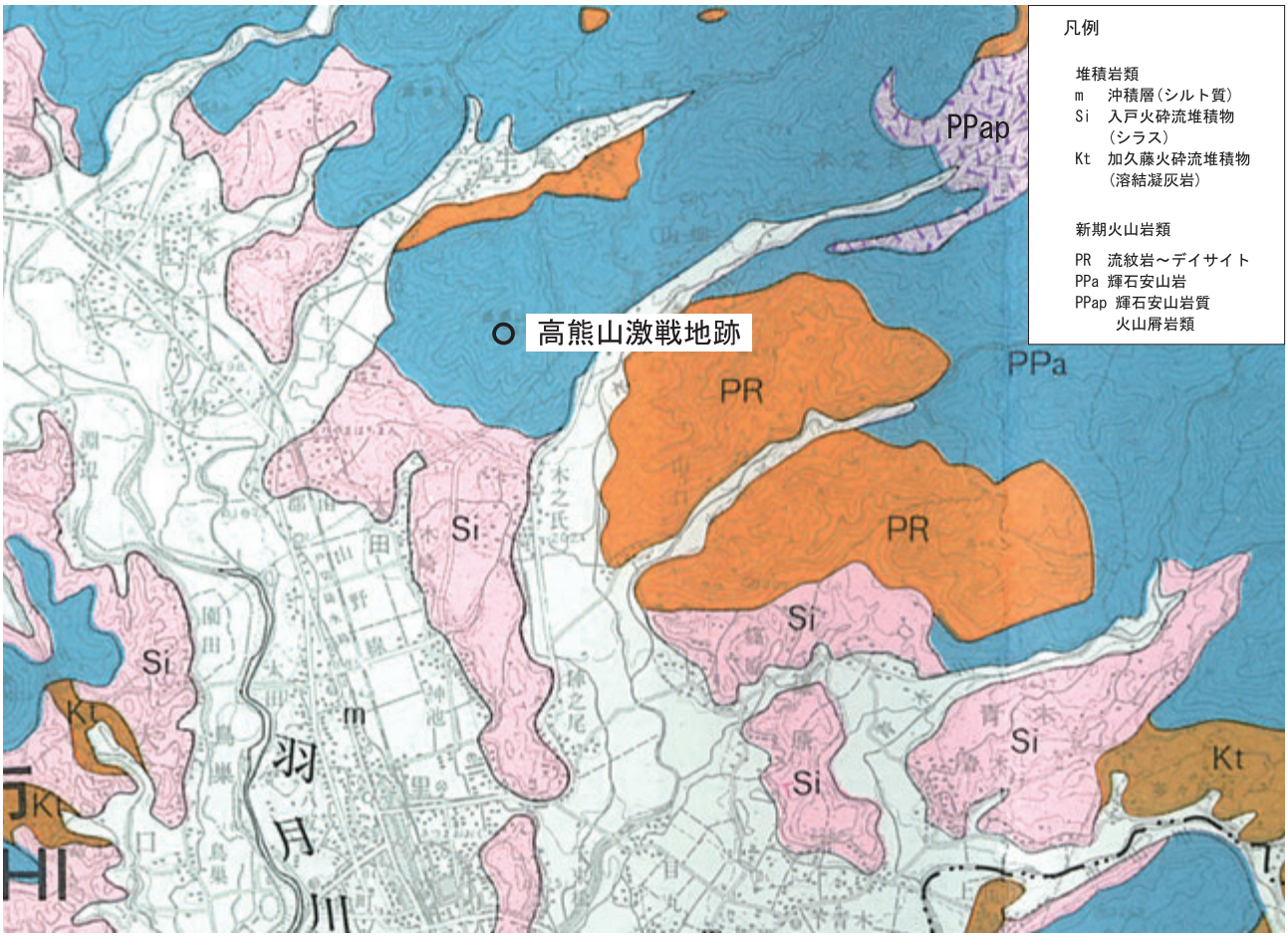
遺跡の所在する伊佐市は，面積 392 ㎢（東西 23㎞，南北 27㎞），県本土最北の自治体で，鹿児島県・宮崎県・熊本県の県境に位置し，北西は熊本県水俣市，北は人吉市，東は宮崎県えびの市に接している。平成 20（2008）年に，大口市と伊佐郡菱刈町が合併し誕生した。

海に面していない市で，九州山地に囲まれた大口盆地を中心に市域が形成されている。大口盆地は，東に霧島山系，西に矢筈岳及び上場高原，南に鳥帽子岳山系，南西に紫尾山系，北に北見山，間根ヶ平山系に囲まれている。

このように四方を山地に囲まれ，最低海抜高度 100 m，平均海抜高度 180 mの高地に位置しており，最も近い海まで 35 ㎞以上離れているため，鹿児島県のほかの地域に比べて内陸的な気候となる。そのため，冬は「鹿児島の北海道」と言われるほど寒く，一方で夏は高温多湿になることが多い。また，大口盆地は火山活動によって形成されたため，かつて酸性白土や軽石の採掘が行われており，菱刈鉱山は日本最大の金鉱山として現在も操業が続いている。日東や五女木などで産出する黒曜石を使用した石器が，県内各地の遺跡から出土している。

盆地中央部は，川内川水系である羽月川，水之手川，牛尾川等の中小河川が周辺の山地から流入し，川内川に合流している。川内川は，大口盆地南部を東西に流れ，南東部で「東洋のナイヤガラ」と呼ばれる曽木の滝を下り，大鶴湖（鶴田ダム人工湖）に流入している。流域では，加久藤火砕流堆積物が，天然のダムと盆地となり，平時は米作りの水源となる一方，水害の要因ともなっている。また，川の浸食と堆積によって，沖積平野や河岸段丘を形成し，その河岸段丘の上に多くの遺跡が立地している。

高熊山激戦地跡は，大口盆地の北東にある高熊山（標高 412 m）の山頂に位置し，現在は公園となっている（第 28 図）。高熊山は約 80～50 万年前の火山活動による壮年期の輝石安山岩山地のため，急傾斜の多い地形となっている。地理的には，姶良市から伊佐市を抜けて肥後に向かう「大口筋」，人吉から久七峠（標高 732 m）を越え大口に至る肥薩を結ぶ重要な交通路沿いにあり，人吉市から伊佐市を経て薩摩川内市に至る国道 267 号を一望



第 27 図　高熊山激戦地跡 周辺地質分類図（鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変）

できる。また，東側に坊主石山（標高 447.6 m），南西側に鳥神岡（標高 403.9 m）を拝している。

２　歴史的環境

（１）周辺の遺跡

伊佐市の考古学研究の第一歩は，早稲田大学文学部史学科を卒業後，旧制大口中学に赴任した木村幹夫氏と，九州大学医学部を卒業し旧大口市で開業していた寺師見國氏によって開始され，学史に残る多くの遺跡がある。また，伊佐市大口では 137 か所（令和２年８月）が「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている。以下に，高熊山激戦地跡が所在する旧大口市域を中心に，時代ごとの概要を述べる。

旧石器時代

日東，五女木は黒曜石の原産地として知られており，産地周辺から発見される遺跡も多い。

旧石器時代の遺跡としては，ナイフ形石器や細石刃が出土している日東遺跡，尖頭器・石核・削器等が出土している五女木遺跡，新開原遺跡（細石器文化期の遺物多数），小野原遺跡，郡山遺跡（ナイフ形･尖頭器･細石器）が挙げられる。

縄文時代

大口盆地をとりまく外輪山から飛び出した舌状台地にあり，眼下には，川内川の支流が流れる絶好の位置に多く所在する。

早期の遺跡としては手向山式土器・塞ノ神式土器の標式遺跡である手向山遺跡や塞ノ神遺跡のほか，松尾山遺跡，小野原遺跡，勝毛遺跡などがある。前期の遺跡としては，曽畑式土器が出土している日勝山遺跡や辻町遺跡，瀬ノ上遺跡がある。中期の遺跡としては，並木式土器の標式遺跡である並木遺跡や島巡遺跡，勝毛遺跡が，後期の遺跡としては西平式土器が多数出土した並木口遺跡や大牟田遺跡が挙げられる。晩期の遺跡としては埋設土器が検出された下殿瀬ノ上遺跡をはじめ，辻町遺跡，島巡遺跡，上尾下遺跡，新開原遺跡がある。

弥生時代

川内川支流の微高地上に遺跡が立地している。遺跡としては，免田式土器が出土した大住遺跡・焼山遺跡・浜場遺跡・里町遺跡，石包丁や磨製石鏃，抉入石斧が出土した下青木遺跡・大住遺跡などがある。また，下鶴遺跡からは土坑 52 基と壺棺１基と弥生時代の武器形青銅器としては，県内２例目となる銅戈が出土している。

古墳時代

川内川支流の河岸段丘や微高地上に立地する遺跡が多い。大口周辺では，高塚古墳は見られず，南九州独自の墓制である地下式板石積石室墓と地下式横穴墓が多数発見されている。地下式板石積石室墓は川内川流域から熊本県南部まで広く分布しており，地下式横穴墓は宮崎県から大隅地方・北姶良・伊佐に限定して分布している。大口地域はこの２つの墓制がちょうど重なる地域である。多数見られる例として，約 140 基の地下式板石積石室墓と 10 基の地下式横穴墓が検出された瀬ノ上・平田遺跡，34 基の地下式板石積石室墓が検出された大住遺跡，90 基以上の地下式板石積石室墓が現地保存されている焼山遺跡が挙げられる。また下鶴遺跡では竪穴住居跡が 93 基検出されている。

古代

平安時代初期に編纂された『続日本紀』には，天平勝宝７（755）年５月に大隅国菱刈村の浮浪者 930 人余りが郡家を建てることを要求し，朝廷が許可したとの記録があり，この年に菱刈郡が誕生したことがわかる。十世紀前半に編纂された『和名抄』には，菱刈郡は「比志加里」と読み，羽野・亡野（出野）・大水・菱刈の四郷からなると記されている。本遺跡の所在する大口周辺は大水郷の一部であることが推測される。

古代の遺跡としては，鳥巣遺跡，荻原遺跡，斧トキ遺跡，原田遺跡が挙げられ，いずれの遺跡でも須恵器の火葬墓（蔵骨器）が発見されている。また，北薩地域に集中する傾向が窺える土師器の高台に胴部と異なる赤色粘土を用いた土師器が，多数出土している大峰遺跡がある。さらに，岡野古窯跡群では須恵器窯跡が４基確認されている。

中世

中世に入ると菱刈郡は旧大口市にあたる牛屎院と旧菱刈町にあたる太良院の両院となり，牛屎院は牛屎氏に太良院は菱刈氏に支配される。12 世紀初頭には島津家初代島津忠久が，薩摩国の守護職兼総地頭職とし入国してくる。その後，牛屎院を長く支配していた牛屎氏は，菱刈氏･相良氏に追われて飯野（現在のえびの市）に移り，牛山城（大口城）は菱刈氏・相良氏の根拠地として島津氏と勢力を争い，その城主も変転する。戦国時代に入ると島津氏が優勢となり，大口城を攻勢し，永禄 12（1569）年，菱刈氏・相良氏は和議降伏をする。その年，牛屎院の地頭職に新納忠元が任命され，この前後から大口という地名が使われるようになる。

中世の遺跡としては新平田遺跡や馬場Ａ遺跡の２つの遺跡は，平泉城跡と時期が一部重なることから平泉城を中心に形成された集落跡ではないかとも推測されている。

近世

近世の遺跡としては広徳寺古墓と王城古墓が挙げられ，人骨と副葬品の古銭が出土している。

外城制度（天明４（1784）年，郷へ改称）に関連するものとして，地頭仮屋，境目番所・辺路番所・厩役所・馬改所などがあった。交通網に目を向けると，陸上交通では，主要街道の一つである大口筋（姶良市加治木町・霧島市横川町･伊佐市を経て水俣に至る）が通っていた。伊佐市は熊本（肥後）．宮崎（日向）と接しているため，他国境目番所・辺路番所が多く設けられていた。

近代

明治 42（1909）年に竣工した曽木発電所は，当時日

本最大出力を誇る水力発電所であり，日本の近代化学工業発祥のきっかけとなった発電所である。現在は下流にあるダム建設に伴って，基本的に水没してしまっているが，閑水期には煉瓦造りの建物を見ることができる。

平成18（2006）年に国の登録有形文化財となり，平成19（2007）年に近代化産業遺産に認定されている。

３　高熊山激戦地跡略史

（１）戦闘状況

熊本から退却した西郷軍は，明治10（1877）年４月下旬に本営を人吉に置き，俊険なる人吉の要害を堅守し，西は大口・水俣方面を，東は豊後方面に進出して，政府軍を牽制し，鹿児島にも部隊を派遣する作戦を実行に移していく。これに伴い，辺見十郎太率いる雷撃隊と池辺吉十郎率いる熊本隊等計約1,000名は大口へ向かうこととなる。

５月初旬，政府軍（第３旅団）が水俣から山野（大口）へ進攻するが，５月10日雷撃隊・熊本隊の攻勢によって水俣近くまで押し返される。その後も，大口周辺では戦闘は続いたが，６月１日の人吉陥落により戦線が大口まで迫ることとなる。大口北西の水俣方面からは第３旅団が，大口北東の人吉方面からは別働第２旅団が大口へ向け進攻しており，６月７日に水俣の久木野，６月８日には大口の小川内，６月13日には大口の山野を占領した。対する西郷軍は大口に拠点を置き，高熊山には池辺吉十郎率いる熊本隊が，高熊山の東側にある坊主石山には辺見十郎太率いる雷撃隊が陣を敷いた。高熊山周辺における６月13日～20日までの戦況は以下のとおりである。

６月13日　熊本隊が高熊山山頂に布陣。
　　宿舎建設及び堡塁建設。

６月14日　坊主石山に雷撃隊・正義隊が布陣。
　　大口に拠点設置。

６月15日　西郷軍，山野の攻撃を決定。

６月16日　西郷軍，山野を攻撃するも撤退。高熊山に退却。別働第２旅団，左翼を芝立山・右翼を黒萩山へ展開。四斤山砲２門・ブロードウェル砲２門を黒萩山へ設置し，高熊山・坊主石山の西郷軍の堡塁を砲撃。河泉山の西郷軍退去。

６月17日　別働第２旅団へ小林方面へ向かうように命令が出るが，明18日に第三旅団と合同で高熊山・坊主石山を攻撃することが決定していたため，黒萩山に留まる。

６月18日　第３旅団，高熊山へ攻撃。高熊山の熊本隊，巨石投下などにより抗戦。
別働第２旅団，高熊山・坊主石山へ攻撃。坊主石山陥落。雷撃隊・協同隊，坊主石山を奪還すべく東南２方向より攻勢をかけるも失敗。

６月19日　坊主石山を占領した政府軍は，第３旅団８門，別働第２旅団４門の計12門の大砲をもって，東・北・西の３方向より高熊山へ向け砲撃。

６月20日　第３旅団，暗闇に紛れ高熊山を襲撃。高熊山陥落。第３旅団・別働第２旅団，連合して大口の西郷軍守備を突破。大口陥落。

（２）過去の調査（整備事業）

高熊山激戦地跡は，昭和53（1978）年10月１日に大口市（現:伊佐市）の指定文化財となり，昭和58（1983）年には公園として整備されている。整備の際には，弾丸・薬莢・貨幣・刀剣などが発見されている。旧大口市教育委員会により堡塁配置の略図が記録されているが，詳しい報告は残されていない。

高熊山麓の大口木ノ氏地区では，平成２（1990）年に地区住民や郷土史研究会の手によって，高熊山で戦死した西郷軍の熊本隊の墓地が整備され，「熊本隊戦没隊士銘碑」が建てられている。また，坊主石山麓の大口篠原山ノ口地区には，出水郡出身の西郷軍兵士37名が，地区住民により埋葬され供養が行われていた。現在の石碑は昭和54（1979）年に地区の住民によって，「西南の役従軍無名兵士無縁者之霊碑」が再建されている。その他，西郷軍の戦死者を供養するための招魂碑が，従軍した各郷の麓である大口・山野・羽月・曽木・菱刈・湯之尾に建立されている。

雷撃隊が大口から撤退するとき，辺見は現在の池田橋付近にあった当時の松並木で馬を止め，高熊山を振り返り望遠しながら「死を賭して固守すること四区余の山塁，いまこの要害の地（高熊山）を糞鎮（政府軍）に奪わる。あぁ，吾が事終わった。今は鹿児島に帰って死に就かんのみである。」嘆き，涙したと言われている。以後，「逸見どんの涙松」と呼ばれ，保護されていたが，落雷により松はなくなり，現在は記念碑が建てられている。

（３）研究史

平成16（2004）年，高橋信武氏により高熊山頂上堡塁（氏は台場と呼称）群の略図作成及び周辺の踏査が行われた。高熊山中腹や鳥神岡での堡塁の存在も報告されている（高橋2005）。

【引用・参考文献】

安藤定　1887『別働第二旅団戦記巻之四』

大口市郷土誌編さん委員会 1981『大口市郷土誌上巻』

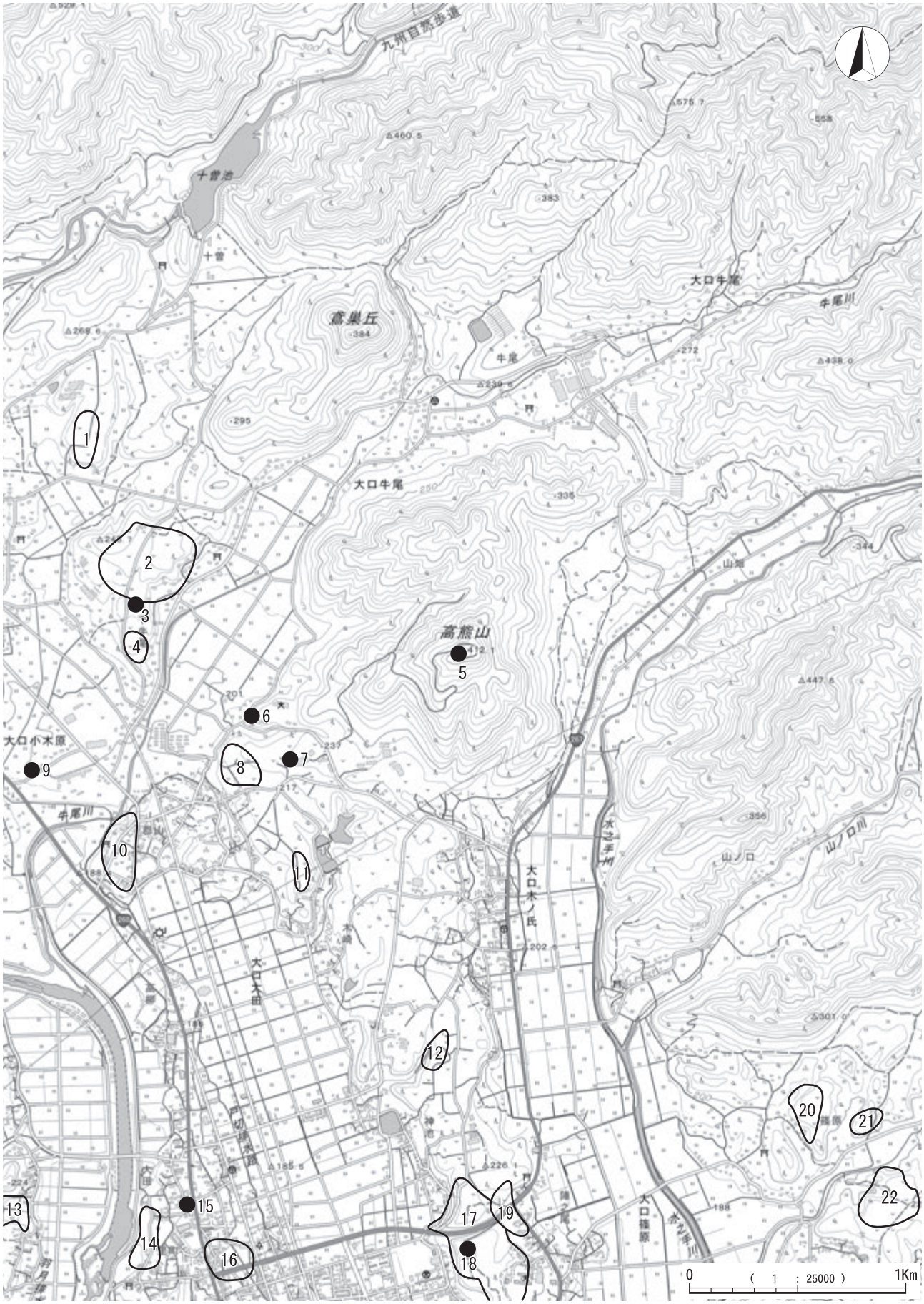
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009『陣之尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（134）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2017『里町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（191）

佐々友房 1891『戦袍日記』

高橋信武 2005「高熊山へ」『西南戦争之記録 第３号』

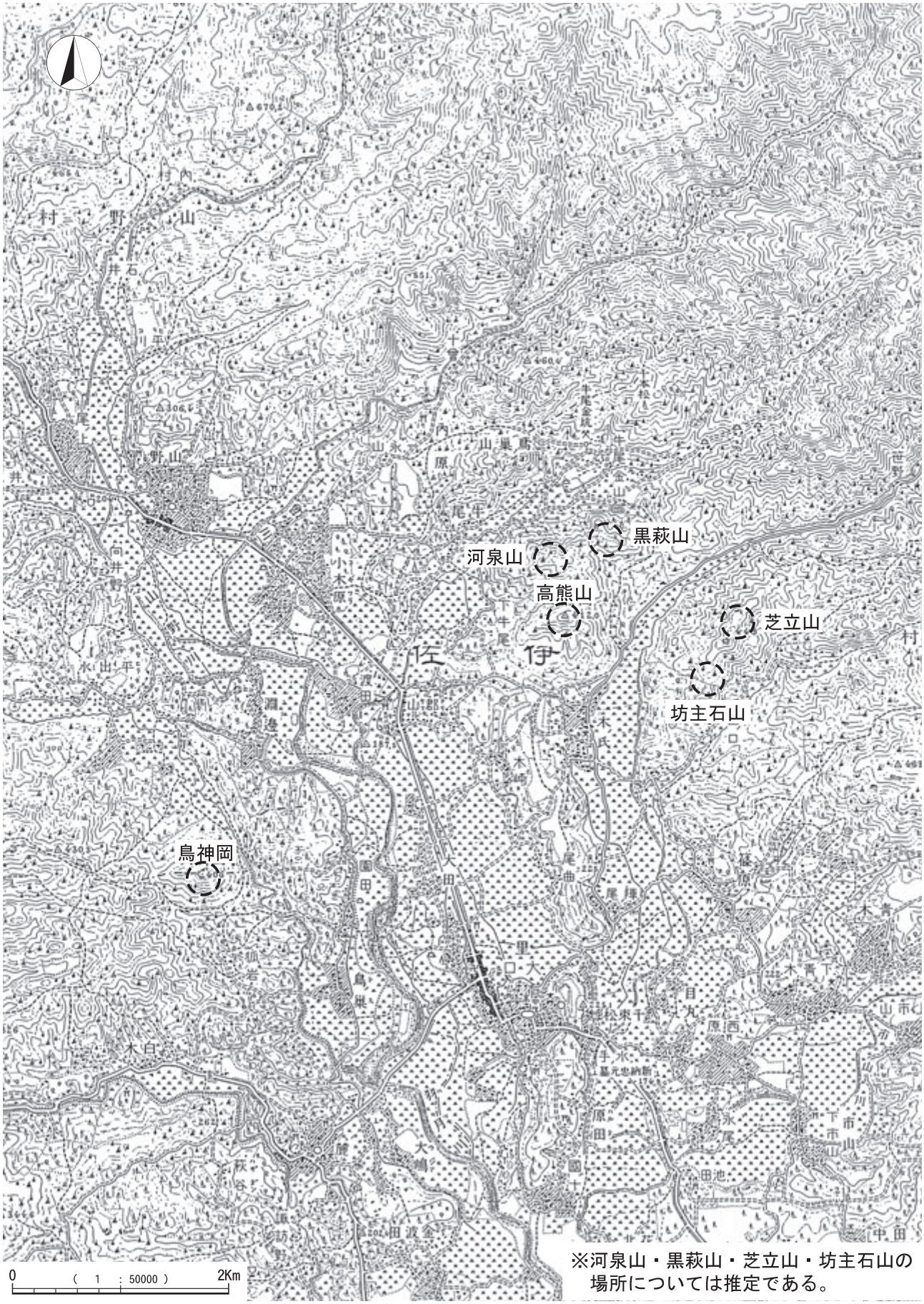
JACAR（アジア歴史資料センター），「戦闘報告表　明治10年５月18日～10年７月10日（防衛省防衛研究所）」
Ref.C09084795300 Ref.C09084795400 Ref.C09084795500
Ref.C09084795700 Ref.C09084795800 Ref.C09084795900
Ref.C09084796000 Ref.C09084796100 Ref.C09084798200
Ref.C09084800200 Ref.C09084800300 Ref.C09084800300
Ref.C09084800400 Ref.C09084800500 Ref.C09084800600
Ref.C09084800700 Ref.C09084800800 Ref.C09084801100
Ref.C09084801200 Ref.C09084801400 Ref.C09085245000
Ref.C09085245100 Ref.C09085438600 Ref.C09085439700
Ref.C09086074800 Ref.C09086075100



第 28 図　高熊山激戦地跡 周辺遺跡位置図（国土地理院 1：25,000 地形図『大口』『山野』『飯塚』『吉松』改変）

第９表　高熊山激戦地跡 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
1	永山	224	113	伊佐市大口山野小木原永山	丘陵		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅶ)』県埋文報（73）
2	牛尾城跡	224	49	伊佐市大口牛尾	台地						●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
3	日勝山	224	11	伊佐市大口山野小木原日勝山	丘陵		●							『考古学』第７巻９号
4	小城	224	114	伊佐市大口牛尾小城	台地		●		●					『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅶ)』県埋文報（73）
5	高熊山	―	―	伊佐市大口木ノ氏高熊	山地								●	本報告書 伊佐市指定文化財（昭和 53. 10.　1）
6	牛尾小学校	224	15	伊佐市大口牛尾・牛尾小学校	台地		●							『鹿児島県考古学会紀要』1
7	木崎原	224	13	伊佐市大口牛尾木崎原	丘陵		●							『考古学雑誌』22-10
8	木崎原	224	11	伊佐市大口牛尾木崎原	台地		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅶ)』県埋文報（73）
9	春村地下式横穴	224	27	伊佐市大口小木原春村	台地				●					『鹿児島県文化財報告書』（４）
10	郡山城跡	224	54	伊佐市大口郡山	台地	●	●				●			大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（14）
11	大儀司	224	111	伊佐市大口大儀司	舌状台地		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅶ)』県埋文報（73）
12	軍神ノ上	224	112	伊佐市大口大田軍神ノ上	台地		●							『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅶ)』県埋文報（73）
13	上松 A	224	63	伊佐市大口鳥巣上松	平地				●					平成２年分布調査
14	黒岩	224	132	伊佐市大口大田黒岩	河岸段丘						●			大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（25）
15	大田地下式横穴	224	24	伊佐市大口大田横手	平地				●					『考古学雑誌』26-6
16	里町	224	22	伊佐市大口里町	沖積地		●	●	●	●	●	●	●	大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（26） 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（191）
17	陣之尾城跡	224	31	伊佐市大口篠原陣之尾	舌状台地		●		●		●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（134）
18	成就寺地下式横穴	224	25	伊佐市大口里成就寺	台地				●					『鹿児島県文化財報告書』（４）
19	芳ケ迫	224	137	伊佐市大口木ノ氏芳ケ迫	平地				●					平成 13 年分布調査
20	篠原城跡	224	30	伊佐市大口篠原城ヶ岡	丘陵						●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
21	島巡	224	12	伊佐市大口篠原島巡	丘陵		●		●	●				大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（６）
22	星ヶ峯	224	88	伊佐市大口篠原	低地		●							大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）



第 29 図　明治 35 年高熊山激戦地跡 周辺地形図（1：50,000・『大口』改変）

第２節　調査の方法

１　発掘調査の方法

高熊山激戦地跡の調査は，伊佐市が管理している高熊山公園（約 10,000 ㎡）（第 31 図）を調査対象とした。

現地踏査や，伊佐市教育委員会との協議，高橋信武氏（日本考古学協会員），新東晃一氏（南九州縄文研究会）の調査方法等に関する指導などを踏まえ，９基の堡塁の精査と構造解明のためのトレンチ調査，周辺地形と堡塁配置の検討，銃弾などの遺物の発見を主な調査目的とした。

遺構配置図の作成にあたっては，世界測地系による３級基準点を設置した。遺構配置図及びトレンチ位置等は，トータルステーションと平板による実測を行った。なお，基準点設置・遺構配置図作成業務は委託して行い，基準点等のデータ一式は埋文センターに保管してある。

調査に際しては，まず竹や樹木の伐採，倒木や枯れ葉の除去等を行い，堡塁の残存状況を確認した。その後，当時の銃弾があることを想定して，調査区全体に金属探知機による調査を行い，反応のあった部分を掘り下げ，銃弾等の遺物の検出を試みた。出土した遺物は，位置を記録して，取り上げを行った。

堡塁の調査にあたっては，まず銃弾等の発見のために，金属探知機による調査を実施した。遺構の保護を図るために，トレンチ以外の部分は，伐採や清掃のみとした。

倒木で壊れた堡塁７号を利用して，崩壊部にトレンチを設定し，下部構造の調査を行った。調査終了後は，崩壊部分を調査結果に基づき復元を行った（第 45 図）。堡塁９号は，胸壁部分に礫が集中していたため，短軸方向にトレンチ調査を行った。当時の面まで掘り下げを行い，調査後，埋め戻しを行った。

２　整理作業の方法

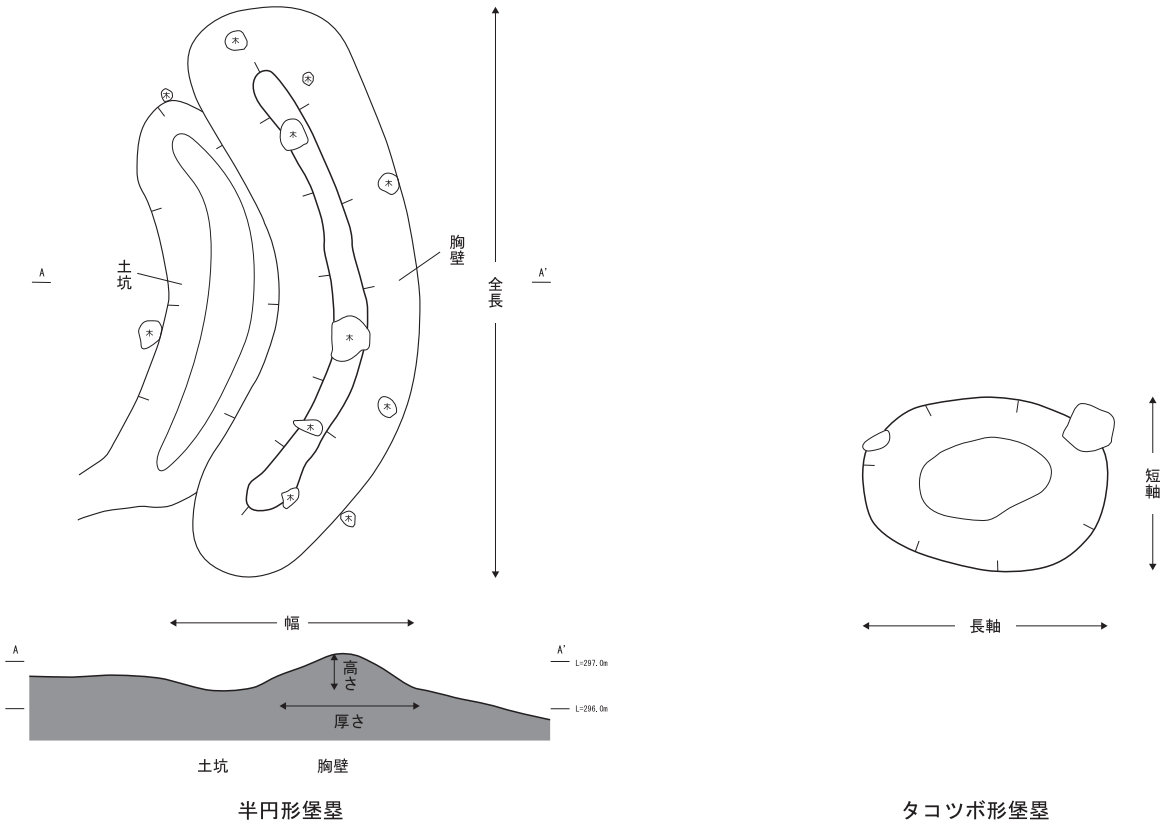
銃弾などの金属器が主な出土遺物のため，クリーニングを行った後に，Ｘ線撮影と実測を行った。作業終了後は，保存処理を行った。

第３節　堡塁の分類

高熊山激戦地跡の層序については，トレンチを設定した堡塁ごとで異なっていたことから，各堡塁実測図で記述する。

堡塁は半円形堡塁とタコツボ形堡塁の２形態が存在した。堡塁の部位名は，前面高まりを胸壁，身を隠していた穴の部分を土坑として記述する。また，堡塁の各計測箇所は第 30 図のとおりである。

なお，各堡塁平面図は，表土での現況図である。



半円形堡塁　　タコツボ形堡塁

第 30 図　堡塁部位名称及び計測箇所

第４節　高熊山激戦地跡の調査成果

堡塁の調査は，清掃を行った後，現況測量を行い，規模や特徴を調査・記録することとした。堡塁７号は，平成30年度に台風による倒木があり，一部が破壊されていたため，その部分にトレンチを設定して，調査を行った。堡塁９号は，単独で南側に配置されたものである。他と異なり，胸壁部分に礫の集中が見られたため，集中部にトレンチを設定して調査を行った。堡塁の配置状況と各堡塁毎に詳述していきたい。出土遺物については，出土状況を各遺構の項で記述し，遺物個別の特徴等については遺物の項で詳述する。

１　堡塁の配置及び構造について

高熊山（標高412ｍ）は，山頂以外は急傾斜の多い山容となっている。ただし，山頂部分には，巨石が点在しているが，比較的平坦である。

山頂部には，西郷軍の９基の堡塁が確認された。そのうち北東側には，半円形堡塁（堡塁３号～７号）が５基とタコツボ形堡塁１基（堡塁２号）が山頂に２重になるように構築されている（第32図）。１つの巨大な堡塁として機能していたと考えられる。６基を合わせた規模は全長約20ｍ，幅約10ｍである。その中で，最大の堡塁は７号で，他の堡塁の後方に位置し，２号～６号を見渡せる。堡塁３号・４号・５号・６号と７号の間は通路状の造りとなっており，その通路状の西に堡塁２号が位置している。これら６基は，政府軍が陣を張ったと推定される黒萩山，芝立山，坊主石山方面を守備するよう配置されている。その他の堡塁は，単体で構築されており，尾根筋から進入してくる政府軍を監視・攻撃したものと推定される。南側斜面を意識して構築された堡塁はない。

堡塁構造は，胸壁と土坑からなる。胸壁は，銃撃を防ぎ，土坑は胸壁裏に掘られており，兵士が身を隠す場所である。胸壁は，土坑を掘り上げた土や礫を使って構築し，地盤の礫が多量に混じる。また，急傾斜の地形や巨石を利用して，高さを増すようになっている。斜面から進行してくる政府軍からは，見上げる体勢となり，堡塁後背の山頂や土坑を確認することはほとんどできない。土坑は，地盤を掘り込んで深さを確保している。

２　各堡塁の調査について

（１）堡塁１号（第33図）

山頂北側に単独で構築されている半円形堡塁である。

現況計測値は，全長640㎝，最大幅384㎝で，胸壁の厚み128㎝，高さ24㎝である。

胸壁は等高線に沿って，傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は胸壁に沿うように長楕円形を呈しており，深さは20㎝である。

堡塁の北側は，急斜面となっている。斜面側から見上げる体勢となり，堡塁内を見込むことはできない。

後背にあたる南側には巨石が２つあり，巨石の北面側を中心に銃弾痕や砲撃痕と考えられる凹凸が無数にある。

（２）堡塁２号（第34図）

楕円形を呈するタコツボ形堡塁である。山頂北東側に６基が集中する堡塁群では一番西側に位置する。現況計測値は，長軸244㎝，短軸220㎝である。深さは北側斜面からは20㎝，南側の後背地からは60㎝である。

堡塁２号の斜面側には，胸壁に利用した可能性がある幅160㎝，高さ170㎝の巨石がある。巨石北面に銃弾痕や砲撃痕と考えられる凹みが無数にある。

（３）堡塁３号（第34図）

半円形堡塁で，山頂北東側集中する６基の堡塁群では一番北側に位置する。北側斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は，全長660㎝，最大幅464㎝で，胸壁の厚み280㎝，高さ36㎝である。土坑は胸壁に沿うように長楕円形を呈しており，深さ40㎝である。

胸壁は等高線に沿って，傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は明らかに掘削をしており，その掘削土を利用して胸壁を一段盛り上げている。

土坑は掘削されているが，西側は平坦となっており，出入り口等の可能性も考えられる。

遺物は，胸壁前面から頂部にかけて，エンフィールド銃弾（第43図４・７・８・９・10）とスナイドル銃の銃弾（第43図15）が出土している。４は弾頭が北側斜面を，７・８・15は弾頭が堡塁側を向いて出土している。９・10は，弾頭が堡塁・斜面どちら側でもない方向を向いて出土している。

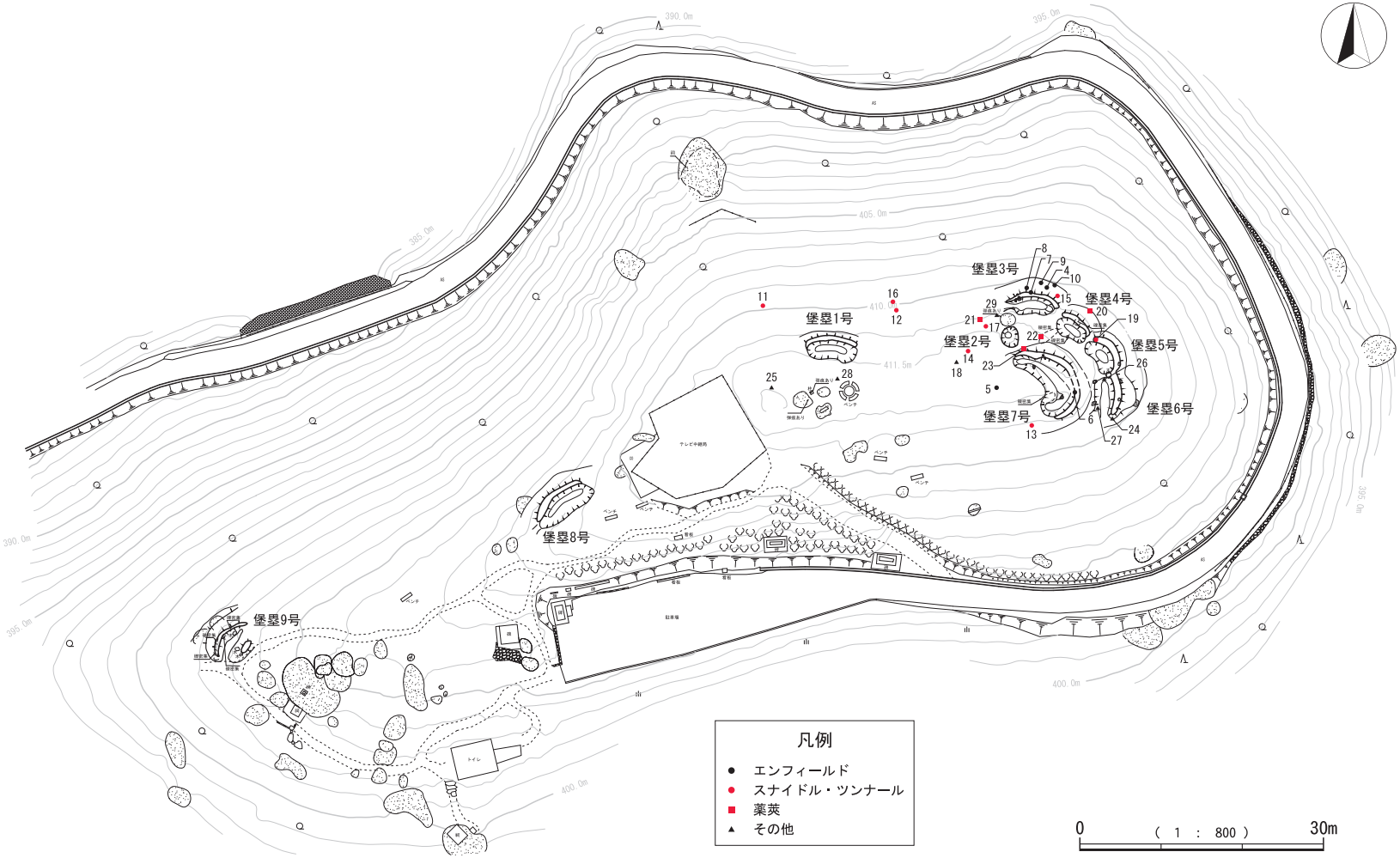
（４）堡塁４号（第35図・37図）

半円形堡塁で，山頂北東側集中する６基の堡塁群の中では，堡塁５号とともに中央に位置する。主に北東斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は，全長410㎝，最大幅464㎝で，胸壁の厚み236㎝，高さ40㎝である。土坑は長楕円形を呈しており，深さ40㎝である。全長よりも最大幅が長く，少しコンパクトな印象を受ける。

胸壁は等高線に沿って，傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は明らかに掘削をしており，その掘削土を利用して胸壁を一段盛り上げている。

堡塁４号は，堡塁５号と合わせて並列する形状だったため，両堡塁の間に長さ約290㎝，幅50㎝のトレンチを設定して，堡塁の掘削状況を確認した（第37図）。表土を取り除くと，褐色粘質土で輝石安山岩を含む非常に



第 31 図　高熊山激戦地跡　遺構配置図及び遺物出土状況図

固い地盤が現れ，４・５号の間を頂点とした２つの掘り込みを確認した。そのため，４号と５号は個別の堡塁と判断した。

胸壁と斜面の境から．スナイドル銃の薬莢（第 43 図 20）が出土している。

（５） 堡塁５号（第 36 図）

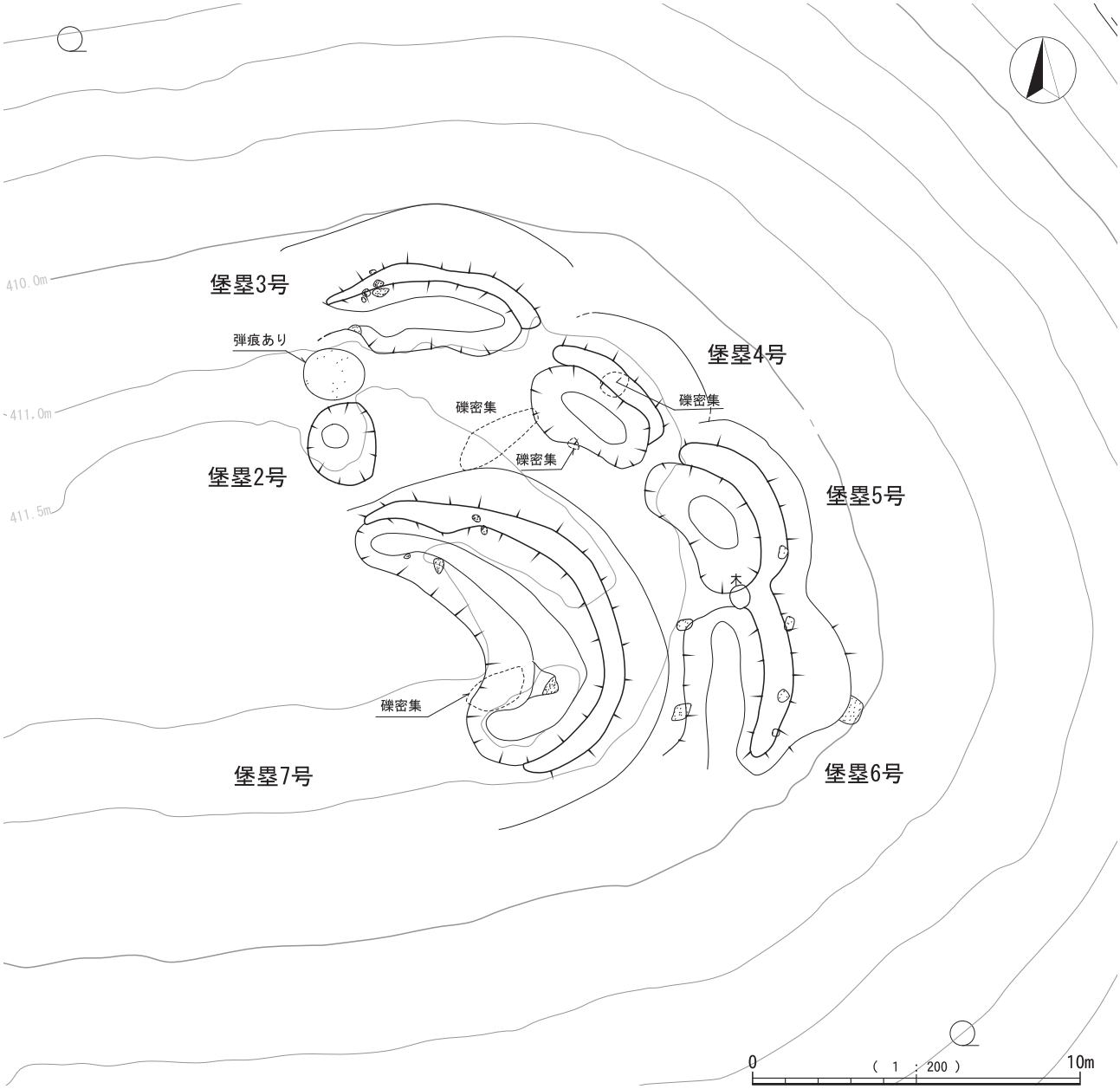
半円形堡塁で，山頂北東側に集中する６基の堡塁群の中では，堡塁４号とともに中央に位置する。主に東北東斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は，全長 500 ㎝で，最大幅 420 ㎝で，胸壁の厚み 164 ㎝，高さ 64 ㎝である。土坑は胸壁よりやや大きく，楕円形を呈しており，深さは 64 ㎝である。

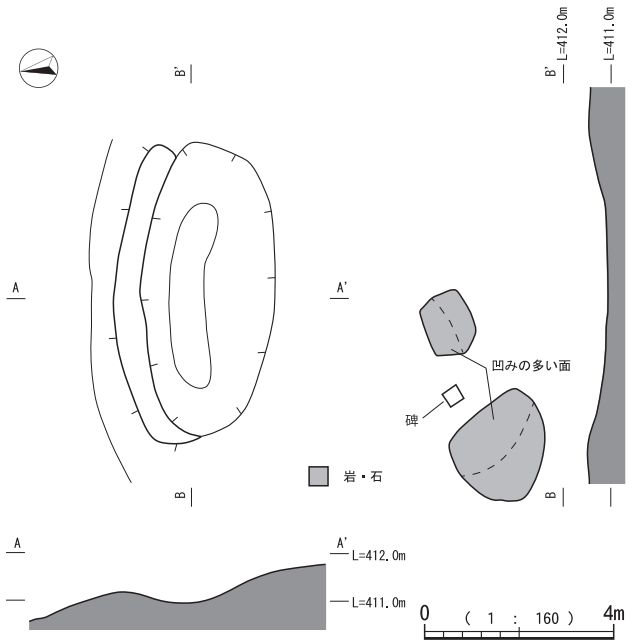
胸壁は等高線に沿って，傾斜に向かって緩く弧を描いている。土坑は他の堡塁より深く掘削されており，胸壁も高くなっている。後背が平坦なため，深く掘削を行った可能性がある。

胸壁は堡塁６号と連結した構造である。土坑に関しては，堡塁６号との高低差があまりないため，１つの土坑の可能性もある。しかし，間に木があり，トレンチ調査を行うことができなかった。そのため，現況の状況から，別々の遺構（堡塁５号と６号）として取り扱うこととした。

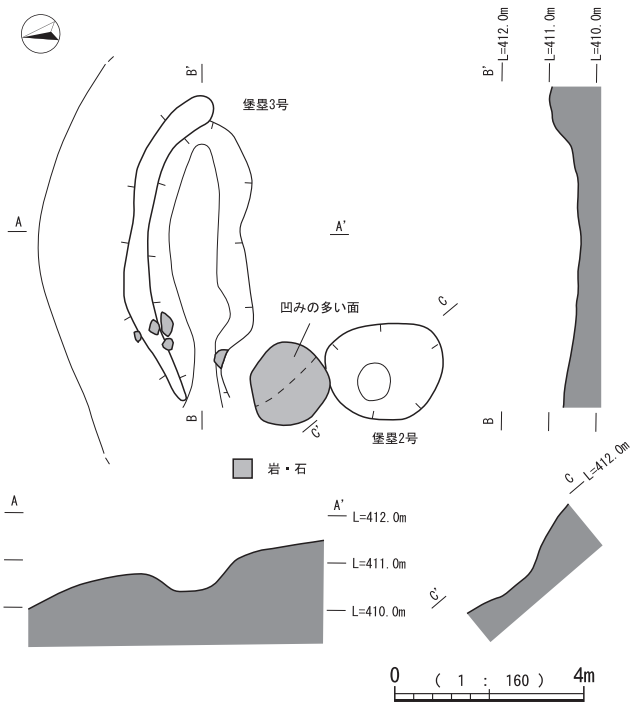
胸壁頂部付近からは，ツンナール銃の銃弾（第 43 図 19）が弾頭を堡塁へ向けて，出土している。



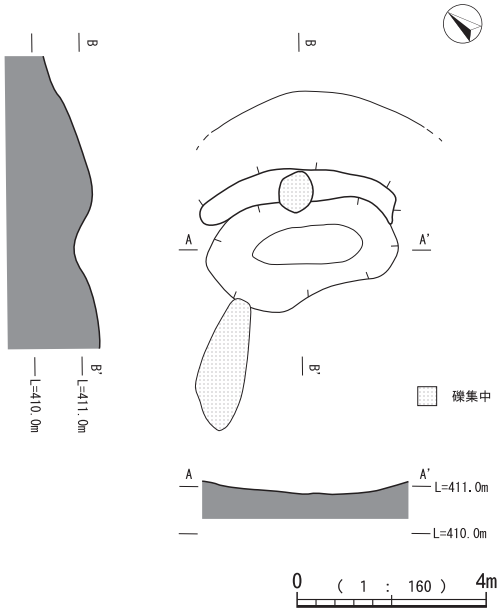
第 32 図　高熊山激戦地跡　堡塁２号～７号遺構配置図



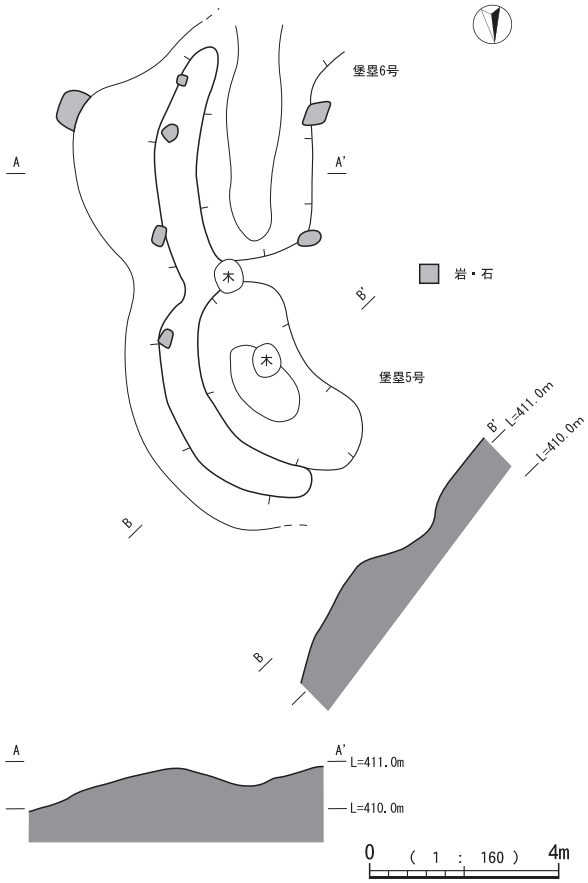
第 33 図　高熊山激戦地跡　堡塁１号実測図



第 34 図　高熊山激戦地跡　堡塁２・３号実測図



第 35 図　高熊山激戦地跡　堡塁４号実測図



第 36 図　高熊山激戦地跡　堡塁５・６号実測図

（６）堡塁６号（第 36 図）

半円形堡塁で，山頂北東側に集中する６基の堡塁群では一番東側に位置する。東側斜面を意識した構築となっている。

現況計測値は，全長 516 ㎝，最大幅 500 ㎝で，胸壁の厚さ 328 ㎝，高さ 36 ㎝である。土坑は隅丸長方形を呈しており，深さ 36 ㎝である。

胸壁は等高線に沿って，傾斜に向かって緩く弧を描いている。東側斜面側を利用して，胸壁を構築しており，裾野が広く厚い。土坑は明らかに掘削をしており，その掘削土を利用して胸壁を一段盛り上げている。土坑の南側は明瞭な掘り込みはなく，平坦面を形成している。堡塁３号と同じく，出入り口等の可能性も考えられる。

遺物は，土坑から針金（第 44 図 26）と釘（第 44 図 27）が出土しているが，当時の遺物かは不明である。南側隣接地には，砲弾の可能性のある鉄塊（第 44 図 24）が出土している。

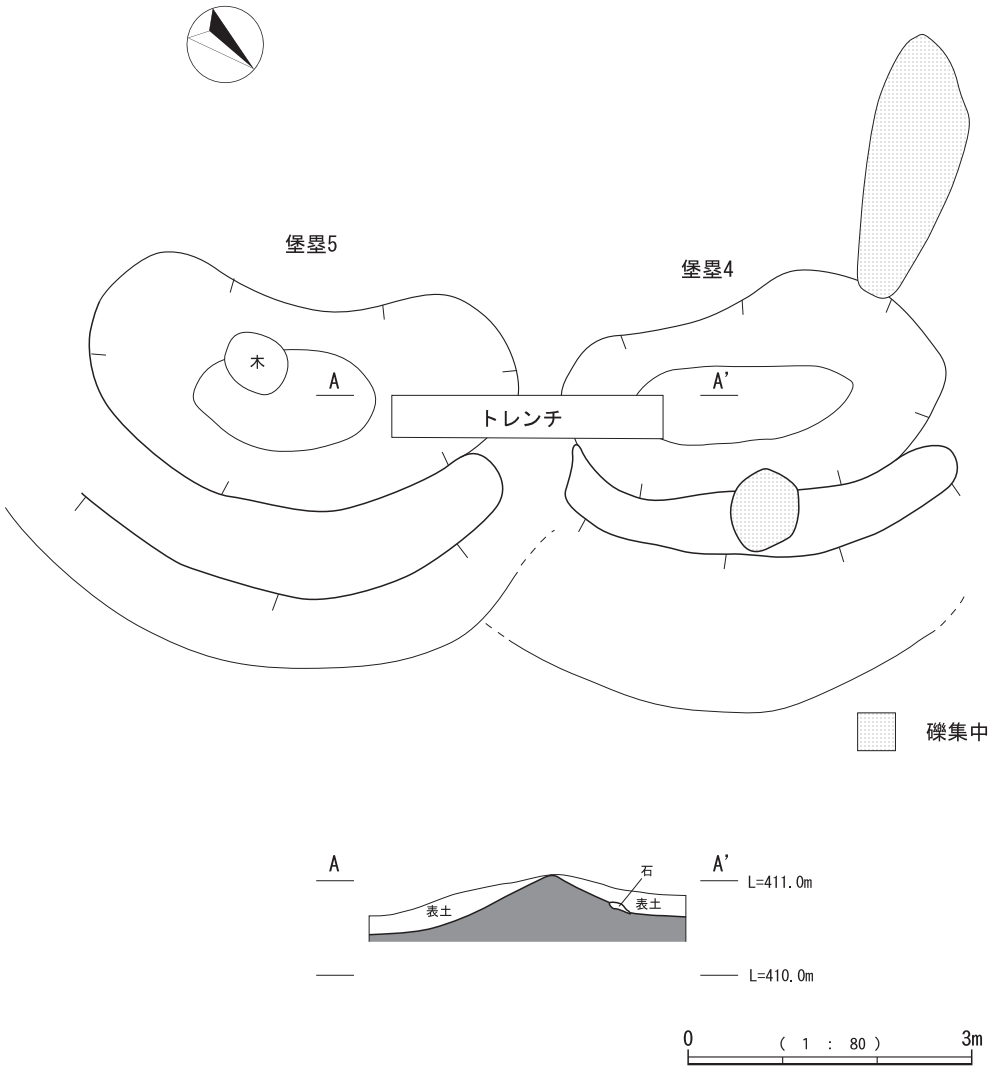
（７）堡塁７号（第 38 図）

半円形堡塁で，高熊山激戦地跡最大の堡塁である。山頂北東側に集中する６基の堡塁群の中では後方に位置しており,堡塁群及び北東斜面を意識した配置となっている。

現況計測値は，全長 1080 ㎝，最大幅 700 ㎝で，胸壁の厚さ 230 ㎝，高さ 50 ㎝である。土坑は大きな半円状で深さが 50 ㎝である。

倒木の影響で，堡塁が大きく破損した部分に，扇形状のトレンチを設定して調査を行った。

胸壁は２つの埋土からなり，１は，非常に固い褐色粘質土である。多くの輝石安山岩の礫を含む。地盤の土に近い。２は樹痕の影響のため褐色土と黒褐色土の混じりで，しまりが弱い。10 ㎝大の大きな礫を含む層である。その下は，非常に固い岩盤で，多量の輝石安山岩や巨石を含む。土坑の埋土は，表土の腐植土のみで，床面は，非常に固い岩盤で平坦面を形成している。胸壁最頂部と土坑床の高低差は，74 ㎝で深い。胸壁埋土が，地山の



第 37 図　高熊山激戦地跡　堡塁４・５号トレンチ図

色調に近く，多量の礫を含むことから，土坑を掘削した土をそのまま胸壁に利用していると考えられる。

土坑は掘削されているが，北側は掘り込みが浅く，南側は深くなっている。その比高差は約 50 ㎝である。堡塁３号・６号同様に出入り口等の可能性が考えられる。

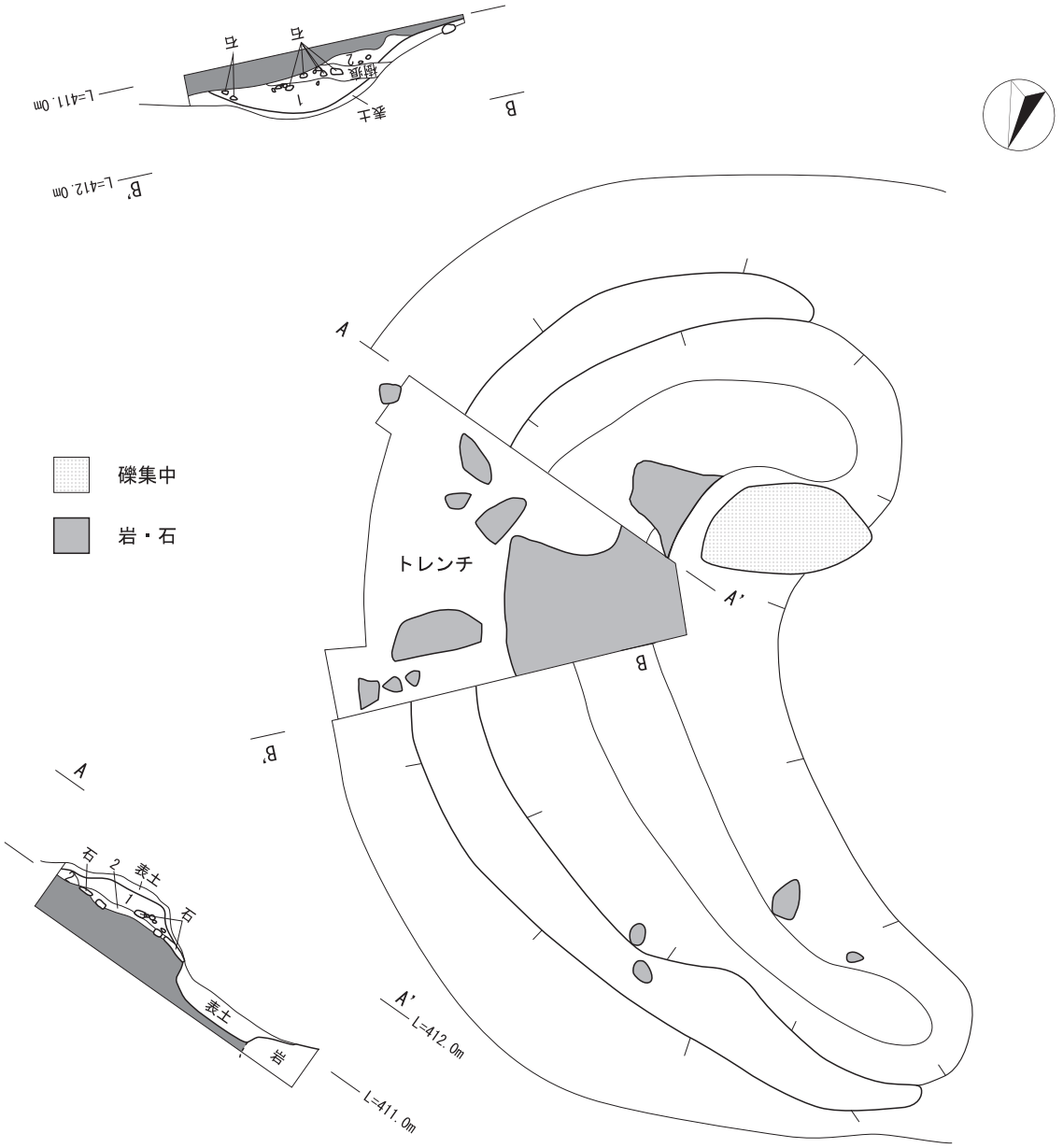
胸壁の中からは,エンフィールド銃の銃弾(第 43 図６)が出土している。弾頭が堡塁を向いており，北東から堡塁胸壁に向かって打ち込まれている。胸壁は貫通してはいない。胸壁北側からは，薬莢（第 43 図 23）が出土している。

（８）堡塁８号（第 39 図）

山頂中央部に，単独で構築されている半円形堡塁である。北西斜面を意識している。

現況計測値は，全長 800 ㎝，最大幅 486 ㎝で，胸壁の厚み 200 ㎝，高さ 160 ㎝である。

胸壁は等高線に沿って，傾斜に向かってわずかに弧を描いている。土坑は胸壁に沿うように長楕円形を呈しており，深さは 20 ㎝である。



1　褐色粘質土（10YR4/4）
　しまり強い，粘性強い，１㎝大の礫を多量に含む
2　褐色粘質土＋黒褐色土（7.5YR3/2）
　しまりが弱い，10 ㎝大の礫を多量に含む

0　（1：80）　3m

第 38 図　高熊山激戦地跡　堡塁７号実測図

胸壁には，巨石と地形の傾斜を最大限利用して，構築している。

周辺からは遺物の出土はなかった。

（９）堡塁９号（第 40 図・第 41 図）

山頂南西部に，単独で構築されている半円形堡塁である。西北西斜面を意識している。

現況計測値は，全長 664 ㎝，最大幅 624 ㎝で，胸壁の厚さ 360 ㎝，高さ 36 ㎝である。土坑深さ 36 ㎝である。

胸壁は，地形と巨石を利用して，約 120 ㎝の高低差を生み出している。そのため，西北西斜面からだと，堡塁の存在は確認できない。巨石には銃弾痕のような凹みは見られない。土坑は明らかに掘削をしている。胸壁，土坑とも北東側で地形の傾斜に沿うように構築されている。

堡塁中央部に 500 × 50 ㎝のトレンチを設定して，調査を行った。

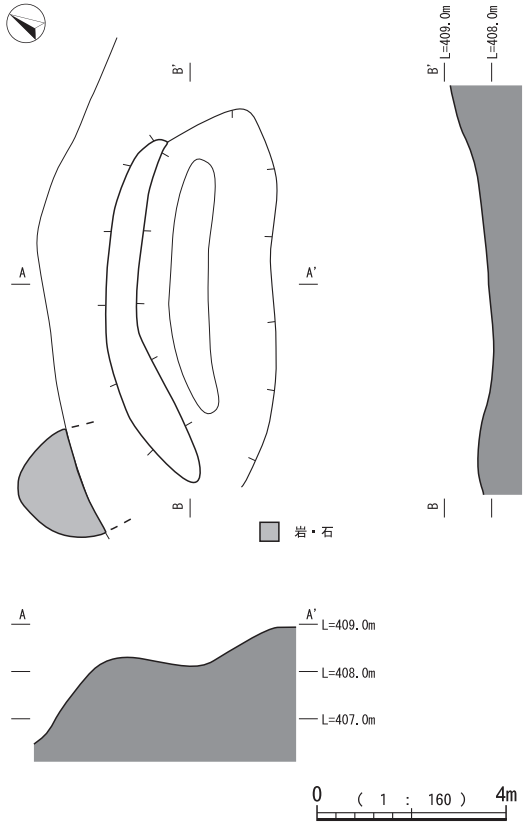
胸壁は岩に構築されており，最頂部付近では 10 ㎝大の多くの礫から構成されている。胸壁全体が礫を積み上げた構築方法となっている。土坑は 20 ㎝表土に覆われており，56 ㎝の深さとなる。

周辺から遺物の出土はなかった。

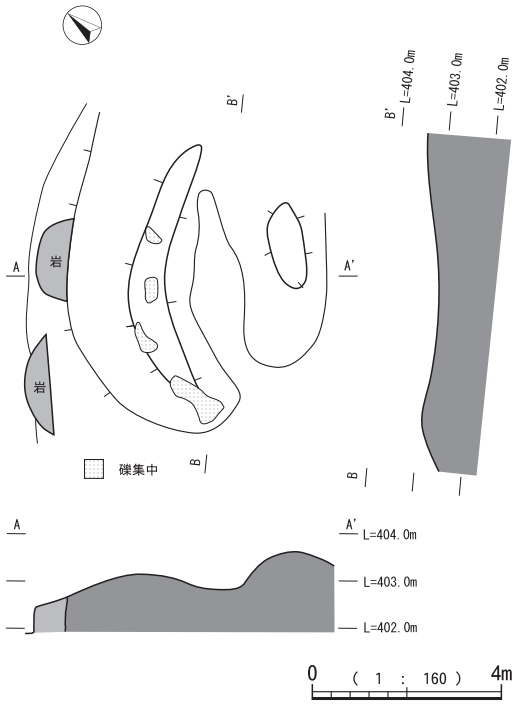
４　出土遺物について

今回の調査では，28 点の遺物が出土した。そのうち，西南戦争時の遺物として，銃弾 16 点・薬莢４点を図化している。また，時期不明であるが西南戦争時の遺物の可能性があるものとして，鉄製品４点・釦１点・古銭１点を図化している。遺物の出土は，調査対象範囲の北側～東側斜面に集中しており，西側・南側では遺物の出土はなかった。

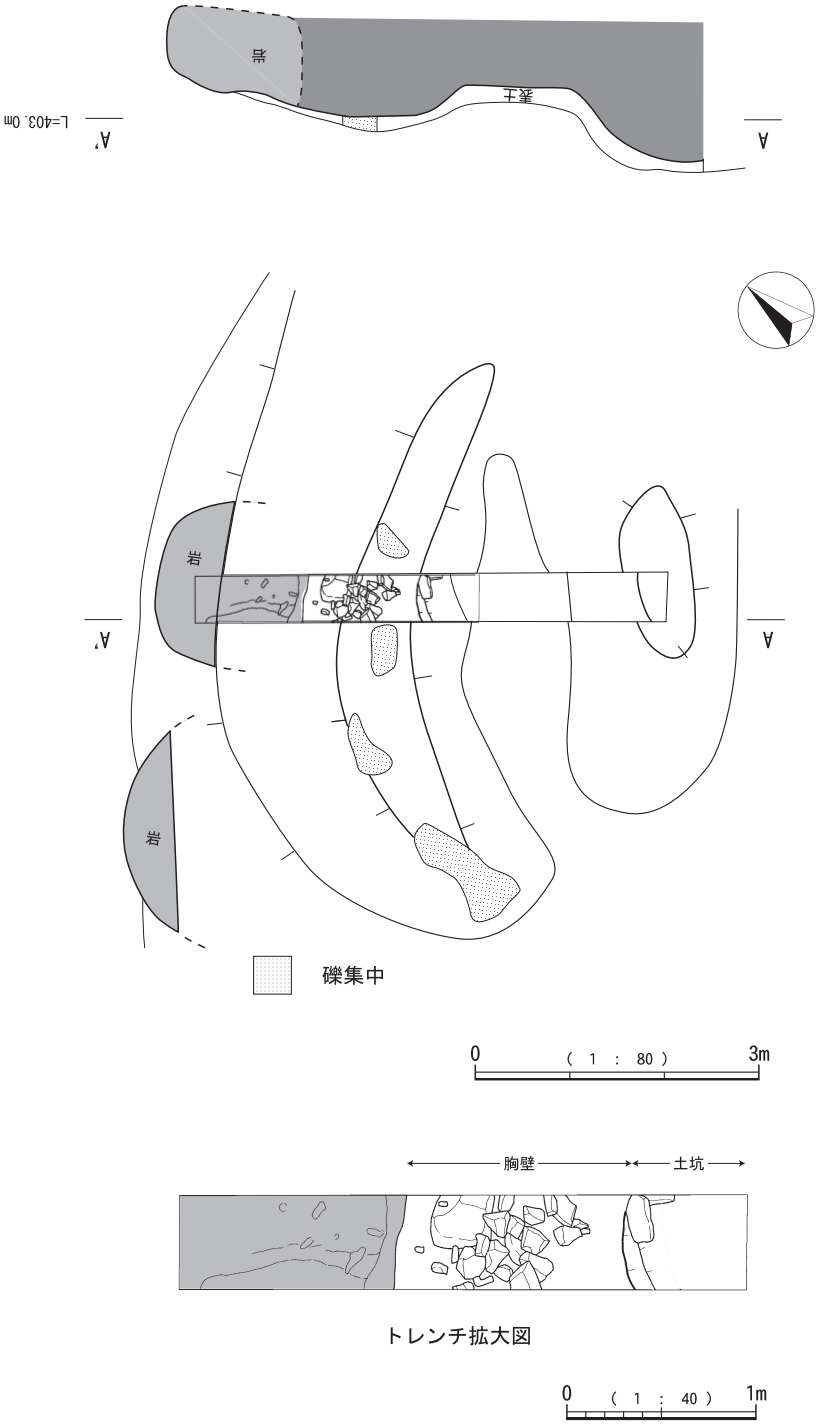
銃弾及び薬莢の部位名称及び計測箇所については，第 42 図のとおりである。



第 39 図　高熊山激戦地跡　堡塁８号実測図



第 40 図　高熊山激戦地跡　堡塁９号実測図



第 41 図　高熊山激戦地跡　堡塁９号トレンチ図

（１）銃弾（第 43 図４～19）

４から 19 は銃弾で，すべて鉛製である。

４から 10 は，前装式のエンフィールド銃に使用された銃弾である。薬莢は紙であり，使用時は紙を破って火薬を銃口に挿入し弾を込める。いずれの銃弾も，弾丸製作時のバリ痕が残り，弾底部凹断面形が台形状を呈していることから，鋳型などで鋳造されたと考えられる。

４は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り，横方向の筋状痕と発射圧のため弾底部凹に 0.5 ㎜ほどの穴が確認される。５は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り，全長が最も長い。６は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り，横方向の筋状痕が明瞭である。７は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り，横方向の筋状痕，弾頭部の剥離が見られる。弾底部側縁が変形し，外へ開いている。８は側面にバリ痕が残り，弾頭部の剥離が激しい。側面に煤状の付着物がある。９は側面及び弾頭上部にバリ痕が残り，横方向の筋状痕がある。弾底部側縁が外側に開いている。また，弾底部凹断面形が台形状であったものが，発射圧力により穴が空き，変形している。10 は側面にバリ痕が残り，横方向の筋状痕がある。弾底部凹断面形が台形状であったものが，発射圧力により内部に穴が空き，大きく変形している。

11～17 は後装式のスナイドル銃に使用された銃弾である。銃弾の周縁に４本の圏溝が刻まれるのが特徴である。雷管一体の金属薬莢と１対で，実包として使用される。

11 は弾頭部に径４㎜・深さ１㎜の凹みがあり，弾底部側縁は，発射または着弾時の衝撃で欠損している。弾底部凹断面形は台形状である。12 は弾頭部に径４㎜・深さ２㎜の凹みがあり，圏溝は鋸歯状に蛇行している。弾底部凹断面形は台形状である。13 は圏溝が鋸歯状である。弾底部側縁は外側に開き変形している。弾底部凹断面形は台形状である。14 は弾底部凹断面形が台形状であるが，他の銃弾より深い。15 は弾頭部が変形しており，弾底部側縁は内側に押し込められている。弾底部凹断面形は円柱状で他の銃弾と比べ深い。16 は発射及び着弾により，弾頭部が変形しており，弾底部は弾壁が薄くなっており，内側に変形している。圧入栓が残り，蛍光Ｘ線分析の結果，金属製（鉄と鉛）と判明している。弾頭部には横方向，弾中段からは縦方向の筋状痕が残る。17 は圏溝が鋸歯状を呈しており，圧入栓が少し外にはみ出している。圧入栓は，蛍光Ｘ線分析の結果，金属製（鉄と鉛）と判明している。弾頭に縦方向の密な線状痕が明瞭に残る。

18 はブーメラン状に大きく変形した銃弾である。内面に３本の細い溝が作られている。

19 は後装式のツンナール銃の銃弾である。弾頭及び弾底部を球状として，曲線で連結しており，ウリのような形状をしている。弾底部には径が３㎜，深さ１㎜ほどの円形の凹みがある。

（２）薬莢（第 43 図 20～23）

20～23 は，スナイドル銃の薬莢底部である。

20 と 21 は蛍光Ｘ線分析の結果，銅製である。底側に凹みと円形の溝，内側には詰め物が残り，２つの孔がある。22 と 23 は蛍光Ｘ線分析の結果，鉄製である。底側の腐食が激しい。内側には詰め物が残り，半円状の突起がある。

実包や脆弱な外表紙や真鍮製薬莢筒は出土しなかった。

（３）その他の遺物（第 44 図 24～29）

24 と 25 は鉄塊である。四斤山砲の砲弾破片の可能性がある遺物として図化した。丸みを帯びており，鉄製で腐食が激しい。

24 は大きさ 5.4 ㎝，厚み 1.6 ㎝で，断面形が弧状である。元々丸い形状で，破損した砲弾の一部と考えられる。腐食が激しく，全体的に錆が酷い。25 は大きさ 5.9 × 3.3 ㎝，厚み 1.3 ㎝で，断面形が弧状である。元々丸い形状で，破損した砲弾の一部と考えられる。表面に 1.4 ㎝の円状の凹みがある。砲弾のスタット（筍翼）を埋め込んだ箇所の可能性がある。腐食が激しく，全体的に錆が酷い。

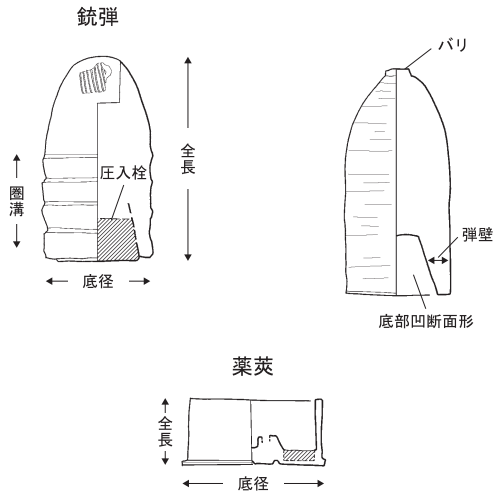
26 と 27 は堡塁６号内表土より出土した。

26 は鉄製で針金のような遺物である。

27 は鉄製で，和釘のような形状である。全長 7.4 ㎝だが，欠損しておりもう少し長い可能性がある。厚みが 0.4 ㎝で，断面形は四角に近い。

28 は銅製の釦である。Ｘ線撮影したが，文様は不明であった。軍服の釦の可能性がある。

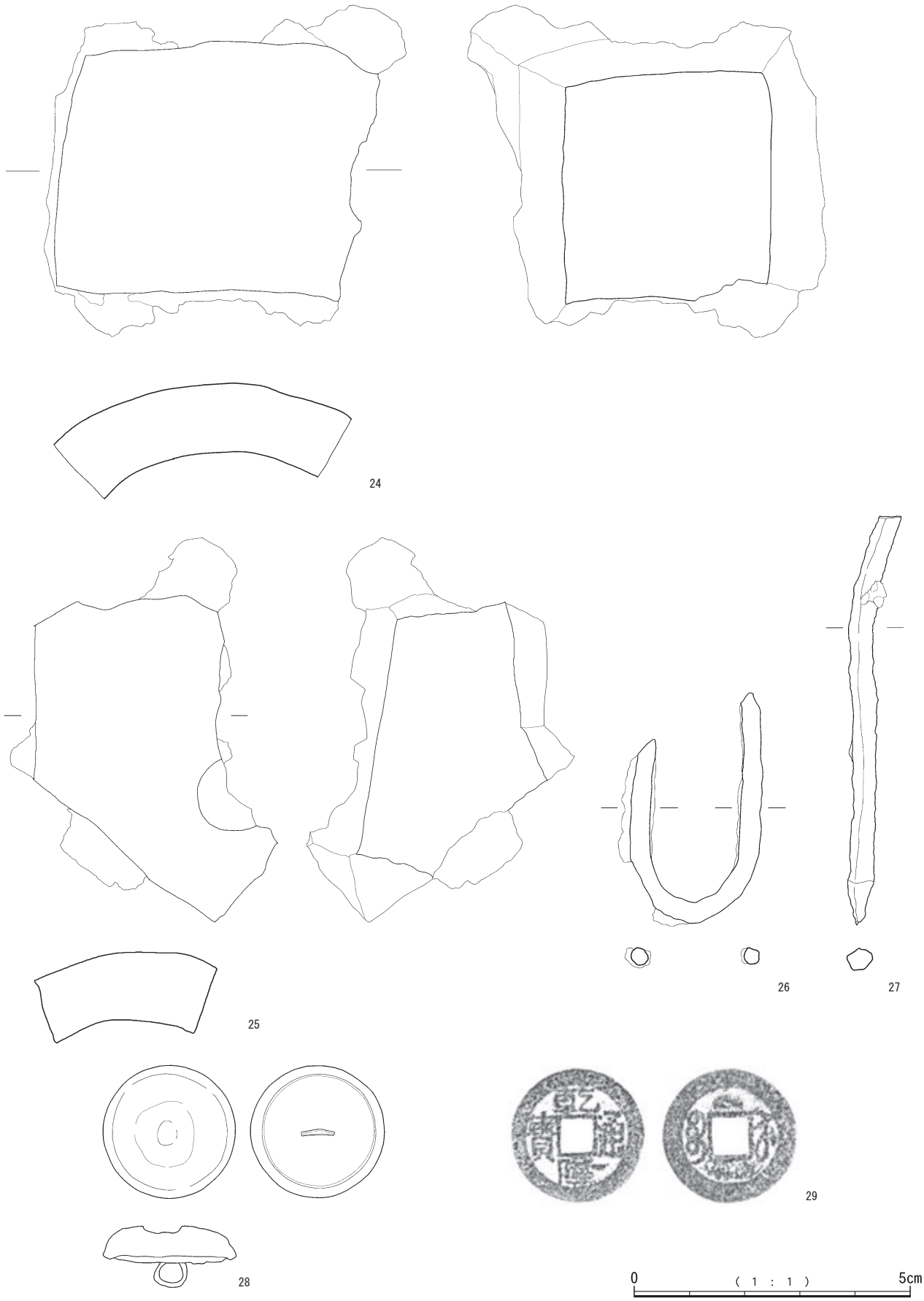
29 は乾隆通宝である。1736 年に清で鋳造されたもので，西南戦争時の遺物の可能性は少ない。高熊山山頂に祠があるので，そこに供えられた可能性がある。



バリ・・・ペンチ状の鋳型で，鋳造した時にできる継ぎ合わせた痕

第 42 図　銃弾及び薬莢部位名・計測箇所

第 43 図　高熊山激戦地跡　出土遺物（1）



第 44 図　高熊山激戦地跡　出土遺物（２）

第 10 表　高熊山激戦地跡　堡塁観察表

単位（cm）

堡塁名	分類	全長方向	全長	幅方向	最大幅	胸壁の厚さ	胸壁高さ
堡塁 1	半円形	東西	640	南北	384	128	24
堡塁 3	半円形	東西	660	南北	464	280	36
堡塁 4	半円形	北西－南東	410	北東－南西	464	236	40
堡塁 5	半円形	北西－南東	500	北東－北西	420	164	64
堡塁 6	半円形	南北	516	東西	500	328	36
堡塁 7	半円形	南北	1080	東西	700	230	50
堡塁 8	半円形	北東－南西	800	北西－南東	486	200	160
堡塁 9	半円形	北東－南西	664	北西－南東	624	360	36

単位（cm）

堡塁名	分類	長軸方向	長軸	短軸方向	短軸
堡塁 2	タコツボ形	南北	244	東西	220

第 45 図　高熊山激戦地跡　堡塁 7 号復元状況

第 11 表　高熊山激戦地跡　銃弾　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	銃弾種類	材質	法量（cm）			圏溝	弾底部断面形	バリ痕	色調	備考
							全長	底径	重量（g）					
42	4	高熊山２	2	表土	エンフィールド	鉛	2.6	1.5	27.4	－	台形	有	暗青灰（5PB4/1）灰白（5T8/1）	堡塁３号出土
42	5	高熊山 20	20	表土	エンフィールド	鉛	3.0	1.4	31.5	－	台形	有	灰白（5T8/1）	
42	6	高熊山 19	19	表土	エンフィールド	鉛	2.8	1.5	29.5	－	台形	有	灰白（5T8/1）	堡塁７号出土
42	7	高熊山 18	18	表土	エンフィールド	鉛	2.7	1.5	30.9	－	台形	有	灰白（5T8/1）	堡塁３号出土
42	8	高熊山 17	17	表土	エンフィールド	鉛	2.7	1.5	26.4	－	台形	有	灰白（5T8/1）	堡塁３号出土
42	9	高熊山 11	11	表土	エンフィールド	鉛	2.7	1.6	33.0	－	台形	有	灰白（5T8/1）	堡塁３号出土
42	10	高熊山 12	12	表土	エンフィールド	鉛	2.8	1.4	33.0	－	台形	有	暗青灰（5PB4/1）灰白（5T8/1）	堡塁３号出土
42	11	高熊山１	1	表土	スナイドル	鉛	2.6	1.5	26.9	4	台形	無	灰白（5T8/1）	
42	12	高熊山７	7	表土	スナイドル	鉛	2.7	1.5	27.6	4	台形	無	灰白（5T8/1）	
42	13	高熊山 21	21	表土	スナイドル	鉛	2.8	1.6	29.9	4	台形	無	灰白（5T8/1）	
42	14	高熊山 23	23	表土	スナイドル	鉛	2.7	1.4	29.7	4	台形	無	灰白（5T8/1）	
42	15	高熊山３	3	表土	スナイドル	鉛	2.4	1.5	29.4	（4）	円柱状	無	灰白（5T8/1）	堡塁３号出土
42	16	高熊山６	6	表土	スナイドル	鉛	2.6	1.5	28.1	4	金属製栓有	無	灰白（5T8/1）	
42	17	高熊山９	9	表土	スナイドル	鉛	2.7	1.4	28.8	4	金属製栓有	無	灰白（5T8/1）	
42	18	高熊山 24	24	表土	不明	鉛	(2.8)	(1.3)	11.0	－	不明	不明	灰白（5T8/1）	
42	19	高熊山 22	22	表土	ツンナール	鉛	2.5	最大幅 1.3 最小幅 0.7	19.9	－	－	無	灰白（5T8/1）	堡塁５号出土

第 12 表　高熊山激戦地跡　薬莢　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	銃弾種類	材質	法量（cm）			色調	備考
							全長	底径	重量（g）		
42	20	高熊山４	4	表土	スナイドル	銅	0.9	1.9	3.8	オリーブ褐色（2.5YR4/4）	堡塁４号出土
42	21	高熊山８	8	表土	スナイドル	銅	0.9	1.9	4.4	オリーブ褐色（2.5YR4/4）	
42	22	高熊山 15	15	表土	スナイドル	鉄	0.9	2.3	5.0	オリーブ褐色（2.5YR4/4）	
42	23	高熊山 16	16	表土	スナイドル	鉄	0.9	1.7	6.0	オリーブ褐色（2.5YR4/4）	堡塁７号出土

第 13 表　高熊山激戦地跡　鉄製品　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	種類	材質	法量（cm）				色調	備考
							長さ	幅	厚さ	重量（g）		
43	24	高熊山 14	14	表土	鉄塊	鉄	5.4	4.5	1.6	207.0	赤黒色（10R2/1）	砲弾破片？
43	25	高熊山 26	26	表土	鉄塊	鉄	5.9	3.3	1.3	133.7	赤黒色（10R2/1）	砲弾破片？
43	26	高熊山５	5	表土	針金	鉄	4.2	－	0.4	4.9	赤黒色（10R2/1）	堡塁６号出土
43	27	高熊山 13	13	表土	釘	鉄	7.4	－	0.4	5.9	赤黒色（10R2/1）	堡塁６号出土

第 14 表　高熊山激戦地跡　釦　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	材質	法量（cm）			色調	備考
						全長	厚さ	重量（g）		
43	28	高熊山 25	25	表土	銅	2.4	0.7	2.7	オリーブ褐色（2.5YR4/4）	

第 15 表　高熊山激戦地跡　古銭　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	層位	種類	法量（cm）				色調	備考
						全長	厚さ	孔	重量（g）		
43	29	高熊山 10	10	表土	乾隆通宝	2.5	0.1	0.6 四角	3.9	オリーブ褐色（2.5YR4/4）	

チシャケ迫堡塁跡群

第５章　チシャケ迫堡塁跡群

第１節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

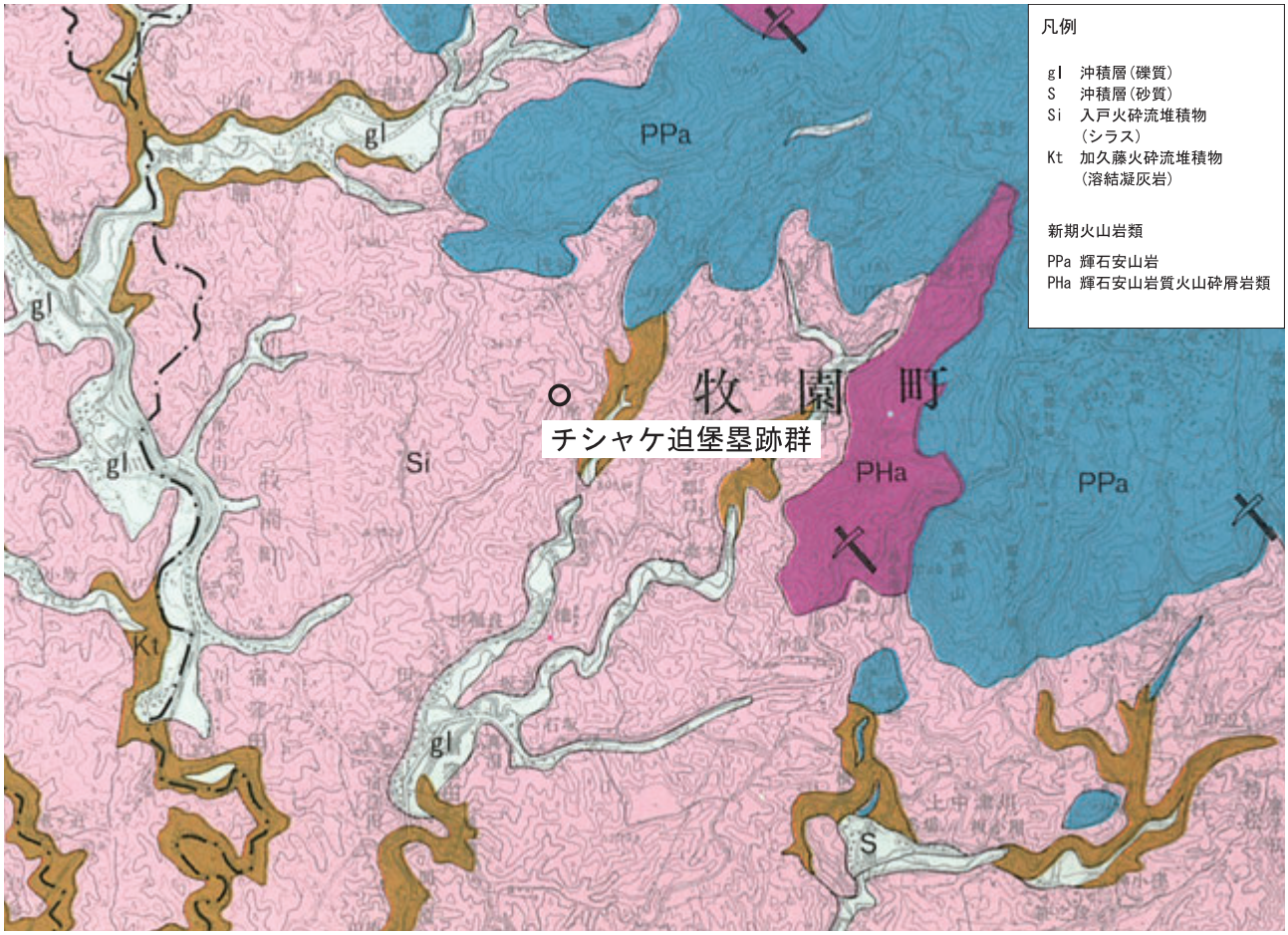
チシャケ迫堡塁跡群は霧島市牧園町三体堂字チシャケ迫（ちしゃがさこ）に所在する。

霧島市は，国分市と姶良郡溝辺町・横川町・牧園町・霧島町・隼人町・福山町の１市６町が 2005 年に合併し，誕生した。東西 30.7 ㎞，南北 37.5 ㎞，面積 603 ㎢，人口 125,302 人（令和２年７月１日）で，規模・人口とも県内２番目の自治体である。霧島市の位置は，鹿児島県のほぼ中央，大隅半島と薩摩半島の交点に位置する。西に姶良市・薩摩郡さつま町・姶良郡湧水町，北に宮崎県えびの市・小林市・都城市，東は曽於市・鹿屋市，南部は垂水市と隣接している。

自然地形は，北東部に韓国岳・御鉢・中岳に代表される複合火山である霧島連山，北西部に国見岳・烏帽子岳等の山々を有する。霧島連山は，最高峰の韓国岳（標高 1.700 m）をはじめ，天孫降臨の神話で知られる霊峰・高千穂峰など，20 数座からなる。昭和９（1934）年に日本で最初の国立公園に指定され，平成 22（2010）年には日本ジオパークに認定された。中部は火山噴出物であるシラス層の丘陵台地，南部は霧島連山などから南に流れる河川によって，東西約６㎞，南北約７㎞，面積 15 ㎢の三角州の低地である国分平野が広がる。

チシャケ迫堡塁跡群の位置する牧園町は，霧島連山の南西部に広がる。火山噴出物の重なりで構成された標高 200 ～ 600 ｍの高原状の山麓に位置している。地形は北東部が高く南西部が低い波状高地で，谷間は一般に深く切り立った急峻で複雑な様相を呈し，平坦地は極めて少ない。南西部には，天降川が中津川・石坂川・三体川・万膳川などの支流を集め南流し，南東部にも霧島川が流れ，渓谷や谷間を形成している。チシャケ迫堡塁跡群のある三体堂周辺は，入戸火砕流堆積物（シラス層）が堆積した丘陵台地で，天降川支流の三体川や石坂川によって浸食された標高 250 ～ 300 ｍの段丘を形成してる。また，その下流の牧園町宿窪田付近では，火山灰による沖積地を形成している。

チシャケ迫堡塁跡群は，市道高野線と市道浅谷線の分岐点となっており，旧来は東に延びる市道浅谷線が集落



第 46 図　チシャケ迫堡塁跡群　周辺地質分類図（鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変）

の道として使用されていたようである。遺跡の立地は，標高 296.7 mの独立した丘陵にあり，頂上から山麓にかけて急峻な地形となっている。市道までは約 30 mの高低差があり，北側から進行してくる政府軍を見張るのには，絶好の位置に面している。

２　歴史的環境

（１）周辺の遺跡

霧島市牧園町では 72 か所（令和２年８月）が「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている。チシャケ迫堡塁跡群周辺の遺跡は，鹿児島湾に注ぐ天降川水系の万膳川，三体川，中津川に沿って立地するものが多く見られるが，これらの遺跡は，採集遺物の報告が中心で，発掘調査された遺跡は少ない。以下にチシャケ迫堡塁跡群周辺の旧牧園町域を中心に，時代ごとの概要について述べる。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては，成政Ａ・Ｂ遺跡と万膳川を挟んで対岸にある宮園原遺跡で，黒曜石の尖頭器が採集されたことが報告されているだけである。

縄文時代

縄文時代に入ると遺跡数が増加し，万膳川流域左岸の丘陵端部に位置する九日田遺跡は，中期末から後期初頭の竪穴住居跡４軒，阿高式土器や，石鏃等が出土している。万膳川右岸に位置する中福良遺跡は，春日式土器や黒川式土器などの中期～晩期の遺物が出土している。牧園町東部の霧島町との堺近くの丘陵部には界子仏遺跡があり，早期の石斧の集積遺構と石坂式土器，押型文土器，平栫式土器などが出土している。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺跡としては，中福良遺跡で，刻目突帯文土器が出土しているが，中園遺跡で古墳時代の地下式横穴墓２基が発見され，玄室から鉄鏃が出土している。

古代

古代については宿窪田付近に，和気清麻呂が大隅国に流された地とする伝承があり，稲積郷や稲積の里と呼ばれていたとされ，国府（国分市）を守護する稲積城があった地とも言われている。しかし，伝承で根拠不明な部分が多く，推定の域を出ていない。この地に馬を放牧したので牧園の名が起こったとも言われている。

中世

中世の遺跡としては，台地の先端部に位置している中福良遺跡からは，掘立柱建物跡１棟が報告されている。中園遺跡からは，遺構の報告はないが，遺物として，須恵器，土師器，白磁，青磁，土製形代が出土している。

近世

近世になり，牧園一帯が「踊郷」・「踊」と呼ばれるようになる。由来は，中世に天降川近くにあった踊城によるものと言われている。調査されている遺跡としては，万膳川流域の沖積地に位置している中園遺跡から掘立柱建物跡２棟と竪穴建物跡があり，陶磁器類が出土している。掘立柱建物跡は桁行９m，梁行５mと規模が大きく，特殊な遺構である可能性が指摘されている。

３　チシャケ迫堡塁跡群概略

牧園（旧踊郷）において，政府軍と西郷軍は７月と８月の２度に渡り，戦闘を行っている。ともに西郷軍は敗退しており，当時地元では７月の西郷軍敗退を「踊の一度敗れ」，８月を「踊の二度敗れ」と呼んで残念がったと言われている。

７月の踊の戦闘での西郷軍と政府軍の戦力については，西郷軍は，辺見十郎太率いる雷撃隊が主力で，約 2,000 人で編成されたが，牧園での戦闘時には，1,000 人程度になっており，これに他の隊を加えても 2,000 人程度と推定される。少しではあるが，野砲や臼砲も備えていたようである。（手嶋 2018）

政府軍は，１個旅団が約 6,000 人で，さらに警備隊・砲隊・工兵隊・補給など，西郷軍を遙かに凌駕する戦力であった。

（１）７月の戦闘状況

６月 20 日に大口で敗退した西郷軍（辺見十郎太率いる雷撃隊・干城隊・正義隊・行進隊の一部と熊本隊，協同隊など）は，軍務所のある横川まで退却した。７月１日には，さらに横川から踊郷に軍務所を移した。このとき西郷軍は，横川方面から追ってくる政府軍（第２・３旅団）を迎撃するため，万膳の扇之迫から宿窪田の踊城址まで南北に広大な地域に堡塁を築いた。

西郷軍の踊，滞在期間は７月１日から７日までの１週間であり，政府軍の進攻前に西郷軍は大窪方面（霧島市霧島町）へ撤退しているため本格的な戦闘は行われていない。戦況は以下の通りである。

７月１日

政府軍，幸田・恒次（旧栗野町）から横川へ進撃。

西郷軍，横川から踊へ退却。西郷軍は，万膳川東岸の山々に堡塁を築いて防御。

７月２日

加治木の西郷軍，別府川を挟んで第４旅団と交戦。

７月３日

下植村の西郷軍，芦谷原へ後退。浅谷の熊本隊，政府軍と交戦。加治木の西郷軍，一部を小田越の守備に当て，主力は国分へ退却。

７月４日

第３旅団の一部，下植村・有村・落水田まで進出して堡塁を築く。芦谷原の西郷軍と交戦。

７月５日

翌日の６日に，第２旅団は踊本道と万膳方面から，第３旅団は赤水・海老ヶ迫方面から総攻撃を仕掛ける命令が出る。その後，第２旅団は小林方面へ向かうよう命令

が出たため，総攻撃は７日へ延期。第３旅団は植村の前面のススミ山（位置不明）に本陣を構え，攻撃準備。

西郷軍の辺見十郎太は国分方面の振武隊・行進隊を援護するため，踊の兵の一部を引き抜いて出陣。

７月６日

国分の西郷軍，敷根に退却。辺見，踊へ引き返す。横川方面と国分方面からの挟撃を恐れた西郷軍は深夜から７日未明にかけて大窪・田口方面に総退陣。

７月７日

第３旅団，踊へ進撃。西郷軍はすでに退却しており踊での戦闘は無し。大窪へ追撃を行った部隊が持松の笹之段で西郷軍と交戦。

（２）８月の戦闘状況

可愛岳を突破した西郷軍が鹿児島へ戻る途中の８月30日に踊で戦闘が行われている。31日未明，西郷軍は笠取峠の突破を諦め，蒲生を通って，９月１日に鹿児島へ突入した。戦況は以下の通りである。

８月30日

西郷軍（約300人），吉松を発ち溝辺方面へ向かう。横川で政府軍の迎撃を受けたため，踊へ進路変更。踊郷手前の笠取峠にて政府軍と激しい戦闘。西郷ら幹部は芦谷原の前田万萬兵衛宅(現在「南州翁宿営之趾」(第47図)の碑文が建つ）で待機。

８月31日

笠取峠の突破を諦めた西郷率いる本隊は，前田家の下方を流れる金山川を渡り，赤水から岩穴・三縄を抜け溝辺から蒲生へ向かった。笠取峠の部隊も政府軍に悟られないように本隊を追った。

（３）研究史

牧園（踊郷）での２度の戦いで築かれた多数の堡塁跡が横川・牧園一帯に多数存在していることが，霧島市文化財保護審議会委員や鹿児島県文化財保護指導委員をされている手嶋正次氏によって報告されている（手嶋2014・2018・2020)。

手嶋氏ら地元有志の調査によれば，横川・牧園一帯に現存している堡塁の数は約300基に達する。これらの堡塁は７月と８月の戦闘のものが混在しており，胸壁の方向と戦闘記録などから，西郷軍と政府軍，両軍の使用した堡塁の検討を行っている。

【引用・参考文献】

手嶋正次 2014『西南戦争の堡塁に関する調査報告書』

手嶋正次 2018『堡塁群が語る西南戦争～霧島の山々に眠る「十年の戦の跡」～』

手島正次 2020『西南戦争　牧園に残る戦いの証拠』

牧園町郷土誌編さん委員会 1991『牧園町郷土誌改訂版』

牧園町教育委員会 1989『界子仏遺跡・高天原遺跡』

牧園町教育委員会 1991『中園遺跡』

牧園町教育委員会 1995『九日田遺跡２』

JACAR（アジア歴史資料センター）「雑書明治10年７月１日～10年７月31日（防衛省防衛研究所)」
Ref.C09084597600

JACAR（アジア歴史資料センター）「戦闘景況戦闘日誌明治10年２月25日～10年９月24日（防衛省防衛研究所)」
Ref.C09084161800 Ref.C09084164200
Ref.C09084167600 Ref.C09084167900

JACAR（アジア歴史資料センター）「戦闘報告表明治10年５月18日～10年７月10日（防衛省防衛研究所)」
Ref.C09084806900 Ref.C09084807000
Ref.C09084807100 Ref.C09084807200
Ref.C09084807300 Ref.C09084807600
Ref.C09084807800 Ref.C09084807900

JACAR（アジア歴史資料センター）「電報綴５明治10年７月１日～10年７月16日（防衛省防衛研究所)」
Ref.C09080887600

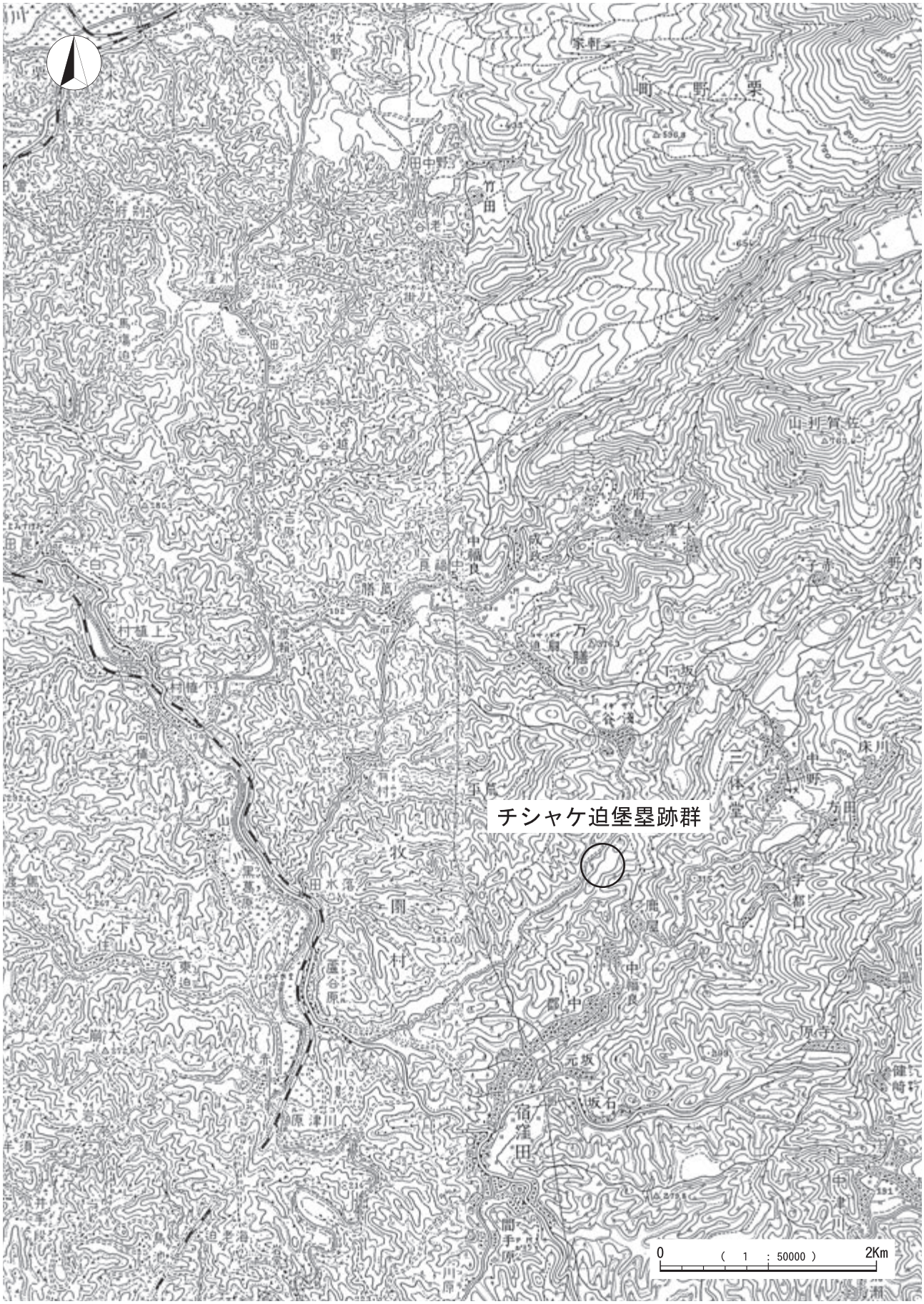
JACAR（アジア歴史資料センター）「日記イ第24号明治10年７月１日～10年９月29日（防衛省防衛研究所)」
Ref.C09085247200

第47図　西郷隆盛宿営地之趾

第 48 図　チシャケ迫堡塁跡群　周辺遺跡位置図（国土地理院 1：25,000 地形図『横川』『霧島温泉』改変）

第 16 表　チシャケ迫堡塁跡群 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
1	中福良	218	269	霧島市牧園町万膳	沖積地		●	●	●					牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）
2	成政 A	218	236	霧島市牧園町万膳成政	山地				●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
3	成政 B	218	279	霧島市牧園町万膳成政	山地				●	●				
4	九日田	218	270	霧島市牧園町万膳九日田	丘陵		●							牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)(5)
5	宮園原	218	238	霧島市牧園町万膳宮園原	台地	●			●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
6	前平	218	239	霧島市牧園町万膳前平	台地				●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
7	浅谷 A	218	241	霧島市牧園町万膳浅谷	台地				●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
8	古屋志	218	240	霧島市牧園町万膳古屋志・毛毬	台地				●	●	●	●		『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
9	浅谷 B	218	271	霧島市牧園町万膳浅谷	丘陵				●	●	●			1990 年農政分布調査
10	赤子Ⅱ	218	283	霧島市牧園町三体堂赤子	平地		●		●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
11	赤子Ⅰ	218	222	霧島市牧園町三体堂赤子	平地		●							『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報（36）
12	一本松	218	220	霧島市牧園町三体堂一本松	平地		●							『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報（36）
13	中野Ⅰ	218	219	霧島市牧園町三体堂中野	平地		●							『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報（36）
14	池ヶ谷	218	244	霧島市牧園町三体堂池ヶ谷	台地				●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
15	中野古墳	218	227	霧島市牧園町三体堂中野	平地				●					『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報（36）
16	中野Ⅱ	218	229	霧島市牧園町宇都口	台地				●					『鹿児島県市町村別遺跡地名表』県埋文報（36）
17	供養塚	218	242	霧島市牧園町万膳供養塚	台地		●		●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
18	梶の場	218	243	霧島市牧園町三体堂梶の場	台地				●					『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）
19	チシャケ迫堡塁跡群	218	533	霧島市牧園町三体堂チシャケ迫	山地								●	本報告書
20	宇都口	218	27	霧島市牧園町三体堂宇都口	台地				●					
21	井手ヶ原	218	237	霧島市牧園町三体堂			●		●					
22	音川前	218	277	霧島市牧園町音川前	台地				●					
23	ソガドン墓	218	234	霧島市牧園町三体堂堂ヶ平	山地						●			昭和 52 年 4 月 15 日指定（市指定史跡）
24	宿窪田坂元	218	230	牧園町宿窪田雀ヶ原山	山地					●				『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
25	弓張	218	245	霧島市牧園町宿窪田弓張木	丘陵				●	●	●			『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書』県埋文報（37）



第 49 図　明治 35 年　チシャケ迫堡塁跡群 周辺地形図（1:50,000・『栗野』『霧島山』改変）

第２節　調査の方法

１　発掘調査の方法

チシャケ迫堡塁跡群の調査は，第 50 図に示す調査地点を中心に（約 5,000 ㎡）を調査対象とした。なお，当該調査地は私有地だったため，土地所有者の承諾を得て，調査を行った。

現地踏査や，霧島市教育委員会との協議，高橋信武氏（日本考古学協会員）の調査方法に関する指導や手嶋正次氏の調査報告書などから，調査目的を７基の堡塁跡の精査と構造解明のためのトレンチ調査，周辺地形と堡塁配置の検討，銃弾などの遺物の検出に設定した。

遺構配置図の作成にあたっては，世界測地系による３級基準点を設置した。遺構配置図及びトレンチ位置等は，トータルステーションと平板による実測を行った。なお，基準点設置業務は委託して行い，基準点等のデータ一式は埋文センターに保管してある。

調査に際しては，まず竹や樹木の伐採，倒木や枯れ葉の除去等を行い，堡塁跡の残存状況を確認した。その後，当時の銃弾があることを想定して，調査区全体に金属探知機による調査を行い，反応のあった部分を掘り下げ，銃弾等の遺物の検出に努めた。

堡塁の調査にあたっては，まず銃弾等の発見のため，金属探知機による調査を実施した。遺構の保護を図るために，トレンチ以外の部分は，伐採や清掃のみとした。

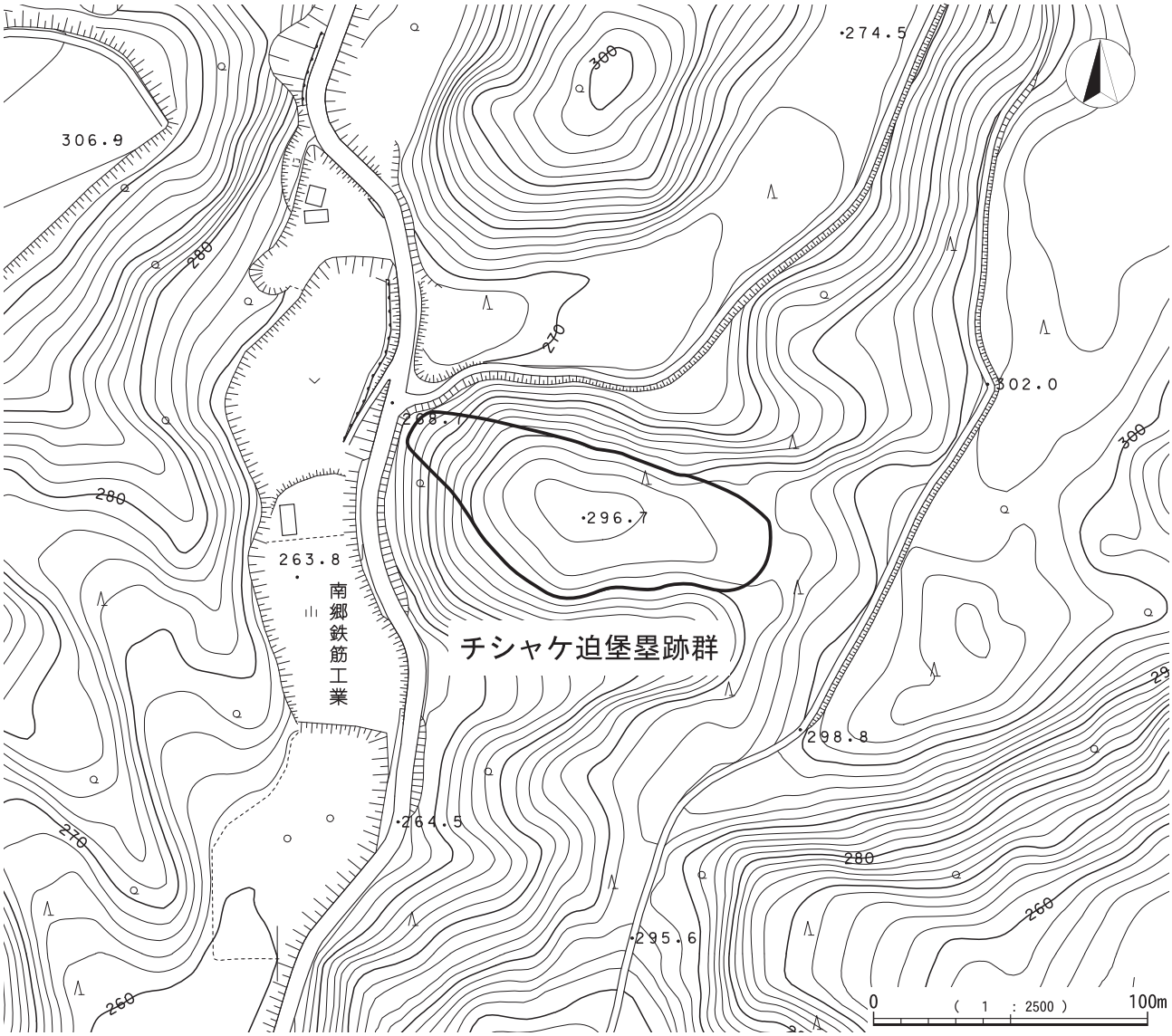
２　整理作業の方法

遺物は出土しなかったため，遺構図の整理や文献の把握・内容確認等を中心に行った。

第３節　層序及び堡塁

本遺跡の層序は，トレンチを設定した堡塁ごとで異なっている。そのため，各堡塁跡実測図で記述する。

堡塁の各部位名称及び計測箇所については，第４章第３節にある第 30 図のとおりである。なお，各堡塁平面図は表土での現況図である。



第 50 図　チシャケ迫堡塁跡群　遺跡範囲図（詳細）

第４節　チシャケ迫堡塁跡群の調査成果

堡塁の調査は，清掃を行った後，現況測量を行い，規模や特徴を調査・記録することとした。

堡塁は，地形の傾斜や凹みの可能性も含まれるものもあるため，多くの堡塁でトレンチ調査を行った。

調査区全体に金属探知機による調査を行ったが，銃弾等の遺物の出土はなかった。

堡塁の配置状況と各堡塁毎に詳述していきたい。

１　堡塁の配置について

西郷軍の陣地の１つであるチシャケ迫堡塁群は，独立した丘陵で標高約 296 ｍにある。北・南・西側は，急峻な地形をしており，容易に近づくことはできない。

丘陵には，３基の半円形堡塁と４基のタコツボ形堡塁が構築されている。各堡塁は単体で構築されているが，７基で１つの陣地を形成している。主に北側にある万膳地区から南下してくる政府軍に対峙する目的で構築された堡塁群と考えられる。

３基の半円形堡塁（堡塁１・３・４号）は，北側を警戒して構築されており，現在の市道浅谷線（標高約 268 ｍ）を見下ろす位置にある。現在は杉の植林によって，遠視ができないが，当時は薪にするなどの木材利用が活発なため，高い木々もなく，遠くまで見渡せたようである。また，比高差があり，市道からは堡塁群を確認できないため，待ち伏せには絶好の丘陵である。

４基のタコツボ形堡塁のうち３基（堡塁２・５・６号）は，南側斜面に構築されている。それぞれ半円形堡塁の中間か，後方に構築されており，相互に関係性をもっている。１基（堡塁７号）は，離れた斜面に構築されている。各堡塁の死角となる場所で，西側斜面から進攻してくる政府軍を低い位置から警戒するのには適しているが，他の堡塁と比高差約 15 ｍあり，離れ過ぎていて独立している。この１基については，調査期間の関係で，トレンチ調査を行っていない。そのため，自然地形の可能性もある。

２　堡塁の調査について

（１）堡塁１号（第 52 図）

丘陵の尾根の一番東に位置している半円形堡塁である。

現況計測値は，全長 620 ㎝，最大幅 596 ㎝で，胸壁の厚さ 340 ㎝，高さ 80 ㎝である。土坑は不定形で，一段低い土坑がもう１つあり，260 × 184 ㎝の楕円形である。深さは 20 ～ 40 ㎝である。

Ａ－Ａ’とＢ－Ｂ’に幅 50 ㎝のトレンチを設定して，堡塁の下層調査を行った。Ａ－Ａ’方向のトレンチは，胸壁を掘り下げて，構造の調査も行った。

堡塁は表土（腐植土）と堡塁廃棄後に流入した土に，胸壁で 80 ㎝，土坑で 30 ～ 50 ㎝覆われている（埋土１・２）。胸壁上層はシラスが主体で，黒褐色土が混じる構築土（埋土３）で構築されている。下層は黒褐色土（埋土４）で基礎を構築している。どちらもしまりがなく，礫や人工物などの混じりはなかった。さらに掘り下げると固い地盤であるシラスの層となる。土坑を掘り上げた土で胸壁を構築したと考えられる。

土坑と胸壁の境には，ステップ状の段がある。表土で観察された一段低い楕円形土坑は，堡塁構築面でも一段低くなっている。土坑床面は，地盤のシラスを掘り込み構築している。

堡塁北側は，杉の伐採により一部削平を受けている。

（２）堡塁２号（第 53 図）

丘陵の尾根の東に位置しているタコツボ形堡塁である。

堡塁１号と堡塁３号の中間地点にあり，北側急崖下の道からは反対に位置している。そのため，北側の道を監視することはできない。

形状は楕円形で，表土での計測値は，長軸 264 ㎝，短軸 184 ㎝，深さ 20 ㎝である。長軸は東西方向である。胸壁は伴わない構造である。

凹みが浅かったため，自然地形の可能性を考えて，Ａ－Ａ’とＢ－Ｂ’に幅 50 ㎝のトレンチを設定して，堡塁の下層調査を行った。

堡塁は表土（腐植土）と堡塁廃棄後に流入した土に，30 ㎝程度覆われている（埋土１・２）。それを取り除くと一段掘り下げた掘り込みを検出した。構築当時の深さは 40 ㎝である。形状については,表土上面と変わらない。床面は，Ａ－Ａ’に約 164 ㎝，Ｂ－Ｂ’84 ㎝の平坦面を確認した。床面は，地盤のシラスを掘り込み構築している。

（３）堡塁３号（第 54 図）

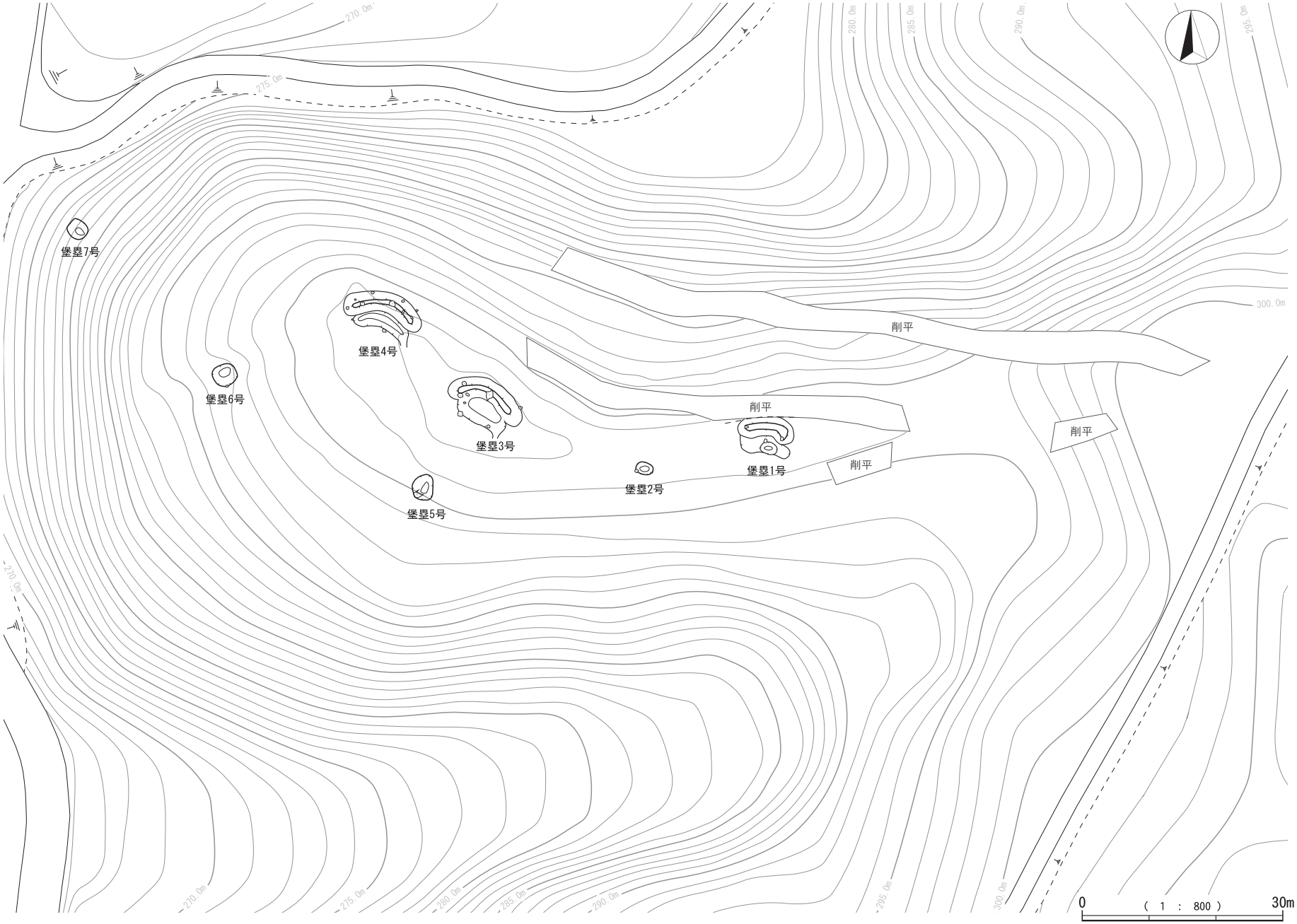
丘陵の尾根から少し開けた頂部平坦地の入口に位置している半円形堡塁である。高熊山激戦地跡とチシャケ迫堡塁跡群の堡塁の中では，最大の堡塁である。

現況計測値は，全長 1170 ㎝，幅 672 ㎝で，胸壁の厚さ 250 ㎝，高さ 72 ㎝である。土坑は他の堡塁よりも大きく，全長 800 ㎝，幅 400 ㎝，深さは 72 ㎝である。

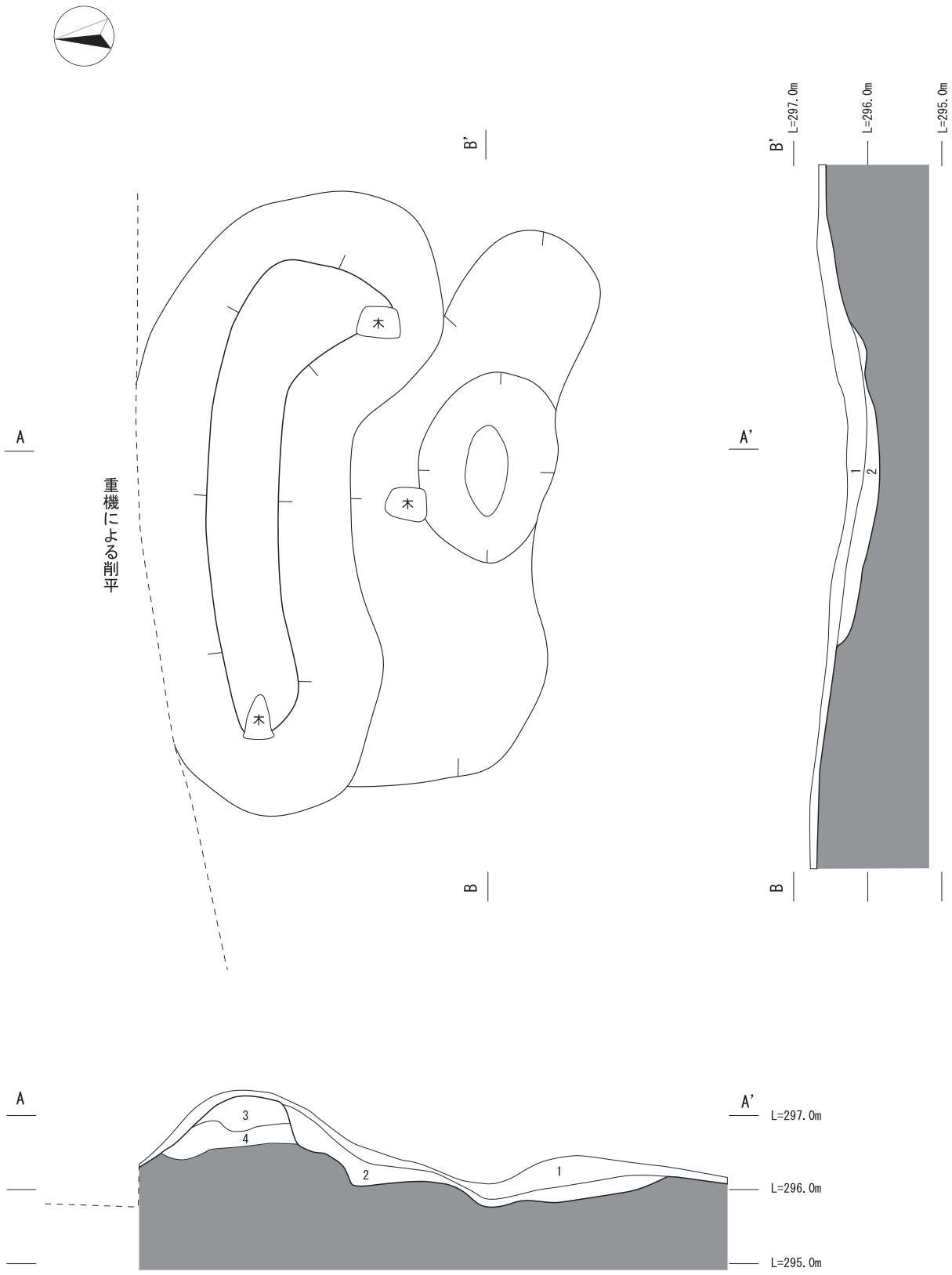
Ａ－Ａ’方向に幅 50 ㎝のトレンチを設定して，胸壁と土坑の構造調査を行った。胸壁は一部掘削を行い，構築埋土の確認を行った。

堡塁は，表土（腐植土）に覆われている（埋土１）。他の堡塁で見られた流入土は見られなかった。胸壁上層はシラスが主体で，黒褐色土が混じる構築土（埋土２）である。下層は黒褐色土で基礎を構築している。堡塁１号の埋土４と同一である。どちらもしまりがなく，礫や人工物などの混じりはなかった。堡塁構築面は，固い地盤であるシラスの面である。また，土坑を掘り上げた土で胸壁を構築したと考えられる。

土坑と胸壁の境には，ステップ状の段があることが確認できた。



第 51 図　チシャケ迫堡塁跡群　遺構配置図



1　暗褐色土（10YR2/3）　表土（腐植土）
2　暗褐色土（10YR3/4）　流入土　しまりなし
3　黄褐色土（10YR5/6）　胸壁構築土　しまりなし　シラスに黒褐色土含む
4　黒褐色土（10YR3/2）　胸壁構築土　しまりなし

第52図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁１号実測図

（４）堡塁４号（第 55 図）

丘陵の頂部平坦地の一番西に位置する半円形堡塁である。全長と最大の長さである。調査期間等の関係で，トレンチ調査は行っていない。

現況計測値は，全長 1208 ㎝，幅 550 ㎝で，胸壁の厚さ 300 ㎝，高さ 70 ㎝である。土坑は細長く，胸壁に沿っており，深さは 70 ㎝である。

胸壁表面に礫等の配置は見られないことから，堡塁１号や堡塁３号と同一の構造と推定される。

（５）堡塁５号（第 56 図）

丘陵の頂部平坦地の南側に位置するタコツボ形堡塁である。堡塁１・３・４号が展開する頂部平坦地から急な斜面に下りる際の一段下がった緩やかな斜面に位置している。　凹みが浅かったため，自然地形の可能性を考えて，Ａ－Ａ’とＢ－Ｂ’に幅 50 ㎝のトレンチを設定して，堡塁の下層調査を行った。

不定形で．現況計測値は長軸･短軸とも 360 ㎝である。深さは．，北東斜面からだと約 80 ㎝，南西斜面からだと約 10 ㎝である。

トレンチ調査の結果，北東側斜面から約 90 ㎝，南西斜面から約 40 ㎝掘り込みを検出した。床面はＡ－Ａ’に約 250 ㎝，Ｂ－Ｂ’に約 200 ㎝あり，地盤のシラスを掘り込み構築している。

表土（腐植土：埋土１）に約 30 ㎝覆われており，さらに約 20 ㎝の褐色土（埋土２）が流れ込んでいる。流れ込んだ土は，しまりのないシラスで，堡塁部分に厚く堆積している。

（６）堡塁６号（第 57 図）

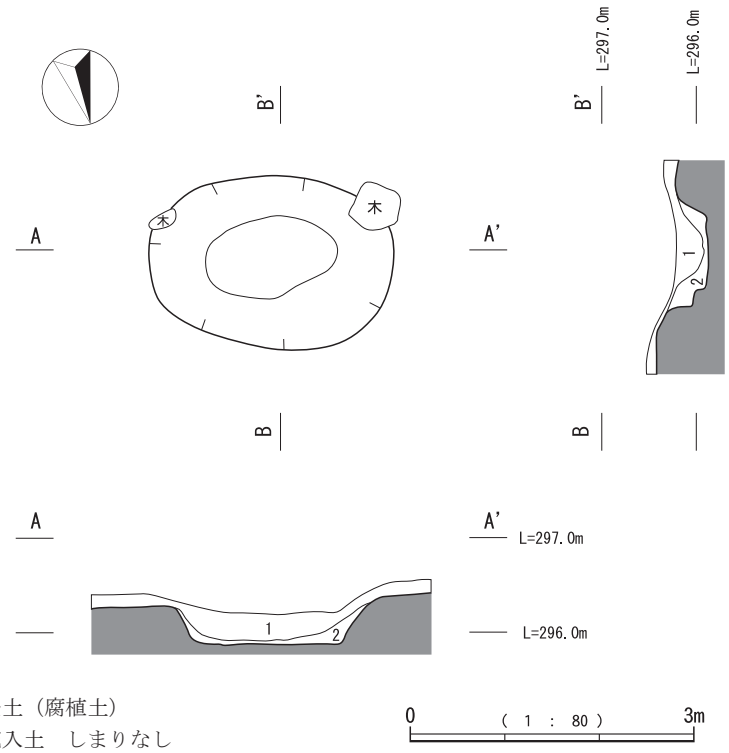
丘陵の比較的緩やかな南西斜面に位置するタコツボ形堡塁である。丘陵の頂部平坦地より，400 ㎝ほどに低い位置にあり，斜面の比較的緩やな狭い部分の平坦地に堡塁を構築している。

凹みが明瞭でなく，自然地形の可能性を考えて，Ａ－Ａ’とＢ－Ｂ’に幅 50 ㎝のトレンチを設定して，堡塁の下層調査を行った。

楕円形で，現況計測値は，長軸 354 ㎝，短軸 326 ㎝，深さは東斜面からだと約 100 ㎝，南北斜面からだと約 50 ㎝である。

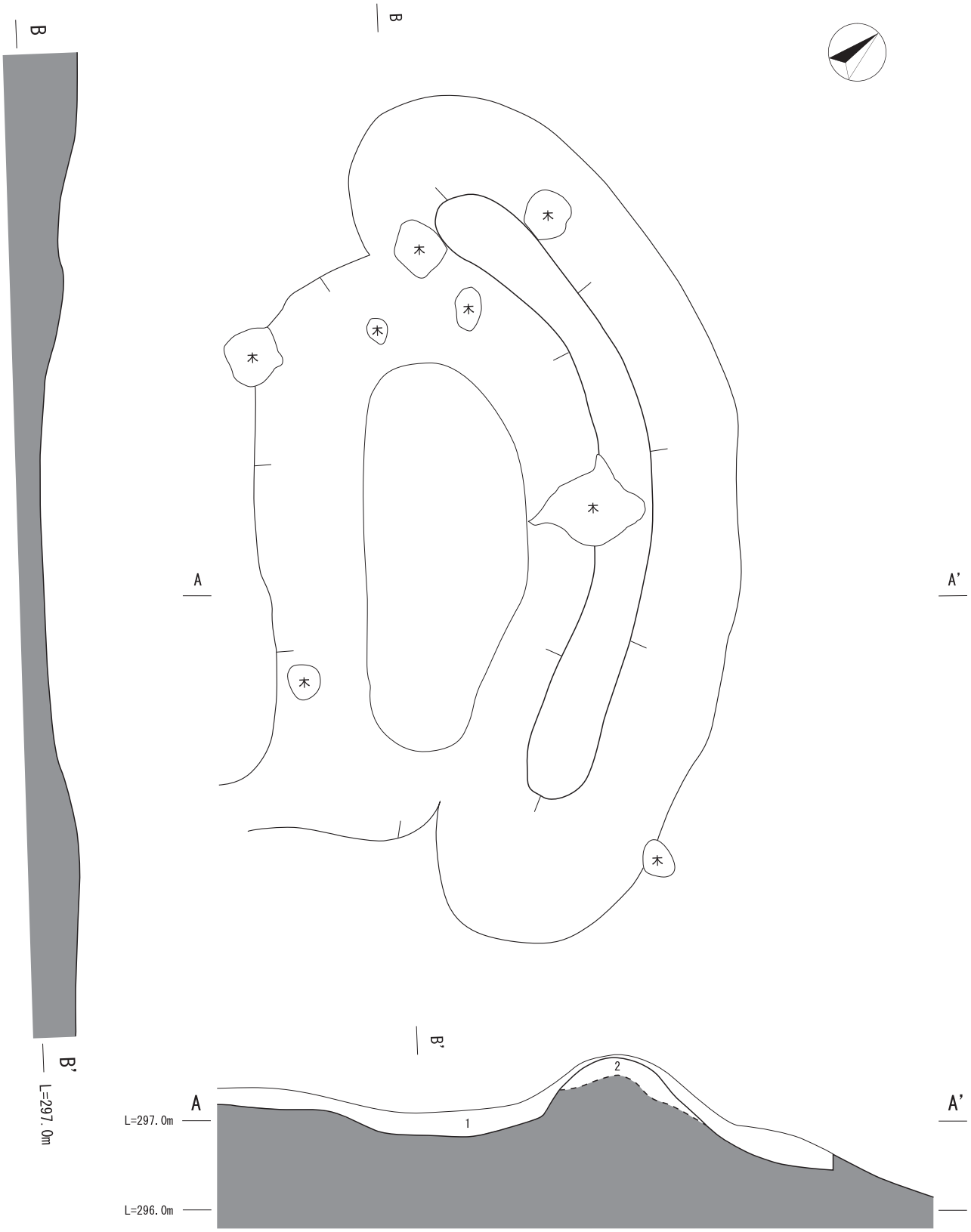
トレンチ調査の結果，南北斜面から約 70 ㎝，標高が低くなる西斜面からでも 20 ㎝地盤のシラスを掘り込んでいる。床面は東方向に緩やかに上がりながら，Ａ－Ａ’に約 150 ㎝，Ｂ－Ｂ’に約 100 ㎝の平坦面確認した。

表土（腐植土:埋土１）に覆われている。その下層は，シラスを由来とした流入した土である（埋土２・３・４）。堡塁廃棄後に周辺の地盤が崩れて流れ込んだものと推定される。



1　暗褐色土（10YR2/3）　表土（腐植土）
2　暗褐色土（10YR4/4）　流入土　しまりなし

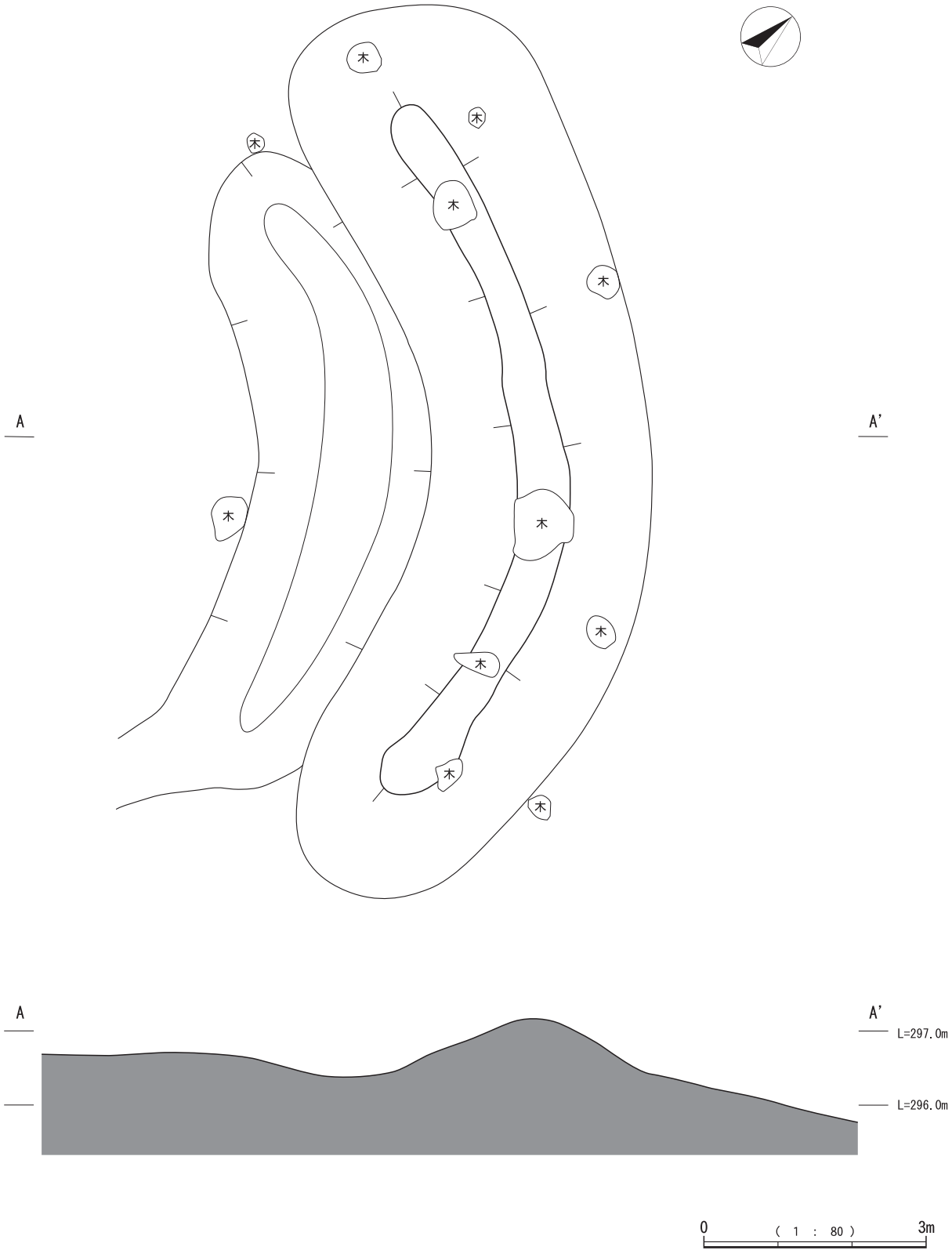
第 53 図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁２号実測図



1　暗褐色土（10YR2/3）　表土（腐植土）
2　褐色土（10YR4/4）　胸壁構築土
　しまりなし　シラスに黒褐色土含む

0　（1：80）　3m

第54図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁３号実測図



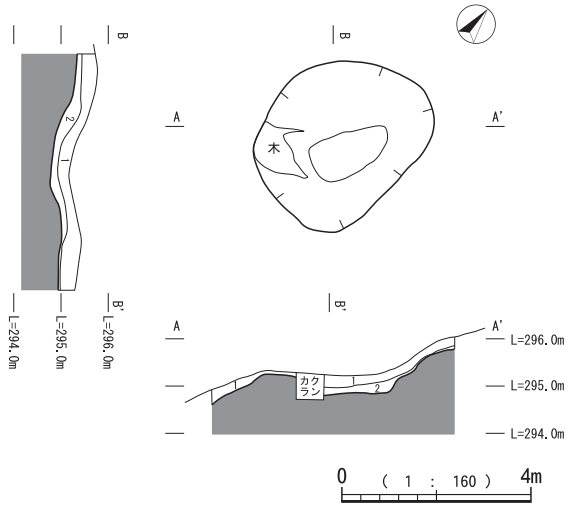
第 55 図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁４号実測図

（７）堡塁７号（第 58 図）

丘陵斜面部の踏査を行った結果，丘陵西側の急斜面にタコツボ形堡塁の可能性がある凹みを発見した。

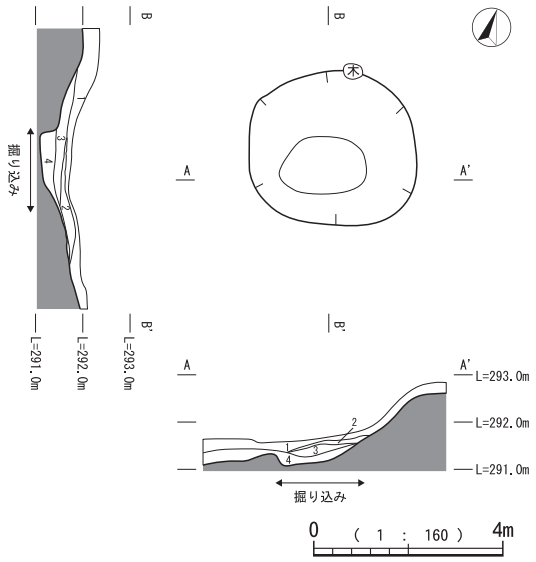
丘陵頂部から約 15 m下った斜面にあり，頂部の堡塁群からは死角となる部分に構築されている。直下には，現在の市道高野線を見ることができる位置にある。調査期間の関係で，トレンチ調査は行っていないため，自然地形の可能性もある。

楕円形で，現況計測値は，長軸 296 ㎝，短軸 275 ㎝である。深さは北西斜面からは 72 ㎝，他の斜面からだと 40 ㎝である。



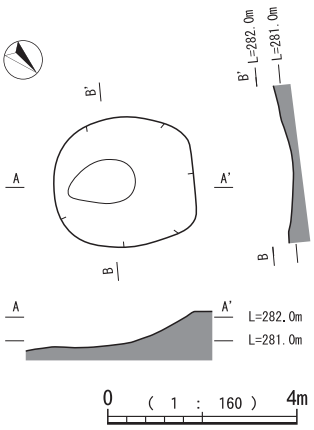
1　暗褐色土（10YR2/3）　表土（腐植土）
2　褐色土（10YR4/4）　流入土　しまりなし

第 56 図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁５号実測図



1　暗褐色土（10YR2/3）　表土（腐植土）
2　黄褐色土（10YR5/6）　流入土　しまりなし
3　明黄褐色土（10YR7/6）　流入土　しまりなし
　１～２㎜の軽石を５％含
4　褐灰色土（10YR4/1）　流入土　しまりなし

第 57 図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁６号実測図



第 58 図　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁７号実測図

第 17 表　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁観察表

単位（㎝）

堡塁名	分類	全長方向	全長	幅方向	最大幅	胸壁の厚さ	胸壁高さ
堡塁１	半円形	東西	620	南北	596	340	80
堡塁３	半円形	北西－南東	1170	北東－南西	672	250	72
堡塁４	半円形	北西－南東	1208	北東－南西	550	300	70

単位（㎝）

堡塁名	分類	長軸方向	長軸	短軸方向	短軸
堡塁２	タコツボ形	東西	264	南北	184
堡塁５	タコツボ形	北東-南西	360	北西-南東	360
堡塁６	タコツボ形	東西	354	南北	326
堡塁７	タコツボ形	北西－南東	296	北東－南西	275

岩川官軍墓地

第６章　岩川官軍墓地と関連遺跡（薩軍の墓）

第１節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

岩川官軍墓地は，曽於市大隅町岩川に所在する。

曽於市は，鹿児島県の東部，大隅半島の北部に位置し，東側で宮崎県都城市，南側で志布志市・曽於郡大崎町，南西側で鹿屋市，北西側で霧島市の４市１町と接している。市の面積は 390.14 ㎡で，鹿児島県の総面積の 4.3％を占めている。平成 17（2005）年に財部町・末吉町・大隅町が合併し，曽於市となった。

曽於市のうち大隅町の地形は，東西に狭長で北部高地に端を発する前川，後川，月野川の３つの川がそれぞれ町内の東部，中部の波状型の凹地を随所に貫流して，東南に向かい，志布志湾に注ぐ菱田川に合流する。

岩川官軍墓地が所在する岩川地区は，曽於市の南部にあたり，西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高 200 m～ 300 mの丘陵性台地が卓越する地域である。さらに，この丘陵性台地は，大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受け，小台地群に分断されている。

２　歴史的環境

埋蔵文化財包蔵地は，大隅町が 267 か所，財部町が 126 か所，末吉町が 187 か所（令和２年８月）と数多く周知されている，

曽於市大隅町における発掘調査は，昭和 31（1956）年に同志社大学の酒詰仲男博士が行った上八合遺跡の調査が最初で，縄文時代の遺物が出土したといわれている。その後，本格的な発掘調査は長く行われなかったが，平成４（1992）年から大隅町教育委員会によって，農業基盤整備等に伴い本格的な発掘調査が行われ，数多くの貴重な資料が出土している。平成 11（1999）年には鹿児島県教育委員会によって，県道改良事業に伴う出水平遺跡や，その後の東九州自動車道建設に伴う定塚遺跡など多くの大規模な発掘調査が始まり，歴史的環境の様相が次第に明らかとなりつつある。以下に，曽於市全域の時代ごとの概要について述べる。

旧石器時代

耳取遺跡・桐木遺跡・桐木Ｂ遺跡・関山遺跡・建山遺跡・定塚遺跡等で多くの遺構・遺物が発見されている。耳取・桐木遺跡では，ナイフ形石器文化期から細石刃文化期に到る礫群や石器製作跡等の遺構が多く検出され，ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・細石核・細石刃等の遺物が多く出土している。特筆すべきは，耳取遺跡で日本最古の石偶（耳取ヴィーナス）が出土していることである。この耳取ヴィーナスを含む 203 点が，平成 19（2007）年に県の有形文化財（考古資料）として指定されている。建山遺跡では２時期のナイフ形石器文化期と細石刃文化期の存在が確認され，細石刃文化期に西北九州からの移動もしくは交流を裏付ける資料や細石刃の線状痕の観察から細石刃の機能，使用方法について再考を促す資料等が出土している。

縄文時代

草創期では数は少ないが，桐木遺跡で集石遺構が検出され，隆起線文土器や石鏃が出土している。

早期では，定塚遺跡で竪穴状遺構 97 基をはじめ，集石遺構や連穴土坑等多くの遺構が検出され，草創期と早期前葉をつなぐ時期の集落として貴重な遺跡である。関山遺跡では，地形に沿って計画的に配置されていたことがうかがえる 19 基の落とし穴群が検出されている。また，赤色顔料が詰まった変形撚糸文土器が，入れ子状で出土している。

前期では，定塚遺跡や稲村遺跡で轟式土器が出土している。中期では桐木遺跡で船元式土器や在地の尖底条痕文土器群・石鏃・石匙が多く出土し，関山遺跡・唐尾遺跡・高古塚遺跡などの遺跡で落とし穴が，小倉前遺跡・チシャノ木遺跡では土坑が検出されている。

後期の遺跡はそれほど多くないが，丸尾遺跡は丸尾式土器の標式遺跡である。また，中岳洞穴は後期後葉の中岳式の標式遺跡として有名である。

晩期の遺跡は各地にあるが，桐木遺跡で入佐式・黒川式土器に伴う５軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑が，唐尾遺跡で黒川式土器に伴う１軒の竪穴住居跡が検出されている。遺物としては，上中段遺跡で夜臼式土器の土器に丹塗り壺や籾痕土器などが含まれ，この時期の稲作の可能性を示す遺跡として注目されている。また，楠木岡遺跡では，日常品の鉢形土器が縄文時代晩期，壺形土器が弥生時代の形態を導入するという状況が見られ，注目されている。

弥生時代・古墳時代

弥生時代・古墳時代の遺跡は少なく，関山西遺跡・打込遺跡・吹切段Ⅱ遺跡などが挙げられるが，詳細は不明である。

古代

高篠遺跡・踊場遺跡といった都城盆地に近い遺跡で掘立柱建物跡などが検出されている。中尾立遺跡・唐尾遺跡・建山遺跡・狩俣遺跡・高古塚遺跡などで掘立柱建物跡や焼土跡などが検出され，墨書土器も出土している。上中段遺跡では墨書土器や焼塩土器などとともに，鞴の羽口や鉄滓・鉄製品など製鉄関係の遺物が多く出ている。

中世・近世

恒吉城は中世の山城跡で，築城年は不明である。大きく３つの城から成り，日輪城，東高城，西高城と呼ばれ，その総称が恒吉城である。城内には，曲輪，土塁，空堀，

虎口，畝状竪堀群が良好な状態で残存しており，戦国期末期の南九州型と呼ばれる群郭型の城郭の姿を色濃く残している。旧大隅町の時から，保存整備事業を行っており，周辺の麓や御仮屋跡推定地などの調査も行っている。また，曽於市内には龍虎城跡，末吉城跡も残り，平行して調査・研究が行われている。その他では，桐木遺跡・建山遺跡で中近世の道跡が，狩俣遺跡で中世の畠跡や溝状遺構が検出されている。

３　岩川官軍墓地及び薩軍の墓　概略

曽於市と西南戦争

大隅半島では，明治 10（1877）年６月末から７月 24 日に都城が陥落するまでに，西郷軍と政府軍の間で，激しい戦いが繰り広げられている。

西郷軍（中島健彦，貴島清率いる振武隊が中心）は，恒吉（曽於市大隅町）を拠点に，７月８日に百引と市成（現:鹿屋市輝北町）の境で，政府軍との激戦に勝利した。西郷軍は，７月 10 日に月野（曽於市大隅町）に進出してきた政府軍を撃退したが，11 日には野方荒佐野（大崎町）付近の戦闘で敗退している。なお，７月８日から 11 日にかけて，西郷軍の戦死者 15 名は恒吉に仮埋葬したと言われている。７月 12 日には大崎で戦闘があり，西郷軍は勝利したが，13 日頃から末吉方面へ退去を始めている。

政府軍は７月 18 日から 19 日にかけ，大挙して財部に進入し，７月 22 日に財部・通山（曽於市財部町）・岩川へ進出する。これに対して，西郷軍は７月 23 日に笠木（曽於市大隅町）・岩川麓の政府軍を攻撃するが，末吉へ退いている。政府軍は，７月 24 日岩川麓・末吉麓や通山方面へ追撃を行い，西郷軍（振武隊）は破れ，都城へ入っている。その都城では，西郷軍は抵抗する力も無くすぐに放棄している。

一連の戦闘により，地元住民は西郷軍あるいは政府軍への物資の調達や動員等に苦慮していたようである。

岩川官軍墓地

岩川官軍墓地は，「大隅弥五郎伝説の里」の北側にある岩川・馬場集落墓地内に位置している。現在 79 基の墓石があるが，昭和８（1933）年の略配置図（第 67 図）によると，86 基余りの墓石が記録されている。なお，墓石の石材は熊本県天草の下浦石（砂岩製）で，熊本県の官軍墓地をはじめ，多くの官軍墓地で使用される石材である。

昭和 42（1967）年７月には，斜面が崩れ，土砂が流れ込む等した。そこで，地元商工会議所が中心となり，墓石周辺が掘り出され，墓地の周囲にブロック塀を巡らし，入口もコンクリートで固め，献灯も２つ設けられた。

当地に葬られている兵士は，主に百引・大崎・岩川で戦死した者や，都城の病院で病死した者と刻字されており，特に激戦であった百引での戦死者が多い。一番位の高い人物は，陸軍大尉の山形照方，次に少尉の奥田政実，少尉補の林為隆，以下軍曹，伍長，兵卒，馭卒，軍夫と続いている。戦死者の出身地は，仙台，東京，名古屋，大阪，広島の各鎮台から派遣されているので，全国各地に及んでいる。また，以前は犬の墓もあったと伝承されている（大隅町誌編纂委員会 1990）。

『大隅町誌』によると，埋葬までの流れは，まず大崎假宿，野方荒佐野，百引の激戦地から死体を運び，いったん現在の墓地北側の空き地あたりに大きな穴を掘り，そこに仮埋葬した。その後に，官軍墓地の造営に合わせて，現在の場所に移したようである。埋葬形態については，火葬と土葬の両方の記録が残る。

なお，現地踏査や，曽於市教育委員会，『大隅町誌』，馬場墓地管理者への聞き取りなどから，昭和８年頃から昭和 42 年までの間に，官軍墓地のある馬場墓地の整備を度々行っていることが判明した。最近では平成 25 年に，縁石の整備と破損した墓石の接合を行っている。

薩軍の墓

岩川官軍墓地から菱田川を挟み，東に 1.5 ㎞ほどの曽於市末吉町岩崎の台地先端部に，ひっそりと１基だけ薩軍の墓が所在している。マウンド状の塚の上に自然石が建ててあるだけで刻字はない。７月下旬の岩崎周辺の戦闘で戦死した西郷軍の兵士が葬られたと言われているが，史料もなく，実際に誰が葬られたのかは不明である。

その他，曽於市では，約１か月に渡り，戦闘が行われたため，大隅町坂元の皆越台場跡（第 59 図）など，西南戦争関連の古戦場跡や史跡・史料など数多く残っている。

【引用・参考文献】

大隅町誌編纂委員会（編）　1990『大隅町誌』（改訂版）

末吉町郷土史編纂委員会（編）　1987『末吉郷土史』（第３版）

曽於市教育委員会　2017 「曽於市内の西南戦争関連の文化財・史跡について」『岩川官軍墓地・薩軍の墓慰霊祭資料』

曽於市教育委員会 『曽於市の幕末・明治維新・西南戦争関連史跡ガイドマップ』

鹿児島県埋蔵文化財センター　2009『定塚遺跡・稲村遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）

第 59 図　皆越台場跡（曽於市大隅町坂元）

第 60 図　岩川官軍墓地　周辺遺跡位置図（国土地理院 1 ：25,000『岩川』『末吉』『大隅松山』『野方』改変）

第 18 表　岩川官軍墓地　周辺遺跡地名表（１）

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
1	般久保	217	226	曽於市大隅町笠木	台地		●							大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）
2	境ヶ尾	217	577	曽於市大隅町中之内境ヶ尾	—		●							
3	三反ヶ丸	217	209	曽於市大隅町中之内三反ケ丸	丘陵					●				
4	岩北城跡	217	533	曽於市末吉町岩北内堀	台地						●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
5	土成城跡	217	172	曽於市大隅町中之内土成屋敷	丘陵						●	●		『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
6	片水段	217	149	曽於市大隅町中之内片水段	丘陵		●			●	●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43） 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（44）
7	郷田Ⅰ	217	120	曽於市大隅町中之内郷田	丘陵		●	●		●				
8	段	217	3	曽於市大隅町岩川小豆穴・段・赤称迫	台地		●			●	●	●		『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』県埋文報（29）
9	上松田	217	150	曽於市大隅町中之内上松田	平地		●			●	●	●		
10	城ヶ迫	217	80	曽於市大隅町中之内	丘陵		●							
11	新城城跡	217	170	曽於市大隅町中之内城之山・城迫	丘陵					●	●	●		
12	迫田	217	78	曽於市大隅町中之内迫田	丘陵		●							
13	中迫Ⅰ	217	158	曽於市大隅町岩川中迫	丘陵					●	●	●		
14	中迫Ⅱ	217	45	曽於市大隅町岩川中迫	丘陵		●			●	●	●		大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（39）
15	池ノ段	217	64	曽於市大隅町岩川池ノ段	丘陵		●							
16	所迫	217	46	曽於市大隅町岩川所迫	丘陵		●							『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』 県埋文報（29）
17	竹下谷	217	53	曽於市大隅町岩川竹下谷	丘陵		●							
18	上河原	217	159	曽於市大隅町岩川上河原	丘陵		●			●				
19	諏訪迫	217	5	曽於市大隅町岩川諏訪迫	丘陵		●							
20	水喰谷	217	6	曽於市大隅町岩川水喰谷	丘陵		●							『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』県埋文報（29）
21	西之園	217	134	曽於市大隅町岩川西之園	丘陵		●		●	●	●			大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（29）
22	馬場城跡	217	169	曽於市大隅町岩川上馬場	丘陵						●	●		
23	元屋敷	217	151	曽於市大隅町中之内元屋敷	平地	●	●			●	●	●		大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）（39）
24	中馬場通	217	126	曽於市大隅町岩川中馬場	丘陵			●		●	●	●		『大隅地区埋蔵文化材分布調査概報』 県埋文報（29）
25	岩川官軍墓地	—	—	曽於市大隅町岩川	傾斜地								●	本報告書
26	西南の役薩軍の墓	—	—	曽於市末吉町岩崎	丘陵								●	本報告書
27	鳴神	217	105	曽於市岩川鳴神	台地		●			●	●	●		大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）（３）（４） 曽於市埋蔵文化財発掘調査報告書（７）
28	三才掘	217	235	曽於市大隅町岩川八合原	台地		●							

第 19 表　岩川官軍墓地　周辺遺跡地名表（２）

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	備考
29	西大久保	217	217	曽於市大隅町月野西大久保	台地				●					
30	渡ケ迫平	217	220	曽於市大隅町岩川	丘陵		●							
31	東馬場	217	32	曽於市大隅町岩川野首・下川路	台地		●			●	●	●		大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）
32	チシャノ木	217	258	曽於市大隅町岩川チシャノ木	台地	●	●			●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）
33	別府	217	7	曽於市大隅町岩川別府	丘陵		●	●						
34	山下口	217	104	曽於市大隅町月野山下口	台地		●				●			
35	竹山Ⅰ	217	66	曽於市大隅町月野中大久保・十文字	台地		●	●						
36	竹山Ⅱ	217	128	曽於市大隅町月野梶畑	台地			●						
37	境木	217	106	曽於市大隅町月野境木	台地		●			●				
38	稲葉崎	217	47	曽於市大隅町月野稲葉崎	台地		●			●	●	●		
39	八合原	217	33	曽於市大隅町月野八合原	台地		●			●	●	●		
40	上八台	217	108	曽於市大隅町月野上八合	台地		●			●				
41	柴立	217	238	曽於市大隅町月野八合原	台地		●							
42	山段	217	107	曽於市大隅町月野山段	台地		●							
43	上長迫	217	215	曽於市大隅町月野	台地		●							
44	馬ノ瀬平	217	207	曽於市大隅町月野	台地		●							
45	堀込	217	208	曽於市大隅町月野	台地		●							
46	岡元城跡	217	196	曽於市大隅町月野岡元	丘陵						●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
47	飯田Ⅲ	217	65	曽於市大隅町岩川大迫	丘陵		●							
48	飯田城跡	217	195	曽於市大隅町岩川宮田他	丘陵						●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
49	深田	217	84	曽於市大隅町岩川深田・門田	丘陵		●							
50	平木	217	81	曽於市大隅町月野平木	丘陵		●							
51	笹段	217	163	曽於市大隅町月野笹段	丘陵					●	●	●		
52	松尾田城跡	217	197	曽於市大隅町月野野首	丘陵						●			『鹿児島県の中世城館跡』県埋文報（43）
53	坂之上	217	73	曽於市大隅町月野坂之上	台地		●							
54	出水平	217	218	曽於市大隅町月野出水平	台地		●							

第２節　調査の方法

１　発掘調査の方法

岩川官軍墓地の調査は，曽於市が管理している第63図に示す官軍墓地全体（約200㎡）を調査対象とした。文献調査の成果等をもとに，現在の配置と階級ごとの墓石の実測，トレンチ調査を行い，官軍墓地形造営時の整備面を確認すること，他に墓石が埋没していないかを調査することを目的とした。併せて，埋葬方法の調査も行うこととした。なお，薩軍の墓については，現在私有地であるため，土地所有者の許可を得て，墓石の配置と墓石の実測，写真撮影を行った。

遺構配置図や地形測量の方法は，下記のとおりである。まず，樹木の剪定や草刈りを行い，墓石を洗浄して，墓全体が観察しやすいようにした。並行して，曽於市教育委員会から提供された地図や基準点座標等を利用して，レベル移動を行った。なお，遺構配置図等は主に平板で，地形測量はトータルステーションで測量を行った。

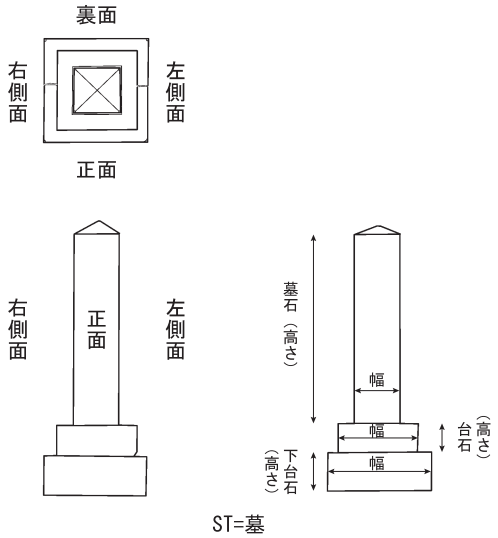
発掘調査の方法は，下記のとおりである。岩川官軍墓地では，墓石の洗浄後，５つの墓石の実測と正面の拓本を行った。その後，トレンチを３か所設定し，人力によって掘削を行った。官軍墓地造営時に関する層と後世の造成による層との判別を行い，さらに地山又は遺構と考えられるプランを検出した層まで掘削を行った。遺物は，古銭が３点出土したが，全て後世による造成の層からの出土であったため，一括で取り上げた。調査終了後は，すべてのトレンチの埋め戻しを行った。

薩軍の墓は，掘削を伴う調査は行っていない。

２　整理作業の方法

遺構図等の整理を行い，遺物は，古銭のみの出土のため，クリーニングを行った後に，拓本を行った。

３　墓石部位名称



第61図　墓石部位名称及び計測箇所

第３節　層序

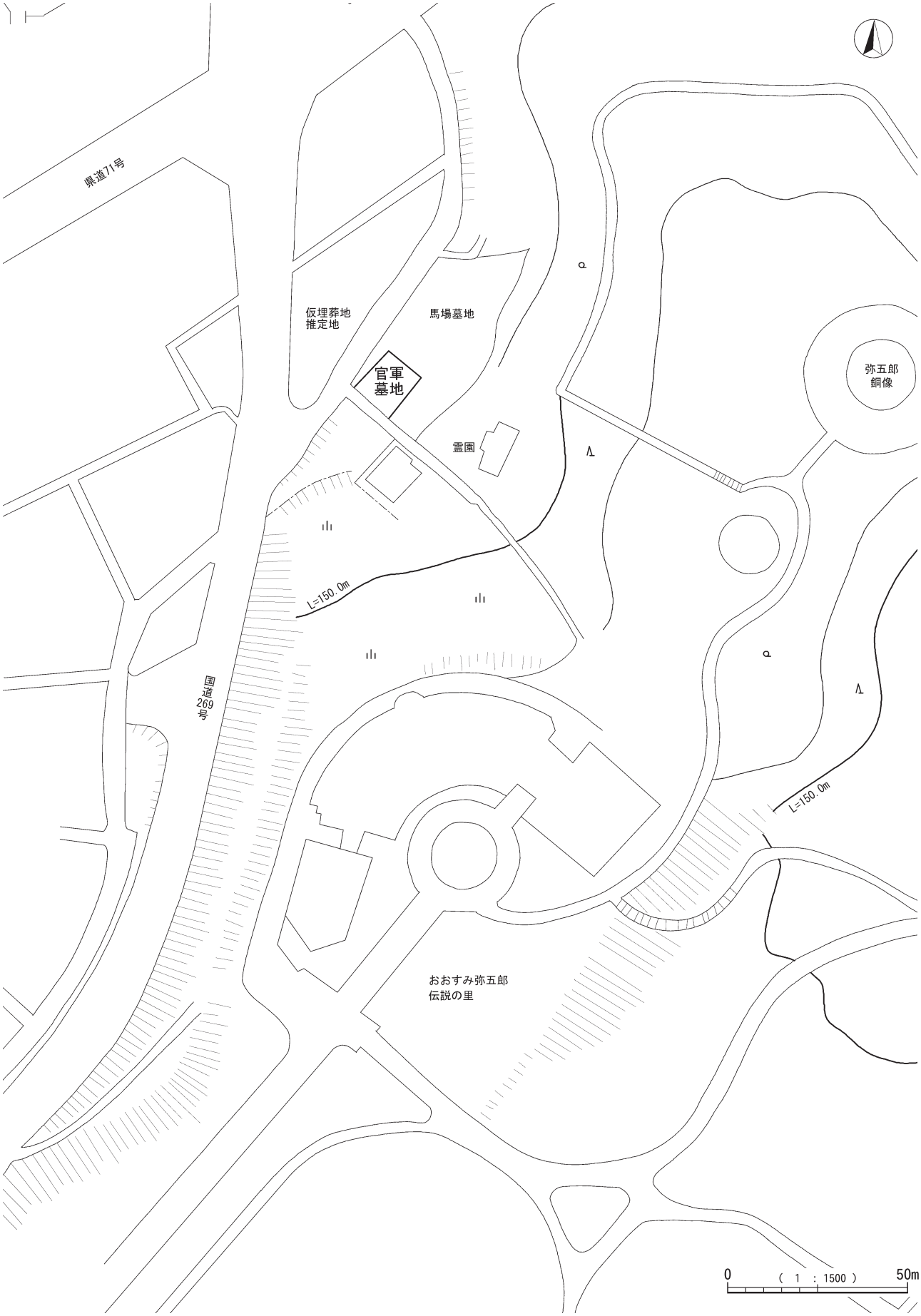
岩川官軍墓地の層序は，Ⅰ層～Ⅲ層は，玉砂利やアカホヤ火山灰が混じることや，墓石や縁石の立地層から後世の造成層と考えられる。墓石は，Ⅰ層とⅡ層の直上にそれぞれに建っているものが確認できた。詳細は，各トレンチで記述する。

Ⅳ層はアカホヤ火山灰層で，トレンチ２とトレンチ３の北側で検出した。トレンチ１とトレンチ３の南側では，Ⅳ層が削平されている。レベルの検討や層位から，Ⅳ層又はⅤ層上面が，官軍墓地造営時の造成面と考える。

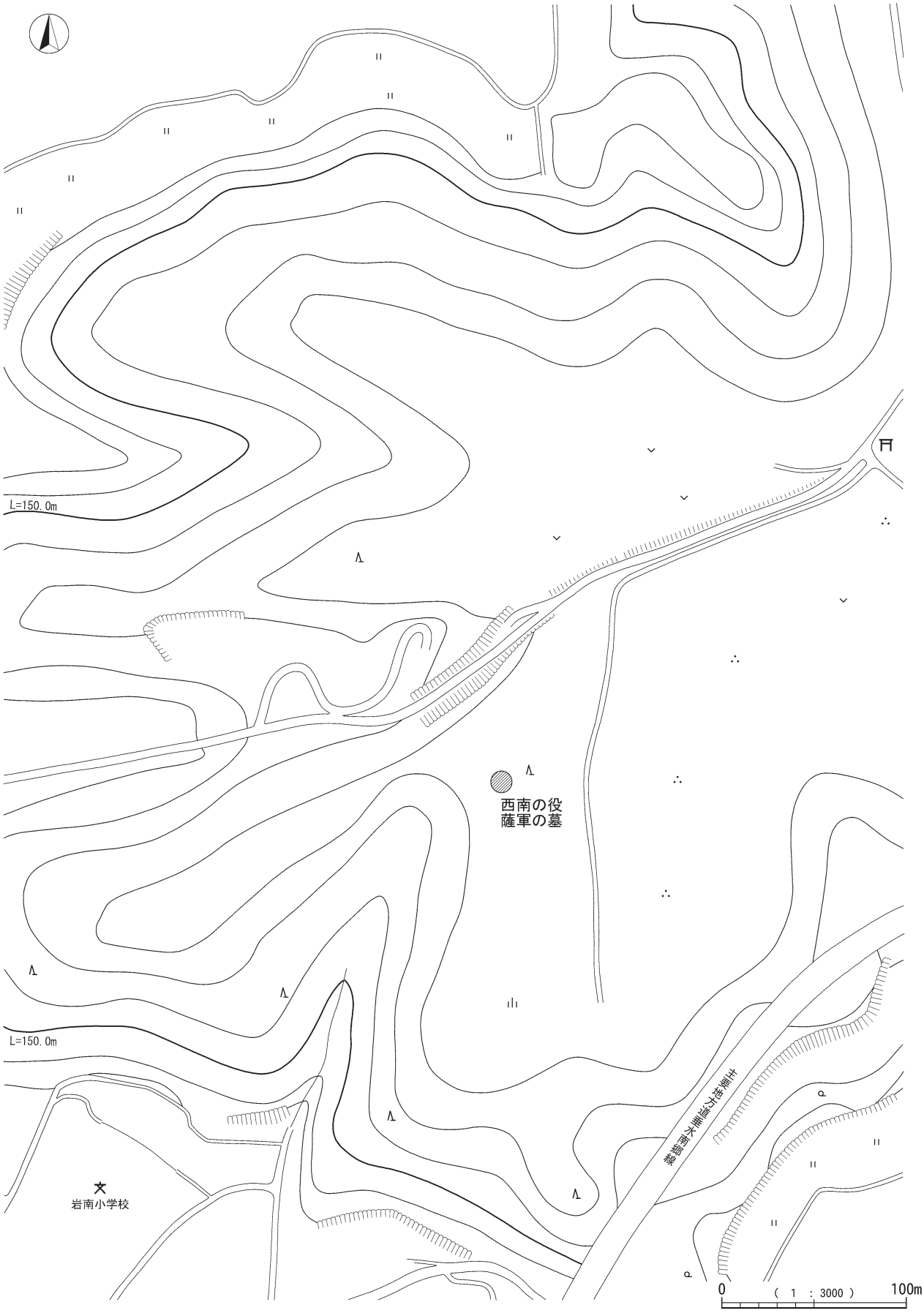
第20表　岩川官軍墓地　基本層序

層位		色調など		包含層・テフラ	層厚
Ⅰ	層	表土	(10YR3/3)	玉砂利の造成層	6㎝
Ⅱ	層	にぶい黄褐色土	(10YR4/3)	アカホヤ火山灰の造成土	5～15㎝
Ⅲ	層	暗褐色土	(10YR3/3)	極小アカホヤパミス１％混じる造成土	20㎝
Ⅳ	層	橙色火山灰	(7.5YR6/6)	鬼界アカホヤ火山灰層	－㎝
Ⅴ	層	黒褐色土	(10YR2/2)	小パミス５％混じる（P12又は13か）	35㎝
Ⅵ	層	褐色土	(10YR4/4)	サツマ火山灰の二次堆積	－㎝

第62図　岩川官軍墓地の土層
（上：トレンチ１　下：トレンチ２）



第 63 図　岩川官軍墓地　周辺図



第 64 図　薩軍の墓　周辺図

第４節　岩川官軍墓地の調査成果

１　墓石の現況について

墓石の現状を調査したところ，79 基の墓石と７基の残欠を確認した。79 基のうち，８基は大きく欠損しており，石材と刻字の違いから６基は後世の造り替えと判断した（第 22・23 表）。

現在の配置は，大尉を筆頭に階級順となっている（第 65 図）。ST １～３（士官）は，正面を西方向に向けている。それ以外の墓石は，正面を北向きに向けて配置されている。

大きさは①大尉，②少尉・少尉補，③軍曹・伍長，④兵卒・馭卒，⑤軍夫の順に小さくなっており，階級順に５つの規格となっていることを確認した。また，台石は，大尉と少尉・少尉補は２段，それ以下は１段となる。大尉と少尉・少尉補の台石の規格は，同一であるが，大尉の墓石本体の高さがわずかに高いため，大きく見える。墓石の石材は，熊本県天草市栖本町下浦の下浦石（砂岩）である。

墓石は，正面に階級・埋葬者名，右側面に死亡月日・場所，左側面に所属部隊，裏面に出身地・旧身分を刻字してある。刻字は楷書体（毛筆書体）で，正面は太く，他面は細い。「﨑」や「嵜」，「仮」や「假」，「戦」「戮」の個々の刻字違いがある。階級等による違いは，字の大きさだけで，基本的な構成は同一である。

葬られている死者の数は，No.79 が軍夫９名の合葬のため，94 名となる。戦死者の出身地は 26 県にもおよび，熊本県が 15 人と多く，次いで石川県が 12 人，和歌山県・兵庫県が６人と続く。全国の各鎮台から派遣されているため，全国に跨がっている（第 28 表）。

戦死の場所は，７月８日百引が 45 人・市成２人と多く，７月 11 日大崎村９人，７月 12 日大崎村假宿６名等となっている（第 25 表）。

墓石は９つのブロックに区画されている（第 66 図）。大尉・少尉・少尉補の３基は，区画が別となっている。区画を整理する縁石は，墓石と同じ下浦石であるが，後世の造り替えでブロックや御影石になっている部分もある。熊本県では，墓石と同規格の縁石もあるが，岩川官軍墓地では，残っている縁石の規格は幅 15～17 ㎝，長さは各箇所に合わせてあり，揃っていない。

なお，墓石の配置については，昭和８（1933）年頃の岩川尋常小学校丸山義武訓導作図の略図（第 67 図）が残されている。これによると現在の階級順でなく，部隊ごとに 86 基の墓石が配置されており，現在の配置とは大きく違う。大尉は入り口近くに配置されている。西側半分は，南北方向に配置されいる。また，現在擁壁部分に軍夫が配置されて，７つの区画に分かれている。官軍墓地造営時当初の配置に近いのは，昭和８（1933）年と考える。

※　階級については，大尉・少尉・少尉補は士官，軍曹・伍長は下士官である。兵卒と馭卒・会計二等看病は，下士官の下に置かれる軍人である。馭卒は野砲をひく馬の馭者（馬を操る人）で，兵卒と同等である。会計二等看病卒はいわゆる衛生兵で，兵卒と同等である。軍夫は食料や弾薬を運搬をする。主に現地等で徴募され，賃金が支払われる。岩川官軍墓地に埋葬されている軍夫の多くは，熊本県出身者である。

２　各トレンチの成果について

第 69 図のように３か所のトレンチを設定して調査を行った結果，官軍墓地の造営時の造成面や，墓石・縁石の構築面を把握することができた。また，２基の遺構プランを検出することができた。

以下，各トレンチの毎に記述をしていく。なお，各図の Tr はトレンチ，ST は墓石の略称である。

（１）トレンチ１（第 70 図）

トレンチ１は，馬場墓地管理者や『大隅町誌』から，斜面が崩れ擁壁を行ったとされたため，官軍墓地造営時の整地面の確認と後世の造成状況を調査し，不明となっている墓石等が埋没している可能性を考え設定した。

擁壁際（ブロック塀）に 300×40 ㎝のトレンチを設定し調査を行い，さらに，ST63 方向へトレンチを拡張して，層と墓石との関係を調査した。掘削深度は，約 30 ㎝で，一部 94 ㎝まで掘削を行った。

層位はⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層の後世の各造成土層の下層に，縄文時代早期相当と推定されるⅤ層・Ⅵ層（サツマ火山灰層）となる。基本層位にあるⅣ層（アカホヤ火山灰層）は検出できなかった。Ⅳ層がないのは，崖崩れ等の削平の可能性もあるが，比較的Ⅴ層上面が平坦であることや，墓地北側トレンチ２のⅣ層上面との標高差が 15 ㎝程度とほとんどないことから，官軍墓地造営時の造成により，削平を受けたと考えられる。

墓石や縁石と層位の関係は，ST63 は，Ⅱ層（造成土層）上面に建っており，ブロックの縁石はⅢ層（造成土層）上面に設置されている。

墓石はⅤ層上面に建立されたが，斜面の崩壊などの後世の改変（整備）で，建て直された結果と考える。ブロックの縁石は，明らかに現代のものであり，擁壁のブロックと同一である。昭和 42（1967）年の整備時に据え，造られた可能性が高い。ST63 はⅠ層（玉砂利層）の下のため，昭和 42 年以前の改変（整備）時の造成面に建て直されたと考える。

なお，トレンチ１の表土から，古銭（第 74 図 30）が出土している。

（２）トレンチ２（第 71 図）

トレンチ２は，下層の造成面の有無や，士官（尉官）と下士官（軍曹・伍長）の立地層の調査，各墓石の墓坑の有無などの確認をする目的で，ST ３・ST ４・ST ５・ST ６の付近に，120×100 ㎝のトレンチを設定した。掘削の深度は約 48 ㎝である。

層位は，Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層の後世の各造成土層の下層に，Ⅳ層（アカホヤ火山灰層）が検出された。Ⅳ層上面は，平坦面を形成しており，他のトレンチの調査成果と併せて，官軍墓地造営時の造成面と考えられる。そのため，それ以上の下層掘削は行わなかった。

士官と下士官では立地層に違いが見られた。ST ３（士官）は，Ⅱ層（造成土層）の中層に立地している。ST ４・ST ５・ST ６は，Ⅰ層（玉砂利層）に立地している。いずれも，後世の造成面に立地している。立地層の違いは，後世の改変（整備）時期の違いと考えられる。

縁石は，Ⅱ層（造成土層）上面に据えられている。造営当時の下浦石で，幅 15 ㎝・厚み 10 ㎝で，長さについては，規格性はない。

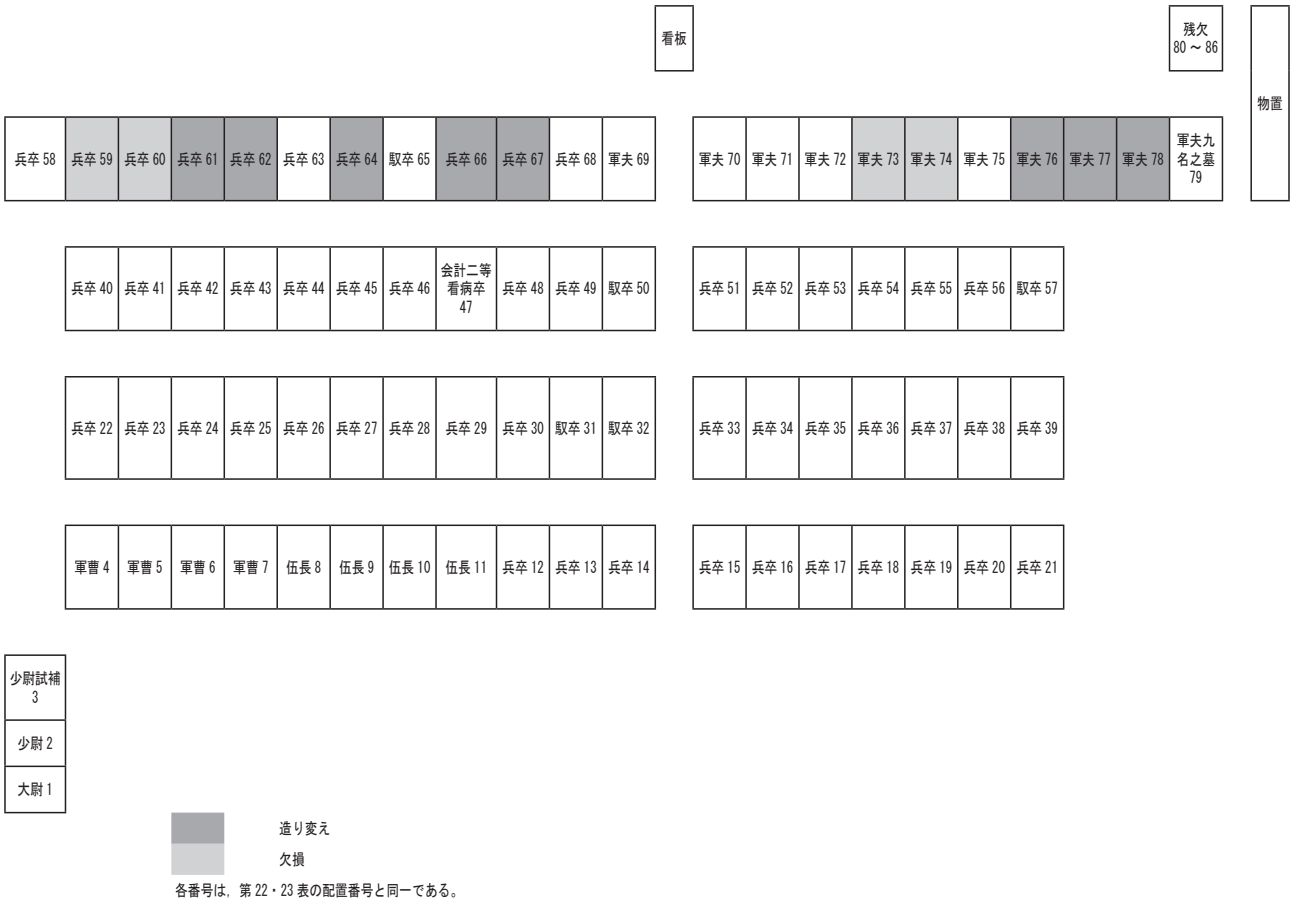
墓坑と想定できる平面プランや，落ち込みは検出できなかった。遺物も出土しなかった。

（３）トレンチ３（第 72 図）

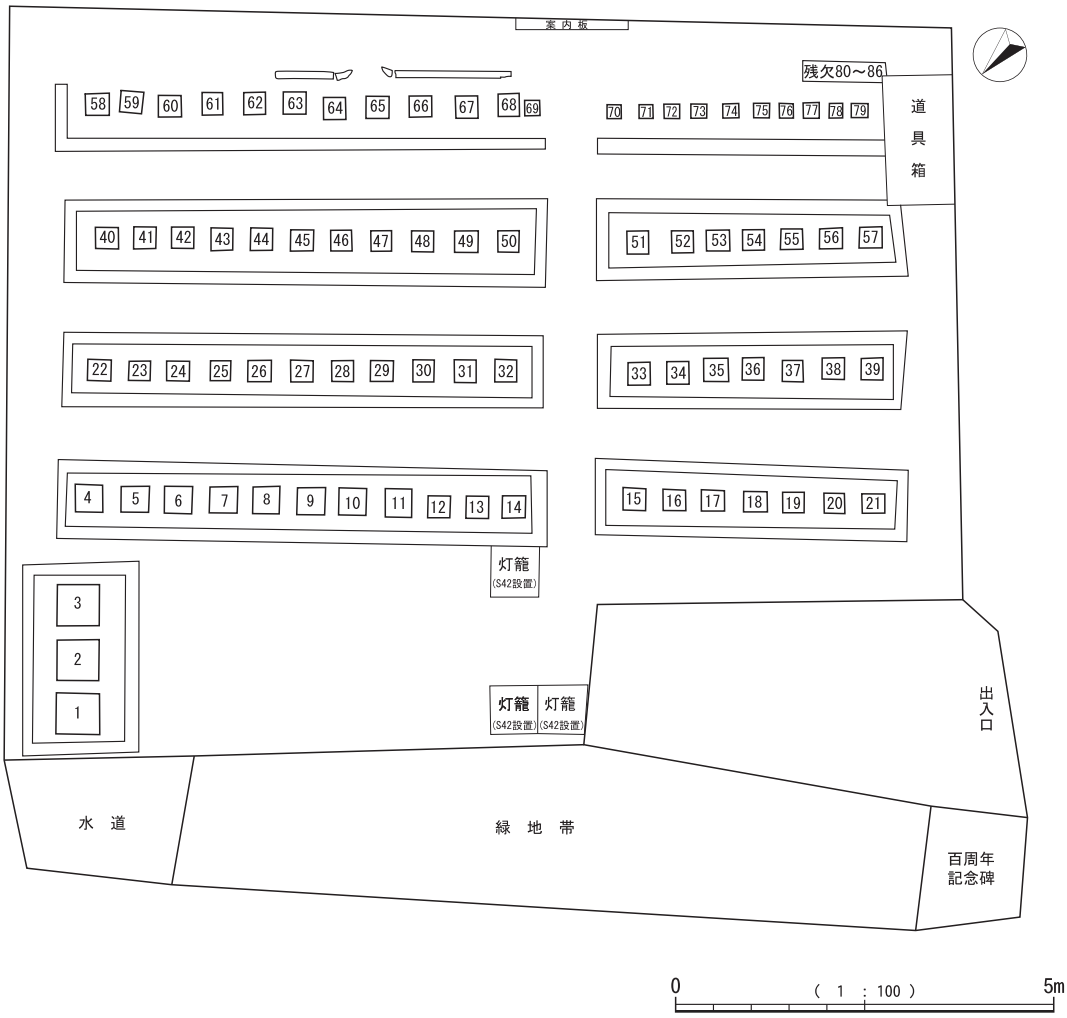
トレンチ３は，下層の確認と官軍墓地造営時の整地面の確認，墓坑の有無の調査を目的として，官軍墓地中央部の南北に延びる通路に長さ 600 ㎝に渡り，交互に７つのトレンチを設定した。

層位は，Ⅰ～Ⅲ層はトレンチ１・２と同一である。その下は各トレンチで違いがある。トレンチ３－３・６では，Ⅳ層（アカホヤ火山灰層）を検出した。トレンチ３－１・２・７では，Ⅳ層が削平されており，縄文時代早期相当のⅤ層を検出した。

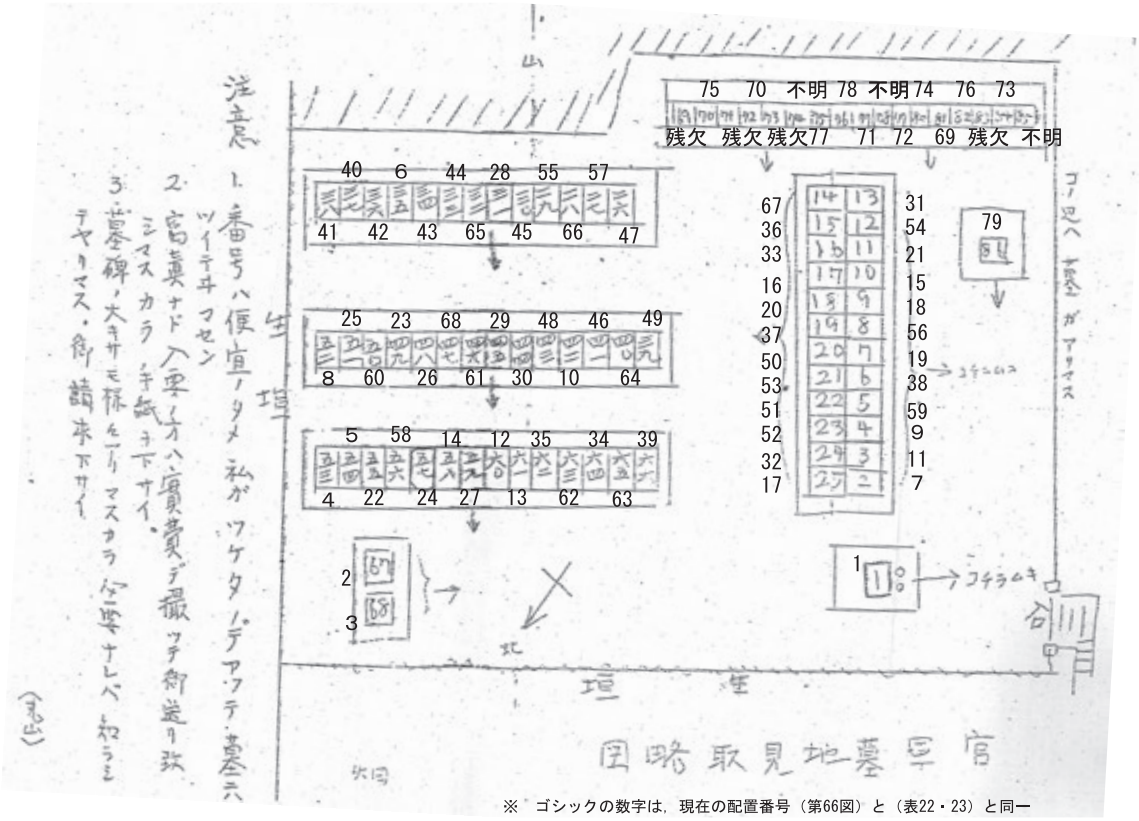
トレンチ３－３・４・５とトレンチ３－２・６では，Ⅲ層直下から再堆積土層を確認した。再堆積土層の一部を試掘したところ，垂直の落ち込みを確認した。その結果，遺構と想定される平面プラント及び立ち上がり（トレンチ３－２・３・６）を確認した。トレンチ３－４・５からは，Ⅲ層直下から，トレンチ３－３と同一の再堆積土層が検出された。このため，再堆積土層は，何らかの遺構の埋土であり，平面の検出状況や落ち込みから，２基の遺構があると考えられる。



第 65 図　岩川官軍墓地　配置図（略図）

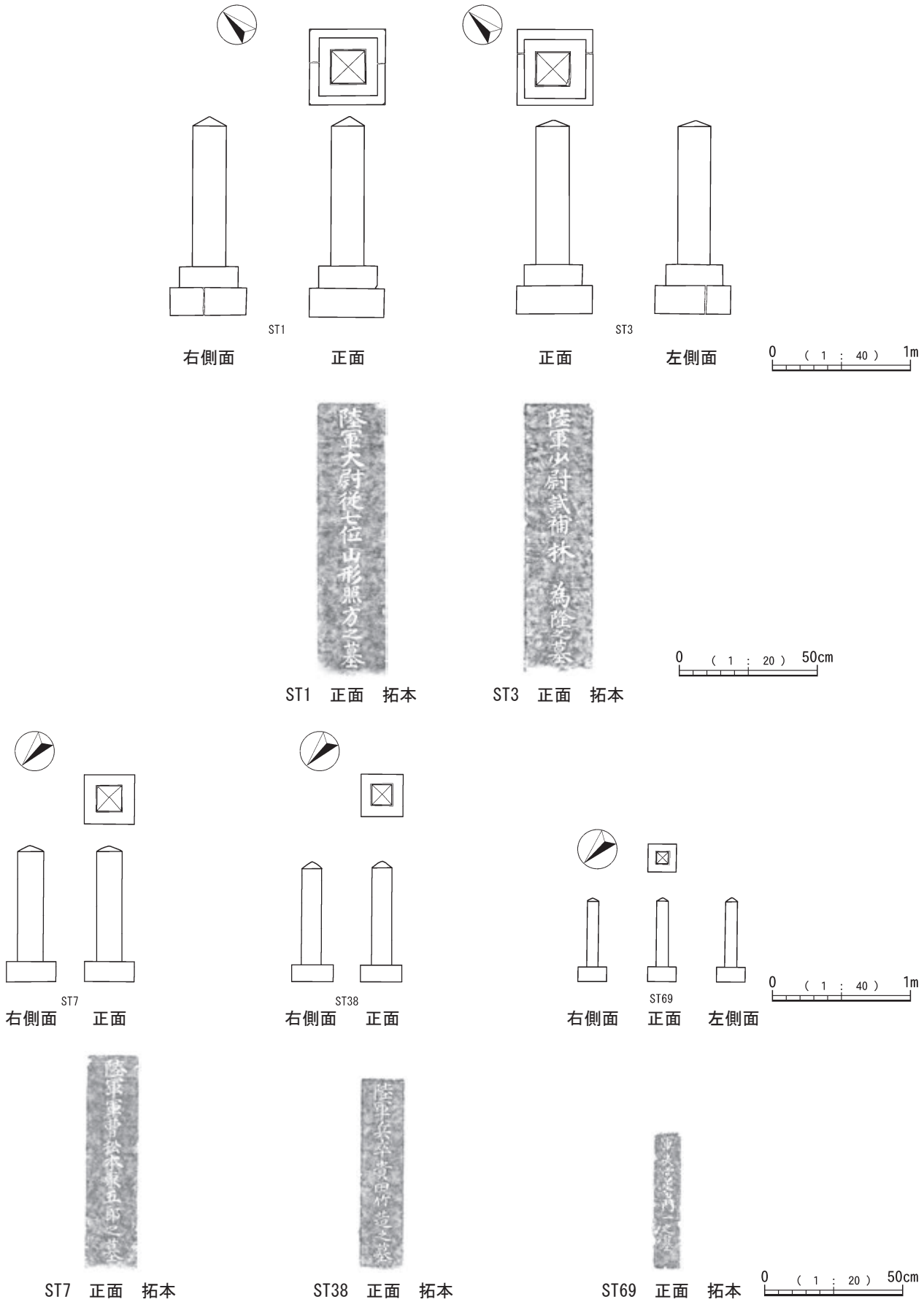


第 66 図　岩川官軍墓地　墓石配置図

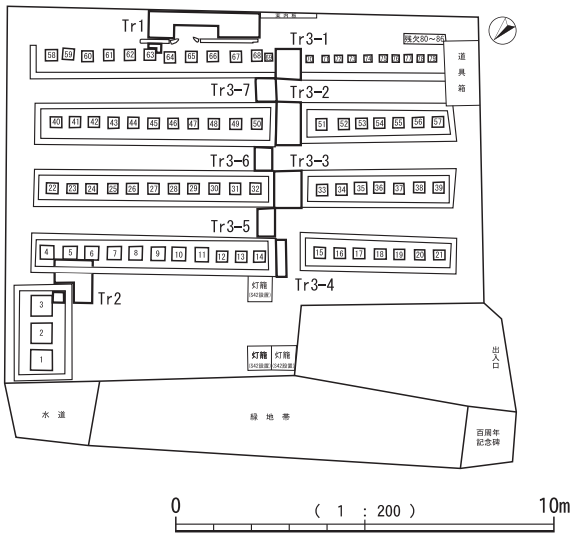


※ ゴシックの数字は，現在の配置番号（第66図）と（表22・23）と同一

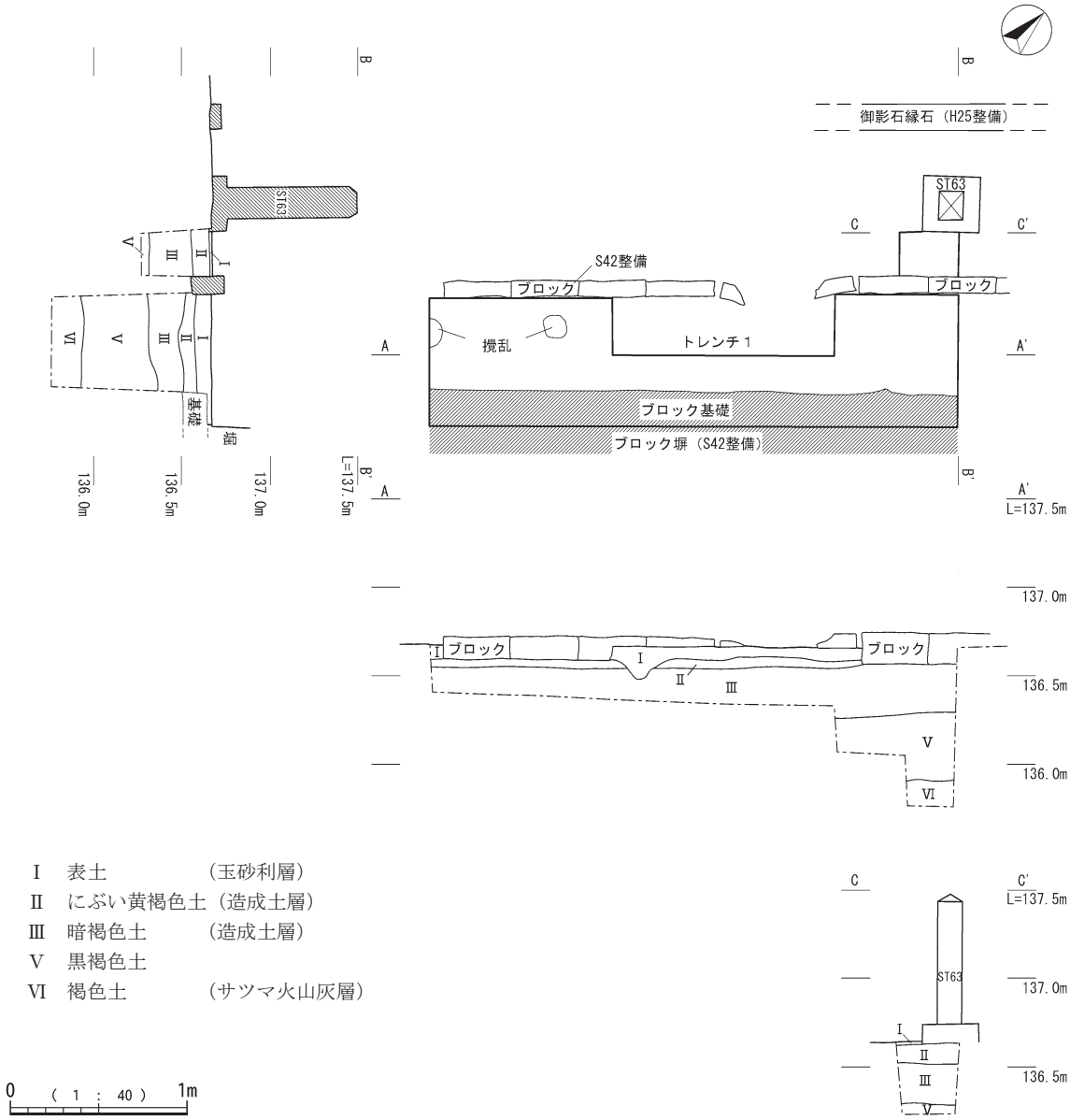
第 67 図　昭和８（1933）年岩川官軍墓地　墓石配置図（略図・スケール不明）
（岩川尋常小学校丸山義武訓導作図　引用・一部改変）



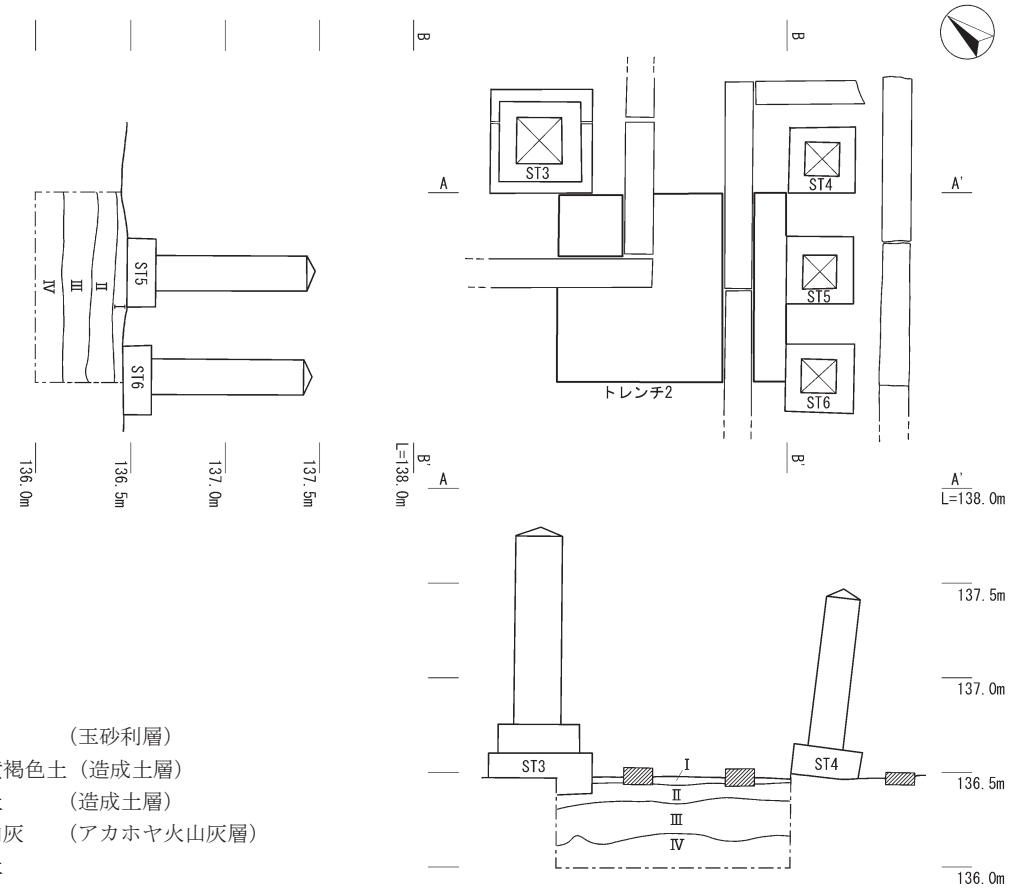
第 68 図　岩川官軍墓地　ST 1・3・7・38・69 実測図及び拓本



第 69 図　岩川官軍墓地　トレンチ位置図



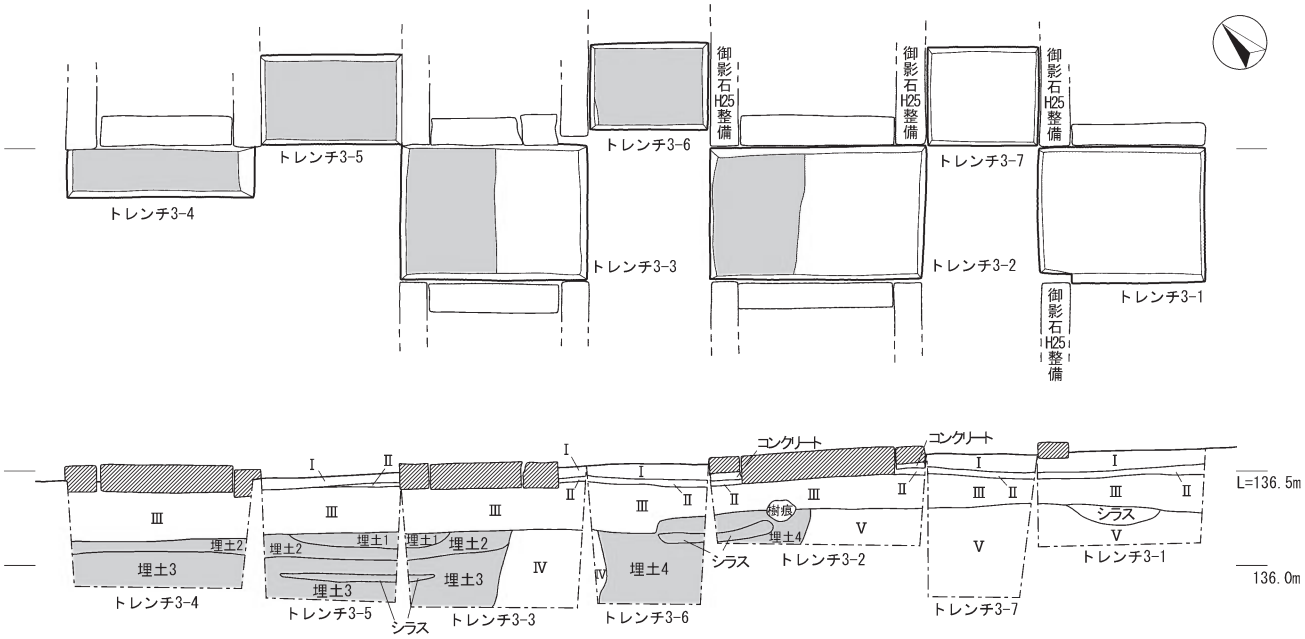
第 70 図　岩川官軍墓地　トレンチ１実測図



Ⅰ　表土　　（玉砂利層）
Ⅱ　にぶい黄褐色土（造成土層）
Ⅲ　暗褐色土　　（造成土層）
Ⅳ　橙色火山灰　　（アカホヤ火山灰層）
Ⅴ　黒褐色土
※　第 71・72 図同一

0　（1：40）　1m

第 71 図　岩川官軍墓地　トレンチ２実測図



埋１　灰褐色土（7.5YR4/2）　しまりなし，シラス・アカホヤ多量混
埋２　暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり
埋３　黒褐色土（7.5YR3/2）　しまりなし，アカホヤ混
埋４　褐色土（7.5YR4/3）　しまりなし，アカホヤ混

···· 遺構範囲

0　（1：40）　1m

第 72 図　岩川官軍墓地　トレンチ３実測図

Tr=トレンチ

第 73 図　岩川官軍墓地　トレンチ位置写真

再堆積土層（埋土）は，黒褐色～褐色土（埋土３・４）でアカホヤ火山灰混じりの土が主体である。全体的にしまりは弱い。各プランの埋土とⅢ層（造成土層）との間には，灰褐色土（埋土１）と，シラスの層が検出された。

２基の遺構は，官軍墓地の墓坑の可能性が高いと判断している。トレンチ３－１・３－３から古銭（第 74 図 31・32）が出土している。

３　出土遺物について（第 74 図 30 ～ 32）

遺物は，表土及びトレンチ３のⅢ層から，古銭が出土している。官軍墓地との関連は不明である。

熊本県八代市の若宮官軍墓地や横手官軍墓地では，墓地敷地及び墓坑からの寛永通宝の出土例がある。

30 は寛永通宝である。トレンチ１のⅠ層（表土）で出土した。半分欠損している。背面は刻印はない。

31 は寛永通宝である。トレンチ３－３のⅢ層(造成土)から出土した。1/4 しか残存してない。「寛」の刻印のみで，背面は刻印はない。

32 は寛永通宝である。トレンチ３－１のⅢ層(造成土)から出土した。半分欠損いており，腐食が激しい。表面の刻印ははっきりしないが,「寛」と「通」の刻印が残る。背面には刻印はない。

４　薩軍の墓（第 75・76 図）

薩軍の墓については,墓石の配置図作成と墓石の実測,写真撮影を行った。

薩軍の墓は，周辺に茶畑が広がる台地の先端の杉林の中に存在している。ほぼ平坦の地形に，マウンド状の塚に立石が建立されている。

墓石は，細長い台形状で，高さ 70 ㎝，上部幅 25 ㎝で下部にかけて徐々に広がり，下部幅 60 ㎝である。石の厚みは 10～15 ㎝である。石材は凝灰岩で，刻字はない。塚の頂部に埋設されているので,全体の大きさは不明である。

表面・側面に荒い加工痕が残り，おおよその形を意識して加工されている。

塚は，土で整形されている。300×260 ㎝の楕円形を呈しており，高さが約 70 ㎝である。現在は，表面には苔が生え，周辺環境と調和がとれている。

明治 10（1877）年７月に，この周辺（岩崎）の戦闘で亡くなった西郷軍兵士を葬ったと伝承されている（大隅町誌編纂委員会 1990)。しかし，史料もなく，地元にもあまり知られていない。ここに建立された経緯や，埋葬された人数や埋葬されている人物は不明である。

なお，同じ台地の周辺の林を踏査したが，同様の構造物等の施設は発見できなかった。

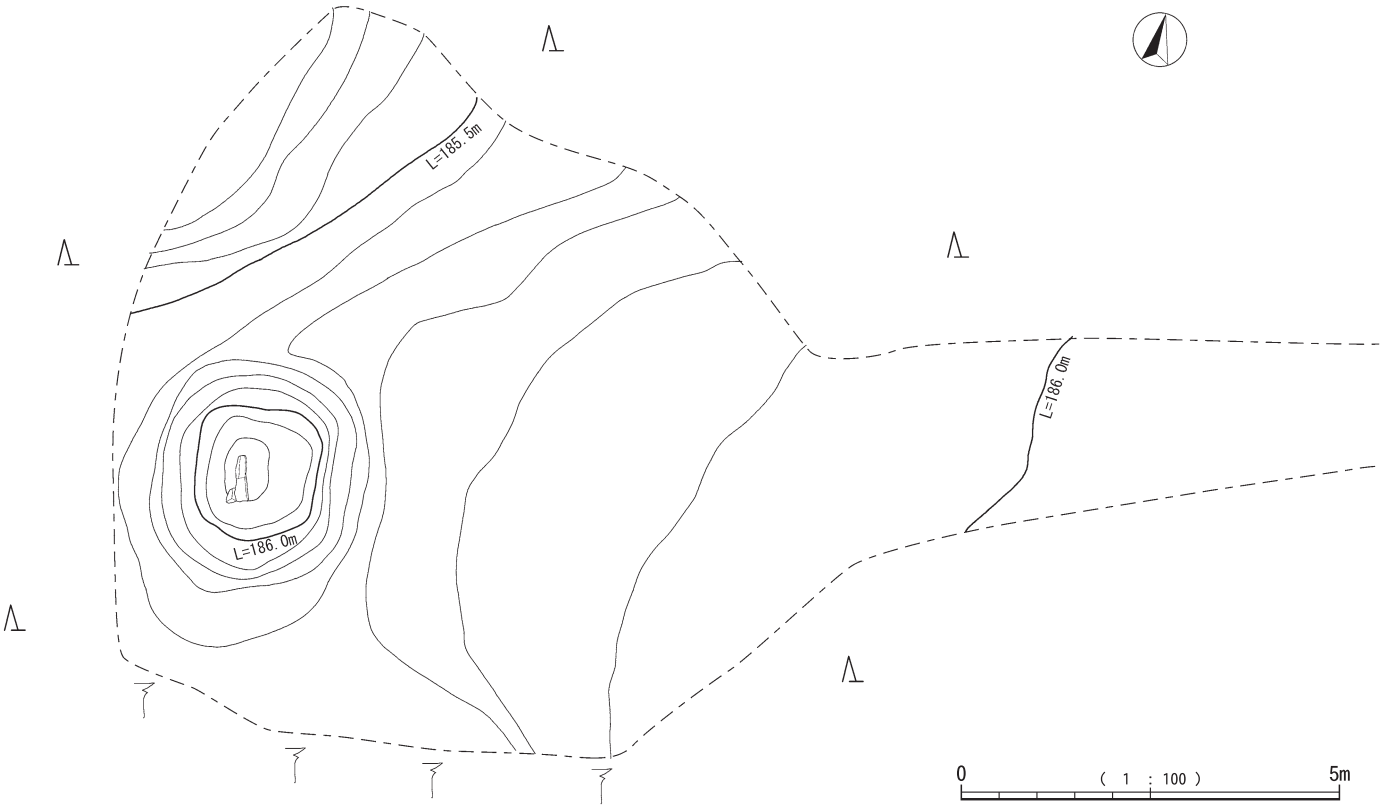
【引用・参考文献】

大隅町誌編纂委員会（編）　1990『大隅町誌』(改訂版)

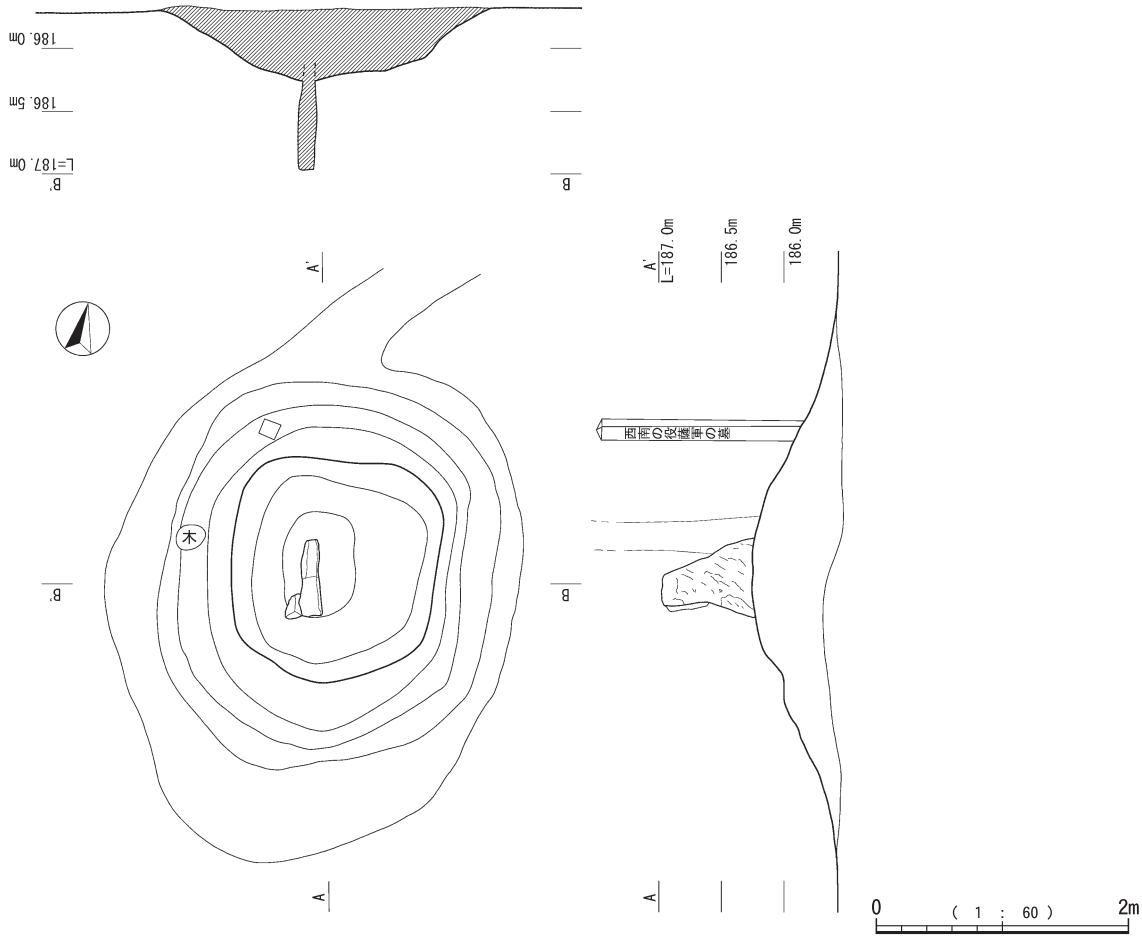
第 74 図　岩川官軍墓地　出土遺物

第 21 表　岩川官軍墓地　古銭　観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	トレンチ	層位	種類	法量（cm）				色調	備考
							全長	厚さ	孔	重量(g)		
74	30	P003	一括	トレンチ１	表土	寛永通宝	(2.5)	0.1	－	1.30	オリーブ褐色 (2.5YR4/4)	
74	31	P002	一括	トレンチ３－３	Ⅲ層	寛永通宝	(1.0)	0.1	－	0.89	オリーブ褐色 (2.5YR4/5)	
74	32	P001	一括	トレンチ３－１	Ⅲ層	寛永通宝	(2.5)	0.1	－	1.26	オリーブ褐色 (2.5YR4/6)	



第 75 図　薩軍の墓　遺構配置図



第 76 図　薩軍の墓　墓石実測図

第 22 表　岩川官軍墓地　石碑刻字一覧（１）

配置	表面			右側面	左側面	裏面			破損状況	備考
	階級	姓名		死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地		旧身分		
1	陸軍大尉 従七位	山形　照方	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊 第一大隊第四中隊長	熊本縣	肥後国飽田郡京町	士族	赤み	『埋』は山縣と記す
2	陸軍少尉	奥田　政實	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日 向国諸縣郡大嵜村戦死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊	高知縣	土佐国土佐郡高見	士族	赤み・ヒビ	
3	陸軍少尉 試補	林　為隆	之墓	明治十年七月廿四日於鹿児島縣下日 向国諸縣郡都ノ城戦死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	愛知縣	尾張国春日井郡本南丸町	士族	赤み	
4	陸軍軍曹	山川　正猛	之墓	明治十年七月一日於鹿児島縣下日向 国諸縣郡大嵜村戦死	東京鎮臺歩兵第二聯隊 第二大隊第一中隊	茨城縣	常陸国茨城郡常磐村	士族	赤み・ヒビ大	
5	陸軍軍曹	倉　満治	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛工兵第一小隊	石川縣	加賀国石川郡材木町二丁目	平民	赤み	
6	陸軍軍曹	杉坂　直喜	之墓	明治十年七月十二日於鹿児島縣下日 向国諸縣郡大嵜假宿村戦死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡長土塀一番町	士族	赤み	
7	陸軍軍曹	松本　東五郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	大**坂**鎮**臺歩**兵第十聯隊 第一大隊附	静岡縣	駿河国志太郡桂島村	士族	赤み	
8	陸軍伍長	長田　與三郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国**嚕啖郡市成八**柴山戦死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊 第一大隊第三中隊	石川縣	加賀国河北郡大菱池村	平民	赤み・ヒビ大・ 剥落	
9	陸軍伍長	堀井　一之	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	石川縣	加賀国石川郡梅枝町	士族	赤み	
10	陸軍伍長	根塚　亀次郎	之墓	明治十年七月十二日於鹿児島縣下日 向国諸縣郡大嵜仮宿村戦死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	石川縣	越中国新川町富山上リ立町	平民	赤み	
11	陸軍伍長	野坂　勝次	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	石川縣	加賀国石川郡金澤村	士族	赤み	
12	陸軍兵卒	阿部　三助	之墓	明治十年九月十七日於鹿児島縣下日 向国諸縣郡都城病院病死	仙臺鎮臺歩兵第四聯隊 第一大隊	秋田縣	第二大區八小區	平民	赤み	
13	陸軍兵卒	鈴木　己之助	之墓	明治十年十一月三日於鹿児島縣下日 向国諸縣郡都城病院病死	仙臺鎮臺歩兵第四聯隊 第一大隊第四中隊	福島縣	磐城国菊多郡下川村	平民	赤み・剥落	『埋』は三之助と記す
14	陸軍兵卒	後藤　虎吉	之墓	明治十年七月廿三日於鹿児島縣下嚕 啖郡岩川村戦死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	愛知縣	尾張国中島郡小信中島村	平民	赤み・ヒビ小・ 剥落	
15	陸軍兵卒	爲井　矢之助	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	和歌山 縣	紀伊**国**海部郡港村	平民	赤み・ヒビ	矢に一部欠けあり。
16	陸軍兵卒	塩嵜　百藏	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引村戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊 第一大隊第二中隊	兵庫縣	淡路国第十二大區佐野村	平民	赤み	『埋』は塩岩、『忠』は 塩崎と記す
17	陸軍馭卒	内堀　長平	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	堺縣	河内国石川郡大ヶ塚村	平民	赤み	
18	陸軍兵卒	興津　喜市	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	兵庫縣	淡路国三原郡淺井村	平民	赤み	
19	陸軍兵卒	諸方　與市	之墓	明治十年七月**八**日**於鹿児島**縣下大隅 国**肝属**郡**百引戦**死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	石川**縣**	加賀国石川郡金澤町	士**族**	赤み・剥落	『埋』は緒方、『忠』は 諸田と記す
20	陸軍兵卒	塚本　平吉	之墓	明治十年七月八日**於**鹿**児**島縣下大隅 国肝**属**郡百引村戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊 第一大隊第三中隊	和歌山 縣	紀伊国伊**都**郡丁ノ町村	平民	赤み	
21	陸軍兵卒	上田　定之助	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	兵庫縣	丹波国氷上郡勅使村	平民	赤み	
22	陸軍兵卒	田村　彌五郎	之墓	明治十年七月十二日於鹿児島縣下日 向国大嵜仮宿村戦死	廣島鎮臺歩兵第十二聯隊 第一大隊第一中隊	愛媛縣	讃岐国鴉足郡西小川村	平民	赤み	『埋』は彌三郎、『忠』 は弥五郎と記す
23	陸軍兵卒	鈴木　桂次郎	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日 向国大嵜村戦死	東京鎮臺歩兵第二聯隊 第三大隊第三中隊	千葉縣	安房国朝比奈郡□郷村	平民	赤み・ヒビ・ 剥落	
24	陸軍兵卒	大槝　良藏	之墓	明治十年七月廿三日於鹿児島縣下嚕 啖郡岩川村戦死	名古屋鎮臺歩兵第六聯隊 第二大隊第四中隊	静岡縣	遠江国城東郡大石村	平民	赤み	
25	陸軍兵卒	坂下　忠藏	之墓	明治十年七月八日於鹿**児島**縣下大隅 国**嚕**啖郡市成八柴**山戦**死	名**古屋鎮**臺歩兵第七聯隊 第一大隊第三中隊	石川縣	越中国**礪波**郡三**尾**村	**平民**	赤み・ヒビ大・ 剥落	
26	陸軍兵卒	平野　登代吉	之墓	明治十年七月十一日鹿児島縣下日向 国諸縣郡大嵜村戦死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊	山口縣	周防国佐波郡高瀬村	平民	赤み	
27	陸軍兵卒	小野木　忠作	之墓	明治十年七月廿三日於鹿児島縣下嚕 啖郡岩川村戦死	名古屋鎮臺歩兵第六聯隊 第二大隊第三中隊	岐阜縣	美濃国第一大區十三小區細 畑村	平民	赤み	
28	陸軍兵卒	宮田　勝藏	之墓	明治十年七月六日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡澁坂戦死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊 第一大隊第二中隊	石川縣	越中国礪波郡柴田屋村	平民	赤み	
29	陸軍兵卒	板野　庄吉	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日 向国大嵜村戦死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊	山口縣	周防国大島郡秋村	平民	赤み	
30	陸軍兵卒	藤原　政市	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日 向国大嵜村戦死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊	島根縣	出雲国飯石郡給下村	平民	赤み・ヒビ大	
31	陸軍馭卒	島田　正知	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	岡山縣	備前国御野郡岡山忍邸	士族	赤み	
32	陸軍馭卒	梅田　市造	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	兵庫縣	但馬国竹野郡綱野村	平民	赤み	
33	陸軍兵卒	飯田　林吉	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引村戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊 第一大隊第二中隊	三重縣	伊**勢**国三重郡塩濱村	平民	赤み	
34	陸軍兵卒	渡邉　豊吉	之墓	明治十年十月廿九日鹿児島縣下日向 国諸縣郡都ノ城ニ於テ自殺	仙臺鎮臺歩兵第四聯隊 第一大隊第二中隊	福島縣	岩代国川沼郡堰澤村	平民	赤み	
35	**陸軍**兵卒	大槝　勘治	之墓	明治十年十月十二日鹿児島縣下日向 国諸縣郡都城病院病死	仙臺鎮臺歩兵第四聯隊 第一大隊第四中隊	福島縣	磐城国宇多郡坪田村	平民	赤み	
36	陸軍兵**卒**	**加屋**　葛藏	之墓	**明治**十年**七**月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引村戦死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊 第一大隊第四中隊	山口縣	周防国玖珂郡保津村	平民	赤み・剥落	
37	陸軍兵卒	倉槝　房次郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下**大隅** **国肝属**郡百**引村**戦死	名古屋鎮臺歩兵第六聯隊 第二大隊第四中隊	岐阜縣	美濃国安八郡大垣町	平民	赤み	
38	陸軍兵卒	貴田　竹造	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	堺縣	大和国山邉郡杉本村	平民	赤み	
39	陸軍兵卒	五十嵐　慶治	之墓	明治十年十一月廿二日鹿児島縣下日 向国諸縣郡都ノ城病院ニ於テ病死	仙台鎮臺歩兵第四聯隊 第一大隊第二中隊	山形縣	羽前国田川郡廣野新田村	平民	赤み・ヒビ・ 剥落	
40	陸軍兵卒	佐野　與吉	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日 向国大嵜村戦死	廣島鎮臺歩兵第十一**聯**隊 第一大隊第一中**隊**	岡山縣	備中**国窪屋**郡**軽部**村	平民	赤み・剥落	
41	陸軍兵卒	高山　嘉奈次	之墓	明治十年七月十二日於**鹿児島縣**下日 **向国諸縣郡**大崎仮宿村戦死	廣島鎮臺歩兵第十二聯隊 第一大隊第一中隊	愛媛縣	伊豫国越知郡鳥生村	平民	赤み	
42	陸軍兵卒	砂本　鉄治	之墓	明治十年七月十二日於鹿児島縣下日 向国諸縣郡永吉村戦死	廣島鎮臺歩兵第十二聯隊 第一大隊第一中隊	愛媛縣	伊豫国風早郡中西外村	平民	赤み	
43	陸軍兵卒	鍋谷　常吉	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	堺縣	大和国吉野郡西谷村	平民	赤み	
44	陸軍兵卒	田村　正則	之墓	明治十年七月八日於鹿児**島**縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	和歌山 縣	紀伊国名草郡和歌山	平民	赤み・剥落	
45	陸軍馭卒	中野　清四郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅 国肝属郡百引戦死	近衛砲兵 第一大隊第一小隊	滋賀縣	近江国野洲郡堤村	平民	赤み	

第 23 表　岩川官軍墓地　石碑刻字一覧（２）

配置	表面			右側面	左側面	裏面			破損状況	備考
	階級	姓名		死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地		旧身分		
46	陸軍兵卒	多胡 仁三郎	之墓	明治十年七月十二日於鹿児島縣下日向国諸縣郡大嵜假宿村戰死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊第一大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤田町	平民	赤み	
47	会計二等看病卒	石橋 之篤	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	名古屋鎮臺歩兵第七聯隊第一大隊附	石川縣	加賀国石川郡金沢長町	士族	赤み	
48	陸軍兵卒	河野 庄吉	之墓	明治十年七月十二日於鹿児島縣下日向国諸縣郡大嵜仮宿村戰死	廣島鎮臺歩兵第十二聯隊第一大隊第一中隊	高知縣	高知県阿波国名東郡助任町	平民	赤み	
49	陸軍兵卒	今野 清八	之墓	明治十年十一月廿一日於鹿児島縣下諸縣郡都城病院病死	仙臺鎮臺歩兵第四聯隊第一大隊第四中隊	宮城縣	陸中国宮城郡仙台北八番町	士族	赤み	
50	陸軍馭卒	南保 安三郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	石川縣	加賀国石川郡金澤	士族	赤み・剥落	
51	陸軍兵卒	阪口 虎松	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	兵庫縣	摂津国武庫郡今北村	平民	赤み・剥落	『埋』は坂口と記す
52	陸軍馭卒	千品 留次郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	和歌山縣	紀伊国名草郡新魚町	平民	赤み	
53	陸軍兵卒	佐藤 善太郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	兵庫縣	播磨国飾東郡西服村	平民	赤み	
54	陸軍兵卒	伊藤 長之助	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	三重縣	伊勢国三重郡西日野村	平民	赤み	
55	陸軍兵卒	會田 留次郎	之墓	明治十年七月一日於鹿児島縣下日向国諸縣郡菱田村負傷後同月三日同縣大隅国鹿屋病院ニ於テ死	東京鎮臺歩兵第二聯隊第二大隊第一中隊	埼玉縣	武蔵国埼玉郡萩島村	平民	赤み・ヒビ・剥落	
56	陸軍兵卒	絹谷 勘藏	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	嶋根縣	伯耆国日野郡矢部村	平民	赤み	
57	陸軍馭卒	玉置 玄成	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日向国諸縣郡荒佐野戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	和歌山縣	紀伊国日高郡熊野村	平民	赤み	
58	陸軍兵卒	吉葉 長藏	之墓	明治十年七月廿三日於鹿児島縣下嚕畭郡鍋村戰死	東京鎮臺歩兵第二聯隊第二大隊第一中隊	茨城縣	第八大區小山村	平民	修復・赤み・ヒビ・剥落	
59	陸軍兵卒	田村 良直	之墓	明治十年七月八日鹿児島縣下大隅国肝属郡百引村戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	和歌山縣	紀井海士郡和歌山新通	士族	造り替え・ヒビ	
60	陸軍兵卒	石井 友八	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日向国諸縣郡大嵜村戰死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊第一大隊□中隊	岡山縣	備中国窪屋郡子位庄村	平民	造り替え・ヒビ	
61	陸軍兵卒	花田 仁助	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日向国諸縣郡大嵜村戰死	廣島鎮臺歩兵第十一聯隊第一大隊第一中隊	廣島縣	安藝豊田郡松江村	平民	上 1/2 欠損	
62	陸軍兵卒	大友 善次郎	之墓	明治十年十月八日於鹿児島縣下日向国諸縣郡都城病院病死	仙臺鎮臺歩兵第四聯隊第一大隊	秋田縣	第一大區九小區加茂村	平民	上 1/2 欠損	下部のみ。しかし、これも正しいかは不明。
63	陸軍兵卒	伊藤 栄五郎	之墓	明治十年十月□□□於鹿児島縣下日向国諸縣都城病院病死	仙台鎮臺歩兵第四聯隊第一大隊第□中隊	宮城縣	第五大區□牧目村	平民	接合で復元	M10. 10. 21 都城病院にて病死
64	陸軍兵卒	山市 太里	之墓	明治□□…諸縣□…	仙臺□□…□□大隊□□□□	青森縣	陸奥国三戸郡田子村	平民	台石に接合	上部のみ。M10. 10. 16 都城病院にて病死
65	陸軍馭卒	木村 芳藏	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	高知縣	阿波国名東郡佐古楠小路	士族	接合で復元・剥離	
66	陸軍兵卒	青木 幸吉	之墓	…□□日於鹿児島縣下…□引戰死	近衛砲兵第一大隊第一小隊	栃木縣	下野国寒川郡寒川村	平民	上 1/2 欠損	M10. 7. 8 百引にて死亡
67	陸軍兵卒	伊藤 伊助	之墓	（読めず）明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引村戰死	（読めず）廣島鎮臺歩兵第十一聯隊第一大隊第四中隊	山口縣	長門国美根郡岩永村	平民	真ん中部分のみ	
68	陸軍兵卒	西村 要吉	之墓	明治十年七月十一日於鹿児島縣下日向国諸縣大嵜村戰死	廣島鎮臺□□□□□聯隊第一大隊第一中隊	山口縣	長門国厚狭郡山川村	平民	剥離激しい	
69	軍夫	宮嵜 門一	之墓	明治十年七月八日大隅国百引ニテ即死	別働第一旅団輜重部	熊本縣	肥後国第五大區冨綱村		赤み	
70	軍夫	山本 文次郎	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引ニ於テ死	別働隊第一旅團	熊本縣	肥後国宇土郡宇土町		接合で復元・剥離	
71	軍夫	本田 佐七	之墓	明治十年七月八日大隅国百引ニテ即死	別働第一旅團輜重部	熊本縣	肥後国第六大區岩原村		ヒビ	
72	軍夫	西村 藤七	之墓	明治十年七月廿三日鹿児島縣下大隅国嚕畭郡鍋村ニ於テ死	別働隊第一旅團	熊本縣	第二大區上立田村		剥離	
73	軍夫	大神 喜平	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引村即死 福岡縣第三大區津屋村	別働隊第一旅團輜重部		（無）		造り替え	
74	軍夫	内田 杢次	之墓	明治十年七月□□鹿児島縣大隅国肝属郡百引即死	別働隊第□旅團	熊本縣	肥後国第五大區竹迫村		造り替え	
75	軍夫	宮本 新平	之墓	明治十年七月八日於大隅国肝属郡百引ニテ即死	別働第□旅團輜重部	熊本縣	肥後国第五大區永村		接合で復元・ヒビ	
76	軍夫	古荘 直七	之墓	明治十年七月八日大隅国肝属郡百引ニテ即死	別働第一旅團輜重部	熊本縣	肥後国第五大區□村		上 1/2 欠損	『埋』には冨綱村とあり
77	軍夫	工藤 吉平	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	別働第一旅団輜重部	熊本縣	第六大區袋津村		造り替え・上 2/3 欠損	
78	軍夫	扇 茂吉	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	別働第一旅団輜重部	福岡縣	筑前国宗像郡津屋崎村		造り替え・上 2/3 欠損	
79	軍夫	九名	之墓	明治十年之役病死	（無）		（無）			
80	軍夫	水上 夫七	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引ニテ即死	別働第一旅団	熊本縣	肥後国第五大區永村		下 1/2 欠損	『埋』は夫平、『忠』は文平と記す
81	軍夫	佐々木 初次	之墓	明治十年七月八日□□…大隅国肝属郡□□…	別働隊第一旅団輜重部	熊本縣	肥後国第五大區六小區吉村		下 1/2 欠損	
82	軍夫	山隈 能藏	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	別働隊第一旅団輜重部		（無）		上 1/2 造り替え	後世、造り替えたようで、２つ現存する。
83	軍夫	坂本 彦七	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	別働隊第一旅団輜重部	熊本縣	肥後国第六大區岩原村		欠損	２つに割れ。後世の造り替え。
84	軍夫	月足 新治	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	別働隊第一旅団輜重部	熊本縣	肥後国第六大區永村？		欠損	残欠【軍夫】が墓石か？
85	軍夫	古閑 菊壽	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	別働隊第一旅団輜重部	熊本縣	肥後国第六大區七小區長村		欠損	残欠【長村】が墓石か？
86	軍夫	下岡 平次	之墓	明治十年七月八日於鹿児島縣下大隅国肝属郡百引戰死	別働隊第一旅団輜重部	熊本縣	肥後国第六大區岩原村		欠損	
―	軍用犬？	犬	之墓							間違いなく犬の墓石が５～６基あったとのこと。野口久夫氏や川原田氏証言。

第 22・23 表は，加塩秀樹氏（曽於市教育委員会）の調査結果を一部改変し，さらに現存している墓石にある刻字を確認して作成した。
太文字は，剥離又は破損している部分を示す。文字は墓石を判読し，別資料から推定した箇所もある。
太文字で下線は，破損のため判読不能のため，文字は別資料から記載したもので推定である。
後世に造り直した墓石も確認された。その墓石は，59 田村良直・60 石井 友八・73 大神喜平・74 内田 杢次・77 工藤 吉平・78 扇 茂吉・82 山隈能藏・83 坂本彦七である。
墓石を確認できなかった埋葬者は，大友善治郎（No62 の可能性あり）・月足新治・古閑菊壽・下岡平次である。
※備考欄の『埋』は、昭和８年丸山義武作の『岩川町馬場西南役官軍墓地埋葬者名簿』を指す。
※備考欄の『忠』は、平成２年青潮社刊行の『西南の役靖国神社忠魂史』を指す

第 24 表　岩川官軍墓地　階級別墓石計測値

階級／墓石部位	墓石＋台石	墓石		台石		下台石	
単位（cm）	高さ	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅
大尉	143.5	107.5	24	15	42.5	21	55
少尉・少尉補	139.5	103.5	24	15	42.5	21	55
下士官（軍曹・伍長）	98.5	83.5	18.5	15	36.5		
兵卒・馭卒	86.5	74	15	12.5	30.5		
軍夫	60	49	9	11	21		

第 25 表　岩川官軍墓地　戦死場所・戦死日一覧

死亡日/戦死場所	鹿屋病院	渋坂	百引	市成	大崎村	大崎村假宿	荒佐野	永吉村	鍋村	岩川村	都城	都城病院	不明	合計
7 月 1 日	1				1									2
7 月 6 日		1												1
7 月 8 日			45	2									1	48
7 月 11 日					9		1							10
7 月 12 日						6		1						7
7 月 23 日									2	3				5
7 月 24 日											1			1
9 月 17 日												1		1
10 月 8 日												1		1
10 月 12 日												1		1
10 月 29 日											1			1
10 月不明												1		1
11 月 3 日												1		1
11 月 21 日												1		1
11 月 22 日												1		1
不明			2										2	4
合計	1	1	47	2	10	6	1	1	2	3	2	7	3	86

第 26 表　岩川官軍墓地　埋葬者階級別数

大尉	少尉	少尉補	軍曹	伍長	兵卒	会計二等看病卒	馭卒	軍夫
1	1	1	4	4	48	1	8	26

第 27 表　岩川官軍墓地　埋葬者所属別数

廣島鎮臺	名古屋鎮臺	東京鎮臺	近衛工兵	大坂鎮臺	近衛砲兵	仙臺鎮臺	別働第一旅團	不明
15	12	4	1	4	23	9	15	11

第 28 表　岩川官軍墓地　埋葬者出身県別数

熊本県	石川県	兵庫県	和歌山県	山口県	福島県・愛媛県・岡山県・高知県・堺県
15	12	各６		5	各３
愛知県・茨城県・岐阜県・宮城県・三重県・秋田県・静岡県・島根県					
各２					
福岡県・広島県・埼玉県・山形県・滋賀県・青森県・千葉県・栃木県					不明
各１					11

※堺県とあるが，現在の大阪府東南部と奈良県の付近で，堺市を県庁所在地として，慶応４（1868）年に誕生し，明治 14（1881）年に大阪府に編入されている。

総　　括

第７章　総括

第１節　滝ノ上火薬製造所跡

１　施設の役割の検討

安政３（1857）年に,調合指揮方の竹下伊右衛門が『銃薬製式禄』を記し,銃薬局の詳細について記載している。これを判読する形で各建物の検討を行いたい。以下の詳述する『　』内の施設は『銃薬製式禄』に,「　」は第77図「銃薬方」に記載されている名称である。両史料にある名称が違うため,想定できる範囲で並列する。「銃薬方」（第77図）に記載があり，今回推定できなかった施設については，その用途は不明である。

水車は，全部で６基記してあり，１日で精製する銃薬は199斤６号１勺８撮070016（約120㎏），年間６万8148斤４合９勺８撮332（約41,000㎏）の製造能力を有するとあり，日本でも他にないと記されている。

『第１　銃薬水車』「銃薬水車」

周囲４丈４尺１寸（13.23ｍ）・幅１尺３寸５分（40.5㎝）・８個の臼を設け，調練用に備えている。

『第２　銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

周囲４丈１尺２寸５分（14.4ｍ）・幅１尺３寸（39㎝）・６個の臼を設け，軍役用に備えている。

『第３　銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

規模は第一水車と同じで，臼を８個設け，官給用に備えている。

『第４　銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

周囲４丈４尺７寸（13.41ｍ）・幅１尺３寸（33㎝）で，10個の臼を設け，軍役用に備えている。

『第５　銃薬水車』「右同と記載の銃薬水車」

規模は第一水車と同じで，臼を８個設け，軍役用・調練用・官給用を補う水車である。

『第６　硝石硫黄筒車』「硫黄車・硝石水車」

周囲４丈１尺２寸５分（14.４ｍ）・幅１尺３寸（39㎝）・左に３個の臼を設け，硫黄を粉砕し，右に３個の臼を設け，硝石を粉砕している水車である。

『第７　軍役用並調練銃薬築実小屋』「不明」

３敷３間の建物で，槌や杵を用いて，軍役用の砲弾に火薬をつめる作業場と推定される。

『第８　官給銃薬築実小屋』「不明」

４敷３間の建物で，槌や杵を用いて，官給用の砲弾に火薬をつめる作業場と推定される。

『第９　軍役用ならびに調練銃薬小屋』「不明」

４敷４間の建物で，篩いにかけて火薬を大きさ別に分けている施設と推定される。火花が散らないように道具には，竹を用いている。

『第10　官給銃薬破小屋』「不明」

４敷３間の建物で，第９と同じ施設である。

『第11　軍役方調練方銃薬乾棚』「銃薬乾所」

軍役用３敷10間・官給用６敷６間の大きさで，柿漆紙で屋根をつくり，銃薬を乾燥する施設と推定される。

『第12・13　防鼠庫』「銃薬庫」

１軒は５敷３間で２階建て，軍役用の銃薬を収納し，１軒は，３敷１間３尺で，官給用の銃薬を収納する施設と推定される。

『第14・15　軍役調練用官給用銃薬調合所』「不明」

硝石・硫黄・木炭を調合する施設と推定される。４敷２軒と３敷２軒の建物があり，調練及び官給用の銃薬調合小屋と記されている。

『第16　木炭搗き小屋』「木炭細末所」

４敷４間の建物で，木炭を粉末にした施設と推定される。

『第17　麻桿板庫』「麻木蔵」

４敷６間の建物で，麻桿（杵）とあるが，麻稈のことではないか。麻稈は，いちびがらと呼ばれ，植物のイチビの茎を剥いで，焼き炭にして，火口に用いる。その倉庫と推定される。

『第18　官給銃薬小出庫』「銃薬小出し蔵」

２敷１間３尺の建物で，銃薬を供給する場所と推定される。1斤（約600㌘）を264文49と記されている。

『第19　大砲煉弾並びに木管導薬製作所』「不明」

木管導薬とあることから，臼砲信管である木管を製造した建物と推定される。台場用に備えると記載があるので，祇園之洲砲台や天保山砲台等へ供給していたのかもしれない。

『第20　雑物板庫』「役局」

５敷３間で庇１つある建物である。銃薬並びに硝石・硫黄等の出納場所である。

『第21　硝石硫黄板庫』「不明」

硝石や硫黄を貯蔵した倉庫と推定される。

『第22　大砲小銃薬包製作所』「パトロン製作所」

大砲・小銃の実包を製作した場所を推定される。１日2,000発・年間72万発製造したとされ，軍用方と調練方では，製作方法が違うことが記されている。

『第23　百五十銭野戦砲薬包型』

砲弾の型の法量を記した箇所で，建物ではない。

『第24　急火管製作所』「ボイセン詰所」

４敷１間の建物である。大砲用の火管（かかん），いわゆる雷管を製作した場所と推定される。

『第25　書籍謄写所』「書写方」

４敷１間の建物である。謄写人３人で，砲術に関係する重要な書籍を謄写すると記されている。午前９時頃から午後４時頃まで勤務し，年俸が４石となっている。

『第26　日記所』「役局」

役人の詰所と推定される。上の間８帖敷・見聞役８帖敷・取払役３帖敷・附役手伝小使４帖半と記される。その他，多くの雑物収蔵所（役局）があったようである。

『第27　桶詰所』「銃薬桶製作所又は銃薬桶囲場」

４敷４間の建物である。銃薬を入れる桶の製作及び充填する場所と推定される。椎材で製作し，１つの桶に50斤（約30㎏）を入れ，犬迫村や郡元村などの銃薬庫

に運送していたようである。

『第 28　硝石煎法小屋』「精製硝石煮所」

４敷２間３尺の建物で，煉瓦の家である。硝石を煮詰め．煎じるような場所と推定される。

『第 29　麻稈焼所』「木灰焼場」

４敷３間の建物で，煉瓦の家である。麻稈を焼く施設と推定される。銅製釜 10 個（釜の径 42.6 ㎝・深さ 42.6 ㎝）があり，麻稈を釜で焼き，1 釜分２斤半（約 1.5 kg）になると記されている。

『第 30　麻稈鋸截所』「キザミ場」

４敷２間の建物である。麻稈を裁断する施設である。

『第 31　黒歴青製法小屋』「不明」

４敷３間の建物である。松ヤニを製造していたと推定される。

『第 32　大工桶給並役丁休息小屋』「不明」

２軒あり，４敷５間と５敷４間の建物がある。昼食時の休息場と推定される。１銃薬水車に９人ずつ配置されていることが記されている。

『記載なし』「大幅機織場」

洋式船の帆の布を製作していたと推定される。

その他

銃薬の売上として，7,590 貫以上となっている。茶そのほかに諸果実の売上が８貫ぐらいになったようである。第 77 図の「此辺茶園」で生産されたものと考えられる。

「水神山神十一回観世音菩薩を崇ねて，毎月 16 日・18 日には，大輿寺持院の僧が来て祭祀を行い，境内の安寧を祈っり，16 日には，すべての職人が申の刻より休むことが定例をなっている」と記されている。観世音菩薩が置かれていた場所は，第 77 図の「滝の上くわんおん堂」であろう。

※「軍役用」は藩用，「調練用」は訓練用，「官給用」は個々の武士用と考えられる。

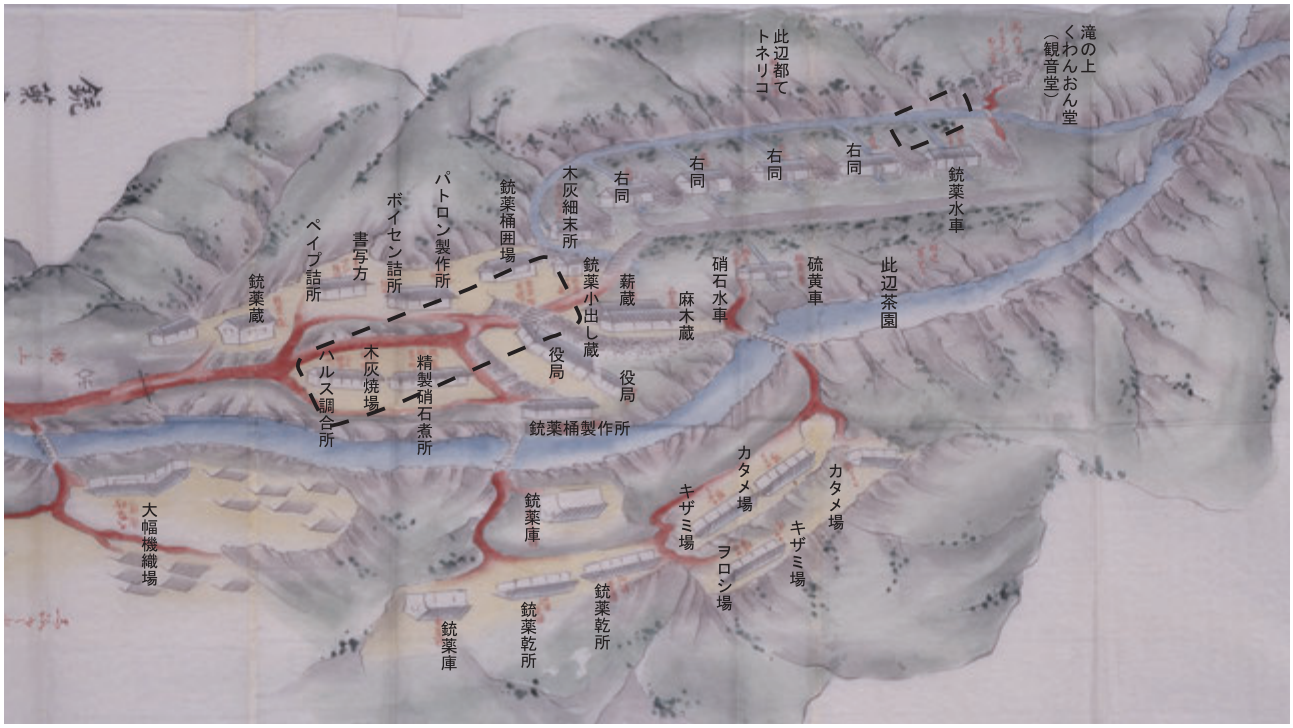
※　建物の大きさを表すのに「敷」と記されているが，単位が不明のため原文とおり記載した。

２　現在も残る遺構

現在残る導水路や石垣は絵図（第 77 図）にも，描かれており，滝ノ上火薬製造所操業時に構築されたものと考えられる。石垣は，急崖に面しているため，擁壁や土留めの役割を担ったものと推定される。導水路は，水車への引き込みや下流域へ水流を流すための施設と考えられる。滝ノ上火薬製造所が稼働した時期は，設立期の第１期，集成館事業に組み入れた時の第２期，明治になり陸軍の管轄となった時の第３期となるが，今回調査した各遺構の細かい時期を明確にする調査成果は得られなかった。

また，絵図（第 77 図）の精製硝石煮所や木灰焼場に煉瓦が使用されているため，塼（第 26 図３）は，その建物の煉瓦とも考えられ，トレンチ２付近は絵図（第 77 図）の該当建物の位置の可能性がある。そのため，調査区１～２に残る石垣は絵図の点線付近と推定され，山側のパトロン製作所やボイセン詰所などの建物の痕跡が残っている可能性がある。また，調査区３の導水路は，銃薬水車の点線部分付近と推定される。

明治 10（1877）年に火薬製造所としての役割は終えるが，その後は，導水路は民間会社に利用され続けたようである。



第 77 図　「銃薬方」（武雄市歴史民族館蔵一部改変）※施設名は松尾千歳氏ご教示による。

第２節　高熊山激戦地跡

確認調査成果や史料調査から，高熊山激戦地跡の戦闘状況や，各堡塁の機能などの検討を行う。

１　戦闘状況

第４章第１節３で概略を記述しているが，明治10（1877）年６月18日～６月20日の戦闘状況を詳細にまとめることとする。主に『別働第二旅団戦記巻之四』（安藤1887）や『戦袍日記』（高野1986）を参考に記述する。

６月18日

午前０時～２時頃　第３旅団が複数の中隊に分かれ高熊山を目指して山野を出発する。

午前３時30分頃，高熊山で開戦

第３旅団に対し，高熊山の西郷軍熊本隊が射撃と投石で対抗する。

午前７時頃　高熊山の西郷軍堡塁に迫るも，山が険しく死傷者が多くなり，第３旅団は退却する。

明け方　別働第２旅団髙嶋少佐，三好成行が第28中隊，第30中隊を率いて，高熊山を射撃する。三好成行は，第３旅団の苦戦を助けるため，西郷軍熊本隊を横から攻撃を行う。

午前10時頃　宮城彦八隊，第21中隊，第22中隊を率いて芝立山を出発する。西郷軍正義隊らの堡塁を破り，坊主石山を占領する。

西郷軍の雷撃隊と協同隊が坊主石山の奪還を図るため，臼砲２門で東南より激しく砲撃するが，失敗する。

６月19日

熊本隊は砲弾を避けるため，巨岩に隠れ，時々小銃で応戦する。夜，村民数十人を使って堡塁を修理し，砲弾を避けるための坑道を掘削する。

大雨に濡れたまま終日官軍の砲撃に悩まされたため，疲労困憊し，皆刀を抱いて眠る。

政府軍は，大砲12門で高熊山を砲撃を行う。

６月20日

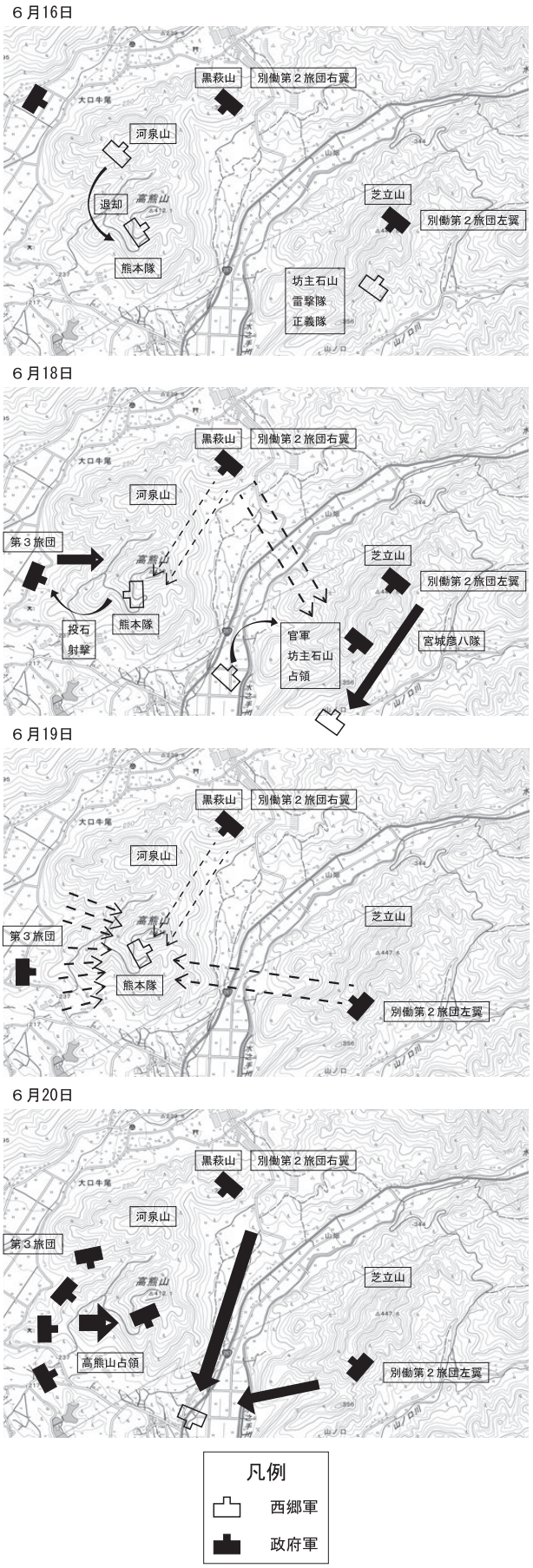
午前１時頃　第３旅団中隊が陣地を出発する。

午前３時頃　大雨の中，第３旅団が暗闇を利用し，熊本隊の熟睡に乗じて高熊山に進撃し，熊本隊の堡塁を次々に占領する。

午前５時頃　第３旅団が高熊山を占領。熊本隊は暗闇の中で第３旅団の不意の襲撃を受け，麓に向けて潰走。岩石の間を駆け下り，転落してけが人も出る。

午後４時半頃　第３旅団の一部は，菱刈馬越まで逃げる西郷軍を追撃し，戦闘が終了する。

熊本隊の戦死者13人，負傷者数十人に及ぶ。政府軍は，17日～20日で戦死者１名，負傷者23人で，この３日間に280発余りの砲弾を発射する。（西郷軍は政府軍により，高熊山に三方から700～800発の砲撃を受けた記載あり）



第78図　高熊山の戦い戦況図

２　堡塁について

堡塁２号～７号は，単体で構築されてはいるが，前後２段の１つの巨大な堡塁として機能したと推定される（全長約 20 m・幅約 10 m）。堡塁７号は，小隊長などの指揮者が陣取ったものと考えられる。

堡塁１基あたりの守備人数については，当時の銃の全長が 1.25 mである。そのため，左右にある程度自由に動かすには，１人あたり，約 2.5 mが必要となる。この試算に基づけば，堡塁７号（全長 10.80 m）には，５～６人が，堡塁３～６号（全長４～６m）は，２～３人程度が守備していたと考えられる。堡塁２号は，これらの堡塁の端に位置しており，弾薬などの物資を置いた可能性がある。なお，高熊山山頂には熊本隊の２つの中隊（高野和人 1986）と配置とある。熊本隊発足当初が 15 小隊（約 1,300 人）であったが，人吉で５中隊に編成され，１中隊 100 人となり，約 200 人が配置されたと推定される。この人数から西南戦争時は，さらに数多くの堡塁が構築されたと考えられる。

胸壁については，高さが計測値では低いが，実際は斜面に面しており，下から登ってくると高い壁が立ちはだかることとなる。また，堡塁８号・９号は，巨石を利用して高さを稼いでいる。胸壁には，多量の輝石安山岩が含まれており，強固なものとなっている。堡塁９号は，胸壁は巨石と輝石安山岩からなり，地形を利用した構造となっている。熊本市の調査では，胸壁に稲藁や墓石を利用したことを報告しているが，高熊山では，人工物の利用はなく，自然地形と地盤の輝石安山岩を利用して，胸壁を構築したことが分かる。

北東から東側で銃弾が出土したことから，この方面で激しい戦闘が行われたと考えられる。胸壁から銃弾が出土し，種類も混じっている。また，薬莢も出土している。かなりの至近距離での戦闘が想定される。政府軍の戦闘報告書にも，「午前一時整列直ニ出発高熊山下ニ至リ卒ニ令シ賊塁ニ達セスンバ発火ヲ禁ス準備已ニ終テ兵ヲ潜メ山頂ノ賊塁ヲ指シテ攀躋塁ヲ巨ル纔カニ五六米突時已ニ三時我全兵大声銃鎗ヲ揮テ突入賊狼狽或ハ放火スルモ弾着高ク或ハ降雨ノ為メ雷管鳴ヲ傳火ヲ得ス漸時ニシテ賊ノ三塁ヲ奪フ直ニ廠舎ニ火シ更ニ追テ又数塁ヲ陥ル是ニ於テ兵ヲ半月ニ布キ猛烈火撃夜ノ明ルヲ竢ツ天明ケ全山ヲ掠シ猶山下ノ残賊ヲ尾撃シ此夜馬越ノ右側ニ於テ守線ス」C09084800200 戦闘報告表（防衛省防衛研究所），下線部要約「午前３時、山頂の敵台場から５，６mに達し全兵大声を上げ銃剣で突入した。」と記載があり，調査結果と合致する結果となっている。

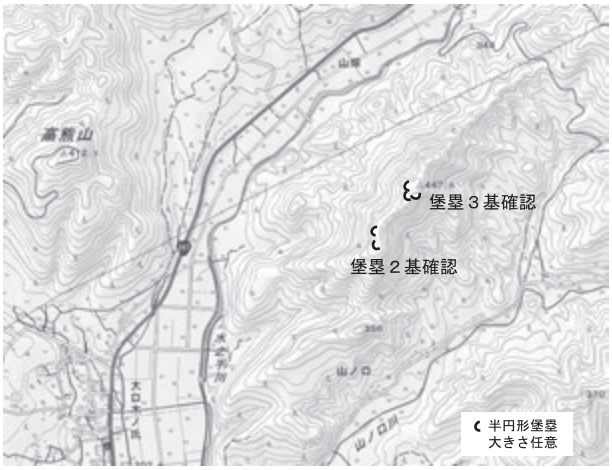
なお，『戦袍日記』には，熊本隊が高熊山山頂に宿舎を建てた記録や，上記の「戦闘報告書」の二重線部分にも，それらを焼いた記載があるが，今回の調査では，その痕跡を発見することはできなかった。

３　坊主石山の堡塁について

高熊山から東へ約１㎞ほどの所に，坊主石山がある。当時の記録では，芝立山に政府軍が，坊主石山に西郷軍雷撃隊が陣取る。現在芝立山という名称はなく，坊主石山となっている。

坊主石山の踏査の結果，５基の半円形堡塁を発見した。すべての堡塁が西の高熊山を向いており，政府軍（別働第２旅団）の堡塁の可能性が高い。１基は整然と巨石を並べて，胸壁を構築している（第 79 図左上）。また，山頂には巨石があり，鉄鉾が奉納され，その下には「明治 13 年庚辰２月吉日，奉願成就，願主野口八太郎」（所属不明）という石の水鉢が奉納されていた。おそらく，西南戦争時に出兵する際に，鉄鉾を納め，無事生還したことに感謝したものであろう。

第 79 図　坊主石山状況写真
左上：堡塁　右上：巨石と手鉢　左下：鉄鉾　右下：手鉢



第 80 図　坊主石山堡塁位置略図

第３節　チシャケ迫堡塁跡群

確認調査成果や史料調査から，牧園全体の陣地状況と，堡塁の構築について検討を行う。

１　牧園全体の陣地状況について

牧園の戦闘状況や堡塁の配置については，史料がなく，不明な部分が多い。ここでは，『堡塁群が語る西南戦争』（手嶋 2018）をまとめる形で考察する。なお，第 82 図に示してある堡塁は位置であり，数は示していない。

（１）位置と数

明治 10（1877）年に西郷軍と政府軍が構築した堡塁は，第 82 図に示した霧島市牧園町と横川町の南北約７㎞，東西５㎞に点在している（手嶋 2018）。牧園（踊）に軍務所を置いた西郷軍は，牧園一帯に 300 を超える堡塁を構築している。そのほとんどは，７月の戦闘で構築されたものと考えられる。西郷宿営地は，８月 30 日の笠取峠を突破しようとした際の場所である。

政府軍は，6 月末に横川を制圧し，横川の植村，牧園の万膳付近に堡塁を構築している。宿窪田にみられる堡塁は，７月の戦闘でなく，８月の戦闘に備えて政府軍が構築したものである。なお，堡塁所属の判断は，胸壁の方向からとしている（手嶋 2018）。

（２）堡塁の配置

西郷軍は横川と牧園を結ぶ，芦谷原～宿窪田（現在の牧園薩摩線県道 50 号）を，重要な場所と位置づけ堡塁群（第１線）を設置したとしている。そして，後方の山々の山頂，尾根等に第２・３線の堡塁を設けたとしている。全体の踏査結果から，堡塁の配置の特徴として，以下の４つを述べられている（手嶋 2018）。

① 後方・左右に堡塁があること。
② 高い位置にあり，道路・崖・急峻な斜面にあること。
③ 周囲（前方・左右）の見通しが良好であること。
④ 隣接する堡塁群と数分以内で連絡できること。

第 82・83 図から，もう一つの可能性を考察したい。北西（植村・万膳）方面から進攻してくる政府軍に対して，第１線を引坂迫～芦屋谷，谷を挟んで第２線をチシャケ迫～宿窪田，天降川支流の石坂川・三体川を挟んで第３線を宇都口～坂元～踊城跡とした可能性がある。

各堡塁の配置場所は，概ね手嶋氏が述べている①～④のとおりである。５～ 10 基の堡塁が集まり，群を成している。さらに，それらが，地形に合わせて配置され，第１線のような守備陣地を構築したものと推定される。

現在の各堡塁構築場所は，雑木林が広がっており，高い位置でも見通しはほとんどきかない。しかし，当時は，木々は燃料として使用されており，木はほとんど無かった。高い位置からは，かなり見通しが良かったはずである。西郷軍は，この地に 300 以上の堡塁を築いたことから，劣勢ではあったが，牧園で防御し，反転攻勢をかけようと好機をうかがっていたのかもしれない。

２　堡塁について

（１）形状について

堡塁の全体形状については，高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡塁跡群とも，半円形堡塁とタコツボ形堡塁が確認された。牧園では円形やＬ字形をした堡塁が報告されている。半円形堡塁は，胸壁が半円状又は弧状になるものが多く，土坑は弧状，半円，円形，長楕円形，長方形となるものが報告されている（手嶋 2018）。また，大分県佐伯市では，政府軍の熊本鎮台工兵隊の構築と考えられる多稜形（四稜形・六稜形）の堡塁が報告されている（大分県 2009）。

タコツボ形以外は，すべて胸壁があるタイプの堡塁である。鹿児島県・大分県とも，半円形堡塁が多数を占める。また，大分県ではタコツボ形堡塁の報告はないが，休憩所や物資保管所と報告のある土坑状に掘り込まれた遺構が，タコツボ形堡塁と推定される。

大分県の内訳

866 基の堡塁のうち，実測図及び報告内容（大分県 2009）から，151 基の形状を把握できた。

第 29 表　大分県・鹿児島県堡塁形状内訳

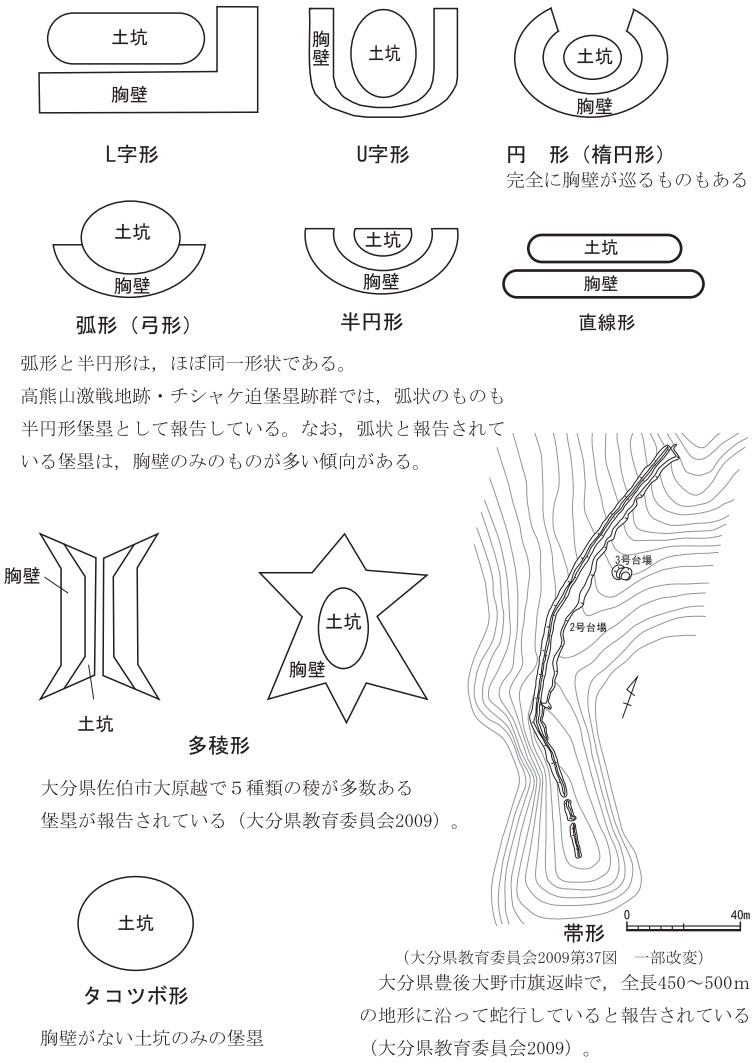
大分県

形状＼所属	西郷軍	政府軍	両軍	不明
Ｌ字形	0	3	0	0
Ｕ字形	1	2	0	0
円形	4	0	0	1
帯形	1	0	0	0
弧形	3	15	0	0
多稜形	0	6	0	0
楕円形	1	0	0	0
直線形	3	5	0	0
半円形	48	40	2	1
不定形	2	10	0	0
弓形	2	1	0	0

鹿児島県の内訳

300 基以上の堡塁のうち，略図及び報告内容（手嶋 2014・2018・2020）から，90 基の形状を把握できた。

形状＼所属	西郷軍
Ｌ字形	5
Ｕ字形	0
円形	27
帯形	0
弧形	0
多稜形	0
楕円形	0
直線形	6
半円形	32
不定形	0
弓形	0
タコツボ形	20



第 81 図　堡塁模式図及び類例

（２）チシャケ迫堡塁跡群の堡塁の構築方法について

堡塁のトレンチ調査の調査の結果，土坑を掘り上げた土で胸壁を構築していることが確認できた。ほとんどはシラスで,基礎にあたる部分に黒褐色土の土が見られる。胸壁全体にしまりがなく，版築のような堆積状況は見られなかった。山道や林道を見渡せる高さに位置しており，水平に攻撃されることは無いため，地形を利用して胸壁にある程度の厚みを保たせて，銃弾を防ぐ方法が取られたと考えられる。

牧園の山々は，基本的にシラス台地が河川開析によってできた丘陵であり,ほとんど石を含まない。人工物(稲藁や墓石）を持ち込むこと無く，現地にある土のみを利用して構築している。

第４節　岩川官軍墓地と薩軍の墓

確認調査成果や史料調査から，埋葬形態の検討，古写真の撮影場所などの検討を行う。

１　埋葬形態の検討

岩川官軍墓地の埋葬形態については，「官軍墓地の埋葬は，遠く大崎仮宿，野方荒佐野，百引の激戦地から死体を運び，一たん現在墓地手前の人家のあるあたりに大きな穴を掘り，そこに仮埋葬，その後現在の所へ移して埋葬したという。埋葬にあたっては火葬にした説もあるが，馬場部落の古老馬場精八氏は火葬でなく，そのまま埋葬したとはっきり言った。なお，都城の病院で死んだ人たちもここへ持って来て埋葬した。」と記述されている（大隅町誌編纂委員会 1990)。

調査では，墓地中央部のトレンチ３（第 72 図）から２基の遺構を検出している。全形を確認できていはいないが，想定される根拠から，官軍墓地の墓坑の可能性が高い。また，トレンチ１（第 70 図）・トレンチ２（第 71 図）の調査成果から，各墓石下には，墓坑がないことが判明している。そのため，合葬の可能性が高い。

熊本県の調査事例では，八代市の若宮官軍墓地において，等間隔に個別の墓坑が掘られている。同市の横手官軍墓地では，溝状墓坑に複数の棺が埋設されたものと，個別の墓坑とに分類されている（共に八代市教育委員会 2002)。玉名市の高瀬官軍墓地では，溝状墓坑と個別の墓坑が確認されている（玉名市教育委員会 2018)。各官軍墓地とも，土葬と考えられる調査結果が得られている。

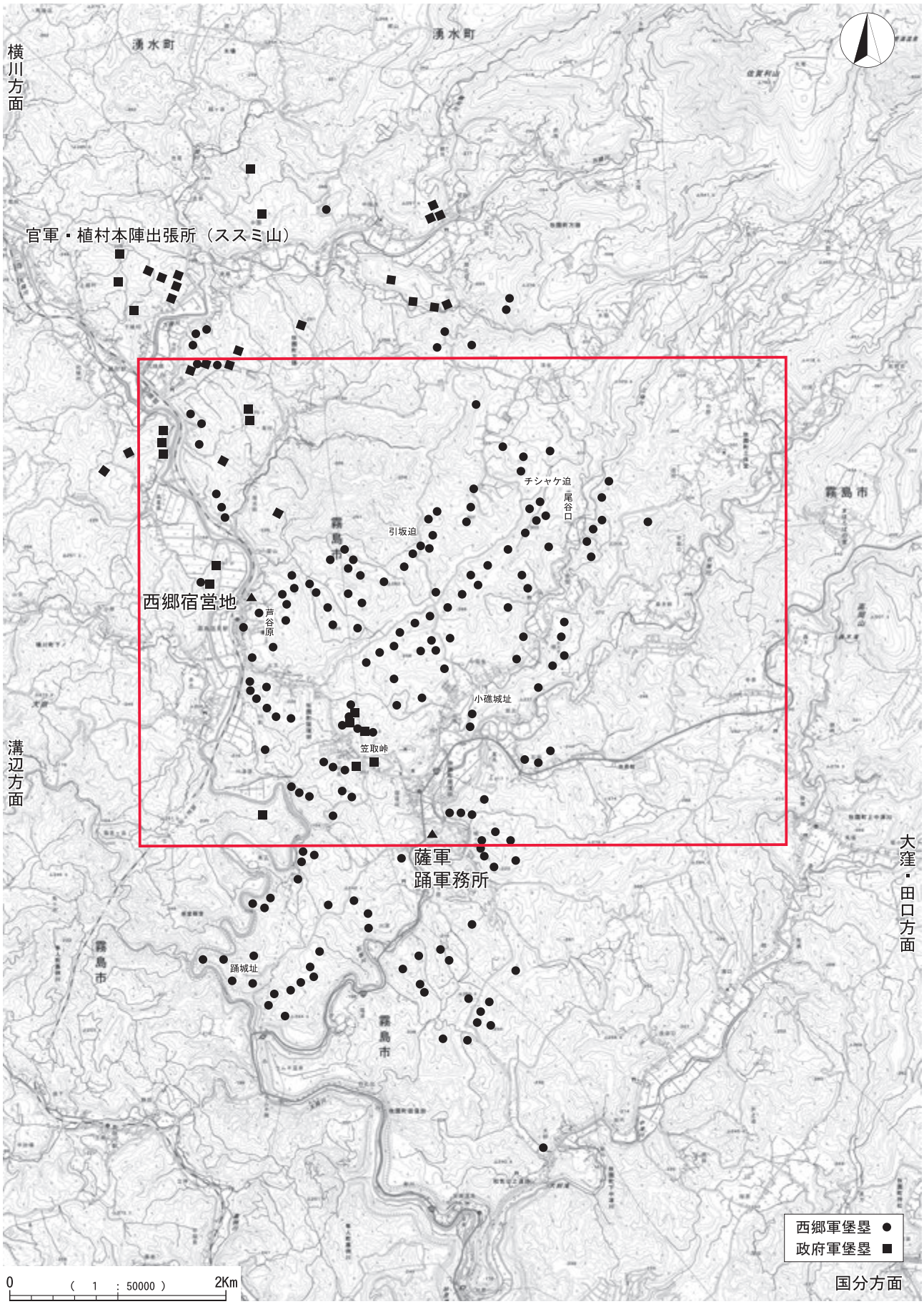
『大隅町誌』と調査成果，先行事例から埋葬形態を検討する。各激戦地から遺体を運んでいれば，仮埋葬後に，改葬を行い遺骨だけを岩川官軍墓地に合葬したと推定される。今回の調査では，火葬・土葬に結びつく調査成果は得られなかった。なお，仮埋葬地とされる場所は，第 63 図に推定位置を記載している。現在は空き地・空き家となっている。

２　造営場所選定理由について

現在の場所が，なぜ墓地の造営場所に選定された理由は，今回の調査では不明であった。

岩川官軍墓地については，埋葬されている兵士の戦死場所から推定する。

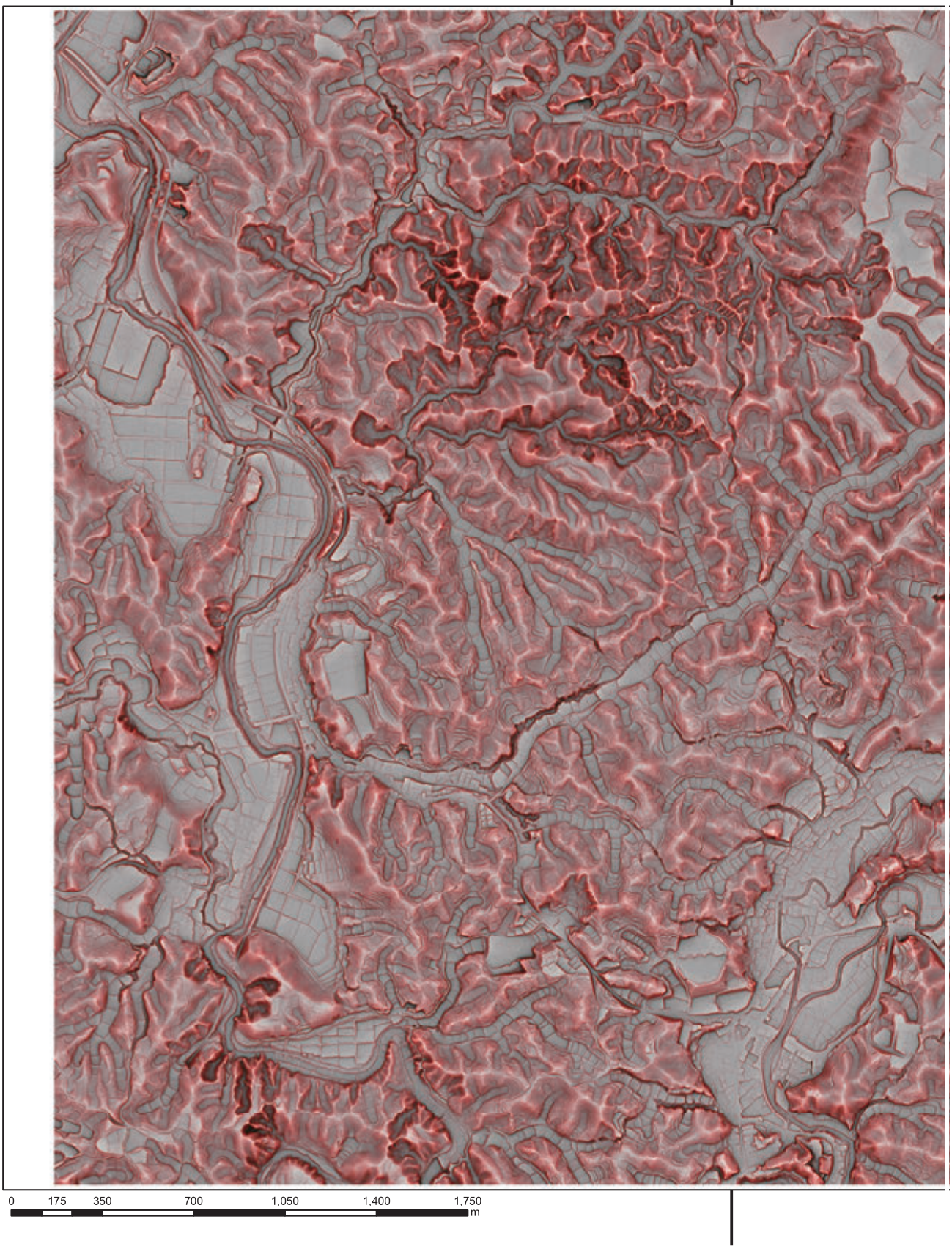
岩川から各埋葬者の戦死場所であるが，最も数の多い百引は約 14 ㎞，次の市成は約 12.5 ㎞，都城 16.5 ㎞と永吉･假宿約 17 ㎞，荒佐野約 11 ㎞となる。位置的には，各戦死場所のおおよそ中間に位置しており，地理的に利便性が高い。このため，この地に官軍墓地が造営された可能性がある。



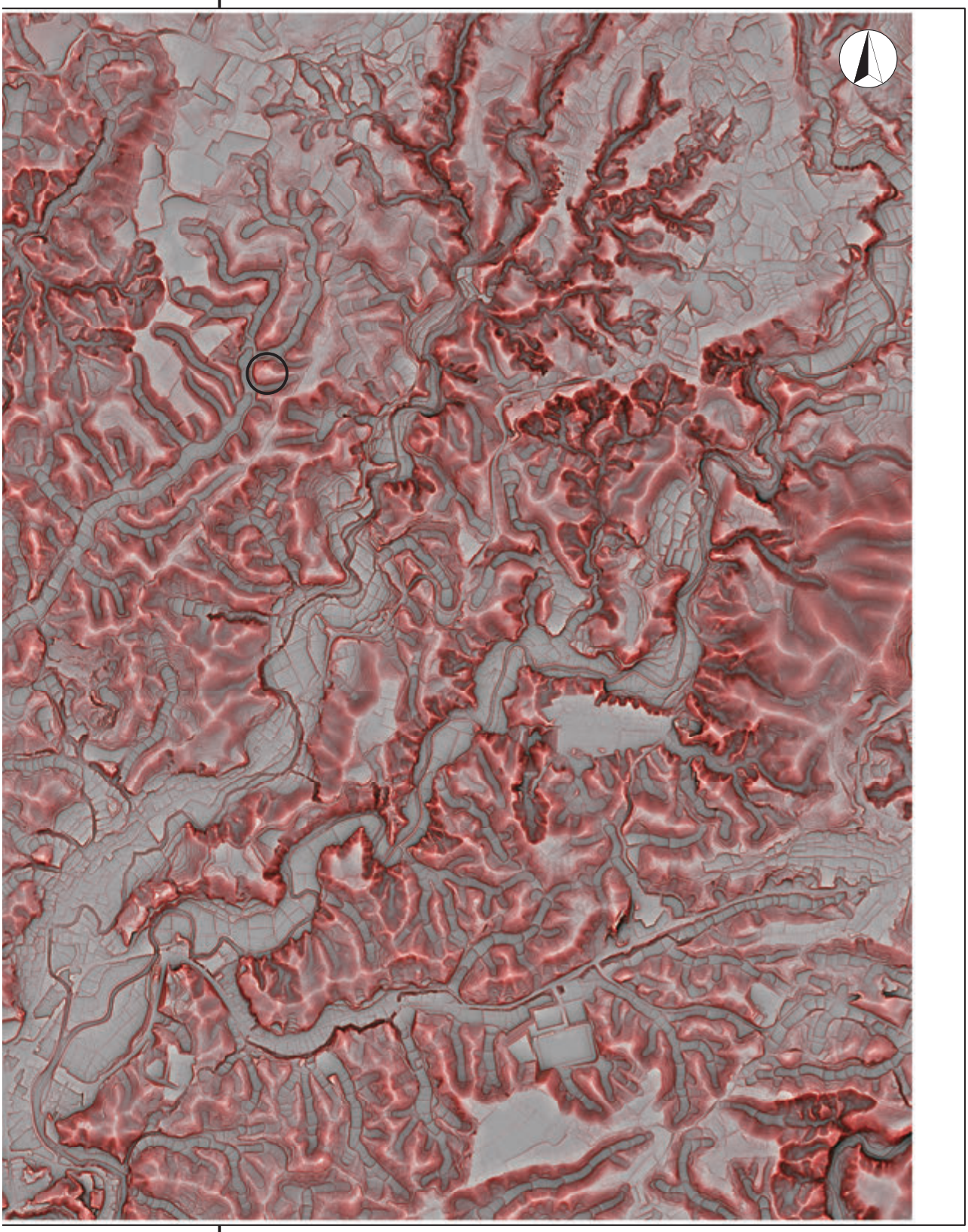
第 82 図　牧園町堡塁位置図（手嶋 2018 引用・一部改変）

※　●・■は堡塁の位置を示すのもので，数を表すものでない。

※　□は，第 83 図チシャケ迫堡塁跡群周辺赤色立体地図の範囲



第 83 図　チシャケ迫堡塁跡群周辺赤色立体地図



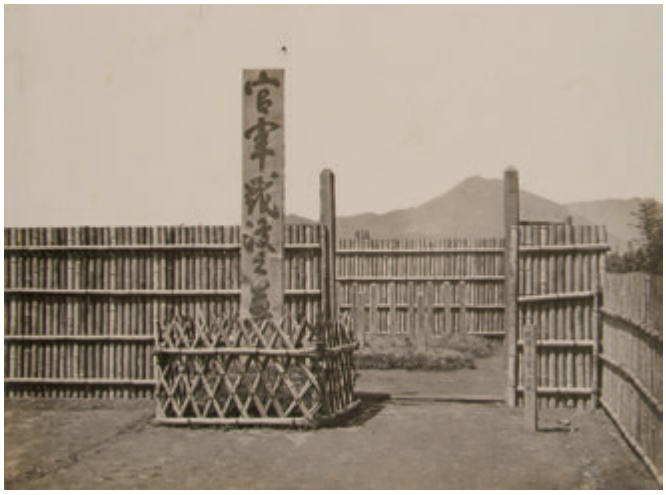
※平成21年計測データを使用（国土交通省 九州地方整備局 大隅河川国道事務所）

○　チシャケ迫堡塁群跡

薩軍の墓については，西郷軍が撤退するときに死傷した者を，地元の有志に託していた可能性がある。たまたま託された人の土地に，葬ったのかもしれない。

４　岩川官軍墓地の古写真について（第 84・85 図）

岩川官軍墓地の古写真として，「官軍戦没之墓」（井桜 2010）が紹介されている。古写真①は入り口付近（第 84 図），古写真②は木柱の官軍墓地（第 85 図）である。「鹿児島県曽於市大隅町にある西南戦争で戦死した官軍墓地であろうか。」（井桜 2010）と記載がある。その経緯については，岩川官軍墓地と著者が想定した理由として，古写真①「鹿児島陸軍墓地其一」・古写真②「鹿児島陸軍墓地其二」と書かれた紙が写真下に張ってあること，木柱が少ないため，埋葬者の多い鹿児島市の祇園之洲でなく，岩川官軍墓地だと推測したこと，古写真①の写真背景が桜島には見えないこと，以上の説明があった。



第 84 図　古写真①（JCII フォトサロン蔵）

第 85 図　古写真②（JCII フォトサロン蔵）

古写真②から戦死者名４人，仙台庄之助，池田秀周，高橋常蔵，中西宗三郎の刻字を読み取り，戦死場所や埋葬場所の調査を行った。その結果，いずれも熊本県で亡くなっており，仙台庄之助，池田秀周，高橋常蔵は宥明堂官軍墓地（山鹿市），中西宗三郎は高月官軍墓地（玉東町）に埋葬されていることが判明した。この調査結果や，墓碑が木柱であることから，この２枚はいずれも，熊本県（場所不明）の仮埋葬地の可能性が高い。

※井桜直美氏（JCII フォトサロン），美濃口雅朗氏　（熊本市文化振興課）には，史料調査にご協力いただいた。

５　岩川官軍墓地の整備状況

岩川官軍墓地は 140 年間に渡り，地元の方々により整備されている。ここでは，その整備状況をまとめる。

造営時期は文献調査等を行ったが，不明であった。熊本県の例によると，陸軍から天草石工（下浦石製）が請け負った官軍墓地は，明治 11（1878）年～明治 12（1879）年に建設及び落成している（玉東町 2012）。鹿児島県も同様の状況と推定される。

管理については，神官をしていた川崎篤義氏が経費をもらって墓地の管理をしていたことが記述されている（大隅町誌編纂委員会 1990）。昭和８（1933）年に第 67 図が最も古い岩川官軍墓地の記録であるが，官軍墓地造営当時の姿と推定される。この略図（第 67 図）は，岩川尋常小学校丸山義武訓導から，静岡県の大橋敦氏へ宛てた手紙の中に残っている。大橋氏は，第 22 表配置 No. 24 の大橋良蔵兵卒の遺族であろう。

その後は，不明な部分が多いが，地元の 70 ～ 80 歳代の方々への聞き取りから，概ね昭和 20 ～ 30 年頃には，第 67 図の墓石の配置でなく，現在の階級別の配置に近いことを証言している。昭和８（1933）年から昭和 20（1945）年までの間に大きな整備（改変）を受けている可能性が高い。それ以後は，周辺の墓地の整備に伴って，官軍墓地も徐々に整備されたと証言されている。

「土砂が流れ込んだりして大分荒れていた。昭和 42（1967）７月には，大隅町商工会青年部で顕彰することとなり，墓石の周囲の置石（縁石のことか）も掘り出され，墓地周辺にブロック塀をめぐらし，入り口もコンクリートで固めた。そして，献灯（寄贈）も２つ設けられた。」（大隅町誌編纂委員会 1990）と記述されている。この時の整備が，現在の岩川官軍墓地とほぼ同一であると考えられる。

最近は，平成 25（2013）年に，馬場集落の墓地の管理者が，曽於市の許可を得て，縁石と破損した墓石を接合している。

第 30 表　岩川官軍墓地の整備状況

西暦	元号	岩川官軍墓地整備内容
1877	明治 10	現在の岩川官軍墓地向かいの空き地に仮埋葬『大隅町誌』（改訂版）
1878 ～ 1879	明治 11 ～ 12	陸軍により，建設及び落成される。（推定）
	明治～昭和	神官をしていた川崎篤義氏が経費をもらって墓地の管理を行う。『大隅町誌』（改訂版）
1933	昭和８	岩川尋常小学校丸山義武訓導から，静岡県の大橋敦への手紙（第 67 図配置図あり）
～		現在の階級別の配置に近い整備が行われる。（推定）
1945 ～ 1955	昭和 20 ～ 30 年頃	
～		周辺墓地の整備に伴って，岩川官軍墓地も整備される。
1967	昭和 42	大隅町商工会青年部によって，現在の形に近い整備が行われる。
～		地域住民により，手厚く祀られる。
2013	平成 25	馬場集落の墓地の管理者により，縁石や墓石の修復が行われる。

第５節　西南戦争関連遺跡の現状と課題

滝ノ上火薬製造所は，敷根火薬製造所と合わせて，日本最大級の火薬製造所となっていく。これが，軍事的な背景を持って，薩摩藩が明治維新を成し遂げる一要因となっていた。その後，明治に入り滝ノ上火薬製造所は，多くの砲弾や銃弾を製造･備蓄できるようになっていく。そのため，政府は，その存在を徐々に危険視していく。

政府が滝ノ上火薬製造所から，武器・弾薬を運び出すことがなければ，私学校徒を刺激することなく，西南戦争は勃発しなかったかもしれない。このことは，当時の県令大山綱良が審理で，政府側が鹿児島に蓄えている武器・弾薬類を運び出そうとしたことが，西南戦争を引き起こした要因であると述べていることからも想定できる。

その後は，西南戦争により，鹿児島城下や集成館を始めとする工場群もほぼ壊滅状態になり，再建されることはなかった。西南戦争前の鹿児島が日本の近代化・工業化をリードしている状況であったが，この状況も一変し，鹿児島は工業と薄い地域となったとの指摘もある（松尾 2017）。このように滝ノ上火薬製造所を始めとするこれらの施設は，近代化・工業化を成し遂げた一方で，鹿児島の工業力に大きな打撃を与えた存在でもあった。滝ノ上火薬製造所などの軍事的な施設がなければ，鹿児島は今でも一大工業地帯だったかもしれない。

また西南戦争では，薩摩藩の私学校徒や各地から参加した党薩諸隊などの優秀な人材も，高熊山激戦地跡やチシャケ迫堡塁跡群や熊本県等の各地の激戦地で散っていった。これは，政府軍も同じで，全国各地から徴兵された人々が現在も，岩川官軍墓地などの故郷から遠い地で葬られている。

一方で，鹿児島の近代化・工業化で培われた人材や使用された機械は，東京や大阪等で，日本の近代化・工業化の基礎を築き，ひいては日本の産業革命の成功へと突き進んでいく要因となっていた。このように，薩摩藩と日本の近代化・工業化に関係し，国内最大で最後の内戦である西南戦争を忘れることなく，残すことも我々の大きな役目である。

鹿児島には，現在把握しただけでも約 100 か所の西南戦争関連遺跡が残っている。史跡等となっているのは 10 か所だけである。69 か所は記念碑で神社や寺院にあるため，保護されているが，13 か所ある陣地跡は民有地で山林が多く，伐採に伴う消失が懸念される。標識等があっても，管理が行き届いていない場所も見受けられる。

一方で，世界文化遺産登録や明治維新 150 周年・大河ドラマ「西郷どん」の影響で，明治維新前後の鹿児島に注目も集まり，関心も高い。今後は，西南戦争 150 周年に向けて，現存する「西南戦争関連遺跡」を活用し，その重要性を周知していくことや当該市町村と適切な保護措置，各地に残る「西南戦争関連遺跡」の実態解明を進めいくことが望まれる。

現在残っている西南戦争関連遺跡を，善意で調査や保存・活用及び管理を行ってきた地元の方々の存在を知ることができた。このような方々により，かろうじて残存してきた西南戦争関連遺跡は，貴重な文化財である。最後に，このような地元の人々に敬意を表し，今回調査した各遺跡の現状と課題を述べ終わりとしたい。

１　滝ノ上火薬製造所跡

今回の調査で，非常に良好に遺構が残存していることが確認された。絵図等の記録から今回の調査範囲だけでなく，対岸等にも広がっていることが予想されることから，滝ノ上火薬製造所跡全体の確認と，遺構の残存状況等の把握が必要である。また，石垣や導水路については今回の調査では，年代決定となる遺物等の出土がなく，構築・使用・廃絶の時期の検討，石垣上の平坦面等の使用方法や，建物の痕跡跡を調査するために追加調査が必要である。

なお，現状は周知の埋蔵文化財包蔵地となっているが，石垣は土圧により一部孕らんでいる部分もあり，崩壊の危険性がある。文化財の保護や災害防止の観点からも，追加調査を行い，今後の取扱いを決め，保護措置を講じる必要がある。

２　高熊山激戦地跡

現状は，伊佐市の史跡として指定されている。

熊本隊の規模や文献等から，高熊山の各尾根にも堡塁が構築され，残存している可能性がある。また，高熊山東側の坊主石山にも辺見十郎太率いる雷撃隊が陣を構築し，高熊山西側方向，水俣との街道筋にあたる鳥神岡に

は，西郷軍が堡塁を構築している可能性が高い。このように，高熊山を中心とする大口一帯の当時の政府軍・西郷軍の陣地の全体像を調査する必要がある。

高熊山激戦地跡は，公園として整備されており，市民の憩いの場となっている。しかし，文化財の活用までには至ってない。従って今後，公園としてだけでなく，適切な保護策を講じて．史跡としての活用が望まれる。

３　チシャケ迫堡塁跡群

今回の調査で周知の埋蔵文化財包蔵地となった。

霧島市牧園町には，堡塁跡が多数存在していることが分かっている。しかし，詳細な位置が不明なため，保護の対象となっていない。今後は，それらの詳細な位置や残存状況の調査により，保護すべき対象地域を検討する必要がある。また，戦闘記録などの史料が少なく，それらの掘り起こしを行い，牧園での戦闘の実態を解明するとともに，堡塁群の保全と活用について，議論を深める必要がある。

普及・啓発面では，霧島市の「牧園に残る西南戦争堡塁跡調査・保存事業」として，牧園町の住民らで組織された「史跡・文化財・景観モデルロード実行委員会」により，定期的に講演会や見学会など，史跡や文化財の保護の普及・啓発活動が行われている。今後，さらにその発展が望まれる。

４　岩川官軍墓地・薩軍の墓

現状は両地点とも，曽於市の史跡に指定されている。

地元の人々によって，約 140 年間祀られてきた貴重な史跡である。しかし，その設立の経緯などは，未だに不明な点が多い。今後は，史料の掘り起こしを行い，鹿児島における官軍墓地の設立や実態を調査する必要がある。また,岩川官軍墓地や薩軍の墓の整備等を行う際は,墓坑の調査や岩川官軍墓地の前に仮埋葬地とされる場所の再調査なども行う必要がある。

地元の商工会や有志により,長年整備が行われてきた。また，年に１回慰霊祭が行われている。地元の方々の関心が高い史跡でもあるので，今後の地域や他の文化財を取り込んだ仕掛け作りで，活用を図ることが望まれる。

【引用・参考文献】

大分県埋蔵文化財センター　2009『西南戦争戦跡分布調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　44

玉東町教育委員会　2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町文化財調査報告書　第８集

玉名市教育委員会　2018『高瀬官軍墓地』玉名市文化財調査報告　第 39 集

八代市教育委員会　2002『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』八代市文化財調査報告書　第 16 集

大隅町誌編纂委員会（編）　1990『大隅町誌』(改訂版)

安藤定　1887『別働第二旅団戦記巻之四』

井桜直美　2010「彦馬が見た西南戦争－古写真に見る西南戦争の記録－」JCII フォトサロン

高野和人編著　1986『戦袍日記』古閑俊雄著　　青潮社

佐々友房　1891『戦袍日記』

高橋信武　2005「高熊山へ」『西南戦争之記録 第３号』

高橋信武　2017『西南戦争の考古学』吉川弘文堂

手嶋正次　2014『西南戦争の堡塁に関する調査報告書』

手嶋正次　2018『堡塁群が語る西南戦争～霧島の山々に眠る「十年の戦の跡」～』

手島正次 2020『西南戦争　牧園に残る戦いの証拠』

松尾千歳　2017『西南戦争と集成館』尚古集成館紀要 第 16 号

靖国神社社務所原著・高野和人編 1990「靖国神社忠魂史　西南の役」(復刻版) 青潮社

写　真　図　版

図版1　滝ノ上火薬製造所跡　古写真

①
名称　　火薬製造所
撮影時期　1872（明治５）年
東京国立博物館
研究情報アーカイブス
から引用

②
名称　　火薬製造所
撮影時期　1872（明治５）年
東京国立博物館
研究情報アーカイブス
から引用

③
名称　　火巧所
撮影時期　明治
東京国立博物館
研究情報アーカイブス
から引用

図版２　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１

①石垣　②石垣テラス　③排水路石垣
④トレンチ２Ａ－Ａ‘平面　⑤トレンチ２礎石

図版３　滝ノ上火薬製造所跡　トレンチ　３・４・５・８

①トレンチ４調査前状況　②トレンチ４導水路　③・④トレンチ３導水路　⑤トレンチ５　⑥トレンチ８

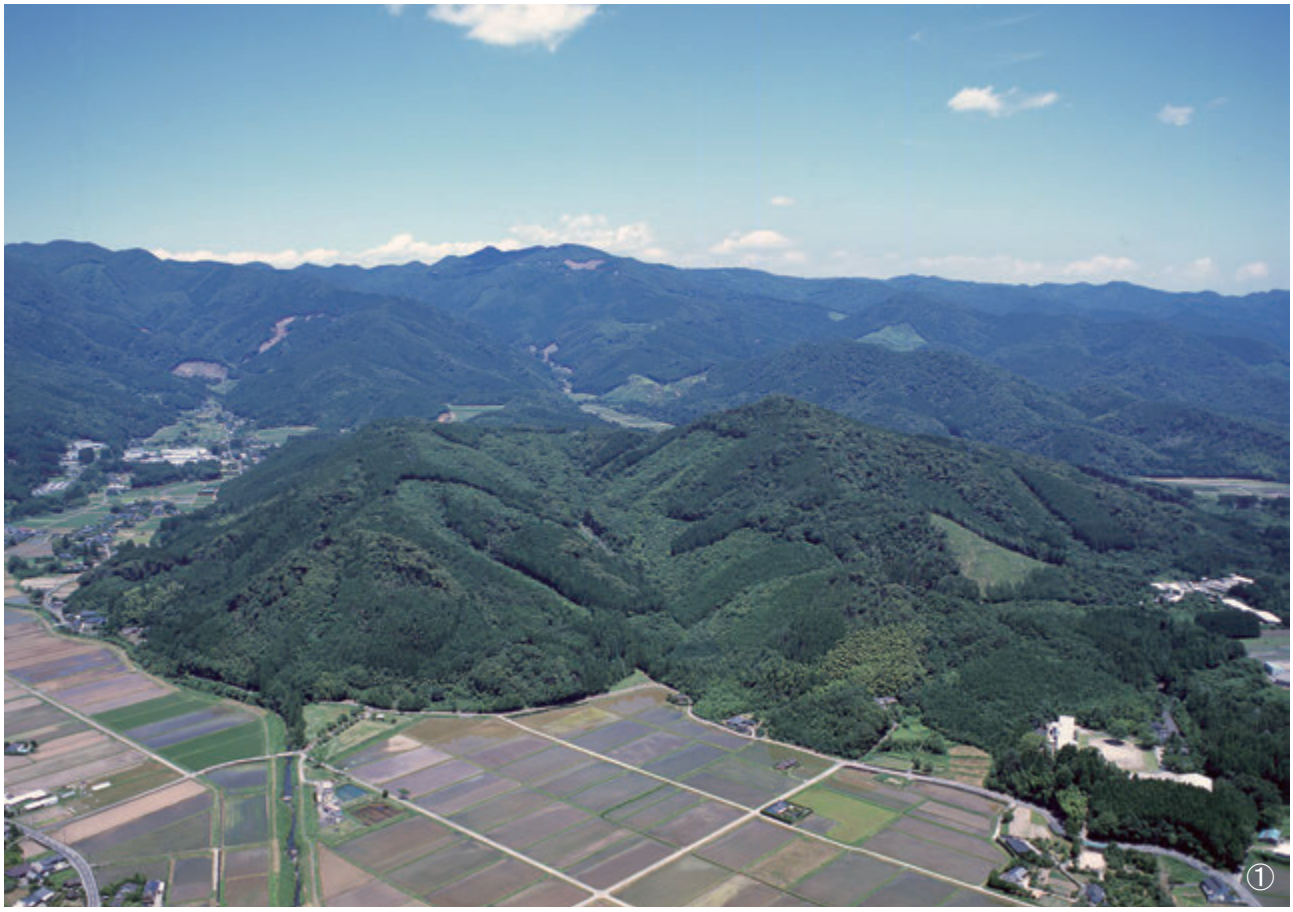
図版４　滝ノ上火薬製造所跡　調査区１・２　石垣・導水路

①・②調査区１～２石垣　③調査区２石垣　④調査区２導水路

図版５　滝ノ上火薬製造所跡　調査区３　導水路

①導水路１～３　②導水路１・２　③導水路２・３　④導水路１　⑤導水路３

図版6　高熊山激戦地跡　遠景



①　高熊山を南西から　②　高熊山山頂

図版７　高熊山激戦地跡　堡塁１号～７号

①堡塁１号　②堡塁２号　③堡塁３号　④堡塁４号　⑤堡塁５号　⑥堡塁６号　⑦・⑧堡塁７号

図版８　高熊山激戦地跡　堡塁８・９号・堡塁４号トレンチ・堡塁７号トレンチ

①堡塁８号　②堡塁９号　③堡塁４・５号トレンチ　④堡塁５号トレンチ
⑤堡塁４号トレンチ　⑥堡塁７号トレンチ　⑦堡塁７号Ａ－Ａ’断面

図版９　高熊山激戦地跡　堡塁７号トレンチ・堡塁９号トレンチ・弾痕跡・銃弾出土状況

①堡塁７号Ｂ－Ｂ’断面　②・③堡塁９号トレンチ　④・⑤弾痕の残る岩
⑥銃弾出土（掲載番号６）　⑦銃弾出土（手前：掲載番号８・奥：掲載番号７）

図版10　チシャケ迫堡塁跡群　遠景・堡塁1号・堡塁4号

①笠取戦跡を北東から　②・③堡塁１号　④堡塁４号

図版11　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁1号～7号

①堡塁１号　②堡塁２号　③・④堡塁３号
⑤堡塁４号　⑥堡塁５号　⑦堡塁６号　⑧堡塁７号

図版12　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁1号・3号トレンチ

①堡塁１号Ｂ－Ｂ’断面　②堡塁１号胸壁　③堡塁１号Ａ－Ａ’断面
④堡塁１号胸壁断面　⑤堡塁３号トレンチ　⑥・⑦堡塁３号胸壁トレンチ

図版13　チシャケ迫堡塁跡群　堡塁２号トレンチ・堡塁５号トレンチ・堡塁６号トレンチ

①堡塁２号トレンチ　②堡塁２号Ｂ－Ｂ’断面　③堡塁５号トレンチ　④堡塁５号Ａ－Ａ’断面
⑤堡塁５号Ｂ－Ｂ’断面　⑥堡塁６号トレンチ　⑦堡塁６号トレンチ断面

図版14　岩川官軍墓地

①岩川官軍墓地を北東から　②岩川官軍墓地入口　③岩川官軍墓地（北東から）

図版15　岩川官軍墓地

①大尉・少尉・少尉補　②岩川官軍墓地（北西から）
③岩川官軍墓地（南から）　④岩川官軍墓地（南東から）

図版16　岩川官軍墓地　墓石（大尉・少尉補・軍曹・兵卒・軍夫）・トレンチ１

①大尉墓石　②少尉補墓石　③軍曹墓石　④兵卒墓石　⑤軍夫墓石
⑥トレンチ１　⑦トレンチ１Ｂ－Ｂ’断面　⑧トレンチ１Ｂ－Ｂ’・Ｃ－Ｃ’断面

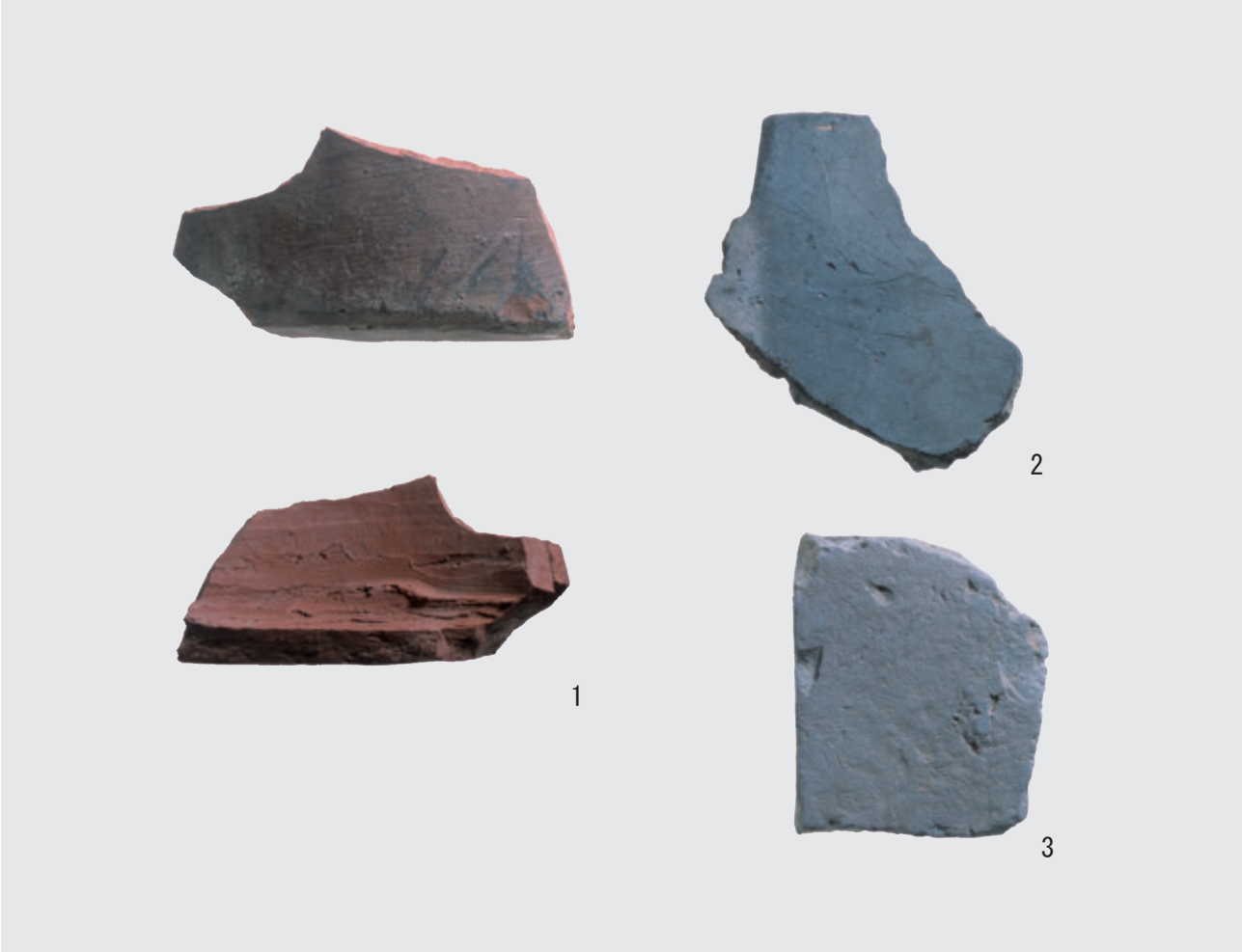
図版17　岩川官軍墓地　トレンチ2・トレンチ3

①トレンチ２（Ⅱ層上面）　②トレンチ２Ａ－Ａ’断面　③トレンチ２Ｂ－Ｂ’断面
④トレンチ３　⑤トレンチ３－１　⑥トレンチ３－２　⑦トレンチ３－３

図版18　岩川官軍墓地　トレンチ３・薩軍の墓

①トレンチ３－４　②トレンチ３－５　③トレンチ３－６　④トレンチ３－７
⑤薩軍の墓（斜俯瞰）　⑥薩軍の墓（正面）　⑦薩軍の墓（裏面）

図版19　滝ノ上火薬製造所跡出土遺物（上）・高熊山激戦地跡銃弾（エンフィールド4～10・スナイドル11～17・ツンナール19）



図版20　高熊山激戦地跡　出土遺物（20～29）・岩川官軍墓地　出土遺物（30～32）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（210）

「西南戦争を掘り，学ぶ」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡

・チシャケ迫堡塁跡群・岩川官軍墓地

発 行 年 月　2021年３月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811　FAX　0995-48-5821
印　刷　所　協業組合　ユニカラー
〒899-2504　日置市伊集院町郡2042-39
TEL　(099) 813-7213　FAX　(099) 813-7214